

BanG Dream! S.S.B.N. — 少女たちとの生活 完結倉庫 —

津梨つな

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

日記調で綴られる”彼女”達との物語。

ここは「Bang Dream! S.S.」——少女たちとの生活——の完結作品置き場になります。

話数とシリーズが増えすぎた上、読み辛いとの声を多数いただいた為こういった形を取らせて頂きました。

新着更新話をお読みいただく場合は←コチラ←から。

<https://syosetu.org/novel/193530/>

※こちらに移した作品については完全完結とし、それ以上の続編が出ないものとします。

※一部加筆修正あります。

目次

【湊友希那】 My cute niece.

はじめて | 1

デビュー | 4

にやーにやーえぷろん | 9

全てを”掛”ける覚悟はある？ | 13

バレ：そう？ | 18

覚醒 | TypeY | UKI28 | 22

料理長のリハーサル | 32

勝負の日（終） | 41

【松原花音】 ゆるふわ系おねえさんに墮とされる

控えめに言って沼 | 50

浸食 | 54

河海月 | 60

そんなこんなで花音さん | 64

陰 | 71

チエイス | 78

堕ちる日々（終） | 85

【山吹沙綾】 山吹色に染まるまで

宿屋「山吹ベーカーリー」 | 98

癒し屋「沙綾の部屋」 | 106

犯。屋「策士の山吹」 | 109

夢見屋「山吹ダイアリー」 | 114

わかみ屋「沙綾プラス黒船」 | 122

心配屋「黒船来航」 | 128

東縛屋「若宮参戦」

136

寂寞屋「戸惑いと惑い」

142

依存屋「二人の為に」

149

山吹屋「鮮黄色の未来に」(終)

154

【弦巻こころ】朗らか破天荒セレ部活動日誌

一筋の金糸

160

ハンドソーパーこころ

164

俺とこころと時々カナコ

169

初めてでもデキました

176

祝うこころ

181

こころの中で大きなモノ

192

でんでんこころん

199

成長するこころ

207

こころの中に落ちる影

217

コレカラ(終)

222

【北沢はぐみ】Naughty small animals!!

おかいもの

237

やわらか すもう れすらあ

242

どんだんどん! はぐみだよ!

248

年に一度、特別なハグみ

253

がちやがちや

261

はぐみ と かいて おくりびと と よむ

269

まったりじかん

275

はぐはぐあみあみ

279

すれた こころ に じゅんすいさが ささる

283

はぐみのある人生 (終)

289

【戸山香澄】戸山香澄 可能性未知数説

呑んで見上げる夜の華 (嫁編)

296

遠いキヲクの流星群 (妹編)

300

花園乱怒 (恋人編)

305

ぷろぽおず (娘編)

311

懐き懐かれ (幼馴染編)

314

センセイ (教え子編)

319

全てが欲しい (ヤバイ同僚編)

324

姉弟でデキること (姉編)

335

イタズラしちゃうぞ (妹の友達編)

340

ほろ酔い快速超特急 (クラスメイト編)

352

大人と子供 (上司編)

361

ずっとずっと、一緒だよ… (Poppin, Party編) (終)

365

【奥沢美咲】奥沢さんは掴めない

初めての人

368

異空間に咲く百合

373

不可避

379

目指せ病みキャラ

384

奥沢サン

389

泡沫の蜜月と狩人の瞞着

398

あったかもしれない祝福

410

破壊、からの、修復

417

終わりの始まり

422

奥沢さんには掴めない
(終)

【湊友希那】 My cute niece.
はじめて

「料理って…難しい？」
「え」

夕食後、食卓と台所の片付けをしていたところで姪の友希那に話しかけられる。

歌の練習場に、と我が家に来るのもすっかり見慣れた光景となっていたが

料理について訊いてきたのはこれが初めてだった。

…というより、料理を始めとする家事の類は一切できなかった気がするが。

「何なのその顔。何度か貴方の作ったものを食べているけど、アレくらいなら私にもできそうな気がするんだけど。」

「アレくらいってのが引つかかるけど…。友希那、料理したことあるのか?。」

少なくとも俺は見たことがない、兄貴——友希那の親父も恐らく同じだろう。

その物言いから、さぞかし経験を積んでそうではあるんだが。

「いいえ、全く。授業でやらなきゃいけないことは何度かあったけれど、大体はリサが何とかしてくれていたわ。」

「リサ?…ああ、あの茶髪の子か。面倒見は良さそうだけど、そんなおんぶに抱っこってなあどうなんだ…。」

「ほっというて。リサがそれでいいって言うんだもの、私は食べることに専念するだけよ。」

さいですか。

「で？どうして急に料理なんか？」

「その…。そのリサなんだけど、8月が誕生日なのよ。」

それで、私からのプレゼントとして何か手作りのものを渡そうと思っただのよ。」

「ほう？」

「手作りって色々調べてみたのだけれど、あまり手の込んだ物はできないし…私って、手先そんなに器用じゃないし。」

一応調べたりはしてるんだな。

——正直なところ、俺はまだこの子のことがイマイチ掴めていない。

昔はもつと子供っぽい子供だったはずなんだが、ある頃から急に変わってしまった。クールと言えば聞こえはいいが、それはまるで周りから孤立しようとするように見えて叔父という一つ置いた関係性ながら、心配な所ではあったのだ。

兄貴も色々あったみたいだし、こうして他人や新しいことに関心を向けてくれるのは

一つの嬉しい変化として受け取ろう。

「ほー。まあそういうことだったら、簡単な料理とか…そうだな、お弁当なんかプレゼントにいいんじゃないか？」

「!!…お弁当…。そうね…それなら…。」

「まだ2ヶ月もあるんだし、ちよつとずつ練習してみるか。」

「ええ。…お弁当、作ったことあるの？」

「なめんなよ？学生時代から自分の弁当は自分で作ってる。歴だけはそこそこだぞ。」

「へえ。それなら、教えてもらってあげてもいいけど。ただし、やるなら完璧なものにしたいのよね。」

「ああ、そりやいい心がけだな。…リサ？ちゃんに喜んでもらえるよ

うに頑張ろ。」

こうして友希那に料理を教える日々が始まった。

最終目標は8月25日のリサちゃんの誕生日に弁当をプレゼント
することだ。

今日は包丁の持ち方と、『タコさんウインナー』は作れても『にや
んちゃんウインナー』は無理だろうということを教えて終わったが
…。

…歌以外のことに前向きな友希那は、特に見守り・応援したくなる。

デビュー

今日も友希那が居る。

閉め切っている扉の向こうから歌声が聴こえているので、まだ練習は続くのだろう。一応この前のこともあるので、晩飯は作らずに待っている。

…しかし、毎度思うがよくこんなに歌い続けられるよな。

学校が終わったその足で訪ねてきたのが16時半頃。俺が淹れた紅茶を飲み終えるや否やすぐに閉じこもってだから…うん。ざっと4時間は歌い続けている計算になるな。

当然邪魔する気もないし、特に聞き耳を立てているつもりもないのだが如何せん声量が凄い。

プロレスラーのマイクパフォーマンスが如く、隔てている戸の存在を忘れさせる程の音量が響いてくる。流星というべきか、その巧さから聴いていられるのであって音痴が同じことをしていたら間違いない手が出ているだろう。

「…おっ。」

歌が、止んだ。

「……………スウー」

急にしん、とした部屋に深くゆっくりと息を吸う音が聞こえる。

…終わったか。

最近見つけた癖だが、友希那は満足すると今のような息の吸い方をする。特に言葉は発さないが、何となくわかった。

ガチャ、と戸が開き少し汗ばんだ友希那が出てくる。

「おつかれ。」

「…ええ。今日も場所の提供、感謝するわ。」

「喉、よく持つな。」

「…? 当たり前でしよう、練習の賜物よ。」

「そういうもんかね。」

「ええ。」

この淡白さ。同年代の女子といえはもう少し騒がしいものじゃないだろうか。そりゃ静かな子もいるだろうけど、これじゃあなあ…。尤も、それがいいところなのかもしれないが。

「…それで、今日は教えてくれるのよね?」

「お、そうだったそうだった。作らないで待ってたんだけどな?…今日はまず簡単なものからやっさいこうじゃないか。」

晩飯、というには些か似つかわしくもないかもしれないが、今日は友希那と作るように簡単なものを計画していた。

材料をキッチンの作業スペースに並べていく。

「…卵…牛乳??…この粉は?」

「裏に書いてあるだろ?」

「…:…ねえ、これから作るのって晩ご飯よね。こんな時間になって甘い物食べるの?」

「いーんだよ、友希那の料理の練習なんだから。最初は簡単なものから、な?」

「…:…:。」

納得いかなそうな顔をして卵をひとつ手に取る。まあ表情に特に変化ないんだけど。

「あの…。卵も、割ったことないんだけど。」

「…そんなことだろうと思ったよ。」

そう。まさに予想通り。

今日訪ねてくる旨を電話で受けたあと、簡単な料理を探していた時だったがホットケーキミックスの残りを見つけた。その時ふと思いついたのが、『全く料理をしたことない⇒どこまでなら経験があるのか?』だった。恐らく友希那のことだ、調理器具は勿論、ポットからお湯を注ぐだけでも危うい。

そうして程良い経験として卵を用意したのだが…

作業工程なんかを考慮した上でも、入門にお誂え向きだったって訳だ。

「正直なところ、卵なんか割れりや何でもいいんだけど…おいおい、握りつぶすのはやめたまえ。」

「…何でもいいって言ったじゃない。」

話の途中で持っていた卵に全力で握力を集中し出したのには焦った。お前、気づいてないと思うけど青筋立ってたぞ。

「持つ力はそんなに強くなっていいんだ。落とさない程度で。それで…うん、ここの角の部分にコンコンって、ノックする位の力で当ててみ。」

「こんこん…こ、ここうかしら。」

ぎこちない動きだが6回目のこんつでようやくヒビが入った。透明な糸が溢れる。

「えっ、わっ。こ、これをどこにやれば…」

正直、オロオロしている友希那は新鮮で無茶苦茶可愛い。相変わらず無表情だが、声色には明らかに困惑が見える。

「ふふっ…このボウルにな。こ、こう、親指を使ってパカッと…そうそう、

上手いじゃんか。」

「……できてる?」

「ああ、初めてだったんだろ? イイ線行つてんよ。」

黄身は破れぐちやつとしてはいるが、殻の破片も入っていないし、擬音多めの説明を聞きながらも動いている。経験ないだけでやりやできるタイプだな。

「…もう一個、やるわ。」

「え? 別にいいけど、そんな食える?」

「……こんこん、こんこん……ぱかっと……できたわ!」

「聞いちやいねえ。」

今度は黄身も保ちつつ綺麗に割れた。流石に卵は大丈夫だな。

「ふふん。」

「ん、やるもんだな…。あとはこっちのカップで牛乳を量って…うん、入れちやつていいよ。」

「…んしょ……次は?」

「はいこれ、粉なんだけど内側にくつついてるから軽く叩いてから…」

びりっ。

「!!……けほっ。」

「…叩いてから開けないとこうなるんだよ。勉強になったな。」

「もつと早く言いなさい…。」

脇腹のあたりを小突かれる。

その後混ぜ合わせ、隠し味なんかを入れ、焼き。因みに我が家ではいつもマヨネーズを入れる。ふっくらするらしいがあまり実感はない。

焼きの時には特筆するような事件もなく、まあまあといった出来であった。

「ん。で皿にのせて…。できたな。」

「…!!…スウー」

「…料理、楽しかったか？」

「ええ…悪く、ないわ。」

若干粉を被って白くなつたその顔は満足そうだ。例の深く吸い込むのもそうだが、珍しく口角が上がっている。

「夜に食べるスイーツもいいわね。」

「自分で頑張ったから尚旨いのさ。」

量つたり混ぜたり焼いたり、初めて尽くしで疲れたろうに。久しぶりに子供っぽい表情を見せる姪は寧ろ料理前より生気に満ちているように見えた。

「でも、お弁当にホットケーキは入れないわよね。」

「そりやな。」

「…次も頑張るわ。」

「ん。」

にやーにやーえぷろん

大人になって。中々自由な時間が取れなくなってからの話。
こんなに真剣に、声が枯れるまで歌う事があつただろうか。
それも自宅で。

今日もまたあの歌姫がうちに来ているのだ。…料理を習いに、来たはずなのだが。

「…もう限界なの？料理を教える時はあんなに先生面しているくせに、不甲斐なさすぎる体たらくね。」

「お前と違って毎日歌ってるわけじゃないんだから…。もう何年大声出してないと思ってるんだ。」

「大声を出せと言ってるわけじゃないわ。お腹…そう、この丹田の辺に力を込めて、響かせるように声を」

「だー！もういい！俺に歌は無理だ！飯作るぞ飯！」

「…仕方ないわね。続きはまた次回にしましょう。」

「まだやんのか…。」

普段料理を教えている”礼”として、よりもよって歌を教えると
言いだしたのだ、この姪は。

確かに「お互いの得意分野を教え合うなら、それは高め合うことにも繋がるし」という言い分もわかる。が、それとこれとは別の話だ。
俺は元からそういった芸術方面の人間ではないのだ。せめて多少は
素質か興味があるものにしてくれ。

と、脳内で悪態をつきつつも手元は着々と料理の準備を進めている。
ひまわりがプリントされたエプロンも装備済みだ。

ああ、エプロンといえば…

「どうだ友希那。料理楽しくなってきたか？」

「？…ええ、まあまあ楽しんでるわ。」

「そうかそうか。…実は、そんな友希那ちゃんにプレゼントがありません。」

「いらないわ。」

「…ふーん。じゃあいいよ、きょうの料理もなしだ！」

「えっ」

これはどうしても友希那にあげたいプレゼントなんだ。そのためにも、ちよつと大人気ない態度を取る作戦へ移行してみる。

「…じゃあ、プレゼントの内容だけでも、聞いわ。」

効いた。

「そうか。……………これだよ。」

差し出したのは黄色とオレンジのチェック柄のエプロン。丈は短いタイプだ。一見普通のエプロンだが裾をよく見ると…子猫が寝転び、寝返りのようにゴロゴロ転がる姿が描かれている。

「ありがたく頂戴するわ。」

ひったくるようにしてエプロンを回収する友希那。

おお、眼が輝いているぞ。

「…気に入ったか？」

「ええ、まあね。」

「ただ、そのプレゼントには続きがある。」

「…続き？」

ゴクリ。と。友希那の喉が鳴る。

そう、このプレゼントには続きがある。豪華二本立てってやつだ。

「見るだけなら許可するが…」

「ぜひ見せてもらおうわ。」

「これだ。」

そう。それはコック帽。シェフの証。それもでかい肉球のデザインに赤いリボンまで付いたスペシャルな仕様だ。実はこの二つはセットで売られていて、結構なお値段のものではあるのだが…。このパステルっぽい黄色とオレンジが凄く友希那に似合いそうな気がして。

…まあ、衝動買いって奴をしてしまった訳だが、こんな形で渡す事になるとは。

「こ、これも頂けるのかしら。」

「これはまだ御預けだ。これは…そうだな、もっと料理が上達して、シェフと認められたら贈呈しよう。」

「認められるって…誰に？」

「俺。」

「……………スウー」

出たなその満足そうな吸気。目標が定まって一段とモチベーションが高まったってところか。

「よし、エプロンつけてみるか。」

「ええ。お願い。」

そう言つて両手を突き出す。

肩紐を通してやり、腰紐を後ろに回し交差…前へ持ってきて蝶結び、と。…ん、思ったとおり似合ってる。

「おお、友希那。かわいいぞ。」

「そ、そうかしら…色、派手じゃない？」

「全然。すごく映える感じだ。いいなあ…。素材もいいから似合うんだな。」

「も、もう…。」

「よし、あっちの部屋行こう。鏡見ようぜ。」

隣の部屋へ移動し、身長ほどある姿見の前に立つ。

「…どうだ？」

「悪くないわね。」

「よし友希那、ポーズだ！ポーズ！」

「ぽ、ぽおず…う…こうかしら…？」

お前…鏡に向かってピースって…。可愛すぎか。

その後もノってきたのか、くるりと回ってみたり招き猫みたいな仕草を試してみたり。今日の料理の授業がファッションショーになってしまう位には楽しんでいたようだ。

勿論、写真もたくさん撮った。

結局料理はできなかったが、友希那は終始ご機嫌だった。多分。

家まで送り届けた後に、兄貴に友希那のエプロン姿を送ってみた
ら、二分と経たずに返信が来た。

『お前が弟でよかった。』

「……………」

全てを「掛」ける覚悟はある？

「ねえ。…ねえってば。」

「あー??」

一作業終わり、掘り出した一昔前のアニメのDVDを見てみると、
姪が袖を引つ張る。ちよつとまってくれ、今いいところなんだ。

「…もう。そんなに面白いの？」

「んー…。まあね…。」

「ふーん…?…ちよつと詰めて、私も見るわ。」
「ん。」

主人公が留年するヒロインを置いて高校を卒業してしまうシーンだ。
主人公とシンクロするように俺の視界もぼやける。

「はあ……。ええ子や…。」

「…あなたって、こういう子が好きなのかしら?」

「そういうつもりで見ているわけじゃないけど…。でも、ま、ロマンっ
ちやロマンだよな。」

年上って感じが全くしない後輩のような年上で、気弱で一途。ゾッ
コンレベルで好かれた上にとことん尽くされるって、もう最高じゃ
ん。

「そう…。」

「はあ…。何年かぶりに見たけど、やっぱ涙腺に来るなあ…。」

「…あなたが泣いているの、初めて見たかもしれないわ。」

「流石に姪の前で頻繁に泣く叔父じゃなあ…。」

「案外可愛いところあるのね。」

「…馬鹿にしてんだろ。」

「さあ?…それより、今日もやるわよ。」

あれ、君いつのまにエプロンつけたの。髪も纏めちゃって…俺が視界を奪われている間に何があったし。

「お、自分で結べたのか。」

「ええ、おかげでね。」

「ほー。別にいいんだけど、リボン結びが縦になっちゃってんぞ。」

「…ああ。何回やり直してもこうなっちゃうのよ。向上心の現れかしらね。」

「調子いいこと言っちゃって。」

さて、と。今日は何を作ろうか…。

「友希那。何かやってみたい料理とかあるか?当然、最後は弁当を作るのが目的だから、弁当に入ってそうな献立とかでもいいぞ。」

「そうね…。さっきのキャラクターは料理とかするのかしら?」

「あのヒロインの子?…たしか、料理はそこそこできるはずだな。このあとも、一人暮らしの主人公の家に飯をつくりに通うはずだ。」

「随分饒舌に話すのね。」

「お前が訊いたんだろう。」

「なんだかちよつとムカつくわ。」

「めちやくちやだなおい…。」

心なしか当たりが強い気がする。嫌なことでもあったのか。それとも月の――

「ポテトサラダっていうの、作ってみたいわ。」

「お?おお、結構な所行つたな。」

「そうなの？難しい??」

「まあ、今までの料理歴をみてみたらな。」

「はあ。」

「考えても見ろ。お前今まで、市販の粉使ってホットケーキ焼いて、新しいエプロンつけて嫌いだからだぞ。」

今回は味付けの要素もあるし、工程も少し長い。結構な差だ。」

「…あのあと、エプロンつけろってしつこかったわよ。…父さんが。」

「ああ、写真送ったらめっちゃ喜んでたもんな。兄貴。」

「ちよ、何勝手に…」

「ポテトサラダだったな？材料用意するから、スマホで手順でもざつと見ときな。」

納得していない様子でスマホを操作し始める友希那を尻目に買い出しへ出る。

帰ってきた頃には、調理器具も用意されていて、まさに準備完了といった様子の友希那が待っていた。

「ふむ、早速作るか。」

正直なところ、あんまり俺が教えることってないんだよな。

最初こそ基礎的なことを教えはしたが、今は本人が意欲的なこともありどんどんと上達している。元々センスはいい子だ。掴み始めたところからは早いのだろう。

「おお、なかなかいい見た目じゃないか。」

「盛りつけはネットの画像を参考にしたわ。」

「うんうん。うまそうに見えるぞ。ただ問題は量の加減だな。これじゃがいも何個使った?」

「え?…ひと袋、全部使うものなんじゃないの?」

「やつぱりか…。次は、飽く迄おかずの一つということを頭に入れてやってみような。…これじゃ二人分くらいの主食の量だ。」

まさかポテサラ一つで大皿を満たせると思わなかったよ。

「…それもそうね。お弁当箱はこれくらいだったもの。」

指で”◇”を作ってみせてくる。手えちつちええ…。そのサイズだとおにぎりも入らないぞ。

「ま、まあ食べてみなさい。料理は味で勝負だもの。」

「ああ…早速いただくよ。」

「はい、箸。」

「おう……………んん??？」

一口食べてみると何かが足りないことに気づく。口いっぱい広がるじやがいもの、土の香りを彷彿とさせる甘さ。そして物凄い自己主張のマヨネーズ。

……………だけ？

「これ、何入れた？」

「何って……………キューピーよ。」

「はあ？」

「これ。」

「キューピーじゃなくてマヨネーズだ。キューピーだと、ここにゴロゴロ人形が入ってることになるぞ。」

「猟奇的ね。」

「うっとりした目をすんな。」

「チューブが小さくて物足りなかったけど、とりあえず絞りきったわ。」

「全部!？」

「あとはこれ。」

「テンポだけなら料理番組みたいだ。…で、これは、胡麻？」

「そうよ。出てきた写真に黒い粒が写っていたから、これはきつと胡麻だと思ったの。」

「なぜ胡麻。」

「真ん中にはらばら撒いてるように見えたから、アンパンを思い出したのよ。」

「あれ胡麻じゃねえだろ…。」

「…知らないわ。」

「とりあえず、色々違うからな。…どーすんだ、この大量のマヨじやが。」

「2、3日食いつなぎなさい。」

「バカ言え。いいか？味付けはなあ——」

その後も、普段とは違って真面目に説明を聞きメモを取る。最近はやっぱり料理に対しても真剣な姿勢になりつつあるんだよな。友達のリサちゃんのためとは言え、いい傾向だ。何より可愛い。

困みに、最初の大量のじゃがマヨは兄貴が食ったそうさだ。

愛娘の手料理だ。さぞかし嬉しかったことだろう。

バレ…：そとう？

「お、お邪魔するわ。」

「お邪魔しまゝつす。」

姪が来た。

…それはまあいつもどおりなのだが、今日は客人が一緒だった。心なしか、友希那も緊張しているようだ。

…いつも遊んでいる友達とかじゃないのかな??

「おう、いらつしやい。…で友希那、その子は？」

「えつと…：。」

歯切れが悪い。いつもあんなに冷たく言い放つのに。

友希那とは対照的に明るく、敢えて悪く言うなら”チャライ”雰囲気の子は、もぐもぐと言葉を探す友希那を優しい眼差しで見守っている。

…とりあえず、玄関から上がらないかい？二人共。

友希那が一生懸命テンパってるので声には出さないが。

「友希那…：そんな言いにくいことじゃないつしよ？」

「や…：別に、そんな…：。」

「とりあえず、二人共上がらないかい？」

立ってるのも辛いので言ってしまった。すまん友希那。俺も歳だ。

二人を居間に通し、茶を出す。今日は仕入れたてのオールグレイ

だ。

「あ、ありがとうございます。」

「いえいえ…。いつもうちの友希那がお世話になってます。」

「ちよ…」

「あはは、こちらこそ、友希那にはお世話になってるんで…」

「えっ…」

「そうなの？面倒見良さそうだけどね、君。」

「そうですか？…あ、アタシ、リサっていいいます。」

「リサ…？」

会話に入れずオロオロする友希那を放置し会話していると、ついに友達の名前が判明した。それも幾度となく聞いた名前。何度も俺に話してくれた彼女を見やると、真っ赤な顔で俯いてしまっていた。

「…ああ、友希那の恋人さんか。」

「えっ…なっ…！」

「え、アタシって恋人だったの？友希那あ。」

「リス…あな…もうっ!!」

「あれ、友希那どうしたの？顔真っ赤つかじゃくん。」

「ばっ…ばっ…!!」

駄々っ子のように力ないパンチを繰り出す姪っ子。なんだこれは、今まで見たことのない可愛さだ。

「んん”っ…それで、リサちゃんはどんなご用事で？」

「あ、そうでした。なんかー、友希那が家で料理してるところ見ちゃったんですよー。」

前はそんなことする子じゃなかったんですけどー、なんでかなーって。」

「ああ…。急にやり始めたら違和感あるよな。」

「そうですね。…で、問い詰めてみたら、ここで教えてもらってるって言うんで、ついて来てみたんですよ。」

友希那…思つくそバレてんじゃねえか…。駄々っ子パンチしてる場合じゃねえぞおい。

「友希那…。」

「う、うるさい。…昔から嘘が通じないのよ、リサだけは…。」

「幼馴染なんだっけ？」

「あ、はい。家も隣だし…。」

「へえ。」

「も、もういいでしょう。リサ、帰るわよ。」

「あれ？今日は料理していかないのか？ゆきにや。…な」

「ゆきにや？」

「ツ……！」

ついうっかり。

友希那が猫に目がないという情報を仕入れた俺は、ここ数日猫グッズで攻め続けているのだ。この呼び名は、猫耳をつけて燥いでいた友希那に捧げたものだ。

「ふうん…？」

あ、リサちゃんも猫みたいな瞳をしている。あれは獲物を捕らえた瞳だ。逃げる友希那。

「これは、その…違うのよりサ。その馬鹿が急に言い出して…」

「おい。」

「あはははは!!お二人、仲良いんですねー!!」

「そんなことないわ。」

「…おい。」

「あっはっはっは!!!」

∴結局、今日は料理はしなかった。

まあ、サプライズしたい相手がそこにいるのだから、当たり前といえども当たり前なのだが。

終始、リサちゃんに二人して弄られ、俺はひたすら友希那に冷たくされるといふ心の折れるような時間を過ごした。なんとか、料理を習うきっかけや最終目標についてはバレずに済んだが、俺はしょんぼり気味のまま、手をつないで帰るふたりを見送った。

——今日は、姪が、遠い。

「おいどうすんだ友希那…。もう一ヶ月切ってるんだぞ…。?」

目の前の光景に、若干の萌えと不安を感じつつ思わず吐いた声は震えていた。視線は60度程下方へ、前方の床へと向けられていた。

そこには――

「み、湊さ……。あんつ。」

「にゃー! 紗夜! その持つている果実を…渡すにやつ!」

「ちよ、ちよつと待つて湊さん…そんなとこ舐めちや…ああつ。」

――猫耳と尻尾を装着し、身も心も猫になり切っている姪とその友人がまさに肉弾戦キヤット(意味深フアイト)を繰り広げているところだった。

昼過ぎ、休日を満喫していた俺の部屋のチャイムを黒猫の運送屋さんが鳴らした。

…ついに、あれが届いたか。

逸る気持ちを抑えつつ、若干のスキップ風味で玄関へ向かい受け取る。

部屋に戻るや否や、包み紙をもうめちやくちやにする勢いで開封していく。アメリカンチルドレンのように。

「おお…これは想像以上だ…。」

通信販売にて購入したのは”猫耳”と”猫尻尾”のセット。以前渡したものよりもしつかりした造りで種類も違う…三毛柄だ。何気

なくまとめサイト巡りをしていた時に広告を踏んでしまい、深夜テンションも相まって購入してしまったものだ。

これを友希那に：久々に『ゆきにゃ』が拝めそうだ。

丁度今日は料理の件で訪ねてくる日。まだ時間があるし、材料の買い出しにでも向かうか。

訪れた産地直送の市場。そこで恐ろしい物を見た。

「マンゴー…？こんなデカいのも買えるのか…？」

値札を見ると…。

あつ、これはいけない。見なかったことにしよう。果物一玉に付いていい”ゼロ”の数じゃない。あれは貴族の食べ物だ。きつとそうだ…。味わってみたい衝動には駆られたがお財布事情的に手は出せない。

…それに今日は料理の材料を買いに来たんだ。マンゴーなんて買っても調理しようがないだろ。

さて、中々に良い物を見られた買い物だったが。…そろそろ来る頃か？

姫様が来る前に換気を、と思い何気なく窓を開けると。

「ちよつと、付いて来なくていいって言ってるでしょう？」

「別にいいじゃないですか。今井さんは来たのでしょうか？」

「リサはリサだもの。」

「…紗夜は紗夜、とは言ってくれないんですか？」

「…あなた、熱でもあるの？」

と。

また珍しく他の人と歩く友希那が見えた。

声こそ遠いが、ある程度良い関係の…友達かな？前のリサちゃんとは違う感じの子っぽいけど、意外と広い人脈持つてんのなあ。

「!!…止まって、湊さん。」

「??…何よ。」

「あそこ、首を動かさずに目だけで見てください。」

「……………ああ。」

「変質者がじつとこちらを観察しています。」

「…嫌なら帰れば?」

「なっ?!?気にならないんですか!?!」

「…いちいち気にしたら何もできないじゃない。」

「ホント、音楽以外は気にならないんですね…。」

ボロクソ言われている…。そんなに見てたか俺。

何にせよ、あの位置に見えるということとはもう五分と経たずにうちに来るということだな。にゃーんちゃんセットは隠しておいて、と。

ガチャ

「来たわ。」

「お、お邪魔しま…あっ」

「いらっしやい。…変質者の家へようこそ!」

「ちよ、湊さん!?!さつき教えてくれてもよかったのでは?」

「着いてから紹介する方が時短になるでしょう。手間も減るし。…叔

父よ。○○っていの。」

「○○おじさんだよん。」

「…:…ひ、氷川紗夜と申します…。あの、○○さんはいつもそんな感じなんですか?」

「…な訳ないでしょう。…:…ちよつとあなた、ふぎけないで。誤解されるわよ。」

「まじか。こんなキャラだと思われるのは嫌だな。」

「キャラって…う？えっ??えッ!？」

この氷川ちゃんって子は冗談の類が通用しない子らしい。視線が物凄く忙しくなく行ったり来たり。恐らく今必死に頭の中を整理しているんだろう。一見冷たそうな彼女だけど、よく見ると表情豊かで可愛い。

「イテツ」

「今、不埒なこと考えてたわね？」

「いきなり抓んなよ…。表情豊かでちよつと可愛いなって思ったただけだよ。」

「思ってるんじゃない…!!」

「いちちちちち…やめなさいってば。」

「あ、あの…私…」

「ああ、ごめん氷川ちゃん。誤解されてたら申し訳ないけど、俺別に変質者とかじゃないからさ。」

もうちつと肩の力、抜いていいよ?」

「は、はあ…。」

何だか満足いつてないご様子。そのうち、はっ!と何かを思い出すような表情の後に、鞆からごそごそと何かの袋を取り出した。

「そういえば…お渡しするのが遅くなってしまい申し訳ありません。こちら、つまらないものですが…」

「あ、いえいえそんなお構いなく…。」

なるほど、礼儀とかはちゃんとしている。委員長とかやつてるタイプの子だな?思わずこっちまで敬語になりながら、頭を下げて袋を受け取る。

…マジか。

「えつと、氷川ちゃんも△△マーケット行つたの？」

「えつ…！何故、それを？」

「これ、昼間行つた時に買おうか迷つてたんだよ。」

「??○○、一体何を貰つて…なにこれ？」

「先程一緒に寄つたお店で買ったじゃありませんか。何を見ていたんですか全く…。」

「むっ、失礼な物言いね。」

頂いたのは先程目を奪われたマンゴー。持つてみて改めてわかる。実のしつかり詰まっていたいいマンゴーだ。というか友希那お前…口で「むっ」つて…可愛いかよ。

「こりゃあいいお土産を貰っちゃったな。ところで、氷川ちゃんは何の御用で来たんだい？」

「えつと…今井さんに、教えてもらいました。」

「今井…？」

「リサよ。この前来たでしょう。」

「ああ、そういえばそんな苗字だったな。…何を教えてもらったんだ？」

「…この家に行けば、見たことのない湊さんが見られるつて。」

「……………」

「……………リサ、やってくれるわね。」

「友希那。キミ普段どんな接し方してんの。」

「別に、普通よ…。」

「氷川ちゃんから見て友希那はどう？今もう既に違つたりするの？」

「だいぶ違いますね。まず先程のように他人の体に触れたりはしませんし」

抓つた時の奴か。痛かつたぞあれは。

「そもそもそんなに他人の近くに立ちません。」

ああ、今は寄り添うように立ってるもんな。何なら、俺の左半身は友希那の体重を僅かに支えている。…要は寄りかかられている。

「あとは…そうですね、口数も多いですし、表情の変化も大きいです。」

「ほおー?…友希那、友達とはもっと仲良くしないとだめだぞ?」

「余計なお世話よ。それに、友達じゃないし。」

「ああ、バンドの仲間だったな。…つーか氷川ちゃん、友希那についてえらく詳しいな。」

「へ?…いえ、別に。」

「ふーん。」

好きなのかな。仲いいって羨ましいなあ。

お、そうだ。

「氷川ちゃん。君にはとっておきの友希那を見せてあげよう。」

「とっておき…ですか。」

ゴクリ、と氷川ちゃんの喉が鳴る。綺麗な子の喉って色気があるな…。じゃなくて。

「…ちよつと、何する気よ。」

「友希那、これ。プレゼントだ。」

「…??何この箱。」

「開けてごらんなさい。」

「?ええ。」

…(ご)そと箱を解体していく。その若干不器用そうで危なっかしい様子を、俺と氷川ちゃん二人して見守る。

…やっぱりそうだ。この子も友希那が好きなんだろうな。

「……？……ッ!!!」

「どうした？」

「にやっ、にや、にやんてものを…!!」

「…いまいちだったか？」

「つけてきていい??」

「ああ、いっついで。」

言うや否や、箱から出したそのセットを持ち、普段歌練習に使っている部屋へと飛び込む。後にはぐちやぐちやに散らかされた箱だったもの。にこにこの俺。呆然とした氷川ちゃん。

「…どうだ？」

「…にや、にやんですか今の…。」

「感染ってるぞ。」

「湊さん……はああ…。」

幸せそうな溜息じゃないか。因みに扉の向こうからは、結構な音量で鼻歌が聞こえてくる。流石の肺活量だ。

まあ、あつちには姿見もあるからな。今頃鏡の前で色んなポーズを取っていることだろう。

「友希那あー。どうだー?」

タツタツタツタツタ…バアンツ!!

呼びかけに対し数秒遅れで開かれる扉。壁とか傷つくからもう少し静かに開けてって言ったよね。

現れたのは、『完全猫仕様』——髪を低い位置で二房に分けて縛った、所謂「おさげ型ツインテール」に三毛柄の猫耳・尻尾をつけ、以前プレゼントしたエプロンを装備——の友希那だった。

ううん、我が姪ながら実に可愛い。可愛さの究ここに極まれりって感じだ。天使か。

隣のクールビューティがえらく静かなのも気になるがまずは写真を…取ろうとして、左手が生ぬるい何かで濡れていることに気づく。??…何だ血か。

…血イ!?

慌てて左側を見やると

「氷川ちゃー…!!!!」

微笑みを浮かべつつ鼻から滝のように血を流す氷川ちゃんの姿が。お前の鼻、ジエツトか何か積んでんのか。

すぐさま体を支え、傍のティッシュで止血を試みる。…面倒だ、詰めときやいいや。

出血も収まり、氷川ちゃんの意識が戻ってくるまでわずか数秒。超回復の氷川ちゃんと高速治療テクニクの俺、どっちが化け物かわからんね。

「はっ!?!…天使? 私の天使はどこ!？」

「気が付いたか?」

「この胸の高鳴り…抱きしめるしかないっ!」

「待つんだ氷川ちゃん! 君今血まみれなんだぞ!!」

「!?ほ、ほんとだ…ってあれ? 私は一体何を。」

「漸く正気に戻ってくれたか。血を見ると冷静になれるって本当なんだね。」

まあアレを見てトリップ仕掛ける気持ちはちよつとわかる。まず友希那がにこにこしてる時点でヤバイもんな。

「……これでよし。○○さん、行ってきます。」

「ちよ、これ何? うわ服脱ぎやがった!」

全然正気じゃなかった。下着姿になった氷川ちゃんはそのままの

勢いで友希那にダイブ。床に押し倒して写真を撮りまくっていた。いや確かにそれなら血は付かないけど…。ここに男も居るんだけど、いいのかな。

…友希那も嫌な顔してないし、別にいいのかな。

ただ、猫セットフル装備の女の子に下着姿でスマホとマンゴーを持った女の子が跨がっているのは…正直異様だ。何の祭りだ。

「ん？何故マンゴー??」

見間違いないじゃない。氷川ちゃんの左手には先程のでかいマンゴーが。

あ、友希那の目は完全にそれを見ている…ということとは、瞬時に餌と判断して持って行ったって事か？氷川紗夜…さすが友希那好き。そこまで把握しているとは。

*
*

「にやつ！にやー！いきなり何するにやー！」

「湊さん湊さん湊さん湊さん湊さん湊さん湊さん湊さん湊さん湊さん」

「…正気に…戻るにやー!!」

「あうっ!？」

おお、反撃だ。

マウントを取られている状態から跳ね除けるとは。どこにそんな力があつたんだ。そして…逆に馬乗りになった。

「こんな、こんな、破廉恥な恰好して…!!その果实ごと食べちゃいたい…にやあ。」

「ひいつ!?!…ちよ、ちよっとストップです友希那さん!!」

可哀想に、最悪のタイミングで正気に戻っちゃったよ。三次会辺り

で急に酔いから醒めるような意味の分からなさだろう。

「…とまらないっ、とまらないにやあ!!」

「ストップ…ああ、だめですそんなところ…いやっ…」

「にやああああ!!」

妙に色気を漂わせた氷川ちゃんが『今日の事は一生忘れません。また来ます。』と帰って行ったのが1時間ほど前。

残された気まずい空気と、今にも溶けそうなほど落ち込んで小さくなっている友希那。

「友希那、今日の料理は」

「死にたい。」

「マンガーは」

「…明日食べる」

料理長のリハーサル

『もし』

「もしもし、兄貴から電話とは珍しいね。」

『…今大丈夫か?』

「??まあ、もうすぐ友希那が来るまでなら。」

『ああ…ちようどその件なんだが。』

「ん??…べ、別に手は出してないからね!？」

『………本当か?』

「えっ………うん。」

『…最近な。やたらと小遣いを要求されるんだよ。』

「はあ。」

『他にも、い、いやらしい小道具とか、持ってくるし…』

「…何で兄貴が恥ずかしかつてんの?」

『馬鹿野郎! 実の娘のそういう姿…興味ない訳無いだろう!』

「ちよつと何言ってるんだかわかんないけど。」

…要は友希那でそういう妄想をしてるってこと?」

『…殺すぞ。』

「相変わらず冗談を冗談ととつてくれないな兄貴は…。」

『お前が解り難いんだよ。』

「あそ。いやらしい小道具って、猫耳とかしっぽとか?」

『そうだ。』

「兄貴は、友希那が猫好きって知ってる?」

『…昔飼ってはいたが、未だに好きだとは。』

「もつとコミュニケーションとんなよ…。」

大好きなんだと。まあ直接聞いたわけじゃないけど、見てたらわかるよね。

それでプレゼントしたら喜んじゃって…。」

『じゃあ、如何わしいものではないんだな?』

「当たり前だろ…姪にそんなこと求めねえよ…。」

『後はなんだ…、何やらよくわからない食べ物を持ってきたり…。』

「それは前にも説明したろ、友希那の練習の副産物だよ。」

『…それもなあ…なかなかしんどいんだよな。一週間じゃがいもはやばかった。』

「ああ、ポテトサラダか。」

『あれがポテトサラダ?…お前何を教えてるんだ?』

「料理だよ。あれは友希那の独特の感性によって引き起こされた化学反応の結果だ。」

『……せめて美味しいものを作らせてくれ。』

「兄貴…独り身の俺から言わせたら自分の娘の手料理を食べるってだけで幸せなことだと思っけどな。」

『…お前…。』

「……またいい写真が撮れたら送るからさ。」

『あれはいいものだな!!ぜひ頼む!!』

「急にテンション上げんな気持ちわりい。」

ピッ

「……………娘の見た目大好きかよ。」

兄貴こそ、親として大丈夫かよ。コミュニケーション足りないんじゃないか??

「…ただいま。」

「おま、ついに自宅と俺の家の区別もつかなくなったか。」

「…ふう。もう第二の自宅のようなものじゃない。」

「そう思ってくれるのは嬉しいんだかなんだか…複雑な気分ではあるな。」

「それよりも、喜びなさい。」

「なに。」

「リサの誕生日まで丁度一週間でしよう?…今日はリハーサル、あなたに料理を振る舞うわ。」

「ええ…。」

「何よ。」

「別に。」

「あそう。あ、でもね…んしょ。」

来た時から若干気になりつつも触れていなかった二つのビニール袋を突きつけてくる。こいつ…何度言ったらエコバッグ使うんだ。

「材料は買ってきたから安心して?」

「あーあー…。どうしてこう大量に買い込むんだ。…本番の買い物は俺も一緒に行くからな?」

「それは、失敗した時にもう一度買い物に行くのが面倒だからよ。」

「失敗を先に考えてる時点でどうなの。」

「うるっさい男ね…。」

あのなあ友希那、君普段からあんまり目付き良くないんだから、眉間に力入れるのよそうな。すっげえ目力・圧を感じるぞ。

「第一、バイトとかしてないだろ?」

「お金はいいのよ、あなたにもらった猫耳つけて頼んだら父さん一発だから。」

「悪女か。」

見た目だけは可愛いもんなあ…。

つか兄貴、「せびられる」とか言ってたけど、完全に手玉に取られてんぞ。

「まあいいや、今日は何を作るんだ?」

「一応最終目標でもある、お弁当に入れられそうなものを作るつもり

よ。晩ご飯用だから、完全にお弁当を作るわけじゃないけれど。」

「……この量の買い物で？」

「いいでしょう別に。…それと、一人でやるから、あなたはキッチンに
来ないでちょうだい。」

「…火事とかは勘弁な？」

「失礼ね、そこまで料理音痴じゃないわ。」

というわけで、友希那の一人クッキングタイムが始まった。

来るなどと言われてもやはり不安なもので。エプロンをつけてご
機嫌に揺れる、ポニーテールな姪の後ろ姿をリビングから眺めてい
た。

「…あら、すりごまってそのものが売ってるのね。」

普通のものしか買ってこなかったわ。」

「なるほど……ここで「みじん切り」ね。」

思い返してみたら、友希那に料理を教え始めて早2ヶ月。

一人ではあまり感じる事のない時間の流れも、あの子が来るようにな
ってから楽しいものになって。

「いったあ!？」

「もう包丁なんて嫌いっ。」

…嘘よ、好き。」

…最初は包丁一つ握れなかったあの子が、「二人でやるからキッチン
に来ないでちょうだい」だもんなあ…。

成長、したよなあ。

「赤ければ何でもケチャップなんじゃないの…？」

トマトソースじゃだめかしら…。」

「…入れちゃえっ」

そういえば、今はすっかり見慣れたあのエプロンも、最初は燥ぎま
くってポーズなんか決めちゃったりして…。

あの時も、正直料理ができるようになるとは思ってなかったけど、
形だけ・気持ちだけでもと思つてプレゼントしたんだよなあ。

「…フライパンを振るって、結構腕力いるのよね。」

「まあでも？この前紗夜にギター持たせてもらったもの。」
ガチャァン！

「!? あっあわわわわわわわわ」

モチベーションが上がった友希那なんて、滅多に見られないからね。変な意味じゃなくて、途轍もなく可愛かった。

一度だけ見に行ったライブとはまた違って、純粹に一人の女の子って感じの…

「…もうこれでいいわ。」

「さて次はこれね…：本で見えてやってみたかったのよね。」

「火を付けて…このよくわからないお酒をつと…。」

「この行為…フランベって言うのよね。…Flammeにちよつと似てるわ…」

勿論、バンドの方も順調みたいだし？リサちゃんにもいいプレゼントができればいいけどなあ…。あの友希那がバンドかあ…。音楽に對して真剣なのは知ってるけど、友達と上手くやれてるってのがすごい。

この前来た…ええと、氷室ちゃん？あれ、氷…川ちゃんだっけ？あの子と喋ってる姿も新鮮だったけども。

「片手でフライパン持つって辛いわ…」

「さつき両手でアレなのに…」

「こう、お酒を…わっさああああ、と。」

ふふっ、響きが…うわあああ!？」

…目の前の惨状、勿論見えているからね？敢えて綺麗な思い出に浸ることで、具体的な片付けの労力を考えないようにしてるの。

「…もうサラダなんてこれでいいわ。」

「めんどくさっ。」

「……………」

「ほほー!! なかなかいい感じじゃないか!」

目の前、食卓に並べられた料理。盛りつけは…まあ教えてないから仕方ないけど、匂いからして味には期待できそうだ。

…ポテサラの時は無臭だったもんな。

「ただ、このサラダ？の丸投げ感はなんだ。キャベツ半分とドレッシングって…。」

「いいじゃない。食物連鎖よ。」

「食物繊維だろ。」

「…むーっ」

「いてえー！」

今日の駄々っ子パンチは力入ってんな…。骨が、骨がやられる…。

「いいから、食べなさい！」

「…おう。」

あの料理中の、いや戦争中の惨状は思い出さないようにしつつ一口目。

……おお。うまいなあこれ！

「…なるほどな。…これ、塩コショウとバターの他に何入れたん？」

「え？…ああ、ケチャ…うん、ケチャップよ。あとコンソメを少し。」

「ほほお、それだけでこんなに旨くなんのか!!」

「!?ほんとは??おいしい??」

「おう、いい味だ。」

「…よかったあ!!この前ファミレスで見かけて以来作ってみたかったのよ。…オムラ」形はあれだけど、卵焼き添えてるのもいい感じだな。……このピラフ。」

そうか…まさかピラフで来るとはなあ。うん、確かに弁当にも入れ

られるしな。ただの白米入れるより、全然いいかもしれない。

「いやその、オム」「ただ、この黒炭みたいなのはなんだ。」

「……………」

「…友希那?」

顔が真っ赤だぞ?目に涙まで浮かべて…。あつ、部屋暑いかな?エアコン…はあとでいいや。

…まあ、まさか黒炭ってことはないだろうし、食ってみればわかるか…。

「ほう…：灰かに香るアルコールの香り。なるほど…：牛肉の、…何かだろうな、うん。さっきのボヤ騒ぎは、あれか、フランベ?」

「…：そうよ。」

「うん、美味しいよ。…見た目はあれだけだな。」

焼け残りかと思つたもん。

フランベ?…：ああ、顔が赤いのってそういう…。ダメだぞキツチンドランカーは。何にせよ、これはもう成長以外の何物でもないな。

「友希那。」

「…：何よ。」

「来週の弁当、喜んで貰えそうだな。」

「…えっ?じゃ、じゃあ。」

「ん。……………友希那には、これをプレゼントしないとな。」

ついにこの日が来たか。ひとり立ち記念でプレゼントしようと思つていた例のアレを取り出す。箱に入ったままのソレは、正直埃を被る直前まで忘れかけていたものだったが。

「わああ…!!!」

例のコック帽。これでフルセット完成だな。

何も言わずに例の部屋の扉を開けてやる。そこに駆け込む
一匹の猫。^{友希那}

さて、このあとはきつと撮影会が始まるんだろうし、キッチンの後
処理は徹夜でやるしかないなあ…。

* *

「…んあ？兄貴？…また電話かよ…。」

ピッ

「はい？」

『お、おま、あああああれ、あのぼぼぼぼうし、こっくこっくこっく
「落ち着け兄貴。」』

『なんつー写真を送ってくるんだお前は。』

「…ダメだったかよ。」

『ぐっじよb』

ピッ

「……………興奮がもう。」

兄貴との通話を終了するや否や、再度着信が。

「…なんなんだもう。」

ピッ

「…はい？」

『○○さっん…!?…あ、あああああれはどどどどいっ…?』

「…氷川ちゃん？」

『フーツ！フーツ！フーツ！フーツ！ふ、ふへへへへ』

「あー…なんだ。」

喜んでもらえて何よりだわ。うん。」
ピッ

∴周囲の人のキャラがもうお腹いっぱいだわ。

勝負の日（終）

おお……決まってるなあ。格好だけは。

「どう……かしら？」

「おう、今日もサイツコーに可愛いな。友希那。」

「あ、ありがと……じゃなくって！」

さて。ついにこの日がやってきた。

リサちゃんの誕生日。友希那にとつて、決戦の日だ。今まで学んできたこと、培ってきたことを全て伝える。

「……ま、弁当を作るだけなんだがな。ちよつと大袈裟か。」

友希那本人はエプロンを始めとした猫セットをフル装備で気合が入ってる御様子。猫耳と尻尾はいるかって？……友希那はほら、変わってるからな。

「ねえ、材料は揃っているのよね？」

「ああ、前に渡されたメモ通りに昨日、な。」

丁度行きつけのスーパーがセールをやっていたのもあつて昨日までとめて買ってきたのだ。お陰で冷蔵庫はパンパンだ。結局最後まで治らなかつたな……必要なものを必要な量だけ買うって教えたのに。

「じゃ、じゃあ……早速やるわよ。」

「おう。俺は、どうしたらいい？」

「……基本私がやらないと意味ないことだし。あなたは、隣でサポートしてちょうだい。」

「サポートお？」

「何よ、嫌なの？」

「いや、いいけどさ。サポートってほど大層なこととはできないぜ。」

「…居てくれるだけで、いいのよ。」

そういうものらしい。

ま、保護者が近くに来てくれるって、結局なんだかんだで落ち着くもんな。

時刻は朝6時。

リサちゃんがうちに来るまで、6時間強。…今更だけど、何でうちに來ることになってんだ。

しかし、こうして隣で見ていると改めて思うが。

随分できるようになったもんだな。最初俺に「料理を教えて欲しい」と言ってきた時なんか……あいや、感慨に耽るのは前回やったからやめておこう。

「で？…肝心の弁当箱が見当たらないんだが…。」

「ああ、それなんだけど。」

結局今日は、ここにリサが来るじゃない？だからもう、普通にお昼ご飯を作って振る舞えばいいんじゃないかってことになったのよ。」

「えーつとだな、そもそもここに呼ぶって聞いたのも今朝なんだが？」

「そうね。」

「リサちゃんの誕生日のお祝いだよな？…普通、呼びつけるんじゃないか？…ああもううるさい。集中できないでしょうが。」

苛つく友希那の手元を見ると、その小さな手でおにぎりを作っているとこらだった。

はあ、可愛いモミジのような手のひらだ。真っ赤で…。

「そのおにぎり、なんでそんな赤いわけ？」

「当たり前でしょう…チキンライスだもの。」

「ほー。ついに誰かやつちまったのかと思っただぞ。」

「馬鹿なこと言っただけでフライパンを熱しておいて。」

「何すんの。」

「…卵焼いて、オムライスみたいなおにぎりつくるの。」

ああ、そいつあオシヤレでいいな。

…そうそう、オムライスといえば。前回俺が食べたものはピラフじゃなくてオムライスだったらいい。次の日ちよつと怒られた。

「……ご飯の方はこれで全部？」

「うん、次は卵を……」

気づいたか。その両手じゃフライパンも持てまい。

「…んっ。」

観念したのか、両手をこちらにつき出してくる。拭けという意味だな。

まったく…手際がいいと思っただらこういうところ詰めが甘いな。濡れ布巾も用意してないし。手を取り、油分のヌメリが取れるまで丹念に拭く。まーまー、顔真っ赤にして目を逸らしちゃって…。まあ、子供扱いされてるみたいだもんな。そりゃ複雑か。

「…ありがと。さて、気を取り直して次に行くわ。」

「はいはい、頑張れえ。」

その後もところどころ計画性の無さを感じさせる部分はあったが、無事デザートまで漕ぎ着けた。こつそり練習していたという、飾り切りリングを作るらしい。…作る？という分類になるのかこれは。

「これこそ、弁当でやれよって感じだよな。」

「…いいじゃない、お皿に盛るか小さい箱に詰めるかの差だけよ。」

「そういうもんかね。」

「そういうもんよ。貴方が細すぎるだけよ。」

「わかったわかった。怪我だけはしないようにな？」

なるほど。ここまでの作業工程を見て若干疑問だったんだが、手に大量についている絆創膏はこの練習でついたものだな？今日こそは傷を増やさないように頑張ってもらいたいものだが…。

「…ちよつと、あまり見ないですよ。」

「えっ」

「緊張すると、手が震えるのよ。」

「えーっ」

「回れ右！」

「はあ……。」

言われる通りに後ろを向く。どうでもいいけど、緊張とかするんだな。

後ろから、「……んしょ、…にやーん……にやーん……」と聴こえてくるあたり、初めの時に否定した猫型の飾り切りでも目指しているんだろう。料理ベタな人って、結局なんだかんだ自己流や拘りが強い傾向にあるんだと思う。視野が狭いんだろうな、きつと。

「できたわ!!…ねえ、見てっ！できた！ほら！」

「わかったわかった……。えーつと。」

確かに、残った皮は ” A | A ” っぽい形になっている。…が、これなら別にうさぎさんでも良くないか…？

「まあ、リサちゃんに伝わればいいか。」

「大丈夫よ、リサならわかるはず。」

「これで完成？」

「いいえ、まだりんごは残っているもの。」

「全部やる気？」

「もちろん。」

お前、またあの大量生産地獄をする気か。

「余ったらお弁当にでも詰めて明日の練習に持って行くわ。」

「弁当の意味よ。」

斯くして、そこそこの量の昼飯と平皿いっぱいのにゃーんちゃんリンゴ畑”が完成した。これをリサちゃんに…。胃薬、用意しといたほうがいいかなあ…。

「…ツスウー」

「満足したならいいか。…ここまでよくやったな。」

コック帽を取って、段ができた髪をくしゃくしゃと撫でてやる。

友希那の横顔は、やりきった感がありありと伝わって来るような、誇らしげな表情に見えた。

「やつほー、友希那あ。」

「…ん、外は暑かった？」

「まあまあかなあ…。それで？言われたとおり、まだご飯食べてないんだけど、どっか行くの？」
「いいえ。……こっち座って。」

食卓の、いつも友希那が座る席。そこにリサちゃんを座らせる。状況が飲み込めていないのか、落ち着きがないように見えるリサちゃん。だいぶ困惑気味だ。

「ゆ、友希那?？」

「ちよつとまってて。」

料理を取りにキッチンへ。少しできてしまった時間、残された俺とリサちゃんは若干気まずい空気に。

「友希那、頑張ったんですねえ。」

「…え?」

「…今から楽しみですよ。」

「……ああ、うん?」

「まさか、あの友希那が——」

その後、友希那の帰りを待つ間、暫し二人で話し込み…リサちゃんが如何に友希那を愛しているかがわかったところで、ぱたぱたと可愛らしい音を立てて戻ってくる。

…ああ、わざわざフル装備にしてきたのね。

「!!何それ!友希那あ!うひゃあ、可愛い…//」

「ふふん、いいでしょう?」

「しゃ、写真撮るね!?!…ひゃあああ!!こっち、こっちにポーズ頂戴!?

…ああ…っ。尊い…ツ!」

あの姿見たらみんなああなっちゃうのかな。物凄い勢いでぱしや

ばしややつとる。

一旦料理は受け取り、代わりに配膳しておこう。

「はあっ…はあっ…こ、これが見せたかったもの??」

「お疲れ様ね、リサ。本題は…こつちよ。」

「…えっ、これ…」

食卓に並べられた食事を見て固まる。そらそうだ。まともにも卵も割れなかった友希那の姿を知っている者なら皆こうなるでしょうよ。全部友希那が作ったって、まるで冗談か手品だもんな。そのまま驚いたような表情で、ゆっくりと席に就く。

「すっ…こ、これ、アタシの為に?」

「ええ。…リサ、誕生日、おめでとう。」

これは全部、私がリサ一人の為に覚えた物よ。貴方に日頃の感謝とか、伝えたくて…その…」

「…ッ!」

友希那と対照的にしつかりメイクアップされた彼女の両目から雫が溢れる。

やがて絞り出した「ありがとう…」の言葉は演技でも何でもなく、友希那の気持ちがあしつかり届いた証でもあったろう。

「良かったな。…友希那。」

暫し素敵な光景に心を温められた後、二人して仲良く手を繋いで帰っていくのを見送りつつ先ほどの会話を思い出していた。

『まさか、あの友希那が料理のプレゼントとは…。』

『やっぱ、気づかれてた?』

『ええ、まあ…。前に一度お邪魔したときにも薄々は感じたんですけど、ね。』

『そうだよなあ…。ちよつと前の友希那を知ってる人なら当然気づくよな。』

『ははは…。○○さん、この話は友希那には内緒にして欲しいんですけど…。』

『ん。』

『アタシ、気づかないフリしようと思います。』

『…そっか、優しいんだね。』

『優しい…とはまた違うんですけどね。』

只でさえ人と関わろうとしなかった、音楽以外を切り捨てようとしていたあの友希那が、こんな形で他のこと・人に興味を持ってくれたんです。』

『うん。』

『…その成長というか、気持ちの変化というか、それだけでアタシには凄い大きなプレゼントで…。』

『……。』

『その気持ちに伝えることが、アタシの役目だと思うんです。』

…勿論、不味かったら正直に言いますけどね?…こう、ズバアツと。ふふっ。』

『……リサちゃん。』

『だから○○さんも、頑張って演技してくださいね?この話は、オフレコなんです。』

『…了解。リサちゃん、本物の親よりよっぽどあの子の保護者みたいだね。』

『ええー?…うーん…そうなのかなあ…。』

『うん、友希那に対しての愛情?…っていうのかな。それがすつごく伝わってくるんだよね。』

…本当に、友希那の幼馴染が君で良かったと思うよ。』

『あ、あははは…。まあ、友希那のことはずっと大好きですけどねー。』

…今までも、これからも。

それに、そういう事言えちゃうあたり、○○さんもお父さんみたいですよ??』

『まあ、本当の父親よりはコミュニケーション取れてると思うしね。』
『あっははは！何それー！』

「何はともあれ、大成功で本当によかったなあ友希那。……りサちやんと、これからも仲良くなあ。」

やれやれ、これじゃあどっちが誕生日かわからんね…。

終わり

【松原花音】ゆるふわ系おねえさんに墮とされる
控えめに言っつて沼

「はあ……。」

柄にもなく緊張している。

学校終わりに招待されたお姉さんの部屋。別に来るのは初めて
じゃないんだけど、それでもやっぱり緊張する。

…相手は大学生のお姉さんなんだぜ？

知り合っただのはいつだったか…あ、そうだ。シヨツピングモールで
迷子になっていたのを助けたのがきっかけだったつけ。へへ、あの時
のおねーさん、歳下かと思うくらい泣きべそかいてたんだよな。

「……………ふう。」

覚悟を決めてピンポンを――

「もう、またやってるの?？」

開いたドアと顔を覗かせるふわふわと外ハネ気味の水色髪。…と
ニコニコ笑顔が素敵なお姉さん。そしてピンポンに手を伸ばした状
態で固まる俺。

「あ……あう……。」

「ふふっ、今日も緊張しちやっつてるのかな?？」

「へあ……あは、こん……ちは。」

「うん、こんにちは。さ、入って入って?？」

「…おじや、しあす。」

意表を突かれたのもあるけど、今日もやっぱり可愛い。

おねーさん——花音さんと会うと、どうしてもその日の最初は上手に喋れないんだ。なんでかな。

…あ、いつも家ではやらないけど、ちゃんと靴も揃えたよ。

「○○くん？今日も暑かったよね。飲み物、お茶と、お水とお…」
「あ、だ、大丈夫だよおねーさん。…ほら、水筒持ってきてるから。」

学校の蛇口は何か汚い気がして使いたくないので、いつもマイ水筒を持ち歩いている。クールでしょ？

母さんには無駄遣いって怒られたけどね。…自分でバイトしたお金だし、いいじゃんよ。

「もー。○○くん…？」

外では仕方ないけど、家にいるときは名前で呼ぶって約束したでしょ？！」

あ、拗ねてる。凄く可愛くてクラクラしちゃうけど…

「だ、だって恥ずかしいし…。それに、おねーさん大学生、俺高校生。年上の人を名前で呼ぶって抵抗が…」

「ふええー？恥ずかしいのは私も恥ずかしいよお？年上とか考えちゃダメ、でしょ？…呼んでみて？」

「ええ…。…か、k…かのん…さん。」

「はあい♪よくできました。」

「わっ、わっ…!？」

とつくにパーソナルスペースを侵犯していた花音さんに、頭を抱き抱えるようにして抱き締められる。部屋に入った時から気になっていた女の人特有のいい匂いに一瞬で包まれた。

ふわふわしたようなおっとりしたような話し方も、このいい匂いも、たまに見せる子供っぽい顔も大人な一面も、全部全部大好きだ。一緒にいて落ち着く、最高のおねーさんなんだ。

「今日はねえ、○○くんが来るのずっと楽しみだったんだあ。お休みの日でよかったよお。」

「うん…あ、お、俺も早く会いたくて、学校終わるの楽しみだったよ。」

「わあ！両思いだねえ。よおしよしよし…」

「おね、かのんさん…髪型崩れちゃうよ…。」

「あれえ？髪型なんか前まで気にしない子だったでしょ？…急に格好つけ出しちゃって、どうしたのかな？？」

「それは、その…」

花音さんに会うからだ、とは恥ずかしくてとても言えない。なんと言おうかと言葉を選んでいると、

「あ、そうだ…今日○○くんが来るからね、これみて？」

「…？…ブツ!!」

何やらモゾモゾしている花音さんの左手を目で追うと、そのまま肩をはだけさせ、中の…し、下着を見せてきた。

「か、かのんさん、これは…」

「新しいの買ったんだけどね？○○くんに最初に見せたかったから、ずっと取っておいたんだあ。…かわいい？」

「え、えと…かわ、いいです。」

「ほんとー？…あ、これより下の方が見たいんでしょー？」

「うーく。」

思わず唾を飲み込んでしまった。いかんいかん直ぐにでも否定しないと。すげえスケベな奴だと思われる。もちろん興味がないわけ

じゃないけど、花音さんに嫌われたくないし。

「あー！○○くん、えっちなんだあ。ちらつと見せてあげちゃおっかなあ…？」

「花音さん今のこの体勢分かってます…？」

「んう？ふふっ、わかってるよお。」赤ちゃんにおっぱいあげる時”みたいたよねえ。」

何度も挿揄われているとはいえ、今日のは特に強烈だ。もう頭に血が上りすぎてクラクラしてきた…。

「もう、真っ赤になっちゃってえ…。○○くん、やっぱりかあいいよお…ふええ。」

追い打ちだ。

可愛いなんて言われ慣れてるわけないし、この「ふええ」がどうもツボなんだ。妙に艶めかしいっていうか、凄くドキドキしちゃう。いつもどおり。

今日もいつもどおり、甘々なまま時間は過ぎていった。

…このままじゃ、ダメ人間になりそう。

「○○くん、今日は泊まっていくんでしょ…？一緒に寝る？」

花音さんと出会ってからというもの、寝不足になりがちなのはこういう訳だ。

浸食

「なんだこの状況。」

「○○くん、ほら、あーんして…?」

「アアン」

「ふふ…おいしい?」

「…まあ…自分で食うよりかは。」

「よかったあ♪緊張して手が震えちゃったよう。」

もう一度言おう、なんだこの状況。

特に何かイベントがあるわけでもない普通の日。…の晩メシ。

いつもと違い、食卓を囲むのは俺と母さん。…と花音さん。どうしてこんな素敵…いやいや、困った状態になってしまったかというと…

あー…説明するより楽なので、回想、入ります。

「ただいまあ〜」

ん。

母さんが帰ってきたみたいだ。課題をやる手を止め、玄関へ迎えに行く。

「おかえり、お母さ…」

「○○、今日はお客さんもいるからね。…ささ、入って入って〜。」

「ふええ…お邪魔します。」

「か…おねーさん…」

「あれ?○○、知り合いなのかい?」

「知り合いっていうか…うん、まあ、そんなとこ。でもどうして?」

「実はねえ、かのちゃんは、母さんの職場にバイトで入ってきたのさ。いい子だし仕事もできるし、つついとお話してるうちに仲良くなっちゃってね?」

い、意外だ…。

花音さん、あんなにふわふわしてるのに仕事できるんだ…。というか今更だけど、母さんがなんの仕事してるか知らないや。

「話してみたら大学に合わせて一人暮らしを始めたって言うからさあ、一度うちにご飯食べにおいでっていったのさ。」

あと、さつき聞いたんだけど、家もすぐそのアパートだって言うじゃないか。…是非いっぱい遊びに来てって、言ってたところなのさ。」

「…マジか。」

花音さんの方を見ると、すっごいドヤ顔の後にウィンクまでセットでくれた。

…計画通り、とか言いそう。

「○○くん、急に来ちゃってごめんねえ? 迷惑だった…かな?」

「ぐっ…。べ、別にいいですけど…。」

「ふふ、よかったあ。…あ、ご飯、お手伝いしますね。」

「あら、そうかい? 助かるわあ。…かのちゃん、料理得意?」

「一人暮らしなので、そこそこですかねえ…。」

「ん、じゃあこっちこっち、一緒にやりましょー。」

そのまま騒がしくキッチンへ行ってしまう二人。一先ず俺も課題へ戻るが、全っ然集中できない。

花音さんが? ウチに?? 料理を作ってくれるって? ツーかいっぱい遊びに来てって? あーだめだ。…変なことばかり考えそうになる。ウチだぞ! 母さんもいるんだぞ!..

悶々としたまま、課題も手につかなくて…椅子に座ったままぼーつとしてると、次第にいい匂いが漂ってきた。

…居間に行っておくか。ついでに手伝えることがあれば手伝っておこう。

…違うぞ？料理しているところが見たいとかそういうのじゃないからな？

「母さーん、何か手伝うことあ…る？」

「あー○○くん、お手伝いに来たの??えらいね！」

「あ…う、あ…」

「あら珍しい。年に一度あるかないかだわ!!もう一人でご飯用意できてもいい歳なのに全く…」

「ふふ、そうなんですかあ?それでも自分から言ってくれるなんて、可愛いじゃないですかあ。」

「かのちゃんと言うならそうなのかねえ。…ほら、突っ立ってないで、お皿とか並べときな。」

「あ…う、うん。」

食器棚から使いそうな食器類を選んでお盆に乗せていく。往復してもいいけど、楽できるところはしないとね。

そろそろいいかなと、取っ手に手をかけたとき、後ろから忍び寄ってきた花音さんが耳元に近づいてきて、

「おねえさんのエプロン姿、どう?」

いやもう吐息が擦ったくて内容が全然入ってこない。

改めて花音さんを見ると、…:うん、たまんないわこれ。何度か見たこともある私服ではあるが、ピンクのエプロン一枚でここまで変わるとは。

エプロンってのは、花音さんの魅力を何倍にも増幅する課金アイテムのようなものかも知れない。

「…ふふ、気に入ってくれたかな?」

「…似合ってます、よ…。」

「ふええ?よかったあ…」

ただこれで大体確信を得た。花音さん、やっぱりこの一連の流れ、計画通りだろ。エプロンなんて普段持ち歩かないもんな。

つまり、そういうことさ。

出てきた料理は美味しい、自然な流れで母さんも仲良くなってるし。花音さんの作戦勝ち感が凄い。外堀から埋めるって言うんだっけ。

どうでもいいけど、さつきからあーんをしてきているのは嬉しいけど、恥ずかしいのと花音さんが全然食べてないのが気になる。

「かの…おねーさんも、自分の分食べなよ。俺、自分で食べられるからさ…。」

「ええー?嫌なの…?」

「い、いやじゃないけど…。それでも、おねーさんもご飯食べに来たんでしょ?じゃあ自分も食べないと。」

「それもそうだよね。…じゃあ、○○くん、あーん…して?」

「えっ」

「あらあら、○○。…お姉ちゃんが出来たみたいで良かったわねえ。一人っ子だもんねえ。」

あ、その程度の認識?

これなら多少過激な事しても笑いで済ませられるかもしれん…：…はっ、いかん、また余計な妄想が湧いて…

「じゃあ…おねーさん、あ、あーん…?」

「ああん…。」

「ツ…!」

女の人の…というかおねーさんが無防備に口を開けている姿、すごくドキドキする。ただご飯を口に入れるだけなのに、体が熱くなるよ
うな、む、ムラムラするような…

「ウ…えい!」

「あつ!」

これ以上、いけない。耐え切れなくなり、口に入りかけていたご飯
を自分で食べてしまった。

「もう…○○くん、いじわる?!」

「はははは! 恥ずかしがつちやつてまあ…!」

「う…二人してからかうなよー!!」

結局一回も花音さんの口にご飯を入れることはできなかった。

花音さんは「また今度挑戦してみよ?」なんて言っただけど、食事
のたびにこれを繰り返すのかと思うと複雑だ。せめて母さんがいな
ければ…。

「○○くん? 寝ないの?」

さらに母さんの余計な好意により、花音さんがうちに泊まっていく
ことに。母さんは「親睦を深めるため」とか言っていたけど、もう意
味がわからないよ…。

「も、もう寝ますよ…。」

「そ?…折角お風呂入ったのに、ずっと布団に入らなかつたら湯冷めしちゃうよお?」

「…花音さん、布団入るの早いですね。」

「だって、お母さん公認で一緒に寝られるんだよお?…ちよつとワクワクしちゃうよねえ。ふええ。」

「もう…少しは自分を大事にしてくださいよ。」

「いーの。ねね、早く入って入って。」

うちも持ち家でもないし一軒家とかでもない。

部屋も収納も限られているので、泊まっていくといつてもこうなつてしまうのだ。いや、だからって一緒に寝るのはまずいって…両方小さな子供じゃないんだから…。

花音さんも「気にしませんから!」とか言ってたけど、本当、無防備すぎると思う。

「…流石に二人は狭いですね。」

「ふふつ。私の家のベッドは元から二人サイズだったからね。…いっぱいぎゅーってできるから、これもこれでありだねえ。」

「もう、さつきも言ったけど、女の子なんだからもう少し自分を大事に…」

「いいって言ったでしょ??私の全部、ゼーンぶ、〇〇くんにあげるんだからね?」

「っ…!!」

さつきのあーんの時もそうだったけど、時々そういう艶かしい声を出すのはずるいと思います。

河海月

『今日是一緒にお散歩をします!!』

そう張り切って言い切ったお姉さんはどこへ行ってしまったのか。また花音さんに呼び出された俺は、数時間前にアパートを訪れた。

：さすがにもうチャイムを鳴らす前にドキドキすることはなくなったけど、それでもやっぱりよくわからない。そもそも女の人の家に上がり込むって言うのが、ね…。

入ってみると、珍しくジャージ姿の花音さん。珍しく、いや初めて見るかもしれないその格好に、慣れたはずの部屋がまた居心地悪いようなむず痒い感覚を覚えた。話を聞いてみると、

『ふええ、なんだかちよつと太っちゃった気がして、ね…。思い切ってウォーキングを始めてみようと思ったのです!』

とのこと。

ウォーキングでジャージまで着こなしちゃって（このために態々買ってきたらしい）、もうほんと花音さん可愛すぎるよ…。どうやらウォーキングというものがどの程度のガチさでやるものなのかわからないようなので、一緒に散歩するくらいいい気持ちで良いのではと提案したところ、冒頭のセリフが飛び出したというわけだ。

断る理由もないのでOKしたが、その時の小さなガッツポーズもまた可愛かった。心臓を鷲掴みにされるような、そんな衝撃の強い可愛さをぶつけてくるよなこの人は。

「でも…どうやったらこんなだった広い河川敷で逸れられるんだろう…。」

最初は家の周辺をグルグル回る様に歩いていたのだが、「折角なら綺麗な場所を二人で見たい」という花音さんの要望でここに来たのだが。夕日を反射しキラキラと煌めいている川面を見るや否や走り出していつてしまい、それきり姿が消えたのだ。

建物はおろか、遮蔽物の一つもないこの場所で一体どうやって見失ったのか、…未だに疑問でしかない。

一先ず、こういう時は探しに出る前に一旦待ってみることが大事だと何かで読んだ気がする。ふらつと戻ってきたときに誰も居ないのがまずいつてやつだ。頭の中でその知識を引っ張り出しつつ、近くのベンチに腰掛ける。

「ああ…確かにこりや綺麗だ。」

ぼんやり見つめる川面は相変わらず橙の光を乱反射して…。

…!?その中で、何か動いた気がした。それも、川の中で動いていること自体おかしいもの。

「…花音、さん!？」

思わず走り出す。

間違いない、あのジャージ、花音さんだ。何だって川の中なんか…!?

「はあ…はあっ…花音、さん…。」

「あー○○くうん。どうしたの??」

「それはこっちのセリフですよ…。普通散歩って、陸の上を歩くんですよ。」

「ふふっ、知ってますよ。これ、見て。」

花音さんが指さしたのは川の中。光がきれいとかそういうかんじ?

「??川がどうかしたんですか??」

「川のね、底のところ。…水がきれいだから、見えるでしょ??」

「……?はい。」

「きらきらしてる光が、水面の揺らぎに合わせて揺らいで、何だかくらげみたいじゃない?」

「はあ?」

「もー!わかってくれないならいいもん。くらげがいつぱい居るみたいで可愛くて、つい近くで見たくなっちゃったの!!」

「…そうですか。」

「ふええ…反応が冷たいよう…。…あきれちゃった?嫌いになっちゃった??」

ずぶ濡れになったジャージの裾を絞りつつ、不安げにこちらを覗き込んでくる花音さん。ああ、もう…その表情も声もずるいんだよなあ…。

「…別に、あきれてないですよ。」

何だか、子供みたいなどころを見ちゃった気がして。…その、放つとけないなあって…。

「むう、馬鹿にしている?君よりずうっとおねーさんなんだからね?」

「…怒ったんですか?」

「べつつにい。」

「…怒ってる花音さんも、可愛いですよ。」

「ふえ!?…そ、そう、かな…えへへ…。」

「……と、とにかく。濡れたままだと風邪とか怖いので、い、一緒に帰りましょう!…ほらっ」

恥ずかしさから居た堪れなくなり、手を取って帰路に就く。少し強引かもしれないがこうでもしないとまた花音さんのペースに飲み込まれる。

…たまには俺が空気をリードしなければ。

「ふええ…手、○○くんから握ってくれるなんて…幸せすぎるよう…」

「何か言いました?…あ、足元気を付けてくださいよ。」

「ふつつ、わかってるよう。あ、帰ったら一緒にお風呂入ろっか??」

「もう、揶揄わないで下さいよ…。」

「本気なんだけどなあ…。」

相変わらず花音さんはつかめない。

そんなこんなで花音さん

「花音さん！遊びに来ました!!」

丁度晚ご飯を食べていた時だった。花音さんから電話がかかってきたのは。

…よりもよって家の固定電話の方に。

勿論俺はご飯中で手が離せないし、母さんが外行用の声で出た。

「もしもし→。…←あらあ！かのちゃん！○○かい??」
「!？」

「…ああ、うん。…：へえー!!わかったわかった、今替わるよ。…ほら、あんたに電話だよ。」

「花音さん、何だって？」

「…：まあ、出たらわかるさ。あんたも父さんに似て、大変な子を引つ掛けたね…。」

どういう意味だ。

まあいいや、花音さんが態々電話を？一秒でも早く出なくちや。

「もしも…」

『ああ!!○○くんらあ!!…：お電話で聞く声もかあいれえ…』

「…ほんとに花音さん？」

「ブフウツ！」

後ろで盛大に吹き出す母さん。母さんの名誉のために言っておくが、決してこいた訳ではない。何とは言わない。

「ねえ、花音さん？具合悪いんですか？…それとも…酔ってたり、します？」

『えっへへへへ。全然そんなことはないよう。』
「……………」

絶対酔ってる。これで素面だとしたら、今まで俺は一体誰と会っていたと言うんだ。色んな意味で若干の不安を覚えながらも、ひとつ提案を試してみる。

「大丈夫ですか？花音さん。…もしキツそうなら、介抱に」

『あ、そうだ!!○○くうん…?今から遊びに来ない?お菓子とかも買ってあるよ〜?』

「……………あ、じゃあ行きます。」

『やったあ!!お着替えしてまってるね!!』

ガチャ…ツ、ツ、ツ…

「……………母さん。」

「行くんなら食べ終わってからにしないよ?食器片付かないから。」
「母さん……………」

で、冒頭の続き。

もうすっかり慣れてしまったこの玄関の扉も、予め手渡されていた合鍵で突破する。部屋に足を踏み入れた途端に香ってくる大人の香り。ああ、これだ。花音さんに包み込まれるような、まるで空気自体が花音さんのような…。

相変わらず綺麗にしてんなあ…。

「……………あれ?」

さっきの電話のテンションからするに、部屋に入ったあたりで出迎えてくれると思っただけけど…。や、別に残念とかじゃないんだけどさ。ほんとだよ。

そのまま奥、リビングの戸をそっと押し開ける。

「お邪魔しま…あらら。」

「うう…ん。…む、…うにゆう…。」

さっきの電話から三十分くらい経っちゃってるもんな。お酒が入ってるなら尚更、か…。

花音さんはリビングのローテーブルから後ろに倒れる形で完全に熟睡していた。おへそ、出ちやってますよ…。そのままベッドまで運んでいこうかと思ったが、その最中で起こしてしまうのも悪い。

近くに転がっていたクラゲ型のクッションを頭の下に差入れ、寝室から持ってきたタオルケットを掛けておくことにした。

「この表情が、素なのかな…？」

女の人の寝顔をじっくり観察するなんて失礼なことなのかもしれないけれど。その整った顔立ちに、やはり年上のお姉さんなんだと改めて実感してしまう。でも…。

「なんだかいつもと違う雰囲気だな。」

眠っているから勿論、なのだが。

表情がないというか、こう…ああ、眉が一字、まつすぐなんだ。いつも若干眉根の下がった、困ったような笑顔が魅力的な花音さん。思えば、無表情だったり真剣な顔だったりするのは見せてくれたことがないのかもしれない。

…変な感じだ。

これが完全に素、油断している時の表情なのか。それとも――

「…嫌なことでも、あつたのかな。」

酔っ払っている、という状況もそうだ。

花音さんがお酒を飲むなんて聞いたことがない。何かあつたのだろうか。…と、花音さんを観察していると、少し肌寒そうな格好をしていることに気づいた。そういえば、さつきも電話で「お着替えしておく」とかなんとか言ってたな。

ちらつと、タオルケットをめくってみ…すぐに戻した。これはちよつと刺激が強すぎるな。俺にはまだ早い。

何でこんな露出高いの着てるんだ…？

「…あつ。」

「……………えへへ、おあよう。」

「…おはよう、ございます。」

「あんまりみないで、ほしいかな…。恥ずかしくなっちゃうよ…。」

「花音さん、なんかあつたんですか？」

「……………」

「別に、言いくいことだつたら言わなくていいですけど…。」

目を覚まして見つめ合ってしまった挙句、気まづくような質問をしてしまった。黙り込んで視線を逸らした花音さんに悪いし、直ぐに取り繕うようなことを零してしまう。誰にだって訊かれたくないことのひとつやふたつ、あるよな。

「うん、本当に、何でもないから、ね？」

心配かけちゃってごめんね…それに、恥ずかしいところも見せちゃったしね…。」

「あ、それは全然いいですよ。僕こそ寝室とか勝手に入っちゃいましたけど…問題なかったです?？」

「うん、大丈夫だよお。ありがとうねえ。」

「えつと、もう酔いの方は…」

「もう大丈夫。迷惑かけてごめんね。お母さんにも、謝らないとね。」
「いや本当にうちは大丈夫なんで…。というか花音さん、寒くないですか？その格好。」

「え…？…えつ、あつ、み、見ないで！」

やっぱり自分でもよく分からないで着てたのか。すけすけだし布地の面積は狭いし…下着なのか水着なのか、そのレベルの服？なんだもん。

素面だと恥ずかしいよね。

「とりあえず…着替えてきたほうがいいかもしれませんね。あ、それか、体が冷えているなら一旦お風呂とか…。」

「うん…今日はすごく面倒見がいいんだね。…いつもは私にべつたりな甘えんぼさんなのにな。」

「あれは花音さんが甘やかすせいですよ。」

「えく？〇〇くんが甘えたそうな顔してるからだよお。」

「もー！またそうやって揶揄って…。早く着替えちやってください！夜だし寝巻きでいいんじゃないですかー？」

「うん、そうするねえ。…〇〇くん。」

「はい。」

「…そこそと衣擦れの音もするし、着替えているのだろう。見てしまわないように背を向け、返事だけを返す。

「…別に見ちやってもいいんだけどね。ええと、今日は遅いし、泊まっ
ていくでしょ。」

「…遅いって言っても、家すぐそこですよ。」

「泊まって行って…ほしいな。」

「…花音さん？」

「あつ、えつと、ほら！最近〇〇くんとかくっつけてないから、〇〇くん

分が不足しちやってるなあって…ダメかなあ?」

酔いが覚めると無性に寂しくなるとかそういうのがあるのかな?

珍しく元気がない花音さんに、そんな余裕のないところを見せられたら何も言えないよ。まあ見えてないんだけど。

「もうこっち向いて平気だよ?」

「あ、了解です…ブフツ!」

「えっへへへ、これもこの前買ったばかりの新しい下着なの。…ピンクは嫌い?」

「…もう、もうちょっと自分を大事にしてくださいって言ってるじゃないですか…。」

ピンクも確かにいいですけど、ひらひらしてるのがクラゲみたいで可愛いと思いますよ。」

「えへへへありがとうね。そっか。買ったときは意識しなかったけど、確かにこれクラゲさんみたいだよね。」

…ん。○○くんは発想力も天才並だねえ。」

「…もう!早く服着てくださいって!ほぼ素肌状態で抱きつくの禁止!禁止です!うぷっ。」

花音さんのすべすべの肌が顔いっぱいに広がる。まだ喋ってるっていうのに、口は硬い布の感触で塞がれてしまった。

「…ちよつと早いけど、お布団行こっか。」

「……………」

「お姉さん、ちよつと今日は疲れちゃったかなあ。朝までずっと、ぎゅーってして寝ようね。」

「…………花音さん。」

いつもと違って、弱々しく腕を回してくる花音さんが心配で、寧ろ俺の方から抱きしめつつ。ただただ振り回される普段の花音さんは

何処へやら。本当に疲れているのか、若しくは…。

再び聴こえる花音さんの小さな寝息と震える身体。俺より僅かに高く思える体温を感じながら、悶々とした夜を過ごすのだった。

陰

…何処行つたんだろうあの。まさか一本道でも姿を消せるとは。
…まるで異空間だな。

夕日の射す住宅街。キョロキョロと周りを見回すも、水色のお姉さんの姿はない。

路地があるわけでもなく遮蔽物もない。暫くは曲がり道もない俺の通学路。

「学校までわざわざ迎えに来ちゃって…嬉しかったんだけどなあ…。」

そういえば初めてだったな。あの、一人で知らない道を歩くと100%次元を超えてしまう花音さんが俺を迎えに来てくれたの。

ま、その嬉しい時間も、僅か7〜8分程で終わっちゃったわけだけど。探すといってもこの一本道を戻ることしかできないので、その間今日のハイライトでも思い返してみよう。

———昼休み。

午前中はずつと電源をOFF切つているスマホをこつそり立ち上げる。学校に行っている間もメッセージやSNSでは花音さんと繋がっていられる。それだけで俺のモチベーションは保たれるってわけだ。

「……………え!?!」

届いていたメッセージを見るなり思わず大きな声を出してしまった。学校では物静かなクールボーイで通っている俺だ。周りのクラ

スマートの目を集めてしまうのも無理はないでしょうね。

と冗談はさておき。いつも通りの『おはよう!』のスタンプの後に続いたメッセージ。

『今日学校まで迎えに行つちやおつかない?』って…何考えてるんだあの人…。』

二軒隣のコンビニを目指して他県まで行つちやう人だぜ。

あれはもう才能だと思わうわ。うん。

『期待して待つてますね〜』…と。ま、本当に来たら明日は台風でも来ちやうかもわからんね。』

面白い冗談として受け取ることにした。

…ふと、自分でも気付かなかったが、無意識のうちに口角が上がってしまったていたらしい。お陰で数少ない友人のうち二人がにやけながら話しかけてくる。

「おい〇〇、エロ画像でも見てんのか?」

「…あ?お前と一緒にするなよな。」

「まっ、失礼しちやうわねえこの子はあ。」

「…それは何キャラなんだよ、尚^{なお}。」

やたら剽軽なバカっぽいこいつは^{やまとなお}大和尚。あだ名は鑑真。底抜けに明るくて絡みやすいのがいいところだが、ただそれだけの男だ。

「…〇〇、アレでしょ?年上彼女とベタベタしてるっつー、いつものでしよ〜。」

「いつものってなんだよ…まあ、年上云々は否定しないけど。」

「いいよなあ。素敵なお姉さんとお付き合いと、憧れちやうねえ。」

「…お前はものごつつ可愛いねーちゃん居るからいいじゃん。それか

拓馬たくまとでもいちゃついきなよ。」

こっちの物静かそうなのは氷川ひかわ風樹なぎ。俗に言う”カワイイ系”男子で、結構モテる。恐らくその可愛さは遺伝だと思う。…前に一度、二人のお姉さんと一緒にいるところを見たが滅茶苦茶美人さんだった。まあ花音さんには敵わないけどね。

因みに、同じクラスの咲来さくら拓馬たくまとデキてるんじゃないかという噂がある。距離が近いんだよな。

「…心の中で惚気けんのやめない？」

「…すごいな風樹。」

エスパーかね。

この賑やかな連中に絡まれている間も花音さんからのメッセージは着々と届いていたが…まあ、クラスでの付き合いも大事ということ、見るのは後にすることにした。

この時チェックしておけば、そして気の利いた返事を返しておけば放課後のアレを未然に防げていたのかもしれない…。

——放課後。

昼食後の授業につきものの眠気のせいで、昼休みにみたメッセージのことはすっかり忘れていたが。席に駆け寄ってきた鑑真の一言は、このあとの展開を予感させるに十分なものだった。

「おいおい！校門のところにつげー色っぽいお姉さんが来てるぞ！！」

「…へー。」

「窓から見え…おお、人だかり出来てんぞ！！○○！お前もこっちききて見ろよ！！」

「…や、あんま興味ないし…。か、帰るわ。」

マジでか？マジで来たのか？

それは期待だったか焦燥だったか、とにもかくにも早鐘を打つ心臓を抑えるように早歩きで校門へ向かったのだった。

「うわっ…あの人集り、男しかいねーじゃん…。」

昇降口から見ても分かる。余程綺麗な人が来ているんだろう。集っているのは全て男子だ。ネクタイの色からするに、学年関係なく来てるな…。

その一団からほんの少し距離をとりつつ、ただ視線のみ渦中の人を探すように向けながら校門を出——

「あっ!!○○くうん!!!きたよお!!」

「…………マジカア」

人集りを掻き分けるようにして水色のふわふわお姉さんが駆け寄ってくる。その癖のある髪の毛が跳ねるのを見ながら、本当に来てくれた嬉しさと集っていた男子の恨めしそうな視線に、本日二度目の口角が釣り上がる感覚を感じた。

ものの数秒で目の前に辿り着く花音さん。

「おつかれさまあ…。いろんな人とお喋りして、疲れちゃったよお…。ふええ。」

「花音さん…。」

また今日の格好も艶かしいなあ…。

短いスカートから覗く太ももは眩しく、ほんのり汗ばんだ綺麗な肌に、肩で息をするちよつと苦しそうな笑顔。熱のこもった熱い吐息…。ああ、夢い…。

「本当に来たんですか。」

「ふえっ!?!…ここ、来ないほうが、よかったかなあ…?？」

「ううん。まさか本当にたどり着けると思わなかったからさ。」

「ひどいっ!」

「えへへ、…すっごい嬉しいよ、花音さん。」

「はうっ」

照れさせてしまったようで、顔を抑えて悶絶する花音さん。その姿も可愛い。

とはいえ、このまま校門こくでいちやついてるのも居心地悪いので、まずはここを離れよう。

「えっ?…あっ」

手を取って歩き出す。

…どうでもいいけど、こういうとき二人の家の方向が同じだと便利だね。

で、今に至ると。

あの時の気恥ずかしさとか幸福感だとかは何処へやら。花音さんと一緒にどこかへ行ってしまったようだ。

「あっ。」

遠巻きに、花音さんを見つけた。どうやら、背の高い男の人と喋っているようだ。…なんだ、知り合いにでも捕まったのかな?

邪魔しても悪いので待機しよう、と…自販機の方に道を逸れたところで、途切れ途切れではあるが会話が聞こえてくる。

「……この前、無事……？」
「……っと……飲みすぎ……。」
「……れし、いんの？……ったら、」
「……めんなさ……もう、忘れ……」
「……り直さ……。」
「……たせてるから……。」
「……ってるから、……連絡……」

聞かないように聞かないように……と思いながら。途切れているとは言え、聞こえてくるキーワードに頭の中では色々と考えてしまう。考えるな。きつと大丈夫だ。ただ、学校の知り合いか何かと偶然会っただけなんだ。……一生懸命意識を逸らそうとはするが、買った缶コーヒーのプルタブに掛けた指が震える。……なんだこの胸のモヤモヤは。

何分かつただろうか。体感時間では数時間に感じた後。ようやくプルタブの小気味いい音が響いた頃。

「お、お待たせだよお。……○○くん？」
「……あ、花音……さん。」
「……顔、怖いよ……」

今自分はどんな顔をしているんだろうか。少なくとも、さっきまでみたいに口角が動く感覚は無い。

花音さん、何を隠してるの？

「……あ、か、帰ろ？ごめんねえ、が、学校の友達に、会っちゃって……」
「……うん。」
「……あのね、○○くん。」
「……はい。」
「私ね……○○くんが、好きだよ……。」

「……そう、ですか。」

「……ごめんね。……でも、好きだから。」

「……。」

「……手、繋いでいいかな？……え、えと、さつきみたいに……？」

「……花音さん。」

これは、訊いていいことなんだろうか。

果たして訊いてどうするんだろうか。

でも、気になるんだから仕方ない。

花音さんの「好きだ」って言葉。……それは、信じられるものなんだろうか。

「さつきの人……。……彼氏さんですか？」

「……。」

「……花音」

「……か、帰ろ？ほら、暗くなっちゃうし!!」

花音さん、何も答えてくれないんですね。

チエイイス

「はあ……………」

憂鬱だ。学校にいても友達と駄弁っけていても家に帰ってきてても…。あの日からずっと、あれからずっと花音さんに会えていない。花音さんは「いつでも遊びに来てね」と言っていたが、とてもじゃないが行く気分じゃない。…花音さん、結局何も話してくれないんだもんな。

「はああ……………」

もう何度目だろう。こうして無駄に二酸化炭素を吐き出すのは。花音さん…全部話してくれよ。

「…………もう、全部投げちやおうかな…………」

ブーブブツ…ブーブブツ

スマホが震える。

母さんかな。帰るの遅くなるとか言ってた気がするし…………。

画面の通知を見て、叩きつけるようにスマホを置く。…………花音さんからだ。

「何だって今頃…………」

悪い報せではないように、そして画面が割れていませんようにと祈りつつ、再度画面を見る。…よかった。ヒビひとつ入っていない。

「……………う……………なっ。」

文面を見て、そのあまりに唐突な展開に急いで玄関へ。若干の緊張を覚えつつドアを開ける。

「うわあ!!」

「ひゃあっ!?!」

緊張のあまりドアを全力で開けてしまったところまでは良かった。…ただ、そんな密接して人が立っているとは思わないでしょう。

凄く嫌な手応えと共に、大好きな人の悲鳴。

「ご、ごめん花音さん!!どこにぶつかっただのっ!?!」

「ふえええ……………お、おでこがジンジンするよお……………」

「うわあ……………赤くなってるよ……………」

「は、腫れちゃわないかなあ……………」

恐る恐るおでこを触ってはビクウツ!と手を引っ込める。…痛いならよせばいいのに、それを何度も繰り返してふえふえ鳴いている花音さんを改めて見やる。

……………体中泥やら草やら……………今ドアにぶつかっただからってここまでは汚れないだろうに。

「花音さん、その服……………」

「ふえ?……………あ、ああ……………これ。」

え、えへへへ。自分一人で○○くんのおうち目指したんだけどね……………?……………気づいたら、山の中にいて。」

「いやいや……………すぐ近所じゃないですか。」

「だ、だってえ……………」

「はああ……………全くもう、花音さんは俺がいないと……………あっ。」

今俺は何て言おうとした?”俺がいないと”だつて?…笑っちゃうよ。花音さんにはあの人がいるじゃないか。俺よりもずっと大人で、俺よりも絶対力になってくれて。

「…○○くん。…ええと、入ってもいい??」

「……………どうぞ。」

「…ええと、○○くん。」

「…はい。」

「……………怒ってる?」

「……………別に。」

嘘。めっちゃ怒ってますよ花音さん。俺に隠し事だなんて。

「…ええと、今日はね、報告があつて。」

くそ、これは悪い流れなんじゃないか?…何かいい手は、この状況からそのお別れを思い止まらせるいい手…。

…あつ。前に風樹に相談した時に聞いたあれを試そう。上手くいったとしてもちよっぴり仕返しくくらいにしかならない気もするけど、やらないよりでした。

「俺からも報告があるんです。」

「ふえっ??」

言え。

「実は俺…花音さんと会わない間に…。」

言うんだ。

「……クラスの子に告白されました。」

言ってやった!!

「……どう思いますか？花音さん。」

「……あ……う……え……??」

あれ。…聞いてた話と違うぞ。 凧樹の姉ちゃんズはわーわーと騒ぎ立てるように嫉妬をぶつけてくると聞いたんだけど……。

おい凧樹、どうしてくれんだ。…花音さん、口をぱくぱくさせながら呻き声のような掠れ声を零すだけになっちゃったし、目は何処か遠くを見ちやってるし。

俺のことなんかまるで、レイヤーの違う絵であるかのように認識してくれない。…もしかして俺、やらかした？

…少し後悔し始めた頃……

「う……う……う……う……う……」

ポロポロと。正にその表現がピッタリといった風に、花音さんの両目からかなり大粒な涙がこぼれ出す。

「か……花音……さん？」

「……う……う……う……う……う……う……。 ふええええええええええ!!!」

「ちよ、ちよつとちよつと」

「えええええ……。 ひ、ひどいよ……折角……折角、覚悟決めてきたのに……つ。 ふえええええ」

覚悟……？花音さんが決める覚悟ってなんだ？

「ああもう……うそ！全部嘘ですよ嘘!!」

「……うそ?」

「はい嘘です……花音さんが、どうせあの元彼さんとヨリを戻すって話するんだろうなと思って、先制でちよっと仕返ししたっていうか……見栄張ったっていうか……」

「……じゃ、じゃあ誰にも告白されてないの?」

「まあ……最近は。」

…俺は初めて見た。涙がまるで逆再生のように引っ込んでいく様を。

「ほ、ほんとにほんとっ!?!」

「……ええ。花音さんと違って、そんなにモテませんから。」

「…私も別にモテないけど……。じゃ、じゃあ、私、言ってもいいかな?」

「…はい?」

何を言う気だ?…と気にする暇もなく、俺の体は気付けば花音さんに包み込まれていて。

「…花音さんっ?」

「……あのね。…ずっと言いたかったんだけど、どうしてか〇〇くんにだけは冗談でも言えなくて……」

でも、誰にも取られたくないから言うね。……私の、私の彼氏さんになって……くれない、かなあ……?」

時が止まった気がした。…でも実際止まったのは呼吸だった。

「——っ!!——っ!!!」

苦しい。苦しいよ花音さん。締めすぎ締めすぎ……

タップを繰り返すこと数回、漸く気づいてくれた花音さんに開放はしてもらったが…死ぬかと思った。割とマジで。

「ということで、何も耳に入ってこなかったので改めて言ってください。」

「ふええっ??…む、無理だよお、恥ずかしいもん…」

「……まあいいですけど。…元彼さんはいいんですか?」

「あつ、それなんだけどね…」

花音さん曰く。

連日良い寄ってきてしつこいののに、一度誘われた飲み会を断り切れなかったせいで悪化しているとの事。元彼というだけでも面倒な上、別れた理由が向こう側の女遊びと散々なようだ…。

俺の事は一目惚れだったらしく、今ではその気持ちが抑えきれず告白に至ったらしい。…ほんとかいな。

「それでそのお……付き合って、くれるかな…?」

「勿論。……これからも、ずっとずっと宜しくお願いします。」

「ふええええ………ここ二年くらいで一番幸せだよお…」

数字が具体的すぎるんだよな。

「じゃあ恋人になった花音さんに提案があります。」

「ふええ?」

「…俺としても、花音さんが元彼に付き纏われるのは胸糞悪いんで、ここらで一発かまして決着をつけましょう。」

「……でも、どうやって…?」

「簡単ですよ。…俺と付き合ってるからって言っちゃえばいい。何なら、その場に俺も行けば万事解決では?」

「……ああ!!そ、そんなことまでしてくれるの??」

「…勿論。恋人ですから。」

「○○くん……／＼／＼」

次回、解決編!!元彼との直接対決をお楽しみに!!

「○○くん……しゅき。」

…やったぜ。

墮ちる日々（終）

今日、俺は人生を決める。

今その決戦の場へ——花音さんの家へ向かっているところだ。

すぐ近所にあるとは言え、歩いていくには数分はかかる。その間、以前宣言した直接対決の日の事を思い返してみよう。

正式に付き合いだしたあの日。：元彼に一発かますと決めたとあの日から、毎日どちらかの家で一緒に過ごし、親とも仲良くなり、花音さんの友人にも紹介され：と外堀も同時に埋めていくような付き合いが続いた。全ては花音さんの提案だったが、今思い返せばそれで正解だった気がする。

その蜜月の日々の中には当然、宣言通り元カレ云々について行動した日もあった訳で、その出来事がなければ二人の仲がここまで深まることもなかったんじゃないかと思っている。

「○○くん……ほんとに、ほんとに会ってお話するの?」

「ええ、勿論。言ったじゃないですか。」

「そう、だけど……でも、もし何かされたりしたら……」

「全然大丈夫ですよ。この場合どっちが悪いのかわかって明らかですし、このまま放置していても俺達は幸せになれない。：ならやるしかないんです。」

「……うん……。」

「今もまだ、この前の人とは連絡を取り合ってるんですね?」

「……うん。」

「よし、じゃあやりましょう。」

「えっと……色々、ごめんね……?」

「謝ることなんてないですよ。……ここに、呼んじやつてください。」

場所として選んだのは花音さんの部屋。案内もなく辿り着きやすい場所だし、プライベートな内容を話すにはこういった公ではない場所のほうがいいと思ったのだ。

逆に公共の、喫茶店やファミレス等の店のほうが安全かも……とも一瞬考えたが、誰に聞かれているか分からない状況で振られる事を考えると、より後に影響してくるかと思いつく下とした。

不安そうな顔のまま電話をかける花音さん。短い電話であったが、「今後のことでお話したいから」ときちんと伝えられたようだ。

電話を終えた花音さんは、スマホを置くや否や正面から抱きしめてくる。背中に回された両腕は、疚しい事など考えられないほどに震えている。

「大丈夫ですよ。きつと。」

「ふええ……申し訳ないよう……。」

ピンポーン

「……あつ」

「出てもらっていいです?」

「う、うん……。」

彼が来たようだ。既にちやぶ台周りに人数分の座布団は敷いてある。俺も冷静に、言わなければならぬことを整理しつつ備えている。

待つこと数分。いくら何でも遅いんじゃないかと緊張感を解きかけたところでリビングのドアが開く。

「おじやましまー……あつ。」

「…どうも。」

「なんだのんちゃん…やっぱりこの前の子じやんか。」

「ふ、ふええ…。」

「?…会ったことありましたっけ。」

「ああごめん。直接会ったことはないけど…写真とか遠巻きに見たりはしてたよ。」

「はあ。」

現れたスラっとした長身の男性。俺の事を見たことがある、という彼は、とてもしつこく復縁を迫ってくるような嫌な奴には見えなかったが果たして…。

「:○○くん、だったっけか。」

「はい。」

「ああ、立たなくていいよ。…向かい側、失礼するね。…よっころせつと。」

俺の向かい側。ちゃぶ台を挟む形で腰を下ろす。…くそ、見れば見るほどいい人に見える。顔も整っているし、話し方も物腰も大人な雰囲気すぎる。

「まずは自己紹介と行こう。ちゃんと、話ができるようにね。」

「はい。ええと俺、いや僕は…。」

「君のことは大丈夫。のんちゃんから散々惚気られているからね。」

「…へ?。」

「も、もう、リヨウくん、余計なこと言わないでっ」

「ははは、ごめんごめん。」

あれ、結構普通に仲良さ気だったりする?もっところ、ギスツているような間柄を想像していたんだけど…。花音さんを躲し、咳払いを一つして続ける”リヨウ”と呼ばれた彼。

「僕の名前は佐崎亮ささきりょう。のんちゃんを…ああいや、花音を小さい頃から知っている、幼馴染のような関係さ。」

「……元彼…じゃないんですか。」

「??違うよ?…なんだ、のんちゃん説明してないの?」

「あうう……」

「はあ。これは長い話し合いになりそうだなあ……」

未だ理解が追いつかない俺を他所に、亮さんの話は続いていく。

「二つずつ整理していこうか。まずは君が言う元彼について。…君が聞かされているとしたら、元彼からしつこく復縁を迫られて…とか言う奴かな?」

「そうです。」

「ふむ。そいつに関しては僕もだいぶ手を焼いていてね…。僕はその件について相談を受けていたに過ぎないんだが、どうにも面倒な案件なんだ。」

だから正直、のんちゃん気持ちとか周囲の人間がある程度固まるまでは手を出さに出せない案件だと思っていた。」

「というっ?」

「…仮にも同じ大学に通っているんだ。下手な真似をして、その後の学校生活や人間関係に影を落とすようなことになったら?…:…:そういう心配は、やっぱりあるだろう?」

「確かに……」

「だからさ。のんちゃんの気持ちはどこに向いているのか。万が一のことを考えたときに、味方になってくれるような…:この子を受け入れてくれる環境ができるまではどうしようもなかったってわけさ。」

「はあ……」

「…今はもう、君がいるだろう?」

「でも、それなら亮さんだって……」

「僕?僕は無理かなあ。いくら昔から知っている子だとしても、飽く

迄妹みたいなもんだし、人生丸つと背負えるかつてなると無理な話だ。僕にも僕の家庭があるしね。」

「家庭？…亮さん、今おいくつですか？」

「もうすぐ30だね。アラサーってとこだよ。…子供もいる。」

懐から取り出したスマホで幸せそうな家族写真を見せられる。「僕にとつては大切な宝物だね」と付け足されたが、そんな言葉が不要なくらい幸福感あふれる一枚だった。

…じゃあ本当に、この人は…。

「花音さん。…俺に全部を説明してくれたわけじゃなかったんですね。」

「ひうつ。…ご、ごめんなさい…でも、どこから話せばいいか…あう。」

「まあ、あんまり責めないでやって欲しい。この子が一番辛い状況にあるんだ。…それにほら、ただでさえあまり頭のいい子じゃないわけだし。」

「…まあ、確かに。」

花音さんが流暢に何かを語っているとところ見たことがない。それどころか、多分長期間の隠し事もできそうにない。

「言葉不足というか、説明不足というか…。大方その辺だろうと僕は思ってるけど…。」

「まあ、今の話を聞く限りはその線かなあと思いますけど。」

「ふええ…。」

「さて話を戻すとして。確かに復縁をしつこく迫っている奴を僕は知っている。のんちゃんの前代彼氏の何人目だったか…まあ大体は、他に女ができて離れていってしまうんだけど、ソイツだけはのんちゃんをキープしようとしたってわけだ。」

「…はあ？」

「ああ君が怒るのもわかる。だけれども、この子自体はこんな有様だし、押されると断りきれない部分もあるからね。：飲みに行ったりもしちゃったんだらう?」

「うん……。」

「…じゃあ早くそいつを…!!」

「仮にそいつに会ったとして、君はどうするんだい? 口汚く罵るのか、力いっぱい殴りつけるのかい?」

「それは…」

どんな事情があったか、どんな人間なのかはわからないが、恐らく精神的にも未成熟な俺が対面したところで冷静に話し合うなんてできないだろう。

じゃあどうする? どうしてこの話に決着を付けようか?

「だから僕が来た。」

「……………それは?」

「ずっと相談されていたしね。：君を抑える役目も兼ねて、大人が一人居れば…ってことさ。」

「それはどうも…。で、そいつとはどうしたら?」

「ああ…：さつき僕が来てすぐに時間指定で呼んだからね。：もうすぐ来る頃だと思っけど。」

ピンポン

あまりにもタイミングが良すぎる登場だな。：今の話の通りだとするなら、このチャイムは正真正銘その元彼が来た合図であろう。

腰を上げようとする花音さんを制止し、亮さんが玄関へと向かう。

「いらっしやい。」

「あ? ……何でてめえがここに…」

「花音に呼ばれてきたんだろ? …奥に居るが上がるかい?」

「つたりめえだろ。退けや。」

「…今日が最後だと思っから、話したいことがあつたら手短にな。」
「ああ？意味分かんねえよ。…退けやあ！」

とても穏便とは言えない雰囲気だけど大丈夫なのか？俺にしがみつく様に顔を埋める花音さんもガタガタと震えている。

やはりここは俺がしつかりし

〈バァン！〉

…勢いよく開けられた扉から入ってきたのは”如何にも”なチャラ男。見下すように見てくる目に、話し合いができる余地など微塵も感じない。

「誰だお前。」

「花音さんの…彼氏だ。」

「はっ。…お前みたいなナヨついたガキがか？…あんま舐めたこと言つてつと知らねえぞ？」

「ナメてないけど。…あんたが花音さんに復縁をしつこく迫つてるつていう「元」彼？」

敢えて元の部分にアクセントを置いて話す。ああだめだこれ。…絶対喧嘩になる。

「ははあん…何、お前もコイツの体目当てか？コイツはいいよなあ…少し優しくしてやれば何でも言うこと聞かし、周りから孤立させりやすぐ依存してくるしよお…」

「やめろ。俺はあんたとは違う。花音さんが好きでいてくれるから、花音さんが大事だと思うから、ずっと一緒に居たいってだけだ。」

あんたみたい汚い欲求を満たすためだけに関係を持つているわけじゃあない。」

「○○くうん……。」

「あ？…訳分かんねえこと言つてんじやねえよ。ずっとモテずに一人寂しく講義を受けてるだけのコイツを誰が拾つてやっただと思つてん

だ？ああ？」

「……もうやめとけ二人共。」

「亮さん……？……そのスマホは……」

ヒートアップしていく空気の中、唯一冷静な声が。

部屋の入り口、元彼野郎の後ろでずっと何かを操作していた亮さんが、スマホを突きつける形で俺たち二人を制止した。

「……お前、随分なことをやってるみたいだが……。のんちゃんもその一人だつてことか？」

「ああ？なんだ、人の携帯を勝手に見ちゃいけませんって習わなかったのか？」

「亮さん？何が何だか……」

「ゴイツの携帯をちょこつと見させてもらったただだよ。……まあ似たような関係の女の子が他にもワンサカといるんだろ？……出てくる出てくる画像やらメールの山が。」

「てめえ……！」

「おっと。あまり余計なこととはしないほうがいい。……余罪は増やしたくないだろ？」

「余罪だあ？……てめえ、まさか」

「ん。証拠に使えそうなものは幾つかの媒体にコピーして保存しておいた。何かあればすぐに動き出せる状況だけど……まだ続けるかい？」

「……ハッ、汚えのはどっちだつて話だよ。……わかった、じゃあ少し話をさせろ。そこのガキと二人でな。」

ただ只管に泣きじやくり震えている花音さんを連れて亮さんは部屋を出ていく。「無理はしないように」と甘いウイスパーボイスで言い残して。

「……警察沙汰にでもしないと真面目に話すらできないのかあんたは。」

「煽んなクソガキ。折角会話してやろうってのによ。」

「そうかよ。…で？何を話すんだ。」

「あー……お前、花音とは本気で付き合ってるのか？」

「当たり前だろ。互いに好き合ってる仲だぞ。」

「ふーん……そりや羨ましいねえ。」

「…あんただって、変な気を起こしたりしなければ今も一緒に居られたんじゃないのかよ。」

「そうじゃねえから羨ましいつつつてんだろ。俺は最初から好かれてなかつたんだ。」

「へえ。でなに？」

「……花音には身内がいねえんだ。」

「は？」

「花音が小さい頃、両親共に死んじまってな。…それ以来面倒を見てきたのがアイツ、佐崎だ。」

「だからなんだよ。」

「花音が高校に入ったあたりからかな、危なげが出てきたのは。…要は、まともに愛情つてやつを受けずに育つたんだ。好かれるとどんなのが相手でも付いていくようになってな。」

「……。」

「そこで何度か酷い目に遭って…人間不信にもなりかけた。…そこだ。」

佐崎は面倒見役として俺をつけた。同い年で、飽く迄友達として面識のあつた俺を選んだんだよ。」

…？待て待て。そうなるときさっきの話と辻褄が合わなくなるんじゃない。

「あんだ、元彼って…」

「……なんだ、俺の演技力も捨てたもんじゃないな。……いいかガキ。じゃないええと…○○だったか。」

「ああ。」

「この一連の騒動。全ては仕組まれたもんだ。」
「なっ…」

一連つて？どこから始まったものだ…？仕組まれた？誰に？俺はいつから…いや、誰に騙されていた？何のために？花音さんは？あれも全部嘘？

ぐるぐる回る俺の頭などお構いなしに、元彼…役のそいつは続ける。

「花音が酔いつぶれて帰ってきた日、あつたろ？」

「うん。」

「あれな、俺と佐崎で飲ませたんだよ。お前との関係を、お前つて人間について、吐かせるために。」

「…何のために。」

「さつきも言ったが、花音は色々なところで分別が曖昧なんだ。善悪くらいは判断できるだろうが、こと他人から向けられる感情については理解していない。その結果酷い目にも遭ってるわけだ。」

「…。」

「だから、俺達保護者としては見極める必要があつた。お前が今までの屑共と同じなのかそうでないのか。…そして花音の気持ちは真なのか。」

成程。…全てが納得できているわけじゃないけど、意味はわからなくない。親代わり、ともなれば筋は通っているんだろうし、…納得も許容も、できたもんじゃないけど。

「まあ、正直俺達がここまでやるのもどうかとは思ったけどよ。…それだけ心配なんだ。花音が。」

「じゃあ…執拗に迫ってくる元彼もいなくて、さつきあんたが言っていた体目当てだなんて言うのも全部嘘なのか？」

「ああ。そんな奴が本当に居たら、とつくに俺と佐崎でそいつを潰し

てるだろうさ。」

「…なん…だよそれ…。」

「悪いな。でも悪気があって騙してたわけじゃないってのはわかってほしい。」

「…ああそうかよ…。」

なんだこれ。俺は何のために頑張ってたんだよ。めっちゃ怖かったんだぞ…。

でも、現在進行形で酷い目に遭っている花音さんも、いいようにキープで使われている花音さんも居なかったんだ…。それは本当によかった…。心から安心…あつ。

「なんだよ○○、泣くことねえだろ。…そんなに俺が怖かったか？」

「ちげえよ…。安心したんだ。今傷ついている花音さんは居なかったって。…だから、俺が頑張ったことは無駄になっちゃったかもだけど、それはそれで良かったって…。ホッとしてるんだ、俺…。」

「……………お前なら大丈夫だろうよ。」

「入るぞ。」

「○○くんっ!!!」

話の終わりを察したか、部屋に二人が戻ってくる。

亮さんは元彼役の方に行き何かと話している。…花音さんは、俺の顔を見るなり相変わらざる泣き顔で抱きついてきた。

「○○くん!○○くん!!ごめんねえ!!ごべんねええ!!!」

「あ、あはは、花音さん…よかったですよ、本当に…」

「私、私ね!!ごめ、ふえ、ふえええええ!!!」

「花音さん…。」

斯くして、俺の闘いは終わったんだ。花音さんの”保護者”に、花音さんを任せてもらえるって形で。

これは後から聞いた話なんだけど、あの元彼役の人、高校卒業と同時に劇団を立ち上げるほどの舞台好きで、脚本から演出・主演まで一人でこなしてしまう様な人らしい。名前は白鷺しろさぎけい兄と言うらしく、業界ではそこそこ有名な人だとか。

…そりやあれだけのストーリーを用意できるのも納得だよ。うん。

俺は、白鷺さんの舞台の上でまんまと踊らされたわけだけど、その見返り見返りが花音さんなら申し分ない。今ではすっかり仲良しとなったあの二人にも、引き続きお世話になっているところはあるし、俺の人生に於いて確かな宝物となるような出来事だった。

*
*

「はあ……。」

柄にもなく緊張している。

何度も押したインターホンだけど、それでもやっぱり緊張する。

何せ相手は大学生のお姉さんなんだから。いつもふえふえ言っていて、目を離すとすぐ迷子になって……それでも俺の一番大好きなお姉さん。

知り合っただのはいつだったか……ああそうだ、シヨツピングモールで迷子になっていたのを助けたのがきっかけだったっけ。

今の俺がこうして決意を固めているのも、あの出会いがあったからこそなんだよな。

「もう、またやってるの??:」

突如開いたドアと顔を覗かせるふわふわと外ハネ気味の水色髪。
…とニコニコ笑顔が素敵なお姉さん。

そして今正に押さんと、チャイムに手を伸ばした状態で固まる俺。

「あ……えと……その……」

「ふふっ、今日はまたどうしてそんなに緊張しちゃってるのかな??」

「えつと……んん”っ。…こんにちは、花音さん。」

「うん、こんにちは。入って入って?」

「はい。」

言われるままに入り、きちんと靴も揃える俺。家では絶対やらないけど。

そのままりビングへ入ったところで、前を歩く花音さんの肩を引き向かい合う。突然のことに少し間拔けな表情の花音さんに、真正面からぶつけるんだ。

今日伝えると決めてきた、想いを。

「花音さん、俺とこの先もずっと、永遠に——」

おわり

【山吹沙綾】 山吹色に染まるまで
宿屋「山吹ベーカリー」

「ね。ね。何かして遊ぼつか?」

「いや、課題やれよ。」

何をどこでどう間違えたか、気が付けばクラスメイトの部屋に居た。

机に向かい課題と向き合う風を装いつつも、遊びたくてうずうずしているのが手に取るようにわかる目の前のこいつは山吹沙綾。同じクラスで、右斜め後ろに座っている女の子だ。

俺と沙綾は飽く迄クラスメイト。それ以上でも以下でもない関係なのだが、沙綾の家が俺の行きつけのパン屋ということもあって、登下校を毎日共にする程度の交流があった。

「今日もいつもと同じように下らない話をしながら山吹家、”山吹ベーカリー”まで来たのだが、そこで珍しい提案。

『あ、そうだ。今日しんどいくらいの課題出されたよね?』

「〇〇絶対やらないと思うから、ウチで一緒にやっつかない?」

や、そんな言うほど不真面目じゃないし。別に監視いなくてもちやんとやるし。

言いたいことは色々浮かんだが、どうせこの後の用事もないのでお邪魔することにした。

勿論、向こうさんのご両親とも顔見知り（店員なのだから当たり前）といつちや当たり前なのだが。で、娘が男を連れ来たというの一言目から歓迎される始末だ。

多感な時期の娘さんでしょ?もつとこう心配しましょうよ。

『ああ、よく来てくれた!今日はお客さんじゃないんだよね?』

部屋?うんうん、上がって行きなさい上がって行きなさい。なんならずつと居なさい!』

おじさん…。

「んー？どしたの。急に変な顔で黙っちゃって。」

「ああ？……いや、考え事っつーか。」

「ふーん？どうでもいいけど、〇〇って結構集中力もつんだね。」

課題だつてあつという間に終わらせちゃってさー。」

「沙綾はもうちよつと集中してやってみような。」

ちやんとやりやあもう終わってんだろ。君もバカじゃないんだし。」

「んー…だつてさ、自分の部屋に〇〇がいるんだよ？」

ドキドキして、課題どころじゃないよね。」

「君が連れ込んだんじゃないか…。」

何がしたいんだね君は…。

「つかさ、俺今いる意味ないよね？」

最初の目的の課題については終わっちゃまったんだし、帰っていいかな。」

「もうちよつと待ってよ。もうすぐ、終わったら構ってあげられるからさ。」

「それ4, 5回聞いたんだけど。」

「あはは…ちよつと集中するから話しかけないでね。」

あ、これ帰るに帰れないやつだわ。

その後も一度こつそり抜け出してみただけど、部屋から出た時点で沙綾の妹・紗南ちゃんに捕まった。

「あれえ？おにーちゃん帰っちゃうの??」

「うん、今日は学校の宿題をやりに来ただけだからね。」

また今度来るよ紗南ちゃん。」

「あれれ？でも、今日はおにーちゃんが泊まっていくからって。」

「は？」

「朝ごはんの時に、おねーちゃんが。」

「……そっか。忘れ物したからお部屋に戻ろうかな。」

「紗南ちゃんも下に戻りな～??」

「わかった!!またあとでね!」

ととん、ととん、ととん、と軽快に階段を下りていく紗南ちゃんを見送りつつ、これは最初から仕組まれていた盛大な罠だったと、ここに来て気づいたのだった。

「……山吹沙綾。」

「あれ?おかえり。どこいったの?」

「…謀ったな、山吹沙綾。」

「んー?なにが?」

「まさか家族をも利用しようとはな。感服だ山吹沙綾。」

「ねえ、フルネームで呼ぶのやめてよー。初めて喋った時みたいじゃん。」

「俺はいつ泊まることになったんだ?」

「あはは…紗南からきいたの?」

「ああ。」

「折角だからもうちよつと仲良くなりたいなーって思ってたさ。」

「いや、今でも結構…クラスでは一番ってくらい仲良いと思うんだけど。」

「そりゃあ分からなくもないけどさ…。男泊めるつてのは不味いだろう。彼氏にでもやったれよ。」

「んー…。私さー、彼氏とか出来たことないんだよね。」

「…あつ、じゃあ今日だけ彼氏の気分にいるっていうのどう?レンタ
ル彼氏??」

「意味が違うだろうが。うーん…山吹の彼氏かあ…。」

「なに、不満?あと、また苗字呼びになってるよ。」

「あ、わり。沙綾な。」

知り合った当初フルネームで呼んでいたのもあり、少し話すようになってからも暫くは「山吹」の方で呼んでいた。

「なんか嫌」というザックリした理由から名前呼びに変更（強制）したのだが、やはり癖が出るときもある。

その度にこうして指摘を食らうのだ。

「不満とかじゃねえけど…。」

「もー、そんなに真剣に考えこまないでよー。」

真剣に考えてOKならいいけど、嫌だって言われたら私だって凹んじゃうよ?。」

「はああああああ。わかったわかった。今日一日彼女になってくれ沙綾。」

「別にこれからずっとでもいいけどね?。」

「そういう冗談は勘違いを招くからやめんさい。」

一つ議題が解決して満足したのか、その後は黙々と課題をこなして行く山：沙綾。

特にすることもなく暇なので、俺も近くのローテーブルで予習に取り組む。

ちなみに、策に嵌められたと気づいた直後に自宅には連絡を入れた。

「お、青春してんな。一発決めてこいよ!」だと。あのクソ親父…。

一時間ほどやっただろうか。このあたりでひと段落としようと顔を上げる。

「……………」

正面、鼻が触れ合いそうな位置に沙綾の顔があった。あまりの近さとそのにやけ面に思わず固まる。

「……なにしてんの。」

「課題、終わったからさ。暇になっちゃったから〇〇の顔見てたの。」
「いや終わったなら言いんさいよ……。」

「すつつごい集中してたからさ。邪魔しちや悪いなーって思ってた。」

「そうかよ。お気遣いどーも。」

「へへっ。お母さんがね、そろそろ晩ご飯だから降りてきなさいって。」

「…ホントに俺、泊まんの？」

「みんなそのつもりだよ？」

「俺が暇人で良かったな。」

「うん、ありがと。…行く？」

手を引かれて階段を降りる。いや一人で歩けるし。介護か。

食卓に着くと、なんとも幸せな光景が広がっていた。

テーブルには沙綾以外の家族が全員席に着いており、漂うのは食欲を刺激する暖かな匂いと穏やかな雰囲気。

食卓には色とりどりの料理が並べられ、まさに家族の食事といった景色だ。

「あ、どうも…なんかすいません。ご飯も、あと泊まらせて戴けることも……。」

まるで俺が無理言って泊めてもらうみたいだなこれじゃ。

沙綾がどこまでどういう風に説明しているのかも知らないし、ふわっとした感じの喋りになってしまふのは仕方ないか。

「はっは。〇〇くん、そう畏まるんじゃない。」

君は昔からお得意さんとして通ってくれてるんだし、なんなら毎日でも泊まってくれていい。」

「もう、それって住んでるって言うんじゃないかしら？」

「母さん、確かにそれもそうだなあ。」

「…どうだね○○くん、いつそ住んでみるかね。」

「…いやいや、そんなそんな。」

歓迎ムードもここまでくると、最早恐怖まで感じてしまう。

絶対裏があるやつやって。

いくら小さい頃から通ってるって言っても、娘が泊まらせようとしている相手にこの対応ってのは…

いろいろ心配だぞパッパ。

美味しい料理を堪能し、世話になってばかりなのもアレなので片付け等はお母さんのお手伝いをする。

沙綾は妹たちを連れ風呂に行っている。

「ねね、○○くん。○○くんって彼女とかいないんでしょ？」

「ブツ…一体何を急に…」

「あ、ごめんなさいね。」

…でもほら、女の子の家に泊まるって男の子が恋人持ちだと後々揉めるじゃない？」

「そりやまあ…。」

「だから、居ないと安心よねっていう…確認？」

「そうですか…。」

「あと、うち来客用の布団とか無くてね。」

申し訳ないんだけど、沙綾のベッドで寝てもらっていいかしら？」

「そっちの方がよっぽど安心できない状況だと思っんですけど…。」

「大丈夫でしょ、○○くんだし。」

俺はいつのまにそこまでの信用を勝ち取ってしまったのか。

一向に解けることのない謎である。

そんなこんなで深夜。

電気も消え、家全体から音と動きが極端に減る時間。セミダブルのベッドに2人は少々狭いようだ。

まさか本当に同じベッドで寝るとは…。もう高2だぞ。

「緊張するね、○○くん。」

「安心しろ、何もしないから。」

…とつとと寝るぞ。

「えー…そんな、勿体無いよ?」

「君も何でそんなにウエルカムなんだよ。」

「んー。わかんない。」

でもほら、今は恋人同士でしょ?」

「本気かよ。」

「私は、これからずっとでもいいって、言ったよ?」

「はあ……。君に勘違いさせられる不憫な男子が増えそうだな。」

「いや、○○くんにしか言わないし。」

「そうかい。」

…ほら、明日も学校あるんだから、早く寝ようぜ。」

「うん…。」

あ、そうだ。今日が終わる前に一個だけ、恋人っぽいことしてもい

い。

「えー…うーん……。めんどくさくなければ別に。」

「ふふ。わかったよ。」

どうせ「好きって言って」だの「腕枕して」だの、その手のことが出るんだと考えていたが…

瞬間。

口に瑞々しい感触。

それは時間にして5秒か6秒程だろうが、体感では数十分のことのように感じられた。

塞がれていた口が解放され、呼吸を忘れていた事に気づいた時には

正直何が何やらで。

「冗談じゃないよって、言うより伝わったでしょ?」

暗くて見えないが、恐らく真っ赤になっているであろう彼女を感じつつ。

これからの関係性に少々の不安を覚えながらも、慣れない環境で疲れた体は眠りに落ちていった。

癒し屋「沙綾の部屋」

「沙綾…。」

「あ、こちら。動いちゃ危ないでしょ?？」

「んう…。」

すっかり慣れてしまった沙綾の部屋。

今は沙綾の希望で耳かきをしてもらっている。普通、こういうのってやってももらう側が希望するんじゃないかって?」

やらせろやらせろってしつこいから寝転がったけど…。

「どう?気持ちいい?」

「…まあまあかな。」

「ふふっ、よかった。…じゃあ仕上げに…。」
ふうーっ

「おおう!？」

「あはははー!どうしたの○○!すごい変な声!」

そりゃ耳にいきなり息を吹きかけられたら誰でもそうなる。
仕上げってこのことか…。

「ふうってやめろ、ふうって。」

…耳は弱いんだ。」

「もう…かわいいんだから。」

「それ、男にとっては褒め言葉じゃねえからな。」

「いいのいいの。○○にしか言わない特別な褒め言葉だよ?」

「…そうかい。」

つか、耳かきの仕上げって普通、あのポンポンみたいな綿毛で掃除するんじゃないのか?？」

自分でやるときは金属製のだからよくわからん。
夕方、程よく日も暮れ外からは子供の遊ぶ声とカラスの鳴き声が聞こえている。

すっかり網戸になった部屋の窓からは涼しい風が入り、頭の下には沙綾のやわつこい腿ときたもんだ。

何とも心地よい、いや、心地良すぎる環境だ。
ずっとここにいたい…。

「…風が気持ちいいね。」

「ん…。」

「ずっとこうしてるのもありかもね。」

「ん…。」

「…○○、おねむ？」

沙綾の細い指が俺の髪を梳く。ああ…墮とされる。

「ん…：そうかも。」

「このまま寝ちやう？ご飯食べる？」

「…寝るのもいいかもな。」

「お布団入る？このまま膝枕がいい？」

「…：ん…。」

「もう、○○さつきから「ん…」ばっかり。」

…：ねね、これで会話が成り立って、夫婦みたいじゃない？」

夫婦、ねえ…。

毎日毎日沙綾のアピールを受け続け感覚が麻痺していたが、俺達別に付き合ってるわけでもないんだよな…。

それこそ夫婦なんて途方もなく先の話だ。

「んう。そうだなあ…。」

「ふふつ。顔、だらしなくなっちゃってるよお。」

もっともつとなでなでしてあげるね。」

「んー……。手、冷たくて気持ちいいな……。」

「心が温かいつてことだよ。だから付き合っちゃおうね。」

「それはなあ……。」

「それとも段階飛ばして結婚しちゃおう？うちは皆OKだと思うけど。」

OK出ちゃうのもまずいだろ……。

取り敢えずそういう面倒な問題は先送りにしてのんびり過ごしたいなあ……。

「…確かにねえ。結婚とかはまだまだ後でいつか。」

今は沢山、私に甘えちゃいな？ずつと一緒にいてあげるから……。」

「心を読むな。そしてあんまり甘やかすな。」

「それはまあ、未来のお嫁さんですから。」

…溺愛しちゃいます。」

俺が堕ちるのも、時間の問題かもしれない。

犯。屋「策士の山吹」

「にーちゃん、勉強はいいから遊ぼうぜ…」

「だめだ。それに、勉強つつたつて宿題だろ？提出するものくらいちゃんとやらなきゃな。」

「ねーちゃんより厳しい…」

「ねね、おにーちゃん見て！」

「おお、今度は何作つたんだ?？」

「なんでしょ〜」

「これは…カニさんだな？」

「ぶつぶー。かにぱんでしたー。」

「くそう、謎のパン屋補正だなあ。」

放課後。

すっかりいつも通りとなつてしまった沙綾との下校を終え、流れるように山吹家の居住スペースへ。

今日は沙綾の弟、純君が多めの宿題に追われているとのこと、監督役を引き受けている。そしてその傍ら、紗南とも折り紙をして遊んでいる、が…。ああ、こんな妹欲しかったなあ。

「義妹にならできるじゃん？」

「心を読むなお姉ちゃん…」

「おねーちゃん!!見てこれー!」

「お、たくさん作つたねえ。おにーちゃん優しい??」

「うん!これね、全部パンなの〜。」

「なるほど、海鮮パンシリーズだね。」

「そうだよ!これがマグロのでしょ、こつちがわかめパンでこれはたこ焼きパンといか焼きパン。」

あとこつちがヒトデパン。」

「それ全部店で売ってるパンってところが恐ろしいよな…。

まじ山吹ばねえ。」

「ヒトデパンは〇〇の案だったよね。お父さん、気に入っちゃって…。」

某名作のあのパンだ。

沙綾のお父さんに…ああ違った、お義父さんって呼べって言われたんだっけ。

お義父さんに作品ごと紹介したのがきっかけで、今店にはちよつと特殊なパンコーナーができてしまっている。

…恐ろしいことに売上は順調と来たもんだ。

「虹色パンは発売に至らなくて残念だったな。」

「貴方にもレインボーってね。キャッチコピーは良かったんだけど…。」

「ほぼまんますぎるから通らなくて寧ろよかったよ。」

…おい純、お姉ちゃんが来てからイヤに静かだな。」

「う…うつせえ。」

「そんな急に真面目になるなら最初から沙綾が先生やれば…。」

「あはは…。この前ちよつとキツく怒りすぎちゃったのかも。」

お陰ですつかり怯えられちゃって…。」

「ふーん…？…おい純、お姉ちゃんこんなだけどな、俺と二人でいるときは宿題とか全然やらないんだぜ。」

「そうなの…？」

「おう。「折角一緒に居るんだから遊ぼうよう」とか言っちゃってな？

俺が怒る役になるんだ。」

「へえー。」

「ちよ、ちよつと！そういう裏事情は話さなくていいんだってば!!」

「裏w事w情ww」

「も、もう…後でおぼえとけよお。」

恨めしそうに睨みつけて店の方に戻っていった。

なんだ、手伝い終わったのかと思ったけど、様子見に来ただけだったか。

「ねえ、にーちゃん。」

「ん。」

「宿題終わったから訊くけど…。ねーちゃんって、にーちゃんの前だと女なの？」

「ブツ…！お前、どこでそんな言葉覚えた…？」

「もーおにーちゃん、紗南の作品飛ばさないでえ。」

「おう、すまんすまん。」

「なんか、にーちゃんがうちに来るようになってから、ねーちゃん変なんだ。」

「すげえ服とか気にするようになったし、にーちゃんの話ばかりするようになったし…。」

「ほーん…。」

「あ！紗南ね、前におねーちゃんと一緒にお風呂入った時ね！」

「おにーちゃんが本当のおにーちゃんになったらってお話してたんだあー！」

「ほーん…？」

「紗南はね、おにーちゃんがおにーちゃんになってくれたら嬉しいな〜って。」

「毎日おにーちゃんと一緒にいたいし、おねーちゃんもニコニコしてるから嬉しいの！」

「なんだこれ…無邪気さが恥ずかしさに変換されてめっちゃ刺さるぞ…。」

「つかあいつ日頃どんな話してんだ。まじ外堀から埋めてくのやめろ。」

「俺も…にーちゃんがいると、宿題忘れなくて済むから、助かるってい

うか。」

「…男のツンデレって、結構マニアックな需要狙うなお前。」

「なにそれ。」

「大きいお姉さんたちが喜ぶなって話だよ。」

「は??」

「まあいいや、お前もデレるんだな。よーしよし。」

「ばか！撫でるのやめろ!!うんこうんこ!!」

「あつ、てめえ、次それ言ったらぶっ飛ばすつつつたろ?」

「ひいっ!…う、うんこー!!」

「あつ」

あいつ、すぐ逃げるな…。

その捨て台詞は育ち悪く思われるからやめろと何度も言って…。

「…おつ」

奥の方に走って行ってしまった純から視線を前に戻すと、いつの間にか沙綾が戻ってきていた。

ニヤついた顔と正面から対峙することになる。

「へへへへへ…」

「何だその笑い方気持ちわりい。」

「すっかり馴染んできたね、おにーちゃん。」

「…お前の策略だろ。」

「えー?なんのことかなあ??」

「顔、顔よ。」

「しらなーい。」

あ、そうだ、紗南。お兄ちゃんに訊きたかったことあるんでしょ??」

「う、うん。…おにーちゃん?」

「どうした?」

「おにーちゃん、いつ苗字変わるの?」

「……………」

「……………フフツ。」

山吹沙綾。お前こんな小さい子に何教えてんだ…。

抗議の意を込めて黒幕を見るも、そんなに幸せそうな顔されたら何も言えないだろ…。バカ野郎。

夢見屋「山吹ダイアリー」

「……でね？式場の候補をリストアップしてみたんだけど…。」

手を止めて声の方を見ると、手作りと思われる数ページの冊子を持った彼女の姿が。

こういうところ、キツチリしているというか真面目というか…。

「ん？…ああ、確かに。そろそろ考えなきやいけない時期だもんなあ。」

「でしょ。この前チラツと見てみたあそこはイマイチだった？」

「ああ…流石に浮島で挙げる式は嫌すぎるだろう。いろんな意味で…。」

アレは流石にな。

何処の国だったか覚えちゃいないが、一步踏み込んだだけでグラグラと、直立もままならない状態だった。

祝福の日に事故やら怪我やらは見たくないしな。

「まあねえ。…面白そう、とは思うけど。」

「おにーちゃん！おねーちゃん！」

「??」

走ってくるのは我がスイートリトルシスター・紗南。

純白のヴェールがとても良く似合っている。

後ろに控える純もパリつとしたタキシードが映えるなあ。ちっちゃいけど。

「おにーちゃん！おねーちゃん！紗南と純くんの式場も決まったよ

！」

「はあ？」

「あのねー、山の奥にねー、おっきい教会があるんだあー。」

「山の…何だつて？」

リンゴーン

まてまてまて、山？教会？

いや、こいつら実の兄妹だろ??なんの式場だ??つーかここどこだ？

リンゴーン リンゴオーン

何だよさつきからうるせえ鐘だな。人が真剣に考え事してる時に大音量で鳴らしてんじゃねえよ？

「こらお前、大事な式の最中によそ見をする奴があるかボケが。」

「ああ?…親父?何言つてんだてめえ…」

「○○…」「、しないの?」

「へ?」

突然話しかけてきた親父から声のする方に意識を戻す。

ああ、沙綾。素敵なウエディングドレスだ。…で、何だつて？

「だから…誓いの」「、しないの?私、ずっと待ってたんだよ?」

「さ、沙綾…。」

目を閉じてその刻をじっと待ち侘びる愛する妻。

待つてろ、今その重大な任務を遂行しに…

「…あ”っ。」

夢か。道理で流れも世界観も滅茶苦茶な訳だ。

結婚式とか、俺別にそういうんじゃないや…いや、最近の沙綾のべたべ

たつぷりに影響されている部分も認めなくてはいけないかな。

それはそうとここは、いつもの沙綾の部屋。最近ほほここで寝泊りしている気がする。

ちらりと壁に掛かっている時計を見る限りもう昼らしい。部屋の主は今頃下で手伝い中だろうな。

日曜の昼時ってことは、常連新規問わずにそこそこの賑わいを見せる頃だろうしな。面倒だろうし下には降りないようにしよう。

…にしても、久々に予定のない日曜だからって少し寝すぎたらしい。

おまけに姿勢も不自然だったようで、首やら肩やら少し凝り固まっているようだ。

「もうすぐピークも引くだろうし、それまで少し時間潰していこうか。」

改めて沙綾の部屋を見渡す。

大体面白そうなものは漁り尽くしちゃったし、他に何か時間を潰せそうなものは…と。

「…あれ？…こりやなんだ。」

机の上に見つけたのは一冊のノート。

こういう場合、ありがちな展開としては「思わず開いたそれが沙綾の日記で、内容を読んだことが沙綾にバレて」みたいな流れかね。

まあそんなアホな定番もないだろ。あんなのは作り話のわかりやすいテンプレでしかないさ。

何の気なしに適当なページを開くと

〃 7月4日

今日も〇〇がうちに居る。

紗南は最初から心配していなかったけど、純も少しずつ懐いてくれ

ているようで嬉しい。

「このまま——」

…おい、まじか。

「…紗綾。こんなところに置いてくお前が悪いんだからな。

これはもうフリにしか感じられないぞ…。」

少し読んでしまった手前、気になるのは確かだ。

もう一度開き、続きを読む。

“ 7月4日

今日も〇〇がうちに居る。

紗南は最初から心配していなかったけど、純も少しずつ懐いてくれているようで嬉しい。

このまま2人が本当の弟・妹になって、〇〇が本当に私を貰ってくれるといいな。

なんちやって。気が早いよね。”

「——ッ。」

またパラパラとページをめくり適当な日を見る。

“ 7月14日

お店が忙しいせいもあってすごく疲れた。

でも、お父さんもお母さんもあんなに一生懸命になって頑張ってる。

まだ若くて動けるはずの私が弱音なんか吐いてちやだめだよね。

ファイトだ!!

そういえば、昨日と今日は〇〇と話もしていない。

自分の家にいるんだもんね。

お父さんと仲良くやつてるかな？ご飯、ちゃんと食べてるかな？”

…あいつ、ほぼ大体の日で俺について触れてんな。

もつと色々考えることもあるだろうに。店も忙しいんだし。

「…あれ？」

次の見開きは真っ白。空白の2ページ。

流れからすると15日・16日か。確かその時俺はここに泊まっていた気がするが…

ああ、次の日は書いてあるな。

“ 7月17日

一昨日と昨日はずっと一緒にいられた。

昨日なんか、朝からお父さんが「パン屋の仕事を教える」って張り切ってたな。

お父さんが楽しそうなのはいいけど、この家が嫌いにならないといいな。

夜は一緒に眠ったし、朝は私が起こしてあげた。

〇〇の寝顔、いつ見ても赤ちゃんみたいで可愛い!!

でも反動かな。

今日、家の前で別れてから寂しくて心細い。

何か悲しいことがあるってわけじゃないけど…

会いたいよ。話したいよ。触りたいよ。

〇〇。

“

「…沙綾。」

その次の日も。

“ 7月18日

朝起きて隣に○○がいない。

普通のこと、のはずなのに、なんか変な感じ。

寂しい？ちがうか。

もう、○○が居ないと私が私でいられないのかもしれない。

それくらい、○○は私にとって必要なんだ。

○○が大好きなんだ。”

これ以上はきつと読んじやいけない、いや読むべきではない、か。そんな気がした。

俺は多分今一番あいつの近くにいます。こんな裏技であいつの気持ちを知るはずのと思った。

そつとノートを下の位置に戻し壁の時計を見ると、思ったより時間は経っていて。

床越しに少し聞こえていた階下の賑やかさも収まっていた。

廊下の様子を伺いながら部屋を出て、階段を下る。

…沙綾が、毎日俺に対してあんな気持ちを持っていたなんて。

本当に気まぐれで、ただの行き過ぎた友達関係からこんなことになっっていると思っていた。

沙綾は俺を必要としている？一緒に居たいと、本気で願っている？仮に俺が傍に居たとして俺に何ができる？いつも面倒を見てもらっているだけの俺の役目は――

「あーおはよう。…今日はお寝坊さんだね。」

「沙綾。」

「…どうしたの？顔、怖いよ？」

「あ、ああ、悪いな。」

「??…まだ寝ぼけてんの？怖い夢でも見た？」

ふと、先程まで見ていた頭の悪い夢を思い出す。
結婚、か…

「ははっ、いや、まあな。」

「そっか。…ごめんね？起こしてあげられなくて。」

「んーん。今日も忙しかったろ？」

…つか、やっぱりエプロン似合うな。」

「まあ、日曜だしね。…エプロンはいつものんだけど、急にどうしたの？」

「んー…。気にしないでくれ。」

それよりさ、例えばの話なんだけど。」

目の前のこいつが何を望んでいて何を求めているのかは分からない。
い。

「もし俺が、ここに暫く居候させてくれて頼んだら、どう思う？」

だからこそ、訊いてみるんだ。

わからないなら直接訊く。俺と沙綾の間なら、下手に気を使ったり
機嫌を伺うよりその方がよっぽどいい。

じっくりくるんだ。

「…え？」

「…ま、迷惑だよな。すまん、なんでもない。」

どんな答えだろうと、今は飽く迄「クラスメイト」だから。そこか
ら進んでも外れてもいないから。

言いたいことは面と向かって言う。訊きたいことは訊くべきだと
思う。

周りが違うって言っても俺はそうするし

「め、迷惑なんかじゃない！」

私、ずつと言わなかったけど、本当はずつと傍にいて欲しい。えと…その…

なんというか、朝起きた時におはようって言える場所に、ずつといて欲しい。っていうか…」

「沙綾。」

「ごめんね、うまく説明できなくて。ええと…」

「いいんだ。大体予想はついていたから。」

「えっ…」

日記を読んだ、と態々言う必要もないだろう。

今言わなきゃいけないのは、関係を進めるという提案だ。

「これは俺の気まぐれなんだけどな。」

…よかつたら、暫く居候させてくれないか？もつと沙綾と一緒にいたいんだ。」

「……ッ！」

いつの間にか俺にとって、お前の傍が居心地のいい場所になってたみたいなんだ。

わかみ屋「沙綾プラス黒船」

「…おはよ。〇〇。」

「……………んあ?」

いつもと変わらない朝。

吐息のかかりそうな距離でにつこり微笑むのは、俺が居候している
ここ、山吹ベーカリーの長女だ。

一緒に寝ることが恒常化して改めて気づいたが、”香ばしい焼きた
てパンの香り×少女特有の甘い香り”というのは素晴らしい方程式
だ。

「……………もう朝?」

「ふふっ、気持ちよさそうに寝てたね。」

「何時?」

「さつき目覚ましが鳴ったばかりだから…もうすぐ4時半ってとこ
ろかなあ?」

「お前、超早起きな…。…ふああ……………ねむ。」

パン屋の朝は早い。

よくお義父さんが言っている言葉でもあるが、日常として体感する
と改めて尊敬する。

手伝い…というには役割が多い、娘の沙綾でさえこの時間に起きる
んだ。よっぽど気合入ってないといけないよな、ホント。

俺もたまにお手伝いはするが、大体その後の授業時間を睡眠で浪費
することになる。早く起きられるようになった分スタミナが持たな
いんだよなあ…。

「おつきなあくび…!かわいいね。」

「そりゃどーも…。まだ行かなくていいのか?」

渋々ワンピースを脱ぎだす。

この濃紺地に水色と桃色の水玉模様が散りばめられたワンピース。前にも聞いたがどうやら彼女のお気に入りらしい。

数種類持つっているパジャマの中で、一番見かける頻度が高いのもこれだ。

部屋着含む普段の服装には、割とパンツタイプのファッション傾向が表れているので、俺も見ている身としてこのパジャマを気に入っているんだよな。

部屋の中をあっちこっちへうろろうろしつつコスチュームをチェンジしていく沙綾を目で追いながら、窓から入ってくる早朝の涼しい空気を吸う。

この状況にもすっかり慣れたもんだ。

「そういうえば、今日って〇〇日直じやなかった？」

「…まじ？」

「昨日先生に言われてたでしょ?！」

「うわあ…もう一人は？」

「えっと……あ、今日はイヴかなあ？」

「若宮か……苦手なんだよなあ。」

若宮イヴ——名前からも察せるように、ハーフの女の子だ。

物腰は柔らかく、純粹で素直といった印象の子だが、どうにも掴みどころがなく苦手なんだ。

ハーフと聞いて、初対面時にぐつちやぐちやの英語で話しかけたのも嫌な思い出だ。

未だにあの、『アナタも私に興味があるんですか??面白い人ですね』とかいう流暢な日本語が頭から離れない。

ハーフってだけで皆からちやほやされてたしな。仕方ないっちゃ仕方ないか。

「あー、あの時の話？」

「それもあるけど、未だによくわからん。あいつ。」

「良い子だとは思うけどなあ…。」

「んー……。遊びにでも誘ってみるかな。」

「えっ???」

「仲良くなればもつと掴めるのかなーってさ。」

「…まあ、今日にでも話してみるか。いい機会だし。」

「えっ??えっ??本気?」

「おうよ。プラス思考だ、プラス思考。」

嫌なことに対して嫌だ嫌だ言っても仕方ないしな。何事も前向きに考えよう。

俺が一方的に苦手意識を抱いているだけかもしれないしね。

「ぶ、プラス思考って…。別に、無理して仲良くならなくてもいいんじゃないかな?あはは…。」

「向こうがどう思ってるかはわからないけど、人と仲良くできるに越したことはないだろ。」

…それに、考え方自体はお義父さんからの受け売りでね。

『嫌に感じる物事の、何か良いところを1つ見つけられたら、そこから見える景色が変わってくる』って。…めっちゃ格好良くねえ?」

「……お父さんめ。」

何やらお怒りのご様子だ。

「えと…あ、ほら、手伝い行かないとヤバいんじゃないか?結構時間たってるぞ?」

…俺は、なんだ、その…もつかい寝る!おやすみ!」

「…ふーんだ。いってきます。」

どこが気に障ったのだろうか。…ツンとした表情のまま部屋を出て行ってしまった。

まあいいか。機嫌悪い日くらい誰にでもあるだろう。今は取り敢えず、もう二時間くらい寝ておこう…。

*
*

さて、もうすぐ一日も終わりだ。

沙綾がベッドで手招きをしているので手短に今日の成果を書き記しておこう。

まず、そう遠くないどこかの休みの日にイヴと沙綾と俺、三人で遊園地に行くことが決まった。

イヴはモデルをやってるらしく、仕事が忙しいので決まり次第、と言っていた。…あ、因みに呼び方を下の名前にしたのはイヴ本人からの要望だ。

『仲良くなるために、まずは距離感を縮めましょー！それがブシドーです！』との事。

武士道は別に志しちやいないが悪くはない展開だ。…にしても、女の子って皆名前呼びしてほしいもんなのかな？いつかの沙綾もそんな感じだったし…。

というか、沙綾も休日は基本的に家が忙しく、今までも遊びやら何やらは断り続けていたはずなのに…。

そんなに行きたかったのか？あの”ミッシェルランド”とかいう遊園地。

で、次。

今さつきやつと解放されたところなのだが、珍しく酒を呷るお義父さんの話に付き合ってきた。

「どうやら沙綾と喧嘩したらしい。珍しい事ってのは重なるもんだ。

「嫌われちゃったかなあ？…余計な事って、俺何言ったかなあ？」と終始悲しんでいらっしやった。

今となつてはすっかりご機嫌な沙綾。明日もまた早起きなんだろうか。

「〇〇ー、早くー。電気消すよー??」

あ、じゃあそろそろ寝る時間なんでこの辺で。

心配屋「黒船来航」

「まだ寝てるの??学校行く時間だよ。」

「……………沙綾か。」

「…あれ?…○○、ひよつとして具合悪い…?」

「……………ああ…。」

エプロン姿の沙綾が俺を起こしに部屋に戻ってくる。

聞こえる声は一枚膜を隔てたように遠く籠って聞こえ、視界もやや揺れている。

特に声が枯れていたり喉が痛むといった症状は無いが、一声名前を呼んだだけで沙綾は気づいたんだろう。

…全く、大した洞察力だな。

「無理して起きなくていいよ…!」

…ええと、熱は…測るまでもないか。大丈夫?どこか痛いところない??」

なんとか体を起こそうとしていると、駆け寄ってきた沙綾に支えられる。

何やら一生懸命になって体の具合を探ろうと奮闘してくれている様子を、どこか他人のようにぼーっと眺める。

「沙綾…今日はいいい匂いしないんだな…。」

「へっ!?…ひゃっ!!」

沙綾が全力で心配してくれている一方で、俺は不満を顔にしていた。

いつも起こされる時に嗅いでいる、パンの香ばしい香りと沙綾の甘い香りが合わさったあの匂い。それがしない。

どんなに顔を近づけても感じられないので、首筋を全力で嗅いでみる。

「ちよっ…だめだつて！今もほら、汗とかかいちやってるし!!…んあつ」

「…だめだ。匂いわからん。」

「はあ…はあつ…だ、だめだよお…朝からこんな…」

…じゃなくてっ…匂いがダメってことは、完全に風邪っぽい？かなあ…。」

「…うーん…。なんか、頭もぐらぐらするんだよなあ…。」

そうか、風邪かあ…。

…風邪？

「ツ!!」

「あつ!?ど、どうしたの?くつつきすぎた??嫌だった??」

いかんいかん…力の加減も上手くできんなあ…。

つい振りほどくような格好になってしまったためか、沙綾が色んな意味で心配を始めてしまっている。

「ああ、ごめん。…ほら、風邪だったら感染しちゃうからさ…。」

「そ、そうなんだ。…嫌われたのかと思っちゃった…。」

「いや、看病してもらって嫌いになることはないでしょ…。」

「そっか…。えつとね、私だったら、気にしなくていいよ?」

○○からもらえるものだったら、風邪菌でもうれし」

「それはさすがに引くわ。」

そんなもんで喜ばんでくれ。

「よいせ…つと」

「えっ?えっ!?起きられるの?学校、行くの??」

「…いや、今日は休む。」

「じゃあ、どこいくの。」

「……帰る。」

「…ええ??」

そのまま一緒にいて風邪を感染してしまうのは忍びない。

居候させてもらっている、という自分の状態・状況を鑑みても、本来の居場所である自宅に戻るのが正しい判断だろう。

…だから、そんな不安そうな顔をしないで欲しい。

「帰っちゃうの?帰らないでもいいんだよ?私は全然気にならないんだよ?」

「そういう問題じゃない。…俺が、沙綾の為に俺は帰るんだよ。」

「私の…ため?」

「ん。大好きな沙綾には風邪とかひいて欲しくないからね。…いつまでも元気でいて欲しい。」

風邪一つで大袈裟すぎる話かも知らんけど、俺のせいで体調を崩すなんて絶対ダメだ。

避けられることは避けていかないよ。

「……………う、うん…そう、なんだ…………。」

「??どした?…あつ、お前も熱あるのか?顔真っ赤じゃんか。」

「う?…だ、大丈夫だから!!…わ、私っ、学校、行くね?」

「おう?おう…。」

「家に帰るのはわかったから、気をつけて行ってね?それと、少し良くなったらまたすぐ戻ってきて?私には〇〇が必要なの。」

あと、それから…家に居る間も、困ったこととか何かあったらすぐに連絡頂戴。学校の途中でも、すぐ駆けつけるから。」

そこまで過保護にならんでも大丈夫だって。ガキじゃないんだから。

そしてあまり涙目で見上げないでくれ。俺が悪いことしてる気分になる…。

「わかってるわかってる…お前は俺のオカンか。」

「オカンって…なりたいのはお嫁さんなんだけど…。まあいいや。

…それじゃあ…本当に気をつけてね？」

「おう。…お前も頑張って…行つてらっしゃい」

名残惜しそうに部屋を出る沙綾。何度も振り返りながら階段を降りるその姿は、まるで永遠の別れを惜しむようだ…。

「さて、…最低限の身支度だけして、帰るとするか…。」

自分の家に帰るのに、まるで外出でもするようだと、ほんの少しだけ笑えた。

ただいま…と、どうせ声に出したところで返ってくるわけでもない
ので心の中で呟く。

ほんの少し離れただけなのに、随分久しく帰省した気分のようにだ。
とはいえ、その状況を懐かしむほど余裕があるわけでもなし、さつ
さと自室のベッドを整え寝る準備に入る。

どうせひき始めだろうし、ゆっくり寝て過ごせば快復も早いだろ
う。

ピンポン

…は？

こっちの家に来客だつて?…親父の知り合いか誰かか??

…人が折角休もうとしてんのに、と文句の一つも言つてやろうと思
い玄関へ。

「はい…?」

そーつとドアを押し開ける。

「あ!○○さあん!!体の具合は大丈夫ですかあ?」

玄関口の隙間へ投げ込む様に元気な声を上げるのは、先日日直の一
件でまともに喋る様になつた銀髪わかみやの同級生。若宮イヴだった。

想定もしていなかつた相手に、一瞬思考が止まってしまつたが…そ
もそも何故うちを知っているのだろうか。

「…イヴ?…え、あれ?学校は?」

「お休みと聞いたので、お見舞いに来てみました!」

芸能界関係者とういうこともあつて、ドツキリかなんかなんじやな
いかと身構えてしまつたが…成程見舞いか。

他の薄情なクラスメートではあり得ない訪問理由だね。

「そんな簡単に休むんじゃないよ…ただでさえ仕事がある日は登校で
きないんだから。」

「いーんです!○○さんの一大事に駆けつけないのは、私の中のブシ
ドーが廃ります!」

お前の中で武士道は一体なんだと思われてんだ…。

とはいえ、折角見舞いに来てもらったのに玄関で立ち話つてのものな
らう。

「とりあえず、ここに居るのもアレだし、上がってくれ。」
「おじやまします!!」

そのまま部屋まで一緒に行く。

途中ふらついてしまうシーンもあったが女子の手前、何とか踏みとどまった。

「…で?」

「でとは???」

「来てくれたのは嬉しいんだけど、見ての通り俺はただの風邪だよ。」

「はいっ!」

「いや、はいじゃなくてね?…帰らないの?」

「??はい。」

「…なぜ?」

あのね。常識的などころなんだけど。

この家、今俺しかいないんだ。でそこに君が来ちゃったわけね。

「私はドクターではありませんので、病気は治せません…。」

ですが、体調を崩している時特有の精神的な辛さを軽減できればと思いついて来たんです!!

どうぞ何なりとお申し付けくださいませ!!」

「…えーつと…。ずっと居座る気?」

ちよつとそれは居心地が悪いかな…。

緊張して回復どころじゃなさそうだし。…大体、これから寝るってのにそんな可愛らしい女の子がすぐそこに居るなんて。

「私のことは居ないものだと思って頂いて結構ですっ!!」

「…いや、でも…うっ」

いかん、視界がグラつく。

沙綾の家からここ、そしてチャイムのせいで階段を往復…。そろそろ限界か。

自分で思う以上の熱が出ていたらしい。

「ほら、無理しちゃダメですよ…。」

ちゃんと、寝てないと…ですよ?」

「あ、ああ…。イヴ、お前…。」

体を支えベッドに誘導してくれるイヴ。

その、細くもしっかりとした柔らかさを伝えてくる身体と、耳元で囁くように紡がれる眠りへの誘いに意識が遠のく。

…気づけば天井を見上げる形で、自分のベッドに押し込まれていた。

「イヴ…?…あれ、イヴ?」

「はいはい、ちゃんとここに居ますからね。」

〇〇さんはあ、ゆっくり休んでくださいね…。」

限界か。

まだあまり聴き慣れていないはずのイヴの声も、何だか居心地のいい響きとして耳に染み入る気がする。

そのまま意識を手放した俺が次に目覚めたのは夜。

恐ろしい数の通知が溜まった事をスマホの画面にて確認、周りを見渡すと、もうイヴの姿はなかった。

「夢…か?」

スマホの通知を見ると、224件もの沙綾からのメッセージ。

メッセージアプリを起動すると、数分置きに何かしらの問いかけをされていたらしいが全く気付かなかったみたいだ。…後で謝つとか

ないと。

「…あれ？」

沙綾への返信を済ませ、下へ下へとスクロールすると見慣れないトーク画面が。

『EVE』…？何やらメッセージも入っているので開いてみると、…昼間の来客が夢でないことが理解ってしまった。

『〇〇さん、ぐっすり眠ってましたね』

『これから、例えば遊園地に行く時とかも使うと思うので』

『連絡先登録しておきました！』

『これからもずっとよろしくお願いします』

『いっ』

…うーん。勝手に携帯を弄るなど注意するべきか、可愛いもんだと見逃すべきか。

…まいつか、可愛いし。

束縛屋「若宮参戦」

「……ええと、この手は何??」

「知らない? 恋人繋ぎって言うんだって。」

「…それは知ってる…けど…」

態々学校の中でまでする必要ないだろ。

あの長かった風邪から復帰してからこっち、もう4、5日くらいにはなるが、登下校も含めて大体の時間はこうして手を握られている。

…おかげで、学校の居心地が悪くて仕方がない。同級生からは哀れみなのか微笑ましさからくるものかわからないが、生暖かい目で見られていることは確かだ。

後は、前にもましてイヴがちよっかいかけてくるくらいか…。

「嫌…なの?」

「嫌ってわけじゃないぞ。…いや、場合によってはかなり嫌かなあ。」

「そう、なんだ…。」

しまった。目に見えてわかるくらいシユンとしてしまった。最近は何故か髪を下ろしていることが多く、今日もご多分に漏れずそうなので、より一層落ち込んで見えるように見える。

ポニテは元気の証だったのかなあ…。

「ああいや!嫌だっけ言う言葉が間違ってたなあうん!ええと、ほら、ご飯食べてる時とかもさ?右手繋いじやうと俺箸使えないからさ?そういう…」

「確かに。…じゃあ、私が全部あーんしてあげるから、それならいいよね?」

「は……………」

参ったな。八方塞がりだ。

甲斐甲斐しく世話を焼いてくれるのは非常に有難い話だが、最近の沙綾は少し行き過ぎてている気がする。どうしたもんか。

「今日もラブラブですね！お二人さん!!」

「イヴ…」

「イヴ、なんか用？」

おいおい、いきなり喧嘩腰は良くないぞ沙綾。

相手がイヴだから気を悪くしていないだけで、他の同級生にやったらギスるから本当にやめよ。な？

「サーヤさんは、最近どーしてずっと手を繋いでるですか？」

「…別にイヴには関係ないでしょ。」

「ええーっ？気になりますし、羨ましいんですよっ!!」

「やっぱり、落ち着くですか？…それとも興奮するです？」

「…両方、間違っちゃいけないかな。」

「…お前、手繋いでる間ずっと興奮してたの？」

「ち、ちちち、ちがうもん。そういう興奮じゃなくて、その……」

「わかりますっ！大好きな人と体の何処かが触れ合っている…とても興奮、というか高揚？しますよね！」

嬉しくてハイになるって感じか？…確かに、それならわからなくもないけど…

ところでイヴ。…お前いつの間に俺の左手とドッキングした？全く気付かなかっただけけど、しつかり恋人繋ぎやん。照れる。

「ああ…何となくわかるわ。…今凄く幸せな気分だもん。」

「…ほ、ほんとうっ!?○○も分かってくれるんならずっとこのまま……」

「確かにこれは素敵なものですよっ！繋いでいる部分から温もりが広

がっついていく気がしますね！」

「…何でイヴも○○と手繋いでんの？…私の特権なんだけど…」

おいおい、そんな特権俺も知らんぞ。というかここでヒートアップするのやめよう？教室中ざわついちちゃってるし、この一歩引かれたような距離感って取り戻すの大変だと思うんだ。

「サーヤさんと○○さんはお付き合いですか？」

「うっ…ま、まだ、正式には、してないけど…」

若宮イヴの先制攻撃！……沙綾は狼狽えている。

「正式とかあったのか。」

記者会見でも開くんかね。

「じゃあよくないです?？」

「ううう、でも！でも……」

若宮イヴの追撃!!……沙綾は泣きそうだ！

「…私に取られそうですか?？」

「……別に、心配は、してないけどさ…。○○、私にべったり甘えてるし。」

若宮イヴの変化球！……沙綾は少し惚気ている。

「…まあ、言い方はアレだけど世話にはなってるよ。」

「○○…。」

俺のサポート！……沙綾は

…疲れたからこのノリやめていいかな？

実際家にも置いてもらって、身の回りの色々なことを世話してもらって…。あれ、沙綾って奥さんって言うよりお母さん??

「でも、だからって○○さんを独占する権利はないと思います。手を繋ぐくらい別に…。ねー?」

「ねー。…。あつ、ごめんつい。」

「…なに○○。○○もイヴの方がいいんだ?イヴをお嫁さんに貰いたいんだ?」

何故そんなぶつ飛んだ話に…。嫁の話なんてしてないだろうに…。

「あつ、ウエディングドレスならこの前着ましたよ!…。見ます?○○さん。」

「おお、そりや興味あるな。…写真?」

「むむむむむ…。…」

胸元からスマホを取り出すイヴ。今明らかに収納出来なさそうなところから取り出していたが、今は気にしないことにしよう。

…ふんふんと鼻歌混じりに操作し、お目当ての写真を見せつけてくる。

「おおおおおおお…。…!!!」

「ふわああ…。!!」

「綺麗です?!!」

もう何一つか、芸術品みたいだった。これぞ花嫁、清楚の極み。身に着けている純白のドレスはまるで特注のように馴染んでおり、その綺麗な背中と相まって今にも翼でも生えそうなほど神々しい。

…こんなお嫁さんを貰える奴はさぞ幸せだろう。

「最高だな。」

「…イヴ、すつごく綺麗…。」

「わぁいっほんとですか??…見せといて何ですが、スツゴク照れます…。」

「……ツ。」

その恥じらう表情までもが…。こと美少女要素に関しては世界一かもしれないなあ、この武士道少女は。

隣の沙綾も、先程迄の不機嫌さはどこへやら。純粋な賞賛をイヴに贈っている。

「…私も、いつかこんな風にウエディングドレス着るのかな。」

「……着たいのか?」

「そりゃあ…ね。私も一応、女の子だから。」

「ふうん。……きつと似合うと思うぞ。沙綾、美人だから。」

「はう…。」

その日がいつかは分からないが、きつと素敵な事だろう。…沙綾の結婚式ねえ…その時、隣に立っている男はどんな奴なんだろうか。

その時俺は、素直に祝福できるんだろうか。

「…ふうん。…これは中々にややこしいですね。」

「何か言ったか?イヴ。」

「いえー。……〇〇さんは、サーヤさんの事好きじゃないです??」

「え?好きだけど?」

「……うーん、これは強敵です…。」

一体何のこっちや。

ま、妙なギスギス感は無くなったようだよ。…と、再度繋がれた両手の温もりを感じつつ、しみじみ思った。

「……イヴ。」

「なんですかあ？サーヤさん。」

「…この男、相当分かりやすく伝えてあげないと難しいと思う。」

私なんて毎日一緒に寝泊まりしてるのにこの扱いだもん。」

「…強敵ですね。」

だからどうして俺を敵にしたがるんだねお前さんは。

沙綾も、どう扱ってほしいってんだよ。

…どうもまだまだ分からないことだらけらしい、俺の周りの女の子は。

寂寞屋「戸惑いと惑い」

「…ん。今日もかあ。」

放課後。バイブレーションを感じ、手元の小さなディスプレイに目を落とす。

送られたメッセージを読み、ここまでの待ち時間が無駄になった事に少しのモヤつきを感じつつ立ち上がる。

『ごめんね』

『今日も香澄と一緒にいるね』

香澄ってのは同じクラスの戸山香澄のことだろう。最近何かと一緒にいることが多く、登校時以外は俺と離れて行動している。

…四六時中一緒だった今までの方が余程異質な状態だったわけだが、それでもあまり一緒にいられないのは寂しいというか、あるはずのものが其処にない…喪失感のようなものを俺に与えていた。

「あつ、帰るんですかあ?」

「ああ。沙綾は今日も戸山と用事があるってさ。」

「ここのところ毎日ですね。」

沙綾の用が終わるかどうかわからず、授業が終わってこっち二時間ほど教室で時間を潰していたわけだが。その間ずっと隣の席でイヴも待っていた。

一緒に帰りたかったらしいんだが、俺は沙綾を待たなきゃいけないし…ということ、沙綾を待つ俺を待つイヴといった何とも面倒な構図が出来上がっていたのである。

「まあな。待たせて悪いな。」

「いえ、私は好きで待つてるだけですから！」

沙綾がほぼ他の場所に行ってしまったている事で、学校では大体の時間をイヴと過ごすようになった。：ああ、別に俺から近寄ったりイヴが寄って来る訳じゃない。席が隣なんだ。

尤も、下校を共にするのは完全にイヴが合わせてくるせいだけども。

日も落ちかけ部活動の声が遠くに聞こえるだけとなった校庭を歩き、校門をくぐる。

「：戸山って、どんな奴だったっけ。」

「カスミさん、ですか？」

沙綾が毎日一緒に居るクラスメイトのことを何も知らない。流石に名前は聞いたことがあるけど、顔はぼんやり…といった感じか。印象に残らないんだよな。

「んー…：凄く大人しくて、ちよっぴり引つ込み思案な感じの方です！」

「そうなのか。：沙綾と、一体何してんのかな。」

「：心配ですか？」

「いや、流石に女同士だし、心配ってこたあないけどさ。：最近あんまり一緒に居ないから距離感じちやってさ。」

「ふふっ、心配しなくても、カスミさんにサーヤさんを取られることはありませんよ。」

「取られるとかそういう…：のじゃないんだけど…。」

戸山のことはよく知らないし、戸山と一緒にいる時の沙綾がどんな顔してようと俺には別に関係ないし。

ただちよつと、ほんのちよつとだけ引つかかるといふか。

「私と一緒に居ることに怒ってるんでしょうか…?」

「…それはない…と思う。家にいるときも、あんまりイヴの名前は出ないし。」

「いつもどんなお話を?」

「特殊な話はしてないぞ?学校がどうか、晩飯の話とか、風呂上がったら何するとか…」

「…挙式はいつになるんです??」

「馬鹿かお前は。」

突然何を言い出す。ただ友達の家に住候させてもらってるだけだわ。

「…○○さんは、サーヤさんの事好きじゃないです??」

「前もそれ訊いてきたよな。…その時も言ったと思うけど、好きだよ。」

「それはお友達として、ですよね?」

「当たり前だろ、クラスメイトなんだから。」

「…じゃあ、お付き合いしてるとかでもないんですよね?」

「?…ああ。」

あんな器量のいい美人に俺みたいな荷物が釣り合う訳無いだろ…。流石にそれは冗談としても雑すぎるぞ、イヴ。

「それなら、私とその枠に立候補しても?」

「はあ?」

「コイビ…いえ、将来のお嫁さんです!」

「はははは、それはお前…あれ、マジな感じ?」

「はい。」

全くそんな素振りも見せなかったイヴからの直接攻撃。勿論俺も

そんなふうに見てなかったし、向こうも仲の良い男友達として友情を感じてくれているもんだと思ってた。

それが、こんなに真剣な表情で告白だった？

「…いやそんな、急に言われてもな。」

「勿論今すぐお返事していただかなくても結構です。」

「……………」

「お付き合いしていただけても、お断りされても……………それまでの期間もそれからもずっと。」

今と変わらずおしゃべりさせていただきますから、安心してくださ
いね。」

「……………あ、ああ。」

イヴは飽く迄冷静な様子で、冗談どころか焦ったり緊張したりと
いった感情すら無いかの様だった。

…流石は芸能界の人間と言うべきか、夕闇に浮かぶその瞳は真っ直
ぐ透き通っていて、薄暗い中でもはつきりと見て取れるツヤのある銀
髪は美しく、それに負けず劣らずといった具合で整いすぎた顔。

非現実感をより一層引立てるその美貌と退治しても尚、なんだろう

…

「では、私はこれで……………こっちですから。」

「……………イヴ。」

「…はい？」

「……………本気、なんだよな？」

「勿論、ブシドーに嘘はありませんから。」

…なんだろう、嬉しさや幸福感は感じられなかった。

何とも言えない気持ちで山吹ベーカーリーの扉を開ける。

「あら、おかえりなさい。…一人？」

「ああ、お義母さん。ただいまつす。…沙綾は何か友達と用があるとかで。」

「あらあら…。??○○くん、大丈夫？」

「へ？」

「何だか凄く元気がなさそうだったから。沙綾と喧嘩でもしたの？」

「ああいえ、そんな、ぜんぜん、仲良しですよ。はい。」

「そう?…まあいいわ。あまり無理しないでね。」

「はあ、すいません…。お義母さんも、あまり無理しすぎないでくださいね。その、店のこととか。」

「あらありがとう。…○○くんが継いでくれるなら、私も少し楽できるんだけどね。…なんちゃって。」

「ははははは…そう、ですよね。」

お義母さんにまで心配をかけてしまうとは。そんなに顔に出るほどモヤついていたか?俺。

二階へ上がり、真つ直ぐ沙綾の部屋へ。ごちゃごちゃと散らかり放題の脳のまま、沙綾の香りが染み込んだベッドへ倒れこむ。

制服のままだがそんなことは気にならないくらいの安心する匂いに包み込まれるも、何か足りないような不思議な感覚は強まるばかりだった。

「……沙綾あ……。」

忘れたいのには忘れられない。自分で自分の気持ちだが、想いが整理できなくなったのは初めてかも知れない。

熱が上がるような感覚に囚われながら零した声は自分の物と思えないほど弱々しいもので。その滑稽な姿を思い浮かべないように、強く目を閉じた。

「……………？……………！？」

何かにゆさゆさと体を揺さぶられる感覚に、意識が浮上する。
眠っていたのか。一体何時間経ったって言うんだ。沙綾は帰って
きたんだろうか。……………沙綾？

「あっ!?……………さあ、や…。」

勢いよく体を起こし振り返ると、驚いたように目を丸くする沙綾と
目が合う。

彼女は少し笑ったあと、

「……………ぐっすり寝てたね。疲れてたの？」

いつも通りに言葉を投げってくる。

それに対してまともに返事もできないまま一歩、また一歩と足を進
める。

強張った表情に恐怖を覚えただろうか、それとも、ゾンビよろしく
虚ろな目で覚束無い足を擦る俺に滑稽さを見出しただろうか。どち
らにせよ、笑顔で両手を広げ、俺を受け入れんとする少女の姿しかも
う見えていなかった。

「沙綾……………ッ！」

応じてくれるただ一人の彼女の胸に飛び込む。いつものように受
け止めてくれる彼女はそのまま、いつものように頭を優しく撫で…

「ごめんね……………遅くなっちゃって。」

いつものように言葉をかけるのだ。

「……………沙綾あ…。」

「…なあに？」

「……………こんなに長い間、俺から離れてるんじゃないやねえよ……………もつと、ずつと俺の傍にいろよ…。沙綾…。」

冷静になって見れば思わず引くくらい溢れ出していた涙と弱気な姿勢のまま、ありのままに沙綾を抱きしめる。

その時の俺は、腕の中に感じる確かな存在と、甘く優しい彼女の香りに夢中だった。……………二人の幼い弟妹とお義母さんが廊下から覗き込んでいるのも気づかないくらい、初めて抱いた感情は強かったんだ。

「…ごめんね。今日で終わったから、ずっと○○と一緒にいるからね…？」

「……………本当か？」

「うん。……………だから、○○も私の傍から離れないでね？」

「こんな気持ちになるんなら、もう絶対お前を離さないし、離れるもんか…。」

「……………そっか。……………○○、大好き…だよ。」

「……………俺もだ。」

詰まる所俺は、寂しかったんだ。

依存屋「二人の為に」

——俺は初めて、学校を仮病で休んだ。

いや、ある意味これは病気なのかもしれない。

「あつ、こらー。ちよつとトイレ行ってくるだけだつてばー。」

「本当か？どれくらい？」

「…女の子のトイレの時間訊くとか、デリカシーないなあ…。」

「あつ、いやつ、その」

「ふふつ。…ちよつとだけ、待っててね？」

扉を閉めて部屋を出ていく沙綾。沙綾の匂いで満ちた部屋には俺一人。

…と同時に止め処無く流れ出す滝のような汗。またコレか…。

あの日以来。…俺がアイツに、みつともない姿を晒したあの日以来、この”発作”が続いている。

昨日まではまだ学校も行った。それでも…今はこのザマだ。沙綾の体温を感じられなくなると…途端に手は震え視界は揺れ焦燥感に駆られる。

視界に揺れ動くあの綺麗な髪が、耳に染み渡る澄んだ声が、慈しみを感じる繊細な指先が…そのどれもが、今の俺には必要不可欠になっているんだ。

「さあ…や…さあや…さあ…」

「ただーいま。」

「沙綾!!」

「わっ!?…つとと、もー〇〇つたら、犬みたい…。」

——依存。

このままじやいけないのはわかってる。沙綾だつてきつと、こんな俺は好きじゃないと思うし。

「ごめんな?…沙綾まで、学校休むような事態になっちゃつて…。」
「いーのいーの。〇〇が体調崩してるのに、学校なんて行つてられないでしょ?…」

「…いや、その理論はおかしい。…いやでも嬉しいし…ええと…。」

すっかり考えも纏まらなくなつてきた。頭が正常に働かない。

そんな、俺を絡め取るような魅力…いや魔力が、沙綾にはある気がする。

「ふふふ。…ほら、また具合悪くなつたら困るでしょ?」

…「一緒に居てあげるから、少し寝よ?」

「え?…ああ…うん。沙綾。」

「なあに?」

「…好きだ。…おやすみ。」

「ふふつ、私もだよ。…ゆつくり休んでね?」

こうしてまた、全てがあやふやなまま時間だけが過ぎていく。

甘いだけの、幸せなだけの時間が。

それでもやっぱり、このままじゃダメなんだ。こんなの、嫌なんだ。

「んー?…んふふ、起きたの?〇〇。」

「……………ああ、おはよ。」

「…あれ?」

目覚めた時、寝る前と同じように隣で寄り添っている沙綾。まるで子猫に寄り添う親猫のようだ、と思った。

「んしょ……と。」

「あ、あれ??○○??具合、良くなったの??」

「……………沙綾。」

「へっ?な、なに??」

ベッドから抜け出て体を伸ばす。…同じ姿勢で眠っていたのだろう。縮こまっていた背筋に、言いようのない快感が広がると同時に本当の目覚めを感じた。

やっぱり、こんなのおかしいんだ。このままじゃ、誰のためにもならない。

「ここ何日は本当ごめんな。…迷惑かけた。」

「えっ、えっ??どうしちゃったの?迷惑なんかじゃないよ!」

「…………アレは何というか…俺らしくなかったじゃんか。なあ?」

「そ、そんなことない!全部全部、私の可愛い○○だったもん!!」

「…………沙綾は、俺のこと好きなんだよな?」

「勿論だよ!私は○○が好き…!一瞬だって離れられないくらい大好きなの!!」

ありがとう沙綾。…お前が嘘を吐いていないこともわかる。そして、思い返せばずっとずっと好きでいてくれたってことさえ、痛いほど伝わる。

「知ってるよ。…いや、最近気づいた、って感じだけど。」

「ねえ、○○。どうしてそんな離れたところにいるの?…どうして、こっちに来て私に触れてくれないの?」

「…………俺さ、自分の家に帰るよ。」

「……………ッ!」

そんな絶望的な顔をするな。別にこれは、別れの言葉じゃない。

俺が本当の意味で沙綾と一緒に居るための…そう、序章はじまりってやつだ。

「大丈夫だよ沙綾。嫌いになったとか離れたくなかったとかそういうのじゃないから。」

「だったらどうして…!」

「大好きなんだ。…でもこれはきつと恋じゃない。そう気づいたんだ。」

「……………」

「今はきつと、自分の気持ちもよく分からないままモヤモヤし続けたせいで…そう、おかしくなってるんだよ。」

……………依存って言葉、わかるな?」

「私は、○○に依存してもらえるの…嬉しいけど…!」

「はははっ、沙綾ならそう言うだろうと思ったよ。…でもそれはダメだ。俺は依存心を満たすために沙綾というんじゃない。」

伝えたいことを、端的に。この体の震えが、汗が、気づかれないうちに。

「まだやらなきゃいけないことが、整理しなくちゃいけないことがある。

…沙綾とこのまま深い関係になるのは、何か嫌なんだ。…ズルして
るみたいで。」

「ズルって……………」

「沙綾…そういえば最近アレしてなかったよな。」

未だ放心状態に近い表情の沙綾にもう一度近づく。心が満たされ、
体の不調も収まる。困った身体だ。

少々強引だが沙綾の顎を軽く持ち上げ、自分と重ねる。おはようとおやすみの…

「……………んっ。」

「……………ふう。世界で一番大切なんだ、沙綾が。……………まあ俺の世界なんてたかが知れてるもんだけど。」

「○○……………」

「俺は帰る。暫く、俺のやるべきことをやってくる。……………もう少しだけ待っていてくれないか。」

「…帰ってきて、くれる?…」

「勿論。沙綾の傍だけが、俺の場所だよ?だからその為にも、さ。」

ずっと一緒に居るためにも。……………今は俺なりの筋を通させてくれないか。

「俺なりのやり方で、もう一度お前を…沙綾を墮としてみせるからな。」

暫しの我慢だ、俺。そして沙綾。

待っていてくれよ、イヴ。…そして最愛の、沙綾。

山吹屋「鮮黄色の未来に」(終)

「…おい、バカ息子。」

「あんだよ。クソ親父。」

朝、学校へ行くこうと玄関を出る俺を、珍しくこの時間に起きている親父に呼び止められる。親父は仕事の関係上、朝も夜も関係なく必要に応じて呼び出されるため、基本的に家に居ないか眠っているかなんだが…。

「お前、急に帰ってきたと思えば何なんだ？腑抜けた面しやがって。」
「うっせえな。もうすぐまた帰ってこなくなるわ。」

「そうかそうか、そりゃいいことを聞いたな。また沙綾ちゃんの家か？」

「まあな。…じゃあ、学校だから。」

「…まあ待て、○○。」

「……親父？」

親父の口から自分の名前を聞いたのはもう何年ぶりの事だったか。それもこんなに真面目な雰囲気でだなんて。強制終了とばかりに扉を閉じようとしていた手を止め、改めて親父の顔を見る。…酔ってる…わけじゃなさそうだけど。

「……お前、沙綾ちゃんとは、いつ結婚すんだ？」

「はあ？…ついにボケたのか？まだそんな間柄じゃねえよ。」

「まーだそんなこと言ってるのか。あんまり余裕こいてっつと沙綾ちゃん取られちまうぞ。」

「うるせえな…そんなことが言いたくて呼び止めたのかよ。」

「…そんなツンケンすんなよ。俺が言ってるのはな？何時までも若く

いられるわけじゃねえんだから、後悔しないように行動しろってこつた。」

「そんなの、わかってるよ。」

そんな当たり前の事をどうして今更。誰だって後悔なんかしたくないに決まってるし、しないように行動するはずだ。

それとも何か、親父は何か後悔でもしてるって言うのか。

「……そうか。ならいいんだけどよ？…俺みたいには、なるなよ？」

「なりたくもねえよ。」

「はははは、違えねえやな。よし、じゃあ行ってこい。」

「…??じゃーな。」

一瞬顔に陰りが見えたことに引っ掛かりは覚えたが、結局のところ親父は何かを悔やんでいるんだ。だから「俺のようになるな」と。

過去に何があつたのかわからないが、もしかしたらウチが父子家庭であることも関係あるのかもしれない。別に気にしちやいないが、

未だすつきりしない親父の突発行動に首を捻りつつ歩いていると、登校前の目的地が見えてきたようだ。

「一時期居候していた」もう一つの我が家。でもある、「山吹ベーカーリー」。その前に立ち少し俯きがちに俺を待っているのは、こここの看板娘でありさつきまで親父が名前を挙げていた少女。

……こここのところ元気がないのは多分俺のせいだ。

「よっ、沙綾。」

「…あ、おはよ……○○……。」

「今日も元気ねえな……行こうぜ？」

「……うん。」

いつもどおりにその手を取り、学校へ向けて歩き——出せなかったのは、沙綾が握った手を引っ張っているためだ。

振り返り、相変わらず深刻そうな沙綾の顔を見る。

「…どした？」

「ねえ、○○。」

「ん。」

「…………もう、無理に一緒にいてくれなくてもいいんだよ？」

「…………ん？」

「私のこと…嫌いになっちゃったんでしょ？最近イヴとずっと一緒にだし、イヴと付き合いたいでしょ？」

沙綾は…泣いていた。眉間に酷く皺を寄せて、震える下唇を必死で噛み締めながら、静かに。

まだ人通りの少ない早朝の往来はとても静かで、沙綾のしゃくり上げるような呼吸だけが響いていた。

「…そんな訳、ないだろ。」

「…嘘、嘘だよ。」

「本当だ。」

「…っ、じゃあ！どうしてずっとイヴと一緒にいるの!?!どうして私の家には来てくれないの!?!どうして、…私から離れて行っちゃうの…?」

堪えきれず想いを叫ぶようにぶつける。そう言われてしまうのも当然で、あの日以来俺は登下校以外の時間をほぼイヴと過ごしていると言ってもいい。

勿論、沙綾を避けていたりイヴと付き合っているわけではなく、ちゃんと理由のあるものだったんだが。

「理由は…ちゃんとあるんだ。ただ、イヴと付き合ってるって訳では断じてない。」

「嘘だよ……。…その理由ってなんなの？」

「……はあ。…なあ沙綾、今日はちよつと遅刻していくか？」
「なんで。」

「…全部、今話すからさ。」

そろそろここを動かないと時間的には厳しくなってくる。朝のH Rに間に合わないのは最早確定だろう。

少し考え込むような素振りを見せたが、やがて沙綾は小さく頷いてくれた。それを視認し、手を引いたまま山吹ベーカーリーに入店する。ああ、別に朝飯を買うわけじゃないぞ。

驚いた顔のお義母さんに会釈しつつ、階段を上がり沙綾の部屋を指す。少し前まで俺が住み着いていた、あの魔性の部屋。

ドアを開き突き当たり、ベッドに二人並んで座る。

「……まず、イヴとは本当に何も無いんだ。…何ならイヴに直接確認したらいい。」

「…でもずつと一緒にいたじゃん。私よりも長い時間…。」

「イヴは…前に告白されて、その後ちゃんと断ったんだよ。」

「…え？…き、聞いてないんだけど。」

「ん、言っていないから…。それで、ちゃんとお断りしたあとにな、当然断った理由を伝えるわけだ。」

「………なんて言ったの。」

「まあ、俺の気持ちなんざ随分前から全く変わっちゃいねえからな。

……『沙綾を幸せにしてえから』って、言ったんだ。」

「………っ。」

正直、今になって思うのだが、イヴはそう俺に言わせたかったのかもしれない。告白自体も不自然だったし、フツた後もやたらとご機嫌だった。

因みにその後イヴと行動するようになったのも、俺がその理由を伝えたからである。イヴがあの時、色々とコネを使ってくれたからこそ今この準備が出来ている状態で沙綾と対峙できているのだから。

「そ、それでどうして……イヴと一緒に過ごすことになるの?」

「ああ……。ほら、『幸せにする』って漠然と言っても、若い奴が何も考えずにバカ言ってるようにしか見えないだろ?」

「そうは……思わないけど。」

「俺は思うんだよ……。だからな? 決意というか決心というか、そういうものを形にしなきゃいけないと思うんだよ。」

「うん。」

「……だからさ、まだ早いかも知れないとは思ってたんだけど、俺はコレを証にしようって決めたんだ。」

「……これ?」

本当はもう少し後で、山吹一家の前で場を設けて渡すつもりだったもの。大切な物だし、毎日肌身離さず持ち歩いているものを取り出す。…箱が薄いせいでポケットにも入っちゃうんだよな。

「……? 何この箱。」

「開けてみ。」

「………えっ?」

恐る恐る開き隙間から中を覗き込むようにしていた沙綾だったが、間抜けな声を漏らすと同時に俺の顔を見つめる。

……なんだそのキョトンとした顔は。

「これ……えっ? ……えっ?」

「流石に時間もなかったから……給料三ヶ月分とは行かなかったけどさ。」

俺は沙綾とずっと一緒に居るために、今日までの日を頑張ってきたつもりだ。」

「これって……そういう、こと?」

「…ん。前にも言っただろ。お前のことが世界で一番大切に、お前の傍

だけが俺の居場所なんだ。だからさ……」

俺が用意してきたものはもうこの言葉しか残ってない。

既に涙を零している沙綾の両目をしっかりと見据え、そっと握った手は離さずに伝える。

「…高校卒業したら、俺と結婚してくれないか。」

「ほら、早く行こ？○○。…今ならまだ二時間目は間に合うよ！」

「……まてまて、靴くらいゆっくり履かせてくれ…」

「だーめ。将来の旦那さんが、遅刻が平気な人なんて嫌だもん。」

「…うし、じゃあ行くか。」

「へへへっ、手繋いでいい？」

「……走りにくくないか？」

これまでのバイト漬けの日が終わっても、これからはパン屋を継ぐ為の修行が待っている。

さつきも「かなりキツイ生活になる」とお義父さんに心配されたばかりだけど、俺と沙綾の手に光る決意の証に誓って俺は…

「いーのー……えへへ、ずっと一緒に居ようね？」

「…おう。」

沙綾の一番近くで、沙綾を一番幸せにするって決めたから。

終わり

【弦巻こころ】 朗らか破天荒セレ部活動日誌
一筋の金糸

雨が降るとそれだけで憂鬱になる。
ジメジメするし、どんより暗くなるし。

日中に部屋の照明を付ける時の心境なんか特に複雑だ。

そんな鬱陶しい雨も夕方には止み、夕飯の準備を始める頃には
地面も乾き始めていた。

「さて、と。材料は昨日買ったからいいとして…。」

ああ、この皿じゃ深すぎつかな…？縁が油塗れにならなきゃいいけど…。」

メニューはもう決まっている。

今日の来客のリクエストだ。

急に来たと思ったら「久々に〇〇の料理が食べたくなったわ！」だもんな…。」

買い出しの後で本当助かった。

にしてもいつもこれ作ってる気がするな…。気に入ってるのか。

「おーい。あんまりその辺弄んなよー。」

怪我したら怒られんのは俺なんだから…。」

「随分汚くしてるのね…。……あらーこれ…。」

机の上なんか、立派な塔ができてるじゃない…。」

リビングを振り返って見てみると不思議そうな顔のこころが
俺の作業場になっているデスクを眺めているところだった。

こころがいきなり訪ねてくる直前まで作業をしていたため
参考用の資料集や何かが不安定に積み重ねられているのだ。
塔とは中々言い得て妙じゃないか。

ただ、やはりお付きの黒服連中から口を酸っぱくして言われている
ように

うちにいる間は兎に角安全に気を配らなければいけない。

ただでさえ何を仕出かすかわからない破天荒な子なのに、そんな危
険地帯に自ら

赴かないで欲しいのだが…。

「あとで片付けるから…。」

飯作ってる間、大人しくしてろよー?」

「別に急がなくていいのよ?」

〇〇の部屋つてすごく面白んだもの!!

ここなら毎日来てもきつと飽きないわ!」

「勘弁してくれ…。」

あんまり散らかさないようにしてくれな?」

全く…。

いいところのお嬢さんつてのはみんなあんなのかね…。

他に知り合いが居ないから何とも言えないが。

何だかんだ言いながらもすっかり慣れたもので、手元では着々と料
理が進んでいる。

「さて、そろそろ焼きに入るか…。」

「あー….:.:わあー!!」

なんだ?

「来て!〇〇もこっちに!早く!」

「今火い使ってるから行けねえな!。何かあったのか?」

「すごいの！神秘的だわ!!」

なんだろ。

ちよつと気になったので近寄っていくと、窓の外を指差し満面の笑みを浮かべるこころ。

「なんだ？外に何かあるのか？」

「あれをみて！…ね？綺麗でしょう！」

なるほど。

雲の隙間から光が差し込んでいる。

太さや広がり様々、何本もの”道”のように射すそれは、雨上がりによく見る光景

ではあったが。

「ああ、さつきまで雨だったもんな。」

「素敵ね…。雨の景色も素敵だけど、このたくさんの光の筋も凄く素敵！」

「…別に、珍しい景色でもないだろうに。」

「珍しくなくなかなくなつて、素敵な事には変わりはないでしょ？」

それに、雨が降る度にこの光を眺められるのなら、雨降りだって悪くないわ！」

「…そっか。」

この子はたまにこういう事を言う。

独特な観点というか、「なるほどな」とつい感心してしまうような無邪気な思考を持っているらしい。

「雨の日の贈り物かもな。」

「それ！すつとく素敵ね！」

〇〇、詩人みたいな事言うのね！」

「……………うるせ。」

因みに。

時間的にはすっかり夕飯から晩飯になってしまったが
こころも手伝った餃子はいい感じの仕上がりだった。

ハンドソーパーこころ

「○○!!来たわよ!!」

「へいへい…。あれえ、俺鍵かけてなかったっけ??」

「鍵なんかかかってなかったわ!」

「黒服の人が開けてくれたもの!!」

ヤロウ…一般人のセキュリティとは言え蔑ろにするんじゃないよ
ホント…。

そういえば、チャイムも鳴らさずに入ってきたのは初めてでなから
うか。

あのインターホンの画面いっぱいに覗き込むこころも可愛いんだ
がな。

「今日は何をしたの??あ!また随分と散らかってるわね!」

「何故嬉しそうなんだ。あ、こころ、そのへんに触るんじゃない。」

「今日も○○の部屋を探検するのよ!」

きつと面白い発見がいっぱいだわ!!」

話している時間も惜しいといった様相でぴよんぴよんと飛び跳ね
ている。

だからその足元が危ないんだってば…。

「わーったから、家に入ったときはまず何するんだっけ?」

「?挨拶はしたわ?」

「来たわよーは挨拶じゃねえだろうが。」

「じゃあ今言うわ!ハロー○○!!」

「はいはいハロー。」

「…で?…まだすることあつたら?」

「うーんと……あつ！テアライウガイね!!」

「そんな”ちちんぷいぷい”みたいなイントネーションで言うな。

手洗いと、うがいな？この前教えたろ？一人でできるか??」

「もー！またそうやって子供扱いする！

いい？私だつて日々成長してるの！手だつて一人で洗えるようになったもの!!」

高校生にもなつて威張る内容じゃないんだよなあ…。

でもその胸張つた誇らしげな表情は可愛いぞ。カメラがあれば速写してる。

「二人で洗ってくるわね！一人で！」

そんなに広くない家だというのにこの子は走り回るんだよな。

猫か。

「フンフン♪……フンフーン♪」

「ご機嫌だなあ……。」

「おねがいつ♪おねがいつ♪」

姫は今日もゴキゲンなようぞ。

何やら口ずさんでノリにノっている。

あれも即席で歌ってるのかな？しばらく聞いていよう。

「かめさんっ♪かめさんっ♪」

「あのさんかくのお山の上で〜」

……。

どっかで聞いたな。なんだっけこの歌。

「おーかみ おととつとつと落っこちそお♪」

音程が不安になってきた。
声色は怖いほど朗らかで楽しそうなのだが。

「いつそいでバイクをぶるるんっ♪うんてえん♪」

あー、なんか思い出した気がする。

CMかどこかで流れていた曲だろう。

……この子世代じゃない気がするが。

「ききいっばあつつかまえたっ！」

……。静かになったが、洗い終わったのだろうか？

手がアワアワの間は水を止めるんだよと教えて以来、きちんと守れているようで結構だ。

普段は自由なのにそういうところはちやんと言う事きくんだよな。
家に入ったらまず手洗い・うがいを教えたのも俺だが。

「ありがとー、かめさんくみんなでごちそおですー♪」

「…あら？」

ん。

「大変だわ○○！」

「どした。っておい！何故びしょびしょのまま来る！」

どたどたと走ってきたところは、キョンシーのように両手を前に突き出し焦った表情をしている。

その両手は水がぼたぼたと滴っており、「まさに今手を洗っていないま
す」という体を表していた。

「タオルがないのよ！」

前に掛かっていた場所にも、後ろのカゴの中にもなかったわ！」

「ああ、洗濯に出したところだったか……。あと、後ろのカゴは汚れた服を入れるところだから

あつても使っちゃダメだぞ？」

「わかったわ！」

「…ほれ、バスタオルだけどこれでいいか。」

「ふいて！」

満面の笑みで両手を掲げる。

水滴が手首・腕と戻っていき擦ったそうな素振りを見せる。

「じゃあこのせて。」

「……………よし。完璧だな。」

「まだよー…えつと…。」

タオルでふいたらいたただきまあす!!♪」

「…終わり？」

「ええー！これで完了よー！」

「そうかい。」

そのニコニコ顔があまりにも可愛らしかったので、その無防備な頭をぐりぐりと撫でてやる。

「んふふ。…あー…ちそう！」

○○、あたしお腹すいたわ！」

「急だな…。まああんだけ騒げば、な。」

「何食べたい？いつものか？」

「そうねえ、今日は——」

因みに、その歌をどこで仕入れたのか聞いてみたところ

「美咲が教えてくれたのよ！」

手洗いの歌なんですって！素敵よね！！」

良くしてくれる同級生がいるらしい。

お母さんみたいな子だな。

俺とこころと時々カナコ

「甘い…甘いぞ…。」

深夜、自宅にて。

囲まれるように置かれた大量の駄菓子に、俺は胃と頭を痛めていた。

こうなったのは夕方、あの世間知らずをとある店に連れて行ったのがきっかけだった。

「○○！来たわ!!」

「……。」

「手も洗ったわよ!!」

「……。」

俺の目の前いっぱい両手を開いて見せてくるこころ。
ミュー〇のいい匂いがする。

「ねーえー！どうして黙ってるの??」

「機嫌斜めかしら?」

顔を覗き込むように近づいてくる。

わかったから、どアップでも可愛いから。首を傾げるな首を。

「…あのなあ。来るときは事前に言えって言ってるだろ?」

今日も折角来てもらって悪いけど、これから出かけなきゃならないんだよ。」

「あら。お外に行くのね??」

「どこに行くのかしら?」

「んー…どこって言われると…。薬局とか、ホームセンターとか、まあ色々だよ。」

「ふーん? 黒服の人に、車を出してもらえないか聞いてみるわ!」

「はあ? 近場だし、歩きでいいんだよ。散歩がてらってな。」

「…いやまて、お前も来るのか?」

「…?」

いやそんな愚問だろみたいな顔されても。

「はあ……。一緒に散歩、するか?」

「もちろん行くわ!! 出かける予定じゃなかったけど、面白そうだわ!!」

「そうかい。…あ、横澤さん、マジで車はいいですから。歩きやすい靴だけ用意したってください。」

「……そうですか。それではこれを。」

横澤さん、とは。弦巻家お抱えの黒服の一人だ。

急に話しかけられたときはびびったが、今じゃすっかり知り合いって感じた。年も近いんだよな。

因みに性別は…謎だ。

髪が長いから女の人だと思ったけど、見た目だけで判断するなど注意されてしまった。

下の名前も教えてくれないし…。そもそもあの黒い制服も体つきをあやふやにするため、見た目じゃ本当に分からない。

「ほれ、こころ。靴ひも結べるか?」

「んーん。どうしても、ここがキツくなっちゃうのよ。」

蝶結び、できないんだっけか。

あーあー、それじゃお団子だぞ。

「どれ、見せてみ？」

「…おーこりやまた随分と固くやったな。」

「すばげってみたいに絡まっちゃったの！」

「怒んな怒んな…。頬パンパンじゃねえか。」

日頃何でも卒なくこなすイメージあるしな。明確に『できない』事自体少ないんだろう。

たまに壁にぶつかるのと大体こんな感じで拗ねる。

膨らんでいる両頬を挟み込むように手で潰すと、「ぶひゅうううう」と空気が抜けた。

膨れっ面も思わずにつこりだ。

「…よし。いくか。」

「ええーいつもありがとうねー○○ー！」

しっかりと手を繋ぎ、外を歩く。

正直、買い物自体そんなに急ぐものでもないし、買うものも急を要さない。

今日は本当に近場の店だけ済ますことに、予定変更しつつ歩いた。

道中のところは、あっちへ行ったりこっちへ行ったり、まるで犬の散歩でもしているかのように、引つ張られる腕の疲労感もなかなかのものだった。

振りほどかれないように手を握るので精一杯だ。

何とか目的の店に着いた頃、すっかり息は上がり肩での呼吸を抑えられないほどに。

対照的に、こころはうきうきそわそわと擬音が見えるかのような調子で、入口の自動ドアで遊んでいた。

「まあまでこころ…ダ○ソーは逃げねえ…。」

「はやくー早く行きたいわ！○○ー！」

「…………ふう。よし、手は離すなよ？あと、店の中では静かにな？」
「了解よ!!静かにするわっ!!」

もう山彦レベルで響いてんだよな。

…と、当初の心配と予想を裏切るように。

店内でのこころは至って静かなもんだった。

色々興味こそ示し、一歩二歩と踏み出すものの、走って行ったり大声を出したりはしない。

…いや、考えてみりや高校生だもんな。ちびっこ感覚で接しちゃう節があるなあ…。

「○○。…ねえ、○○?」

「んあ?…どした、こころ。」

「…これ。」

「んー?なんだそのクジラ。」

「んー。」

「…。おおお、ヒンヤリするな。」

「うん…………。」

「…どうした、元気がないぞ。疲れちやったか?」

「んーん。」

なんだろう。落ち込んでるとか、機嫌が悪いとかそういうのじゃないけど。

「あのね、○○。」

んつと、今日は、静かだったでしょ?」

「?ああ。気味が悪いくらいな。」

「…………いつも元気すぎるって、○○が言うから…ちよつと静かにして

みようと、思ったの。

だから、また次も、他のお店に行くときも、連れて行ってもらった
り…できるかしら。」

はー。ギャップ。ギャップだよこれ堪らんね。

つまりあれか、いつもは燥ぎ過ぎて俺に注意されるから、お出かけ
禁止になるのが嫌で頑張ってみたと。

「いい子か。」

「うん、今日はいい子。」

「そかそか。…でもさ別にいつもだって、うるさいとかって怒ってる
わけじゃないぜ？」

ちゃんと毎回一緒に遊んでるだろうが。」

「…そうなの？」

「ああ。…だからいつものこころのままでもいいんだよ。

無理して何でも我慢しなくていいから。な？」

「…うん。わかった、わ。」

「…………。でも今日はちよつと頑張ったからご褒美をあげちゃおうか
な。」

「ごほうび…？」

「そのクジラ、買って帰るか。」

「…!!!」

表情がぱつと明るくなる。

まるで向日葵のようだ、柄にもないこととも思ってみる。

「ひんやりしてていい手触りだしな。気に入ったんだろ？」

「ええ！とつても!!」

「うっし。じゃあこれと…なんか適当にお菓子でも買って帰ろ。」

「いいの!?!…えつとね、気になったのがいっつぱいあるのっ!!」

言うや否や、菓子コーナーの方へ走って行ってしまった。
うんうん、これが弦巻ころろだ。
このぬいぐるみは…300円か。
百均とは言え、普通に品質のいいものは少し高めで売っている。
こういった掘り出し物があるのも、なんとも楽しい店である。

「○○ー!!!たくさんあるわー!!!」

…やっぱもう少しあの静かなころろのままにしておくべきだったか…。

*
*
*

「…楽し…かったか、こころ…。」

「ええとつても!!○○、辛い?」

「ちよ…:つとだけな。これ、全部お菓子だもんな…。」

甘いもんばつか選びよってからに…。

まさか、百均で万札を出す羽目になるとはな。流石の金銭感覚だぜ。

というより、百均どころか百円すら知らなかったっぽいが。

「あなたも楽しそうね!カナコ!!」

「…カナコ?」

「そうよ!!!これ!!!」

自慢げにクジラを差し出す。レジを通したあと豪快に値札を引きちぎり、ずつと抱いているのだ。よほど気に入ったと見える。

どうでもいいけど、あんまり張るんじゃない。タダでさえ目立つ胸なんだから。

「…お前、カナコって言うのか…。」

「そうよ!!折角○○から貰った大事なぬいぐるみだもの!!」

素敵な名前をつけてみたわ!!」

「どこから出てきたんだ…その、カナコってのは…。」

「??」

キョトン、と。何を聞かれているんだかわからないといった顔をする。

え、カナコって有名人かなんかいたっけ?知らない俺がおかしいの?

「○○、あなたカナコと仲良しじゃないの?」

「初対面のクジラが知り合いたあ驚いたね。どんな人脈を想像しているのかしらんが、今日が初対面だ。」

「そっちじゃなくて…。」

指をさした先に…。

「…やっぱ女の子なんじゃん、横澤さん。」

うむうむ、こころは可愛いし、横澤さんも急に距離が縮まった気がするし。

いや、それよりも――

「菓子は食える分だけ買えって教えなきゃな…。」

初めてでもデキました

「こ…これは…。」

「凄いでしょう？カナコに教えてもらったの!!」

目の前には料理の詰まったパックが二つ。

お祭りなどでよく見かける、プラスチック製のアレだ。

輪ゴムは掛けてあるようだが、まさに「ギリギリ開かないようにしてます」といった感じの、はち切れんばかりのパック。と、満面の笑みを浮かべてそわそわつく金髪の美少女。

きつとまた気紛れの一つなんだろうが…ああ、これは絶対食い切らないといけないやつだな。因みに、”そわそわ”というのは今考えた造語だ。そわそわするって感じ。

「これ、全部こころが？」

「ええそうよ！味見はカナコにしてもらったから、安心・安全は保障するわ!!」

「…横澤さん？」

隣に寄り添うように立つ黒服さんを見る。

相変わらず無表情のまま「ご安心を。」と短く答えが返ってきた。

…そりやまあ品質はいいとしてもよ。

「こころ、俺ってそんなに大食いに見える？」

「いいえ？でも、男の人だもの、たーつくさん食べて大きくなるのよ

!!」

「うーん、ちよいずれ。」

???

「まあいいか…それじゃ、こころ、横澤さん、いただきます。」

差し出された割りばしを割り…くそ、2：8で割れちまった…。
一つ目のパックに手を付ける。
これは…

「ナポリタンか。」

「ええそうよ！最初に見た時から、名前がキュートでお気に入りなの！！」

「ナポリ…たん？」

「ブフツ…！」

噴き出す横澤さん。…相変わらず無表情を保てない人だ。

この人だけほかの黒服連中と少し違って、割かし表情が豊かだ。会話も必要最低限って感じじゃないし、たまにギャグも言う。

ただ、流石に噴き出したのは初めて見たぞ…。そんなにツボかねナポリたん。懐かしの味だぞナポリたん。

「…：…おお、確かにうまい。」

「ほんと!?ほんとにおいしい!?!」

「ああ、味付けも全部こころがやったのか？」

「ええそうよ!!」

「ほほう、結構器用なんだなあ。」

第一印象

見た目こそ壮絶なインパクトだったが、味は確かにおいしい。

昔懐かしの喫茶店の味、って感じかな。…その時代そんなに知らんけど。

「でも、量はちよつと多いかもな。」

「そうかしら？」

「ああ、お腹パンパンなるで。」

「…お空、飛べるかしら。」

「…気球とか想像してる?」

「ブフォッ!…ゴホツゴホオ!」

「横澤さん、笑い過ぎだから。」

腹の中にナポリタンが詰まった気球が飛ぶわけないだろう。ただただ重いボールだぞ。

…相変わらずこころの想像力と発想力には驚かされるというか感心させられるというか…。

「カナコ、風邪なの?」

「い、いえ…○○さんが、まん丸でお空を…ゲホツゲホオ!!」

「落ち着け横澤さん。」

「…んー。それじゃあ、次はもう少しだけ減らしてみるわね!

すこおしだけよ?すこおし。」

親指と人差し指を突き出し、同時に目も細めながら少しのジエスチャーをする。

別にそんなに微調整希望ではないんだけど。

「ん。よろしく頼むな。」

…それで、もう一個のこのパックは?」

「そっちはおかずよ!簡単にできるって教えてもらった、お肉と野菜の炒め物よ!」

「ほほお、予想外に家庭的なのがきたな。」

蓋を開けると香ばしくもほんのり甘い香りが湯気と共に漂ってきた。

うんうん、こっちは量も多すぎずおいしそうだ。

さっきのナポリタンなんて蓋を押し退ける勢いで結構飛び出してたからな。

ホイミスラムを押し込んだら足が出ちやいました☆みたいなイ

メージだった。

「じゃあ早速いただきます。

……おお、これは美味しいな。」

「ほんとう!?!」

「おう、俺、鶏肉大好きなんだよな。サイズも一口サイズで食べやすいし、程よく柔らかくもシャキシャキした野菜と相性ばっちりだ。」

「……!!」

ぱあっと顔を輝かせたところが横澤さんと目線を合わせる。

頑張ったんだろうなあ……。嬉しさがこっちにまで伝わってくるよ
うだ。

「これはいくらでも食べられちゃうなあ……。」

「あたし、すつつつづく頑張ったのよ!

フライパンなんて、初めて触ったの!それで、じゅーって音が楽し
くって、野菜が小さくなるのも面白かったの!!」

「そっかそっか……。」

「そうだわ!今度はうちに遊びに来てちょうだい!

あたしがお料理しているところ、是非○○にも見てほしいわ!!」

「おー、そりや楽しそうだな。」

「ふふん、そうでしょうそうでしょう!

出来立てを食べさせてあげるわね!」

どうやらあの弦巻邸にお呼ばれされることになったらしい。

勢いなのか本気なのか俺には判断できないが、きつと唐突に連行さ
れるんだろう……。

それより、

「だいぶ腹いっぱいだな……このナポリたんどうしよう。」

「ウグツ……ククツ……」

「横澤さん、無理して堪えずに笑っちゃえばいいのに…。」

「い、いえ…それは、失礼ブツ…ですから。」

「……。」

「???

少し嵩は減ったが未だはみ出るナポリタンに蓋をし、

「横澤さん、これ、ホ○ミスライムみたいじゃね?」

「ブフォオツ…ゴホツゴホツ…イヒツ…。」

「??…ここに来るとカナコもご機嫌ね!」

祝うところ

すげえ…すげえぜ……。

夕刻頃、不意に鳴らされたチャイムにインターホンのディスプレイを見る。そこには、「ドッキリです☆」と言われても納得できるような光景が。

んでそれをバツクにぼそぼそと喋る顔見知り。

『○○様、お迎えに上がりました。』

「…あー、うん。今行きますね。」

夏の暑さから見る蜃気楼だろうか。

いや、蜃気楼って機械通しても見れんのかな…。

粗方準備は済ませておいたので、すぐにでも出よう。依頼の品をしまったバスケットを持ち、靴を履く。…ん、スマホの充電もばっちりだ。

謎の緊張があるが、行こう。

意を決し玄関を開けるとそこには――

「お待たせ、横澤さん。」

「…いえ。」

やっぱり本物だよな。…あの黒塗のリムジン。

あんな長い車体がどうやって入り組んだ住宅街を抜けてきたかは謎だが、弦巻家が抱える運転手だ。今更ツッコまんぞ。

自分でドアを開けなくていいことに戸惑いつつも車内へ。

…どうやら迎えはうちが最後だったらしい。中には、珍しくもガリリイな格好の先客が。

「…ああ、○○さんの家だったんですか。」

「おつ、美咲ちゃん…だったよね？」

今日は随分と…可愛らしい格好だね。」

「ふふつ、合ってますよ。まだ片手で足りるくらいしか会ってませんもんね。」

格好はその…一応、招かれの身なので。…似合わない、ですよね？」
「そんなことないさ。あんまりファッションとかは詳しくないけど、似合ってると思うよ。」

「そう…ですか。」

「うん。」

……………。

ま、まあ仕方ないよな。

コミュ障とかじゃないぞ？まだ三回しか会ってないんだからな？

あれ、四回か？

沈黙は痛いのが、目的地までの辛抱だ。

嘘は言ってないしな。凄い似合ってたぞ。ほら、上のシャツ？ブラウス？っていうのか？それもなんかすげえし。

下のスカートも…あ、そもそも今までパンツルック？しか見たことなかったから、そのチラチラ見える生足にも驚いちやうし。

長さもなんか、短いほうだと思うし…うん！全く以て知識と語彙力が足りない!!

「…?!」

しかも長く見つめすぎたせいで怪訝な表情をされるというおまけ付きだ。

はあ…早く着かねえかな。

「○○様、奥沢様。お降りくださいませ。」

「うおつ」

何だもう着いてたのか…。静か過ぎて気付かなかったぞ。揺れがないとか静音設計とかそういう次元じゃなかったな。さすが弦巻。

にしても美咲ちゃんはエラく落ち着いてるな。

「美咲ちゃんはよく来るの?」

黒服さんに周りを固められ、黒服さんに道を作られ、その上黒服さんに先導されつつ訊いてみる。

半歩ほど後ろ歩く美咲ちゃんは、そのまま無表情に近い顔で教えてくれた。

「ええまあ、二日に一回くらいですかね。」

「へえ。…二日に一回?」

「ええ、学校の帰りとかに。」

「へ、へえ…。」

めっちゃ来とるやん。そら慣れるわな。

そういえばこころって、学校どうしてんだろ。まさか歩いて通うってことは無いだろうけど、毎日リムジンで送迎か…?

「あ!!来たわね二人とも!!待ちくたびれたわ!!」

「うん、きたよーこころー。」

「お、お邪魔します。」

通されたのは…ここがなんつー名称の部屋かもわからんが、とにかくでかい部屋。

真ん中にはこれまたでかいテーブルがあって、その周りをびっしり椅子が囲っている。

ほー…これまた凄いキメ細かなテーブルクロスだな。これで寝る

のもアリだ。

「…アリな訳無いでしょ。」

「鋭いツツコミありがとう美咲ちゃん。」

「…何緊張してんですか。気楽に寛げばいいんですよ。」

「ば、ばかいえ、緊張なんかしてないわい。」

「二人とも、こっちに座って!!」

俺の緊張などお構いなしにこの子は…。

二人の手を取ったところはそのままテーブルの端、短い辺の真ん中へ。普通のテーブルならお誕生日席って言うんだろうけど…。

椅子が多すぎてどこが真ん中か探すのも一苦労だ。

「○○はここー！美咲はこっちね!!」

「はいはい。」

「こころはどこ座るんだ?」

「あたしはここ!!」

椅子を飛び越えるようにして椅子に座るお嬢様。…今何回転した??義経の八艘跳びを彷彿とさせる軽やかさだったぞ。

これにより席順左から、俺・こころ・美咲ちゃんとなった。ちやうど、将棋の王と金の関係みたいな。

「こころ?…あと何人来るんだ?」

「??今日来るのは二人だけよ?」

「!？」

「??そんなに驚くことかしら??」

こころの回答に思わず固まった。

じゃ、じゃああの大量の椅子は何なんだ??

「どーせこころのことだし、どこに移動しても座って食べられるようにとかそういうのでしょ。」

「？隙間があるのがなんか嫌だっただけよ？」

「…へへっ」

…思ったよりしょーもない理由だった。

「さてとーそんなことより、参加者は全員揃ったのよ！

始めましょ!!」

「…ん。」

「はいはい。」

かくしてパーティーは開かれた。

こころの、誕生日のお祝いだ。

パーティーも和やかな雰囲気が進み。最初は気になって仕方が無かった黒服達もどんどんと、そういつたシステムであるかのような認識にしかなくなかった。

…さすが弦巻家の黒服、驚きの力だ。

俺は席を立ち、だだっ広いテーブルに所狭しと並べられた見るからに金のかかった料理を食べて回った。勿論目的を忘れちゃあいないが、こういう機会じゃないと食えないものばかりだろうしな。

うん。どれもこれも美味え。…と。

「…卵焼きっ。」

料理だけを見て歩いていたせいとかその違和感にもいち早く気づいた。そんなでもって釘付けだ。

これだけの料理が並ぶ中で、シンプルな卵焼き。…これは口へ運ば

ずにはいられないな。

いただきま〜おおう！これは…!!

「○○？どうかしら、その卵焼きは!!」

「んむんむ…ん、ああ。パーテイ感はないし、急に家庭料理感が出てて気になって食べちゃったけど…。」

なんつーか落ち着く味でいいな。これ。」

「本当!？」

「ああ、俺は好きだなあこれ。」

毎日食べたいくらいだ。」

「……ッ!!やったわ!!」

聞くなり、ガツツポーズ。すすすつと寄つてきた横澤さんとハイタッチを交わしている。

ははあ。これやっぱ、こころが作ったんだな。

「こころ、お前、やれば大体なんでもできるタイプだよな。」

「そうかしら？教えてもらったとおりにやっただけよ!!」

「それが難しいんだよ。…にしてもこれはうまい。」

「あのねあのね!!このエリア、全部あたしが作ったやつなのよ!!」

「!?…ほほう、道理で家庭料理が多いわけだ…。」

改めて見てみると、そこには普段見慣れたようどこか懐かしい品々が並んでいた。

おいおい、このマカロニサラダなんか、俺が昔よく作ってもらっていたような…。」

「ん?」

「どーしたの??」

「これは……母さんの……」

そうだ。確かにそうだ。

懐かしい味なんてもんじゃない。まさに実家で出されるその味じゃないか。これは…っ!?

「○○様、そちらの料理ですが、レシピを○○様のお母様より仕入れました。」

「…横澤さん。あんたらもう何でもありだな。」

「…ころー!!そろそろプレゼントのコーナー始めるよー!!」

音もなく後ろに立っていた横澤さんに今更驚くこともなく返していると、当初の席から美咲ちゃんの大きな声が響いた。

粗方食べ尽くして満腹になったか、手持ち無沙汰で暇になったか…なんにせよ、俺も戻るしかないわな。

こころも全力ダツシユで向かっちゃったし。

ああ…美少女二人が激しめのスキンシップでべったりしている様子は、遠巻きに見ても十分眼福だなあ。

「よいせ…っつと。」

「掛け声がおじさんですやん…。」

「ははっ。」

若干広すぎる部屋を歩き、自分の席に戻る。美咲ちゃんの弄りにも反応する気力が残っちゃいない。

広すぎんだよ。

*
*

美咲ちゃんが手渡したのは、綺麗にラッピングされた箱。
水色のリボンが印象的だ。

「わあ…!!素敵なお人形ね!!」

「ははは…ありがとう？」
「おお、器用なもんだな。羊毛フェルト、だっけ？」
「はい、趣味なんです。一応。」
「ありがとう美咲!!ずっと大切にするわ!!」
「うん、どういたしましたよー。」
「ふふっ、この二人、あたしと美咲かしら??
二人ともふわふわしてて可愛いわあ…!」

女子力あるなあ…。

パステルカラーの選択も相まって目に優しい。手触りも良さそう
だ。いいなあ…。

「○○さんにはあげませんよ?」

「わかってるよ。」

「それより、○○さんの番ですよ?」

「はいはい。…ほらこころ、これは頼まれてたやつ。」

「わあ…!!」

「うおお…。」

俺がこころ直々に頼まれて用意していたのはケーキだ。
シンプルながら、生クリームたっぷりの土台にイチゴを散りばめた
ケーキだ。

昔の経験が生きたな。

バスケットは重かったが、喜んでくれているようで何よりだな。

「これ、これよ!…もう食べてもいいかしら!？」

「勿論。食うために作ったんだからな。」

「うふふっ!じゃあ早速…。」

「あ、やっぱストップ。」

あぶねえ、忘れるところだった。

「これを載せないとな…。」

ラップを解き取り出したのはチョコレートプレート。

『「こころ 誕生日おめでとう」』

勿論、メッセージも自分でやったぜ。

「すごいわー！この文字も食べられるのかしら!？」

「おう、チョコレートだからな。たんとお上がり。」

黒服さんが手際よく切り分け、それをこころが喜々として平らげていく様を幸せな気持ちで眺めている。

おいおい、口の周りクリームだらけにして…。相変わらず子供みたいなやつだなあ…。

それでも、その笑顔が見たくてつい色々やってしまっただよなあ…。ちやつかりイチゴを多めに掻っ攫っていく美咲ちゃんを横目に見ながらも、癒しのひと時は流れていく。

時間もだいぶ遅くなって。

落ち着きを取り戻した邸内はこのパーティの終焉を表しているようだった。

「さてとっ…それじゃあ、あたしからご挨拶するわね！」

言いつつ、俺達の手を握るこころ。

先程までの騒がしい雰囲気はどこかへ。

一息ついて顔を上げたこころは、急に真面目な、どこか遠くを見るような表情カオをしている。

「…ふたりとも、今日は来てくれてありがとう。」

あたしの誕生日…。別に、あたし自身は特別な日だとは思ってなかったのだけれど。」

「……………」

「……………」

「それでも、今年初めて独りじゃない今日を迎えられて、今この場に二人が居てくれて…。」

…上手な言葉選びはできないけれど、産まれたただけの日をお祝いしてもらえるって、やっぱり特別なことなのね。」

なんだろう。今はいつもより、こころが大人びて見える。さつきまでまだまだ子供だとか思ってたんだがな。

…いや、確かに一つ、大人になったのか。概念だけではない、誕生日の祝福を受けて、な。

こころは相変わらず正面を向いたままで淡々と喋っているように見えるけど、いつものこころとは違う顔つきに見えるんだよな。

靴紐が結べなくて困っているような、手が上手に洗えて喜んでいるようなこころとは、違って。

こころ越しに見る美咲ちゃんも同じようなことを考えて聞いているのだろうか。

「…ねえ、美咲?」

「へっ…え?」

「あなたがくれたお人形。とっても素敵!」

…でも、それよりも、毎日あたしと一緒にいてくれて、学校でも面倒を見てくれて…。

それがすごく嬉しいの。」

「…それは、あたしが勝手に…!」

「ううん。こういう時じゃないと言えないから、伝えたいの。」

ありがとう美咲。あなたははずとずっと、あたしの最高の友人よ!」

「あ……。」

うーん、ええ話や……。泣いてしまう。

「それから○○。」

「…なんだい。」

「あなたは…あたしが迷惑をかけるようなことをしても、いつも何だかんだで面倒を見てくれる。」

怒ることもなく、優しく、お父様みたいに、ね。」

「…………。」

「これからも、その…あたしと一緒に過ごしてくれるかしら?」

「…そりゃ、勿論だ。お前が飽きるまでは相手するさ。」

「ふふっ。ありがとう。」

それからこころは立ち上がり、改めてこちらに向き直る。

そのまま満面の笑みを浮かべ、

「二人とも!!これから末永く、よろしくねっ!!」

ああ、これからもよろしく、こころ。

誕生日おめでとう。

「こころの中で大きなモノ」

「…あらっ？…あはっ、見て○○！」

「見るから待って…あんまり早足で行かないでくれ…。」

「昼過ぎあたりに例の如くこころ嬢が押しかけてきたのをきっかけに、近所をただぶらつくという素敵な時間を過ごしていた。」

「が、若い子の体力とはやはり恐ろしい。」

「周りが広くなればなるほど移動のスピードが上がるこころをやや遅れて追いかける俺。…こちとら、黒服さん達から君の安否について一任されてんだ。マジ勘弁してくださいこころさん。」

「もう、○○はアレね。運動不足ね。…こんなにか弱き少女の足に敵わないのに、どうしてあたしのボディガードが務まるのかしら？」

「言いたい放題だなあ君は。」

「色々ツツコミ所はあるんだが、取り敢えずお前の行動力にまともについていけるのは美咲ちゃんくらいだと思うぞ。」

「あの子はホントすごい。眠そうで気だるそうな雰囲気醸し出しつつ、この元気なお嬢さんと同ポテンシャルで動き回るんだもんな。若さだわ。」

「しよーがないわねえ。今日は○○にペースを合わせてあげるわっ。」

「はいはい、お気遣い感謝しますよ、お嬢様。」

「んっ。…それで、これ見て!!」

「…どこから採ってきたのそれ。」

「そこらじゅうにいっぱい生えてるわ!!」

「喜々として突きつけて見せてくるのは大きくて立派な…色とりど

りのキノコ。

いつの間にか近所の公園まで来ていたらしい。

…にしても、相変わらざるの好奇心と、その怖いもの知らずな度胸に乾杯…じゃなかった感心する。俺そこら辺の雑草であつても素手で触りたくないや。

「よく素手で触れるなあ。」

「ふふっ、ちよつとひんやりしててね、ふかふかしてて、可愛らしいのよっ。」

「ちゃんと手洗わなきゃな？」

「(こ)こ(こ)こよ…(こ)こ(こ)この手触りが素敵だわっ！」

キノコの傘にあたる部分、その裏か。繊維質がむき出しになつてゐる部分であり、柔らかく滑らかなシルクのようなところは言うが…そもそも触りたくないのだから確かめようもない。

まあ、本人は満足そうなので放つとくことにしよう。

「…これ、食べられるかしら。」

「言うと思った。…絶対毒あるからやめとけ。」

「あら？○○つてば、キノコ博士??」

「なんじゃそりや…普通に、得体の知れないキノコが体に無害だと思ふ方が無茶だろ…？」

ただの菌やでそれ。何から生えてるかもわからないのに…。

「普通つて…何かしら？」

「えっ…。」

「○○の言う普通つて、誰が決めたものなの??」

「…んんんん…。」

確かに。振り返つてみれば、”普通”という単語を使う機会は多

かったかもしれない。

普通、普通…常識、当たり前…。そういった固定観念に縛られることも、俺をつまらない普通の人間たらしめる要素なのかもしれないな。

流石はこころ。久々ではあるけど、また思わぬところでその独特な観点を見せたな。

「そうだな。普通って言い方はよくないな。」

「良くないとは言わないけど…。そんな言葉で片付けてしまうのは、なんだか勿体無いわっ！

…ほら、食べたら大きくなるかもしれないし。」

「…こころが言うとなんな可能性も感じられるから不思議だな。でも食べるんじゃないぞ。」

「えええ??○○は?○○は大きくなるの??」

「なりません。…俺が大きくなったところなんだっちゅーねん。」

キノコ…大きい…いやいや、こころを前に何を考えてんだ。ベタすぎる。

残念そうにしつつもその目は爛々としており、周囲をキョロキョロと見回す姿は、まるで天敵の気配を探る野生の小動物のようだ。

…あれはまだキノコを探している目だ。

「…んんう…………。」

「なあ、まさか今日のお散歩をキノコ探しだけで使い切るつもりかい?」

「うーん…美咲に、お土産に持って行ってあげようと思って…。」

「喜ぶかなあその土産…。」

「相手はあの美咲よ??…きつと喜ぶわっ!!」

可哀想に、美咲ちゃん。

君はこころの中で、無類のキノコ好きとして認識されているよう

だ。…まあ、不思議としつくりくるけど。

「…わかったよ。俺、その木陰にいるから、満足するまで集めておいで。」

…あんまり遠くに行つちやダメだぞ?」

「わかったわっ!!○○も、あんまり遠くに行かないでね?」

「木陰で待機つつつてるのどこに行くんだよ俺は…。…わかったよ。」

気をつけて行っておいで。」

頷くや否や嬉しそうに駆け出す小さな背中を見送る。

…こういうほのぼのとした時間もいいもんだな。

「…すっかり父親みたいになられて…」

「んあ?…ああ、あいつ自身の口から”お父様みたいに”って言われたしね。」

…俺の中でも親っぽい気持ち芽生え始めたのかも。」

「性犯罪者の道に目覚めなかったようで何よりです。…てつきり、そつちの気があるかもとヒヤヒヤしておりましたが。」

「………横澤さんって、たまにとんでもないカミングアウトするよね。」

…俺そんな危険視されてたの?」

「そりゃあ、あの弦巻家のご令嬢を自宅に連れ込むような方ですからね。」

…おまけにこころ様を見る目はいつもデレッツデレ、デレッツデレ…」

「してねえよ。」

「ですよね。」

こころがキノコ集めの旅に出た後、木陰で草木の匂いを楽しむ俺の隣に音もなく傳く横澤さん。

すっかり慣れたもんだが、最初は音もなく隣に立つ横澤さんに毎度心拍数を跳ね上げられたものだ。話し始めるとふわふわした横澤さ

んだが、こんなんでも立派な黒服の一員なのだと再確認できる瞬間でもある。

「キノコ、多分持って帰るよな。」

「…ええ、今バスケットと手拭きセットを用意させてますので。」

「そか。相変わらずいい手際だ。」

「こころ様を理解していればこれくらい、造作もないですよ。」

「…俺もいけんじゃね？」

「…ふふつ、馬鹿言っちゃあいけませんよ。」

「そうだよなあ。」

「…こころ様、本当に最近楽しそうで。」

「最近？何かあったっけ？」

「いえ、最近といっても〇〇様のお家に行くようになってからですね。」

「…退屈しないからか。」

「真意はわかりませんがね。…特にお誕生会以降なんかは、〇〇様のお話ばかりしてますよ。」

「…へえ。」

「〇〇様と過ごしている間はまさに天真爛漫といったご様子のごころ様ですが、お屋敷では笑顔ひとつ浮かべない方なので。」

「…まじっ…」

「マジでございます。」

全く想像できないけどな。

横澤さんの言うことが本当だとしたら、それはそれで見てみたい気持ちもあるし、そんなこころは全く見たくないって気持ちもある。

てつきり家でもあんなだと思ってたし。

「ですからその…ほんの少しのお時間でも、こころ様とご一緒に過ごしていただきたい、というのが私個人の思うところではあります。」

「横澤さんだけの気持ち、ね。」

「ええ。…御当主様などは、また違った見解をお持ちですから。」
「当主……こころの親父さんか。」

弦巻グループの総帥、ブレインと名高いこころの父親。

確かに、そこまで上り詰めた人間であれば後継であるとか、一人娘の交友関係にも目を光らせているものなのかも知れない。

こんなしがない絵描きと連んでいるようじゃ、いずれこころ自身にも何かしら辛い思いをさせてしまうのかも、なんて考えてはいるのだが…。

「確かに、俺みたいな普通の人間じゃ釣り合いも取れないしなあ。」

「ああいえ、そういうものではありません。」

…あの方はとにかく子煩悩ですから。…イマイチ接し方がわからないといえますか。」

「…つまりどういうこと？」

「本当はべつたり仲良くしたいみたいです。○○様のように。」

ただ素直にそれが出来ないために、私たちのような黒服と金銭を与えて好きに使わせるといふ愛情表現…。要は、物凄く不器用な方なので。」

あ、割と普通のお父さんなんだね。

もつとヤバイ…こう、おっかない感じの人かと思ったけど。

「その為か、親にあたる方の愛情をあまり知らずに育ってしまったので…」

○○様には是非、父親のようなポジションから愛情を注いで頂ければと…。」

「父親代わり、ね…。」

「……………難しいでしょうか？」

「ただの絵描きにそんなこと頼むとはね…。ま、こんなごくごく普通の一般庶民でよければ、やれるだけやってみるさ。」

まさかそんな大それたプロジェクトの重要ポジションとして見られているとは思わなかった。…本当にいいのかい？お父様や。

「ふふっ…○○様ほど特別な方はそうそういらっしやいませんよ。」

「…買い被り過ぎだつてば。」

でんでんこころん

「○○ーっ!!見てみて!!雨よっ!!」

「…言われなくても見えてるよ。外に居るんだから。」

大雨が降った。選りにもよって、こころが遊びに来たその日に。

「うふふっ…♪ぴっちぴっち、ちやつぶちやつぶ、らんらんらんっ
♪」

「雨なんかそんなに珍しくもないだろうに…。」

「うーん…すっかり乾燥いじやってえ…」

「横澤さん、カメラ、濡れますよ。」

で、大雨の中何故みんな揃って外に居るのかというと…。

今回は珍しく、こころの気紛れ”だけ”ではないんだよな。

「取り敢えず、事の発端の回想入れときますか。」

「横澤さん、そんな進行役まで…」

「遊びに来たわよっ!○○っ!!」

「はいはい、上がってくれ。」

「わーい!!」

大雨の降る昼下がり、窓を叩く大粒の雫の音と共にお嬢様と黒服が訪れる。

これだけ書くと、まるで小説のプロローグにでもなるんじゃないかってほどかっこいい描写なんだよな…。

相も変わらず元気いっぱいのところと、珍しく最初から姿を見せている黒服。横澤さん その手には見慣れない物が…。

「…カメラ?」

「ええ。御当主様より拝命を頂戴しまして。…これに愛娘の元気な姿を収めてこいと。」

「…なんでもまた。」

「実は、○○様との交流のご様子はいつも報告しているんですが…。」
「まじかよ。」

「そのご様子が気になるのか、是非一度見てみたいとの事だったんですが。」

「…ところが嫌がる、とか?」

「いえ、ご当主様が「恥ずかしくて無理」とのことです。」

なんじゃそら。…いい歳こいたおっさんだろ? 少なくとも俺よりは上だと思おうし。

「そっか…折角可愛いのに、見れないなんて可哀想だな。…あ、それでカメラか。」

「はい。お察しが早くて助かります。」

どうやら今日一日、カメラでこころをつけ回すらしい。少し遠めから。何だか「人生初めてのおつかいをする子供を追い回すあの番組」みたいだなと思いつつ、横澤さんを部屋の奥に引き連れていく。
こころの足跡を辿る様にして奥へ…いやいや足跡って。

「こころおー!!!」

「……はあいー…何かしら?」

廊下の奥、点々と足跡が続いていった先の部屋の戸枠から頭だけだしたこころが返事をする。

「お前さん、今日は裸足なのか？」

「??ええ、そうよっ！」

「…サンダルで？」

「そうよ??…んつとね、向日葵の飾りがついた、可愛いやつつ!!」
「別にどんなサンダルかは聞いてない。」

…雨の中、裸足でサンダルを履いてくるとどうなると思う?」

「うーん………びちよびちよ?」

「正解。…じゃあ、そのびちよびちよの足で家に上がるとどうなると思う?」

「………足が汚れる?」

おい。どうして外よりうちが汚いみたいになっただ。

お前の足が汚れとるんじゃ…。

「…この足跡見てみろ。」

「…?…まっ!あたしのところまで続いているわ!! 一体だれがついてきてるのかしら…。」

「はいはい、馬鹿なことと言ってないでこっちこい。足拭くから。」

「はあい。」

不思議そうな顔のままとととと走って寄ってくる。…裸足で過ごすのは良い事だが、外から入ってくる時は別だ。汚い足で部屋を歩かれたら部屋の主は怒るだろう。

「足、どうやって拭くの??」

「…そうだなあ…。」

地べたに座らせるのもなあ…。とすこし考え、周りに座る場所がないか探す。

とは言えここは玄関から少し進んだあたりの廊下。普通こんなと

ころに座る場所を設けるわけもなく…。

「そうだわっ!」

「んー?」

「折角たくさん雨が降っているんだし、お外で遊びましょう!!」

や、言ってることの矛盾がすごいんだが。降ってるからこそ屋内で
だなあ…。

「お嬢様、それではこれを。」

「わあ♪カッパね!!」

レインコートの準備が早えんだよ横澤さん…。

そうして黄色い雨合羽に身を包みご機嫌なところに手を引かれる
まま、土砂降りの外へと繰り出すのだった…。

まあ、いい大人が雨の中外に出たからといって、特に何かがあるわけではなく。

結局無表情でシャッターを切りまくる横澤さんの隣で、傘に跳ねる
雨の音色を聞いて立ち尽くす。

ああ、なんだか俺、

「横澤さん。」

「…なんでしよう。」

「わあ!カエルさんだわ!!」

「…連絡先交換しない?」

「…急ですね。」

「…こうじめじめしてるとき、何か良い事でもないと、ね。」

「…へえ。〇〇様、ナンパのおつもりですか?」

「あはっ！滴が綺麗ねっ!!」

「そんなつもりはないけどさ、……このころのこととか、もつと知りたいと思ってる。」

「それならば、お嬢様と直接コンタクトをお取りになつては？」

「んー………なんかさ、犯罪臭？がするじゃんか。」

「よくわかりませんが。」

「きゃー♪冷たいわっ！あははははは!!」

「……まあいいや。」

「そうですね。………別に交換してもよかったです。」

「………そう？じゃああとで。」

「………え、ええ。」

「○○ー!!こつちに来てちようだい!!」

横澤さんとの交渉が成立したところで、何やら木の根元辺りでごそごそやっていたところからお呼びがかかる。

……にしても本当に、放つといっても一人で延々遊べる奴だなあ。そういうところも飽きないところだなあ。……手がかからないってのもいい。

「……どうしたんだ？」

覗き込む俺の目の前に、にゅつと何かを突き出してくる。

「えすかるごっ!!」

「うおー………あー、カタツムリか。」

殻を摘まみ上げられる様にして空を飛ぶかたつむり。こんなにまじまじと見たのは子供のころ以来だなあ……。

……あつ、足場がなくなつたことに驚いているのか、めちやくちや触覚が荒ぶってる。

「かわいいもんだなあ。」

「……………これ、食べられ」

「食べられないよ。」

「……………まだ全部言っていないのだけれど。」

「お前の言うエスカルゴってのはアレだろ？ フランス？ 料理の。」

「うん。」

「……………腹減ってんのか？」

「…ちよつと。」

「そつか。…でもその子は食べないで上げような。」

「どうしても？」

「どうしても」

そんなに食いたいかそれ。絶対まずいぞ。

「そうだわ!!」

「？」

「美咲にも教えてあげましょつ!!」

思いついたようにポケットからスマホを取り出し、電話をかける。

…このタイミングで？ 美咲ちゃんに？ ……一体何を教えてあげるつてんだ。

「……………あつーもしもしつ、あたし、こころー！」

「……………うん、うん。…そーなの!!」

「……………あつ…えーつと、えすかるごつー！」

「…??…えすかるごつー! ……しらない? ……えすかるご…。」

「……………んーん、ちがうわ。……えすかるご。… ……でもね、○○○

が、食べてはいけないうつて言うの。」

「……………うんっ! ……じゃあまた、学校でねっ! えすつ…美咲!!」

うーんどこから突っ込んで良いやら…。

ひとまず美咲ちゃん、ご愁傷様。きつとなんのことが訊こうものにも、こころからは「えすかるごっ」しか返つてこなかったんだろうなあ。

ゲシユタルト崩壊しそうだ。

「うっ……くくっ……」

少し後ろでは横澤さんが酸欠になりかけている。そんなに面白かったかエスカルゴ。何なら食わせてやれエスカルゴ。

「エスカルゴって……カー○イにいた変な奴ですよね……ぶふーっ!!」

「…横澤さんがわからんゾイ。」

相変わらず勝手にツボって…あの人もあの人で楽しそうな人だと。

「……ん。」

袖をくいくい引つ張られる感覚に視線を戻すと、何やら切なそうな顔のこころ。

「どうした?」

「…えすかるごさん、おうちに帰っちゃったの。」

「おうち?」

こころの摘んだかたつむり。殻からは先程の荒ぶり君の姿が見えない。…どうやら殻に戻ってしまったらしい。

「そっか。…じゃあえすかるごさんは元の場所に戻してあげて、俺たちも帰ろっか?」

「うん、そうする。」

「ん。…よしっ、じゃあ行くか。」

「……んっ。」

「??……ああ、手な。繋ぐからそんなに押し付けんな。」

両の手の平を俺の両頬へぐいぐいと押し付けてくる。…手を繋いで欲しい時のサインだということは最近わかったが、それ、蛙やかたつむりやら色々触った手だよな？勘弁してほしいな？

…顔がベタベタになるのを防ぐためにも、押し付けられている手を取りしつかりと握る。……うん、満足そうな笑顔だ。

「むふー。」

「………横澤さんも、帰るよ。」

「……くくっ…、ええ。わかりました。」

「雨の日は色々な発見があつて楽しいわねっ。」

「お前それ晴れてても曇つても言うだろ。」

「毎日が楽しいことではいいなのっ!……あっ!」

急に足を止め振り返る。

…忘れ物か？最後に居た木の根元あたりをじつと見ている。

「…ばいばいっ!…えすかるござんっ!」

ああ。挨拶はしつかり出来る子だったね。

成長するところ

「○○！これはなあに??」

「それは…練り消しゴムだ。」

「これが消しゴム!?…だつて見て、こおんなに柔っこいのよ??」

「ん。形を変えて…こんな感じでほら、ちゃんと消えるだろ?」

「うわあ!!…まるで魔法だわっ!」

膝の上で足をばたつかせて燥ぐところ。…練り消し一つで魔法のようだとは…昨今の魔法使いも安くなつたもんだなこりや。

今日は平日だが、朝からずーつと二人で過ごしている。勿論、目に見えずとも黒服はいるはずなので、二人きり、なんてロマンチックな状況じゃあないんだけどな。

練り消しゴムを弄り終えたところが続いて手を伸ばしたのは木炭。机の脇に予備として置いてあつたものだ。

「これは??」

「…あつ。あーあ、やつちまつたなところ。」

「んう?」

「何でもかんでも躊躇なく掴むからあ…」

剥き出しの木炭をむんずと掴めば結果はお察しだろう。…案の定隙間から見える手のひらは真っ黒黒の黒。こころ本人はまだ気づいちゃいないか。

「…ほれ、パーにしてごらん。」

「…??…あつ。ああああ!!!」

「あーあー。真っ黒だなあ。」

「黒！これ、黒！ふわあ…」

「はっはははははは!!なんだこころ、その顔!!」

ぶーっと膨れて両手を交互に見るこころ。ちよつとハリセンボンみたいで可愛い。

手が汚れたことに対して怒っているのか俺が笑ったことに怒っているのか。…どちらにせよ、このままって訳にもいかないな。

「ごめんごめん…。よし、手え拭いてやるからな。一回降りてくれ。」
「ええ。……………これ、どうやって降りたらいいかしら?」

「どうやってって…ああ、手が使えないからか。」

気づいてすぐ置けば被害は片手で済んだのになあ。手を開くときにぶご丁寧に持ち替えたもんだから、両手とも真っ黒だ。確かにこのまま立ち上がろうとするなら、触った箇所を確実に黒く汚してしまうことだろう。

「うーん……………しゃーないな。ちよつと擦りたいかもだけど我慢してくれな?」

「えっ??…うつ、んっ、あ、ちよ、ちよつと」

「よいせ……………つと。」

脇の下に手を差入れ持ち上げる。今回ばかりはこころが小柄で良かったな。…同じくらいのタツパの奴に試したらわかるぞ?これ滅茶苦茶キツいんだから。

「な……………な……………な……………な……………」

「??…どした、痛かったか?脇。」

「……………そ、…ち、ちが……………」

「??まあいいや、タオル取ってくるから待っどけ。…あんまりあちこち触るんじゃないぞ?」

何やら顔を真っ赤にして物言いたげなところを残し洗面所へ。…
あ、炭だし水拭きだけじゃ落ちないかもしれないかもしれんなあ。

「どれハンドソープも…」

「〇〇様。」

「のわあっ!?!…なんだ横澤さんか。いい加減足音立ててくれよ…。」

「これは失礼。…先ほどの件ですが。」

「さつき?何かあったっけ?」

膝に乗せてたのがまずかったのかな?お父さんに怒られちゃう?

「ええと、その…。」

「?」

「膝からの降ろし方が、少々まずかったというか…。」

「どういう。」

「その…お嬢様は、胸部の発育が少々伸び盛りでして。」

「…ああやっぱり?気にはなってたけど、あれくらいの子の胸を凝視して過ごしているわけじゃないから比べたこともなかったんだよな。」

やっぱりでけえんだ。そりやまあ、服の上からでも分かるくらいだし
デカイ方ではあるんだろうとは思ってたけど…

「…今想像してます?」

「まあね。」

「し、しないでください。」

「…や、別にそれに気づいたところでどうこうはないから。」

「…本当にいい?」

「ホントだよ。」

そんなジト目で睨まんでください。心配しなくても、そんな弦巻一

族を敵に回すようなことはしませんって。

でも、押し付けられるだけでハッピーな気持ちになるのは確かにあるよ。よく抱き抱えてるから感じる感覚だけでも。

「何でそんな話になったんだっけ。」

「はっ。そ、そうでした。…さっき、膝からお降ろしになる際に触れたのでは？」

「…………あー、うん。すっかり慣れちったから気にしてなかったけど、少しは当たったかも。」

「ええ。そこなんですけど。」

何か問題あったか？まさかその降ろし方も今後は禁止とか言うんじゃないだろうな。

「慣れているのはお嬢様も同じはずなんです。」

「そうだな。」

「…………先ほどのお嬢様、何か気になりませんでしたか？」

「…まあ、ちよつと変だったかな。顔も赤かったし。」

「ええ。…………おそらくは、恥ずかしかったのかと…。」

…………ところが…恥ずかしいだって??

そんな馬鹿な…と一蹴しようのない反応ではあったけど、でもあの…………ころだぞ?..

「…やつと恥ずかしさを覚えてきたってことか。」

「その可能性は大いにあります。…何せあんなにも身体の発育は進んでいるのです。内面が追いつくにしても、むしろ遅いくらいです。」

「だよなあ…………。あゝっ!!」

「どうしました、○○様。」

恥ずかしさを覚える…………つまりはあれか。純粹無垢だった娘に思

春期が来てしまったようなもので…。

俺は気づいてしまった。よく聞きはするが自分には無縁だと思っ
ていたあの事象の危険性が生まれていることに。

「まさか、だけどさ。」

「はい……?」

「俺、そのうち嫌われる?」

「!!!」

「!?!…だつてさ、女の子つてある時期になつたら急に父親のこと嫌い
になつたりウザがつたりするんだろ?」

「…あ、あわわわわわ…。」

「な!?!な!?!あるよなこれな!?!」

「はわわわわわ、ど、どどどどど、どうしましうね?!?」

「ええ!?!嫌だよお!?!嫌われたくないよ俺!!」

「そんな!?!そんな!!私の尊い時間があ!!!」

凄いな。人間は感情が昂ぶっている時に自分より荒れている人間
を見ることで落ち着くと聞くが…。本当だわ。

横澤さんがかつてないほど取り乱しているのを見て、何だか冷静に
なっている自分を感じた。

「……まあ、取り敢えず手を拭きに行つてやらないと。」

「…ああ、そうでしたね。」

「横澤さん、大丈夫?」

「なにが?」

「いやめつちや荒れ狂つてたじゃん。落ち着いた?」

「…うん。ごめん。」

「それが素なんだ?」

「あつ。」

「いや別に俺は気にしないよ?…敬語嫌いだし。」

「マジ?ウケるんだけど!テンアg」

「や、やっぱり戻して！」
「……………」

「うわあ…。」
「もーっ！随分と遅かったじゃないっ！」

一悶着の後、タオルと水の入ったバケツに洗剤を引っ提げて戻ると。

先ほどの状態に加え、何故か両頬まで真っ黒に汚したところが仁王立ちで待っていた。ぶんすこしてる。

「悪かったよ…。とうかこころ、ほっぺたどうしたんだ？」

「ごっ、これは…ちよつと触っちゃったのよ、うん。」

「あちこち触るなって言っただろ…。」

「ごめんなさい…。」

全く、話を聞かない子だな。

「ほらそこ座って。…はい、じゃあ両手出してな？」

「うん。…んっ。」

両手を出させて綺麗に拭いていく。予想通り水拭きじゃ綺麗にならないかったので洗剤も混ぜながら優しく落としていく。

「ふんふん…ふんふん…♪ふふっ。」

例の歌をハミングで奏でつつゴキゲンなこころ。…よし、まだ嫌われていない。

未だにこの子のご機嫌スイッチがどこにあるのかわからないが、基

本的に俺とスキンシップを取っているときは楽しそうな気がする。
自惚れかなあ。

「…はい、終わり。…ほっぺたはどうしようかな。」

「うふふつ、綺麗になったわっ!…ほっぺも拭いてっ?」

「…はいはい。じゃあ俺も座るな。」

正面から向き合う形で座り、近くに引き寄せる。場所が場所だけに、正面から至近距離で見つめ合う形になる。

「じゃあどっちからやるかな…。」

「……………んー。」

「……………」

目を閉じて拭き取られるのを待っているであろうところ。……いや、大丈夫だ俺は。何も邪なことは考えちゃいないぞ。

だからニヤニヤしないでくれ横澤さん。

「……………エモい。」

「漏れてる漏れてる!」

「どうぞ、私なぞ気になさらず、続きを。」

「……………。よしこころ、拭いていくからな。」

「んっ。……………んふ。……………んう?……………んんっ。」

擦ったそうに艶かしい声を上げながらも決して目は開けないころを拭いていく。

やめなさい、変な気持ちになっちゃうから。あれだったらまたハンドソープのうたでも歌ってて欲しいくらいなんだけど。…ああ、口の周りも拭くから無理か。

「はあっ……………はあっ……………はあっ…!!」

「…横澤さん、息荒いし近いしうるさい。」

耳元で興奮せんでくれ。

「だって、だって！素晴し…いやもうこれはたまらんですなあ!!」
「誰だあんた。」

何はともあれ、とつても素敵なフキフキタイムは終わり…すっかり綺麗になったところは鏡で汚れをチェックしている。

その背中を眺めながら、横澤さんと。

「ああ…よかったよ、まだ嫌われてないみたいで。」

「…ね。凄くよかったですよ。」

「…横澤さんはまた違う意味でしょ。」

「うん。」

「…横澤さんってさ、思春期とか反抗期とか、そういう人間っぽいタ
イミングあった？」

「別にずっと人間だけど？」

「ほら、黒服ってさ。人間味ないじゃん？…統制の取れたアンドロ
イド軍団みたいなの。」

一体どういう人生を歩んできたらあの仕事できんだよ。とは常々
思う。

「ああそういう。…私は…というか、横澤家って一族がアレなんです
よ。」

「説明が雑。」

「弦巻に仕え続ける一族というか…。ズブズブの関係なんです。」

「言い方！」

「私自身も幼少期よりSPとしての教育を受ける日々でしたし、そん
なブレている余裕はなかったんですよね。」

「へー。…何だか予想通りでつまんねえな。」

そんなものだろうと思ってたよ。一朝一夕でどうなるものでもないだろうし、「あれ実は面接で決めてるんですよ」とか言われても何かがっかりする。

「だからここちや…お嬢様を見ていると羨ましいやら何やらで、眩しい限りなんですよね。」

「へえ。眩しいってのは同意できるな。」

「…惚れてんですか？」

「…馬鹿言ってるじゃねえよ。」

「とうと？」

「あんたらと同じ目線で、好きだつてこつた。」

「へー。…じゃあ、もし告白でもされたらどうするんです？大人な気分の○○さんは。」

「…さあわからんよ。問題ないなら付き合っちゃおつかな。」

「…ふーん。怖。」

「…あ、戻ってきたよ。」

「満足そうな顔ですねー。」

たたたと駆け寄ってきたところは、勢いそのままに俺に抱きつく。

元氣を感じさせる動作で上げた、その邪氣の無い顔で一言。

「○○っ！あたし、○○大好きよっ！」

思わず顔を見合わせる横澤さんと俺。

「…どうするんです？」

「…………お、俺も大好きだよーこころー。」

はぐらかすように前頭部を撫で回す。

今はこんな子供っぽい子だけど、いつかは告白だなんだという日が来るんだろうか。…恥ずかしさを覚えた今日の一件もあるし、少し不安になってきたな。

「横澤さん、そのニヤケ面やめて。」

「ええー？だって尊すぎる絵面なんですもんー。」

「これも全部親父さんに報告すんの？」

「…いえ？個人的なコレクションですが。」

「趣味かよ。」

あのね、横澤さんもここらと同じくらい謎多き人物なんだからね。

こころの中に落ちる影

「うーん。……あつ！……ちがうわ。」

「……………」

「……………」

「これなら……っ！だめねえ。」

「……………なあ。」

「はい。」

「あれ、何やってるんだっけ。」

「お嬢様は今、「もっと友達大量生産大作戦」の計画中でございます。……友達は生産するもんじゃねえだろ。」

何を躍起になって書き散らかしているのかと思いきや、そんなことを……。見た感じ、第一印象というべきか、こころは割と打ち解けやすいというか友達に囲まれてくんな子だと思ってた。

それが蓋を開けてみたら”友達大量生産” ……ね。

「こころ、友達いっぱい欲しいのか？」

「ええ！きつと仲良しさんは多いほど楽しいもの!!」

「そういうもんかね。」

「……………〇〇は、お友達いないの??」

「う”っ”」

無垢な顔して心を抉ってくる。こころが、心を……………ふふっ、またつまらぬ事を言ってしまったな。

「ブフツ……………〇〇様、相変わらず、お戯れが、過ぎるようで……………フェヒツ」

「横澤さん、人の心読んで笑うのほんとやめて。…あつ、また心つて言っちゃった…」

「アツハツ!!……ンフー!ンフー!」

「……ありやもう手遅れだ。」

口を必死に抑えて顔を真っ赤にしている横澤さんを尻目に、再びこちらへと視線を戻す。…あつ、こちら、その目はいけない。自分のお付の人をそんなに冷たい目でみちやいけません。

「ん、んころろ?」

「…あつ、ごめんなさい。カナコがいつもの状態に陥ってるなつて。」

「うん、それはもうどうしようもないよな。」

「ええ。」

あれはもう病気みたいなものだし、使用人ガチャに外れたと思って我慢するしかないのさ。……まだジタバタしてるし。

「で、だ。具体的に作戦は何か思いつきそうなのか?」

「んー。それが結構難しいの。……どうしたらみんなと仲良くできるかしら?」

「クラスの子とかにさ、朝の挨拶して雑談してゝって流れじゃダメなのか?」

「あー無理無理。不思議と避けられちゃうのよ、この子。」

「……あれ、いつからいたの?美咲ちゃん。」

確かうちのチャイムを鳴らして入ってきたのはこちらと横澤さん、いつもの二人セットだけだった筈。…そのあとドアが開いた気配はなかったし、黒服さんの出入りも見えない。

「ああ、こちら達が入ってくる少し前に、そこから。」

「そこ?……美咲ちゃん、うちにはちゃんと玄関っていうのがあつてね?その指をさしてるものは窓と言って、空気とか偶に虫なんかを入れるためのものなんだよ。」

「はあ？あたしは虫ですか？」

「キレるんなら玄関から入んなよ…。」

こつちがキレイたいわ。

…と、こちらでアホな二人が揉めてる間も、こころは黙々と手を動かしている。いい案が浮かんだのだろうか、先程までの独り言は全くと言っていいほど無い。

「…………じゃあ、邪魔しないように俺達はあるちで揉めようか。」

「はあ？もういいでしょ。別に怒ってないし。」

「何なんだ君は…。」

今この空間で謎ランキングを集計するとしたらTOPに君臨するのは間違いなくこの女王・奥沢だと思う。全く読めない、どころかもう意味がわからない。

とは言え、さすがにこころの友達を長いことやっているだけあつてか、邪魔にならないように部屋の端の方へ俺を引っ張っていく美咲ちゃん。めっちゃ力強いやん自分。

「…………こならいいかな。」

「なに、こんな端っこまで連れてきてくれちゃって。…告白？」

「あたしにだって人を選ぶ権利くらいあるんですよ。」

「……………続けて、どうぞ。」

どうしよう、最近の美咲ちゃんやたらと当たりが強くて心が折られるんだけど。残機がもう…………。

「実のところね…………こころ、学校じゃ有名人でして。」

「そりゃあんなぐ令嬢だもん、有名にもなるよ。」

「あいや、そうじゃなくて…。割と暗いというか、学校じゃ笑顔どころか言葉も発さない子なので。」

「うつそやろ。」

「本当ですよ。……ほら、写真。」

突きつけられたスマホに映る、窓際の席で一人弁当を突く俯きがちな美少女。……え、これマジ？

「…ね？あたしがこころの家に遊びに行ってもあまり笑ったりしないし、この家に居る間だけなんですよ…こんなところが見られるのは。」
「それは……」

確かに、それなら突然友達云々言い出したことにも合点がいく。…だが、それを知ったことでどうする？俺に何ができる？

美咲ちゃんも、何を思っただ俺にそれを伝えただ？俺なら何かができると思っただ？

「美咲ちゃん……。」

「…ん。」

「友達って、どうやったらできるのかな…。」

「知らないですよ。あたしも割とぼっち寄りですし。」

「ええ……。俺もだよ。」

「知ってますよ。…で、カナコさんもぼっちです。」

「まあ社会人だし…。大人になってから友達って難しいしね…？」

「いえ、酒癖が悪いんですよあの人。…黒服連中の中でも浮いてるみたいで。」

「ええ……?!？」

なんてこった。こころの問題が発覚すると同時に、ダメな大人二人の存在も浮き彫りになってしまった。なんてこった。

「……横澤さん。」

「ぼっちの件ですか？如何にもでございしますが。」

「あつさりと……じやなくて、こころの件だけど。」

「…それは私に訊かれても。結局お嬢様は、○○様に頼っているんですよ。」

「俺に?」

「ええ、○○様は大人で唯一信頼している方らしいので。」

それはそれは、責任重大だな…。

その後すっかり辺りを闇が支配した頃。…満足したのか、すっかり草臥れたノートと筆記用具を引っさげ、こころは帰っていった。…あと、気づけば美咲ちゃんもいなくなっていた。

俺には一体何ができるのか。こころは、俺に何を求めているのか…。

誰にも相談できず、久しぶりに一人酒を呷った夜になった。

コレカラ（終）

「〇〇大丈夫？お水飲む？」

「あーいや…今はいいかな…。」

「あたしに何か出来ることはないかしら？」

「大丈夫、心配することはないよ。こころ。」

無駄に健康なだけが取り柄の俺としたことがしくじっちゃったよ
うだ。

朝から雨が降ったり止んだり、あまり心地良い天気ではない一
日。本来なら仕事に精を出す予定だったんだが、寝起きの瞬間に自覚
するほど体調を崩し床に臥す俺が居た。

在宅で作業する仕事と言うこともあって、今日一日を快復に使う
…そう考えていたのだが。

*
*

ピンポーン…ピンポーン…

朦朧とする意識の中、部屋に響くチャイムの音。来客を示す音色だ
が、如何せん俺は活動できずに虚しく繰り返されるチャイムを聞いて
いた。

ガツチャン

「!?」

鍵が開く音がした。…鍵を持っている奴が？…いや、それ以前に
ピッキングを用いた侵入・空き巣の類を危惧すべきか。

既に体調的に緊急事態に陥っているというのに、追い打ちをかけるように……クソツ、今日厄日だな。……と内心歯噛みをしつつ何もできない俺。

「お邪魔しまー……つて。」

「……………何だ君か。」

侵入者はどうやら顔見知りだったようだ。

「…何してんの？」

「病人に向かつて言う言葉じゃないなそれは……。」

奥沢美咲。以前からちよくちよく問題行動が目立っていたような気もするが、どうやら彼女は知人の家が留守であれば持ち前の器用さで鍵をこじ開けて侵入するようだ。

おまけに病に伏せている人間に対して「何故寝ているのか」という疑問を抱くらしい。サイコだな。

「や、○○さんが体調崩すってイメージなかったからさ。寝てんの珍しいなーつて。」

「そうかい。……こう見えても俺だつて人間だぜ。」

「あそ。……こころは？」

「学校じゃないのか？……つて君も学校だろうに。」

「あ、いーのいーのあたしは。……つかしーな、ここに来たらこころに遭えると思つてきたんだけど……。」

人の家に勝手にエンカウントイベントを設定するのやめてくれな
いかな。

「だったら直接弦巻の家に行つたらいいじゃんか。」

「はあ？馬鹿じゃないの？あたしの直感がここだつて言つてんだか

ら、そりやここに来るでしよふっ!」

知らんがな。

キィ…バタアン

「およう…これは美咲の靴ねっ!」

…来たぞおい。

「美咲っ!」

「お、やっぱ来た。…どう?○○さん。」

「どや顔やめろ。」

部屋に駆け込んでくるなり美咲ちゃんの名を呼ぶところ。続いて現れるいつもの横澤さん。

美咲ちゃんの妙に勝ち誇ったようなドヤ顔に若干の殺意を覚えるが、それよりもこころが俺をガン無視して美咲ちゃんに駆け寄っている事実が胸に突き刺さった。

俺の表情を読み取ってか、横澤さんがクスリと笑ったのも相まって、俺のメンタルはズタボロ。病は気から現象により一層体調が悪化した気さえする。

「…あら?…○○っ!」

「うおっふう!!」

少し落ち込みかけた俺を察してか、全体重を掛けたフライングボデイプレス。うん、いくら君が小柄とは言え位置エネルギーがね…? 綺麗に腹に入って変な声も出た。

「具合わるいの?」

「…今の一発がトドメになりそうなくらいにはな…。」

「あら！○○って軟弱なのね。」

アレを食らえば誰でもなるさ。

「そうだなあ…悪いがこころ、今日は遊んでやれそうにないんだ。美咲ちゃんとお外にでも行つといで…。」

「○○。」

「…なんだね。」

「あなた、今とても辛そうな顔をしているわ。」

そりや寝込むほど体調悪けりやそんな顔にもなるわ。それ以外にも理由がなくはないんだけどさ…。

「…悩み事かしら?」

「……どうかね。」

「隠したって無駄よ。…あたしには全部わかるもの。」

「そりやすごいなあ…こころは…んしょつ、と。ついに超能力者になったのか。」

「○○。」

「…何だよ、ジョークだぞ、笑えよ。」

「○○、あたしは、どうしたらいいのかしら。」

いつもと違い、どんなに頭を撫でようと脇腹を擦ろうとクスリとも笑わないこころ。上体を起こし、俺の太腿に跨る様にしてこちらを向く彼女と至近距離で見つめ合う。こころは…ただ只管に、真っ直ぐに澄んだ瞳で見つめてくるだけだ。

彼女は何を伝えたいんだ。彼女は…

「あのさ、見つめ合っているとこ悪いんだけど…。あたしら居るの、忘れてない?」

「奥沢様、空気読みましょう。」

「横澤さん……うだつて、あのまま放つといたら致しかねないよ?」

「致しツ!?!……そ、そそそれは、是非カメラに」

「うっそでしょ。」

締まらんなあ……。ただ、その雑音にも気を逸らさずにこちらをガン見する膝の上のお嬢様。

横澤さんと美咲ちゃんは何やら三脚やら照明器具やら準備しているようだけど、気にしない。

「どうしたらいい……ってというのは?」

「……あたしね、ずっと友達が欲しかったの。」

「うん?」

「色々考えもしたし、お外で楽しいものや素敵なものに学ぼうともしたわ。」

ああ、あれはそういう外出だったのか。

「……色々なところに行つたな。」

「ええ。全部……ゼーんぶ楽しかった。……それでもね、あたしが変わらないと友達なんてできない。そうよね?」

「……ここ、お前は」

「……でもね。あたし、今のままで充分……充分すぎるくらい幸せだったの。」

「……それじゃあ、何がわからないんだい?」

友達が欲しいという単純な話でもなさそうだし、かと言って俺たちと楽しく遊ぶだけでもダメだと……。つまりは両立? いや、それも浅はかな問題なのか……?

「……まただわ。その顔……」

「顔?」

していればいい事なのかもしれない。

それでも、この子はその外見や実年齢とかけ離れた精神、成熟しきった大人のような…そう、ある種達観しきった目線も持っている気がする。弦巻ころろとは、只の幼い女子高校生のものでありながらその実俺なんかよりもずっと広い視野で物事が見えているんじゃないかと考えた末、素直に胸の内を明かすことにした。

「俺はな…ころろが…」

「……にしてもさ、どうすんの？これから。」

「……さあな。横澤さんも付いてるし、また来たくなったら来るだろ。」

俺のずっと考えていたこと、悩んでいたこと…こうなればいいなと、望んでいたこと。それらを全て、真剣な表情のころろに話し終えたあと。

暫く考え込むように唸っていたころろは、俺の膝の上から離れ無言で部屋を出て行ってしまったのだ。慌てて横澤さん率いる黒服軍団が追いかけていったが、意味も分からず取り残されるのは当然俺と美咲ちゃんなわけであって。

「ふーん。ねね…ころろさんさ、実は何か案があるんでしょ。」

「あん…？何だね急に。」

「あたしね、使えるんだよね。超能力。」

「そりやすごい。…で？唐突に訳分からんことを言い出した理由は何なんだね。」

「…ころろさん、大人じゃん？」

当たり前前のことを急になんだ。そりや君らから見たら大人だろう

き。

「大人だと不都合でもあるのか?」

「大人ってさ、都合悪いこととか見栄えが悪いこととか…そういうの、全部隠しておくもんだと思ってたんだよね。」

「そうらしいな。」

「○○さん、しないじゃん。」

「…子供だって言いたいのか。」

「そうじゃなくてさ。…ところが○○さんに懐いてるのって、そういうのが理由なのかなって。」

懐かれてはいるんだろうけど、何が原因とは確かに考えたことはなかったな。横澤さんは父親みたいだからって言ってたけど。

「だから…心配なんだよ、こころは。」

「心配…か。」

「…だから、道が見えるなら、示してあげて欲しいと思う。」

「…なんだ、今日は詩人だなあ美咲ちゃん。」

「茶化さないで。…他に良い言い方が…無くてさ。」

普段茶化してるのはどっちかと再三問いたかったが、この子もこの子なりに心配なんだろう。大事な友達が。

「…俺の案、か。道になるかは分からないが、確かにあるっちゃある。」

「…でもな。」

「うん。」

「……凄く冷たいことを言い渡すことになると思う。」

「…うん。」

「それに、俺にはどうしてやることもできないし、力になりようもないんだ。」

予てより考えていたこと。悩み続けていたこと。

それは何時からだったか：俺とじゃなく、沢山の仲間や友達に囲まれて、太陽みたい笑顔を振りまく。そんなところが見てみたいと。…その為には、俺がこうして面倒を見続けていちゃいけないとも。

「…あたしが、あの子を見守る番なんだね。」

「ああ。」

「…あんまり無茶は言わないですよ？」

「勿論バックアップはするさ。あいつが無茶言ったり、理解が追いつかなくなったら俺に相談するといい。」

「…すっかりお父さん気取り、ですか。」

「茶化すな。」

何だかんだでこの子：美咲ちゃんが居てやれば、こころは安心して動き回れると思うんだがな。こうして気楽に話せる仲でもあるし、こころの話になると一から十まで言わずとも通じるような子なんだから。

「と、ころで、さ。」

「……ん。」

「○○さんって、今日は体調崩してたんだよね。」

「……ん。…ん!？」

そうだった。…あ、なんか改めて意識したらすごい具合が悪い気がしてきた。

「あ、あー……これ言わない方がよかった……やつ？」

「……かもな。」

部屋と部屋の罅。引き戸を閉じて区切ることもできるレールの上で、すっかり力の入らなくなった膝を崩し：俺は、強制的な眠りに就

いた。

*
*

「○○っ……○○っ…!!」

「…んむ？………お、帰ったかこころ。」

「帰ったかじゃないでしょ!!………どうしてそんな無茶するの!!」

「………こころはやさしいなあ……。」

「…やさしいとかじゃなくて……。」

「俺はほら、もう寝てるだけで治るからいいんだ。…それよりもな？」

恐らく黒服連中に運ばれたのだとは思うが、再びベッドに詰め込まれていた俺。強引にも寝かしつけられていたせいも、身体は先程よりずっと楽だ。…ほら、このとおりに起こしてみても全く問題ない。

「こつちにおいで、こころ。」

ベッドの空きスペース…俺の右側にあたるソコをぼんぼんと叩いてやる。複雑そうな表情でトコトコと歩いてきて寄り添うように腰掛ける。こちらを見上げてくる顔にいつもの無邪気さは無い。

「…なんつー顔してんだお前は。」

「うにゅっ………ぷあ。…もう、いきなりレディーの顔を撫でるなんて、マナー違反だわ。」

「ははは、怒んな怒んな。」

口元、頬、耳ともみくちやに撫で繰り回してやると、少しか表情が柔らかくなったようで。

「…あのね、あたしさっきまで少し考えてみたの。」

「ん？」

「やっぱり、あたしは○○にもっと笑顔になって欲しい。そのために邪魔になつてることがあるならあたしが全部解決して…」
「(´▽｀)」

早口で何かを伝えようと必死になつているところを制する。美咲ちゃんを見やると真剣な顔で一つ、頷きを返してくる。：言うしかないか。

「…(´▽｀)、もううちには来ないほうがいい。」

「…えっ?」

「あのな?…別に(´▽｀)のことが嫌いになつたとか、邪魔になつたとかそういうんじゃないんだ。」

「じゃあ、どうして…」

「俺の望みはな?…さっきも伝えたと思うけど、お前がもっと世の中に出て、いろんな人を巻き込んでみんなで仲良く、明るく…ああもううまく纏まらねえな…」

「……………」

「お前と一緒にいて、お前と接することでどんなに落ち込んでいる時でも不思議と明るい気持ちになれるんだ。…これってな、すっげえ才能だと思ふんだよ。」

もっと大きな舞台へ、大きな…世界へ。

「だから、その才能をもっと外に向けるべきなんだ。…俺だけじゃなく、そう…世界とかな?」

「…せかい?」

「ああ。今の(´▽｀)は、「俺が笑顔になるように」ってだけ考えてるだろ?」

「そうよ。あなたが全てだもの。」

「…ははっ、こりゃ聞き様によつちや素敵な愛の告白だぜ。」
「??」

そんな真つ直ぐな瞳で言ってくれちゃって…。不覚にもドキリとしたわ。

見ろ、横澤さんも美咲ちゃんも苦笑いだ。

「話を戻そう。…でも、折角笑顔って素敵なものにするなら俺一人じゃなくて…世界中のみんなを笑顔にするってのはどうかな？」

「せかいの…みんな…。」

「おうともよ。…それなら俺やお前だけじゃなく、世界中が幸せになる。勿論俺も笑顔になるし…ここらならきつと出来ると思う。」

「でも、あたしは…。」

「いいじゃんか、今がどうだって。…俺の前ではこんなに明るく居られるんだ。きつと、素敵な仲間ができれば少しずつ変わっていけると思うんだよ。」

仮に、俺には懐いているから素直に笑っていられる…のだとしたら、同じくらい信用できる見方がいっぱい居ればもう少しここらしくアグレッシブに行動できるんじゃないだろうか。

あとはその持ち前の不思議な感性と周りを笑顔にする魅力のまま、世の中を引つ掻き回していきやあいんだ。そして一人でも多く、俺のように幸せな日々を授かる人が増えたら…。

「…あたしに、できるかしら。」

「こころじゃないとできないことだと思うよ。…短い間とは言え、ずつとお前を見てきた俺が言うんだ。」

「そう…ね。…そうしてくれたら、○○は嬉しい？」

「勿論。…正直なところ、世界がどうのつていうのは一番大事なことじゃあないんだ。俺にとってはこころが一番大事で…こころが幸せになるのが一番で…。」

「…わかったわ○○。あたしやってみる。」

「…ん。」

両手をがっしりと握られる。これからこころがどんな選択をしてどんな道を歩んでいくのかはわからない。それでも、今ここにあるこの温もりは俺を裏切ることはないだろう。

こころは強い子だから…きつと世界中を、いや世界そのものを笑顔にしてくれることと思う。

「……あたしね。」

「なんだい。」

「〇〇が大好きよ。…世界中の誰よりも、一番大切なの。」

「そりや光栄だ。」

「だから、きつとやってみせるわね。」

「…まずは何から始めるんだ?」

「そうね。…誰かさんが「家に来るな」なんて言うから寂しくなっちゃったし…ええと。…お友達を集めて、皆で音楽をやるのなんてどうかしら?」

音楽か。俺といっても触れてこなかったジャンルだ。確かに音楽は良い案だが…技術やその他諸々は…

「音楽ね…。オーケストラでもやるのか?」

「んーん。もつと規模は小さくていいの。…えつと、バンド?…くらいの。5〜6人くらいで成り立つものがいいわ!」

「お、ノつてきたな?」

何かを閃いてからのこころは兎に角凄い。スタート地点からゴールまでを既に見通せているというか、筋道も順序も一瞬で頭の中に構築されていくのだ。

きつとずつと傍で見てきた俺と美咲ちゃんには当たり前のよう理解できることでも、ほかの人間が相手となるとそうはいかないかもしれない。それでも、彼女の中に道は出来ている。

「ふふっ、なんだか楽しくなってきたわ。」

「…バンドとなるとバンド名が必要だよなあ…。」

「うーん…。…名は体を表すって言うじゃない？」

「言うなあ。」

「だから、あたしの目指す目標というか…達成したい想いを込めたものにしたいの。」

「込めたい想いか。」

「ええ。最終的には世界を笑顔に、そして幸せな世界にするのが目標だから…。」

言い淀んだまま、上目遣いでこちらを見やる。

…ここで一旦案のブーストが切れたか。…こういう時は少し視点を
変えるようにインスピレーションの刺激を…。

「音楽をやるってことは、世界にこころの想いを発信することになる
よな?。」

「ええ、そうね。」

「そうなるよ、その音楽に載せたを受ける世界は…つまるところ、こころ
のお客さんかファンになるわけだ。」

「…そうなれば嬉しいわね。」

「なら、「世界を幸せなものに変える」んじゃないかって、「幸せな世界と出
会う」ってイメージでもう少し考えてみよう。」

「世界と…出会う。……………ああ!!」

きた。

こころの瞳が一段と輝きを増す。キラキラ光る黄金の双眸。これ
がこころが何かを閃いた時の合図なのだが、俺の仕事も何度この閃きに
助けられたか。

「○○、”世界”さんは幸せな笑顔になったら、あたしと友達になって

くれるかしら?」

「これまた凄い発想だなあ…。うん、きつと世界もこころと友達になりたくてウズウズしてると思うぞ?…今はまだ気づいていないかもだけど。」

こころが輝き出した。同時に、世界も動き出すんだろう。

「…世界さんって、どんな楽しいことを持ってきてくれるかしら??」

「きつと、こころの知らないことをいっぱい知ってると思うぞ。」

「わあ…。ふふふ、何だか楽しみになってきたわ!」

「それはよかった。…そんじゃ、世界さんに気付いて貰えるようなバンド名にしないとな。」

「別に、気づいてもらえなくたっていいの!…あたし達から世界さんを見つけるわ。」

「…一体どうやって。」

「簡単よ!…○○、こんにちは!」

「??…こんにちは、こころ。」

「…ふふつ、ほらね?」

それは、全ての始まりの言葉。

「挨拶をされたら、ついお返ししちゃうわよね?」

「…ほう、考えたなこころ。」

「だからあたし達のバンド名は…」

大丈夫だ。こころ、お前なら世界中を巻き込んで全てを幸福で埋め尽くすこともできるだろうさ。

「こんにちは!…しあわせなせかい!!」

おわり

【北沢はぐみ】Naughty small ani
mals!!

おかいもの

仕事終わり。

少し年の離れた妹、はぐみと一緒にスーパーに寄る。

学校終わりに友達と一緒に職場に来たので、解散後もそのまま待っていたそうだ。

俺の職場は複数のショップが入った複合型の施設で、地元民も結構利用している。

これといって何か約束がある訳じゃないが、学校と職場が近いこともあって

仕事終わりの俺を待ち構えているはぐみに遭遇することは珍しくない。

頻度で言うと週1、2といったところか。

今ではすっかり、よくはぐみが待っているベンチを一度見てから帰るのが日課になっている。

「…にーちゃん聞いてる?？」

「あ、ああごめん、何だったっけ？」

「もー！折角迎えに来てあげたんだから、お話くらいちゃんとしてよねー！」

ぶーっと膨れた顔をする。

えーっと確か、先輩が迷子になった話をしていた気がするな…。

「あ、それ。そっちのネギ取ってくれ。」

「丸いの?長いの?」

「長ネギの方。」

「りよーかーい。…んしよっ。

あ！見てにーちゃん！他のはここまで白いのに、これだけここまで緑だ！」

母さんから頼まれていた食材達を買って帰らなければならないのだ。

手始めに、入口から割と近いところにある青菜コーナーから回る。長ネギは特価らしく、フルーツコーナーの近くに一本ずつバラ売りされていた。

はぐみはまだ、玉ねぎと長ネギの違いがあまりわかっていない。もう高校生なんだがな…。

「ごらごら、振り回さない。

ネギは武器じゃないぞ。」

「はあーい。ごめんなさーい。

それで、次はなに??」

「えーつと…。」

スマホを取り出し母さんからのメールを表示させる。

母さんはまだやつとガラケーを使える位なので、家族のトークグループにはいないんだ。

「ふむ…。結構あるな。」

「みせて！ねーねー！にーちゃん、はぐみにも！はぐみにもー！」

「わーったから、大きな声出さない。

他のお客さんびっくりしちゃうだろう?…ほら。」

「へへー。…ふん、ふんふん。」

「じゃあはぐが買うもの見る係な？」

兄ちゃんがカゴ持ってるから、何買うか教えてくれ。」

「りよーかい！えつとね…あ！次はコロッケ買うんだって！」

そんなこと書いてあったかな…？

母さんは割と料理好きというか、出来合いの物をあまり好まないの
で

惣菜の類を指示される事はまず無いはずだが…。

…ははあ。

はぐみを見やると明後日の方向を向いており、手元のスマホなどま
るで見ちやいない。

視線を追うと——惣菜コーナー。

「はい、スマホ没収。」

「へっ？あつ！えっ、あーっ！

なんで?!にーちゃんなんでー?!」

「今、ズルしようとしたろー。」

「う…だって!にーちゃん!コロツケはほら!いつも、その…おい
しい!」

「ん。言われたものだけ先に買っちゃうぞー。」

「むーっ!!!」

はぐみは母さんの作るコロツケが大好きだったな。

惣菜のは…食べたことは無いはずだしよくわからんが、まあコロツ
ケなら全部同じなのか。

甘やかしてばっかりでもいけないし、ここは不機嫌なはぐみを引ッ
張って歩くしかないな。

目的のものは、えーと…。

うん、これだけなら場所もわかるしすぐ終わるな。

「よし、はぐみ。

今から言うものをさっさと買っちゃまおう。手分けして集めるんだ、
いいいな?」

「ふーん、しらないもん。

にーちゃん一人でやればー?」

「ほう…。じゃ、ご褒美は兄ちゃん独り占めしちゃうからな。

…じゃーな！」

「えっえっ、まって…ご褒美って何!？」

にーちゃんはどうしてももらえるの??？」

「兄ちゃんはちゃんと頼まれごことをこなせるからな。

でもはぐは駄目だ。」

「えー…はぐみもできるよー！」

…じゃ、じゃあ！さっき見たもの、全部カゴに入れたらいいんだね
!？」

「どうかなー。」

「かしてー！」

にーちゃんはここにいてね!!」

ネギが一本ぶっ刺さっただけのカゴをひったくられる。

走り出す背中を多少の不安感から見送り、自分の買い物に向かった。

その後、ここで待てと言われた場所まで戻ってきたが…

流石にこんな道の真ん中に突っ立っている訳にもいかないので、お菓子のコーナーで暇をつぶす。

やがて…

「もー…にーちゃん！」

どうして動いちゃうの!!はぐみ、すっごい探したんだからね!」

汗だくのはぐみが現れた。

「なんだ、随分早かったな…。」

どれ、見せてみ。」

「ん！」

突き出されたカゴを受け取る。

お前はカンタか。

……おお、マジで一度でリストを暗記していたのか。
全て母さんの要望通りだ。俺なんか未だに迷っちまうコーヒーの
種類も正解を入れている。

「よし。よくやったはぐ。

会計して帰るぞー。」

「へへー。はぐみ、すごい？すごい??」

やんちゃな笑みを浮かべて体を摺り寄せてくる。

こちらを見上げている頭をぽんぽんと軽く弾ませるように撫でて
やる。

くすぐったそうに受け入れ、えへへと小さく笑った。

その後レジを通過。

何故かいつもやりたがる袋詰めを任せ、店を出る。

帰り道、先ほど不機嫌だったことなどもう忘れてしまったのか
上機嫌で今日の出来事を教えてくれる。

無事に家に着き、夕食。

食卓には当初予定していなかったコロツケも並んでいた。

母親に習って初めて作った俺のコロツケ。

妹よ、これが褒美だ。

「たんとお上がり。」

「いったただっきます！」

……にーちゃん、これなんか違う。」

普通に売り物をプレゼントしたほうが良かったかもとちよつと後
悔した。

やわらか すもう れすらあ

久々の平日休み。

親からの勅命を受け、俺達兄妹は隣街のさらに隣街を目指してドラ
イブ中だ。

勿論運転は俺、ナビ&賑やかし担当は妹のはぐみだ。

平日ということもあつてか道は空いている。

二時間近くの運転だが、前後の車間にも余裕があつて運転のさほど
得意ではない俺にも音楽を鳴らす程の余裕が生まれている。

「にーちゃんにーちゃん、次の曲にしていいい?」

「いいよ。：嫌だったか、ハインリツヒーズ。」

「んーん。嫌じゃないけどね、うーんとね、もっと元気な方が楽しい
なつて思つて。」

「いいよ、そのスマホで流してるから、好きなの選びな?」

「わあー!」

ふんふんふん…♪と口ずさみながらどんどんと左にスワイプして
いるのだろう。

最初の一瞬のみ聞こえる曲が次々とチェンジされて行く。まるで
イントロクイズだ。最終問題クラスの難易度だが。

「…はぐ?その左上の↑矢印押してみ?

……そうそう、ずらーっと出てくるだろ?」

「ほんとだ!!ここから選ぶんだね。」

さっすがにーちゃん、めかにつくだね。」

「違ふよ。」

「…えつとね……これ!」

軽快な前奏が流れ始める。

確かにほぐみの好きそうな、ポップでキャッチーな、明るいテンションの……

「あ、お前、自分のバンドの曲で来たな??」

「にひひー。特別に、隣で生披露してあげるよ!!」

「え?これはぐも歌ってるんだっけか?」

「うん!サビだけ!!」

「…………今もサビだけ歌ってくれるの?」

「うん!そこ以外のところ何て言ってるか知らないんだ。」

知つとけ。

お前ベース弾いてんだろ。信じがたいけど。

「そっかー。…………もうすぐサビだぞ。」

「うん!歌うよ!」

♪それゆけ!わちやもちやわちや…あ、これ2番だったや。」

「…せめてサビだけなら覚えときなさい。」

本番は一体どうしてるのやら…。

この一見アホそうな妹がバンドをやってる。

それも、触った事もないベースを弾きながら歌まで歌っている。

更にそれが有料で配信されているというこの事実。全部があまりにも非現実的だが、この子も外に出るとしつかりできるのだろうか。

うーむ、世の中不思議でいっぱいだ。

「他の曲で、完璧に歌えるのは入ってるか?」

「んーとねー…。」

あーこれ!」

「なんて曲?」

「わ…わいてんぜろてんしてんぜろ。」

「は?」

「わいてんぜろてんしてんぜろ!!」

「……しらん。そんなの入ってたか?」

「えー、にーちゃんの携帯だよ?」

もう流しちゃうね!!……歌ってもいい?」

「歌えるならどうぞ。」

ふむ……ふんふん……

ああ……ああいいねえ……

「はぐ、ノリノリなところスマンが、これ”ヨロ”って読むんだぞ。

わい、おー、える、おー、だよ。」

「へー。」

「Afterglow、か……

幼馴染って、響きがもういいよなあ……。」

オーゼロ、エルエルを0、Lをしって読んでるこいつがマトモに歌を歌える訳無いだ
ろと改めて思うが……

しっかし上手いなおい。

あ!サビでは”ヨロ”って読めてんじゃねえか!

その後も目的地に着くまで、他バンドオンリーのはぐみソロライブ
は続いた。

無事予定もこなし。

帰りに夕食をと、大盛りで有名な店に寄る。

一人前こそ普通だが3人前サイズ、4人前サイズと見た目も実量も
インパクトが増していく。

「はぐみね、この一番大きいのにする。」

「や、絶対無理だって。4〜6人前って書いてあんど。」

「でも、すもうれすらーってかつこいい！」

「相撲レスラー…飯のサイズに付ける名前じゃねえなこりや。」

「ねーねー、にーちゃん、これがいい！」

「ええ…絶対残すだろ…」

「兄ちゃんと半分こする？」

「うーん…じゃあ、まずこれだけ注文して、全部食べれそうだったらにーちゃんも頼めばいいと思うっ！」

我儘か。

「はぐ…お前天才だな。」

結局まずはぐみのオムライス・相撲レスラーサイズのみ注文することに。

あ、ドリンクバーもつけた。

「おお…こりや圧巻だ。」

「山だ…。山が出来てるねにーちゃん！」

「これはすごい…写真撮つとこ。」

「あ、はぐみその写真欲しい！こころんに見せたい！」

「なぜこころちゃんに…。」

「なんかね、こころんのおっぱ」

「ん、言いたいことはわかった。」

こころちゃんとは、はぐみの友達で、同じバンドの仲間だ。確か。身長割に大変素敵なものをお持ちなのは知ってる。

「まあ、話はいいから、冷める前に食っちゃまおう。」

「もう半分食べたよ。」

「大食いの人かお前は。」

そういえばこいつ超早食いなんだっけ。
いつも量が多いせいで早いイメージがないけど、改めて見ると掃除
機みてえだ。

みるみるうちに山は削られて行き、綺麗に整地されていく。
あ、これ全部行ける流れだわ。

「はぐ、全部食べられそう?」

「うん、よゆー。」

目の前で見ていても信じられないが、これなら安心だ。

俺はまあ、そんなに大食いな方じゃないし、普通に1人前でいいや。
再度店員を呼び、自分の分とサイドメニューを注文する。

オーダー取りに来た店員のお兄さん。その表情、わかるぜ。

態々取り皿と取り分け用のスプーンまでくれたのに、小さい女の子
の方が空にしてるんだもんな。しかもこの速さで。

「なあ、すげえ食った分ってどこでどう消費されてるんだ?

はぐ、背も大きくないし太りもしないだろ?」

自分の分が来たが熱くて食べられないので冷ましつつ訊いてみる。

もしかしたら恐ろしく燃費が悪いのかもしれない。

テーブルを挟んだ向かい側でジンジャーエールと野菜ジュースを
混ぜて遊んでいた妹は、俺の質問に身体をまさぐり始める。

やがて、とことこと隣に来たかと思うと俺の手を取り。

——自分の胸はぐみに押し当てた。

「!?」

「なんかね、最近柔らかくなった気がするからここかもしれない!

ここころんみたいになれるかなー。」

妹よ、いつのまにかちよつと成長しちゃって…。

お兄ちゃんは、複雑です。

「はぐ、今の、兄ちゃんだからいいけど、ほかの人にやっちゃだめだぞ？」

「えー？うーん、しないよ。」

にーちゃんでもそうだけど、擦りたいからあんまり嫌！」

「うーん理由は不安だけど…まあいいか。」

あまり知る気がなかった新事実も知りつつ、満腹になった二人は帰路に着く。

案の定というか何というか、行きであれだけ乾燥いだ後満腹になった妹は、帰りの助手席ですやすやと寝息を立てていらっしやった。

うん、寝顔も天使だなあ…。

そのぷにぷにとした頬を暇つぶしに弄りつつ、すっかり対向車の居なくなった道をのんびり帰るのであった。

頬を突つついた時にあの膨らみの感触が頭を過ぎったのは内緒だ。兄としても、それはいけない。

どんどん！はぐみだよ！

「にーちゃんにーちゃん!!」

ドンドンドンドン

「……………」

「…あれ？いないのかな??」

「いないんじゃないの?…ほら、お仕事とか。」

「うーん…あ、でも!玄関にくつ、あったよ!」

「ねーねーはぐ、ここがお兄さんの部屋??」

「そーだよかーくん!はぐみの部屋の隣なの!!」

「…かーくん?」

「いいなあ。私、お姉ちゃんだから上の兄妹が羨ましいよう。」

「そーなんだ!えっへへ、いーでしよー!!」

「急に自慢…。」

「みーくんは?みーくんもにーちゃん羨ましい??」

「んー…あー、はいはい。あたしもお兄ちゃん欲しかったなー。」

「…みーくん…?」

何だか騒がしかったので居留守を決め込んでみたら…ああ、これはこれで面白い。

はぐみ、友達と一緒にの時はこんな感じなのか。

つつても、前にバンドのみんなと会った時もこんなだったか。

…まあ、こんな特殊な呼び名の友達は初めてだが。あ、着ぐるみのやつはいた。あれはなんだったんだ…。

「にーちゃんにーちゃん!!いないのー!」

「おっといけねえ…ええと…。」

…どうしたー?何か用事かー??」

「!!お兄さん、いたね!!」

「うん！やったねかーくん!!にーちゃん、開けてもいいーい?」
「いいぞー。」

ガチョ

「おっじやましまあーす!!」

「にーちゃん!友達連れてきた!!」

「…ども。」

「おお、いらっしやい。…で、何故俺の部屋に通すのかね妹よ。」

居間なり自分の部屋なりで遊んでなさい。

「んとねー。かーくんが、にーちゃんに会いたって言うから連れてきたー。」

「かーくんっていうのは…」

「はい!!私、戸山香澄っていいます!!かーくんとお呼び下さい!!」

「…ああ、”香澄”のかーくんか。女の子なのに、くん付けでいいのかい??」

「いいんです!呼びやすいのが一番!!」

ああ…元気いっぱいだ…。

はぐみの友達って感じるなあ…。同じ匂いがする。

…や、変態とか言うなよ。そういう匂いじゃねえ。

「そっかそっか…。それじゃあ、そっちの君がみーくんか。」

「ああ、聞いてたんですね…。」

「まあほら、はぐみの声はよく通るから。」

「ふーん。」

「…えっと、みーくん。君の名前は?」

「ふふっ…美咲です。奥沢美咲。」

「なんで笑ったの。」

「いや、訊き方…。ぷふっ。」

「そんな変だったかな…。まあいい。」

君、どこかで会ったことないかな。」

「ふふっ…。ふふふふ…。」

えっ、どこがそんなにツボ？

「はー…。お兄さん、ナンパじゃないんだから…。」

「ああなるほど。…で、どう？」

「確かに会ったことはありますね。お兄さんが気づいているかはわかりませんが…。」

どこで思っただんです？」

「やっぱりか…。何というか、聞き覚えのある声だったんだ。」

でももうちよつとテンションは高めだったような…。」

「…素敵な耳をお持ちで。」

「もー！にーちゃんとみーくんだけでお喋りしないで！

はぐみとかーくんが置いてきぼりだよ！」

「はわあ…。」

そっかそっか、そんなにむくれるな妹よ。

そしてとなりのかーくんは何故そんな阿呆面で惚けているんだい。

「ごめんなあはぐみ…。」

あとでいっぱい遊んでやるから、今は折角来てくれたお友達と遊んでおいで？…な？」

「うう…わかったよ…。」

「あと、かーくん？そんなに見つめないでくれ？」

かーくんも、向こうではぐみと遊んでやってくれ。」

「香澄…です。」

「ん、さつきも聞いたぞ。戸山香澄ちゃんな。」

「香澄って呼んで!!お兄ちゃん!!」

「うわちやー…。戸山さんが堕ちた…。」

「お兄ちゃん？君は俺の妹じゃないだろ…。」

「こんなお兄ちゃんがほしい！ほしいほしい！！

ねね、はぐー私もお兄ちゃんほしいー」

「ええ!?だめだよかーくん！にーちゃんのはぐみのにーちゃんだもん
!!」

「うーん…。」

「あーあ。收拾つきませんねこりや。」

「みーくん、パスしていい?」

「や、勘弁してください。」

「頼むよー…ミツシエルー…。」

「ふふつ、そこまで気づいてたんですね。」

「まあね。はぐみの前では言わないけど。」

「言っても気づきませんよ、多分。」

「そっかー…。」

「で、これどうするおつもりで?」

「どうしよっかなあ。でも、もう一人妹ができるとしたら美咲ちゃん
みたいな大人しい子がいいかなあ…。」

「…なりましようか?妹。」

「まじ?うれしいわー。」

「よろしくねー。おにいちゃーん。」

「引くほど似合わないね。」

「でしょう。」

「!!見てかーくん!!」

「はっ！私たちが揉めてる間に、美咲ちゃんにお兄ちゃん取られ
ちやっただ!!」

「……いえーい。」

「「ずるい!!」」

嵐のような妹軍団は、騒ぐだけ騒いであつという間に帰って
いた。

なんだっ
たんだ。

年に一度、特別なハグみ

パァン!!パァン!!パァァン!!

クラツカーの乾いた祝福が鳴り、気持ち程度の紙吹雪とセロファン
の紐が視界を埋める。

クラツカーを持つ者、祝福を受ける者。うん、みんないい笑顔だ。
誕生日はこうじゃなくちやな。

*＊

「にーちゃんにーちゃん!!」

「お、なんだはぐみ、まだ学校行ってなかったのか??遅刻するぞ?」

「ねね、今日何の日だか知ってる??」

「ん、お前の誕生日だろ?」

「せいかーい!昨日の内に予習してた甲斐があったね!」

「予習で…あの地獄のようなコール&レスポンスのことか。」

朝、身支度を整え出勤に備えていると制服姿の妹が駆け寄って
くる。

時間的にはかなりギリギリだが、よほど楽しみなのだろう。昨日か
らこの質問の繰り返しだ。

因みに、地獄のコール&レスポンスとは

はぐみ「せい、ほーお!」

俺「ほーお。」

はぐみ「せい、ほーお!」

俺「ほーお。」

はぐみ「ついに迎える30日!この日の記念日なーんだ?」

俺「一体なんだー、なんなんだー。」

はぐみ「忘れちゃいけない誕生日!年に一度の誕生日!せい!」

俺「誕生日！誕生日！誕生日っぴっぴー！」
はぐみ「よくできました！」

という頭の痛くなるやりとりのことだ。

仕込みの時間も含めて、昨日はほぼ半日これをやった。

誕生日っぴっぴー！のリズムが頭から離れない。

「今日、学校終わったら一緒にケーキ受け取りに行くんだろ？」

「そう！今からすごい楽しみ！」

「そうかそうか、じゃあ無事に帰ってこないとな。」

…ほれ、頑張ってる行ってらっしゃい。」

「うん！にーちゃん、行ってきます!!」

あの遣り取りこそ今年が初めてだが、誕生日の朝は毎年こんな感じだ。

うちはサプライズをしない。ケーキもプレゼントも、はぐみが一緒に見て一緒に決めるのが慣例だった。

「さて、と。俺も一日頑張るかあ。」

ケーキの受け取り、楽しみだな。

昨日の夜のうちに、担当したパティシエから写真が送られてきてたっけ。

…あいつも立派になったもんだ。

その後、はぐみに負けないくらい楽しみでソワソワしていた俺が部署全体にイジられたのはまた別のお話。

「た、ただいま!!」

急ぎ足のまま玄関に飛び込む。

息を切らし挨拶を終えると、外出の準備万端のはぐみがそこにはいた。

「にーちゃん、ダツシユしたの？」

「おう、プチ残業しちゃったからな。」

「でも全然待ってなかったよ！いいこ!!」

「おう、いくぞ。」

スマホと財布だけをポケットに押し込み、ビジネスバッグは玄関に放り投げる。

はぐみの左手を忘れずに握り、ケーキ屋へ向かう。

毎年依頼している行きつけも行きつけ。商店街の人気店『洋菓子の七日堂』へ向かう。

昔同級生だった「毛利」という男がパティシエとして働いているその店は、ちよくちよく奇抜な催しをやっては商店街を沸かせている。今回もその「毛利」に頼んでいるため出来栄えについては全く心配していない。

俺が見たいのはそのケーキを食べる時のはぐみの笑顔だけだ。

「にーちゃん、今年もあのお店なの？」

「そうだよ。違う方が良かった？」

「んーん。あのお店ね、こころんもお気に入りだね、たまに遊びに行くんだ。」

「ケーキ屋に遊びに行くってなんだ…買い食いか？」

「ちがうよっ。たまにだけどね、お店の前でプロレスやったり追いかけてっこしたりしてて楽しいんだ！」

「…ああ、そういやそういう店だったな。」

あの店には確か、何年もケーキを作っていないパティシエとケーキ以外のものなら何でも作れるパティシエが居ることでも有名だ。

奇抜すぎてつい通っちゃうんだよな。

…と思わず思い出し笑いをしていると件の店の店の看板が見えてきた。

「ななにちどー!」

「…そうだな。」

やや早歩きで入った店内は涼しく、人もまばらといった感じだったが、カウンターの男と目が合うや否や声をかけられる。

「あつ、北沢さん? 受け取りですね〜?」

「あ、はい。…ほらはぐみ、ちゃんと受け取ってな。」

「うん! ちゃんと持つよ!」

「いまお持ちしますね〜」

裏に消えた男は1分とせず箱を抱えて戻ってきた。

「はい、それではこちらになります。

傾けないように気をつけてお持ちくださいませ〜。」

「あ、はーい。んじゃ支払いを…。」

「はい…はい……。ちようどですね。」

「またお待ちしてますね〜。」

「はーい、どうもです。」

「はぐみの誕生日のケーキ、作ってもらってありがとうございます〜!」

はぐみは凄く幸せです!! はぐみ、頑張っって帰ります!」

元気よくはぐみが伝える。

うん、お礼もちゃんと伝えるし、最高に可愛い妹なんです。

会計をしてくれた男もにっこにこだ。

そんなこんなでブツを受け取った俺たちは慎重にその箱を抱えたまま家路を急ぐのであった。

「たっだいま〜！」

「ただいま。」

我が家の玄関からは、先程は感じなかった料理のいい匂いが漂い始めていた。

そして何よりも…

「靴、多いなあ…」

「みんなもう来てくれてるんだね!!…にーちゃん、はぐみ、ケーキ届けてくるね？」

にーちゃんは着替えとかお風呂とか済ませちゃいなさい！」

「おっ・おう。」

張り切ってるなあ…。

それではお言葉に甘えて、自宅モードになっちゃいますかね。流石にずっとスーツでいるのも窮屈だ。

その後、のんびりし過ぎてはぐみに怒られることも少々ありはしたが、漸くパーティーへ。

「今年はまだすごいなあ…」

壮観だった。

我が家の食卓テーブルに来客用のテーブルをくっつけ、長机の様にセッティングされている周りを、やいのやいのと若い女の子達が囲んでいる。

何度か会ったことのあるバンドのメンバーはもちろん、香澄を始めとして何人か知らない子もいるな。

おそらく全員同級生やらバンド関係の知り合いだろうが、お兄ちゃんは幸せだ。こんなにも沢山の人が我が妹の誕生を祝ってくれるなんて。

…あつ、泣きそうだ。

「おにーちゃん、だいじょうぶ？悲しいの？」

「…うん、大丈夫だよ。ちよつと感動しちゃってね。」

…というか香澄？君はあつちのグループには混ざらないの？」

「はい！おにーちゃんとはたまにしか会えないのでこういう時に一緒にいたいんです！えへへ…。」

「そかそか。…でもほら、今日のはぐみの誕生日をお祝いしてくれると嬉しいな。」

この子だけは別の目的で来てたのかな。

でも勿論、日頃はぐみと仲良くしてくれているのは知っているし、すごくいい子だ。妹の友達がこういう子でよかったよ、ほんと。

「はあい、それじゃあみんな？」

そろそろパーティ、始めるわよ？」

ワアアアアアアアアアア！！

「すげえや、もう歓声のレベルじゃんか。」

母親の一声にバラバラだった参加者より一斉に歓声が上がる。

今年もいよいよ始まる。一年に一度の大イベントだ。

「それじゃあはぐみ？まずは主役から挨拶お願いね？」

「うん！今日はみんな、はぐみのために集まってくれてありがとう！！

…誕生日っていう嬉しい日を、みんなと一緒に過ごせてはぐみはとっても嬉しいです！

いつこ大人になったはぐみと、これからも仲良しでいてください
！！」

ああ…妹が眩しい。

ちゃんと挨拶もできる、いい子だあ。

拍手の中で皆立ち上がり、一人一つ配布されたクラツカーの紐に手をかけ――

「いやあ…今日は盛り上がったなあ…。」

若い子達の騒がしさが帰った後。

母親と一緒に片付け。

はぐみは余程楽しみ疲れたのか、リビングのソファで寝落ちしている。
る。

溢れそうなヨダレがとつてもチャーミングだ。

「よし、こっちの片付けは大分終わったし…。」

〇〇? はぐを部屋まで連れて行ってあげて?? このままここに寝かせとくわけにもいかないし。」

「…そうだなあ。じゃ、あとは母さんにパスするわ。」

小柄故に重さを感じないレベルの妹を抱き抱え、部屋へと向かう。
俗に言うお姫様抱っこだな。これもまだ暫くは兄である俺の特権であると思いたい。

「…よし、とりあえずはこのままベッドに…。」

「…んう?…にーちゃん?」

「お、起きたか?」

「ん…寝ちやつてた…?」

あ、にーちゃんに抱っこされてるう…えへへへ…。」

「こらこら、しがみついたらベッドに下ろせないだろ??」

「だって今日あんまりくっつけなかったから…。」

ぎゅーってしたい。」

「…しかたないなあ。一回、ベッドに下ろすぞ?」

「…んう。」

「よし、いい子だ。」

ベッドにテディベアのように座り、胡乱な目でこちらに両手を突き出している妹を優しく抱く。

それを受け入れるように背中へと両腕を絡めてくるはぐみ。

寝ていたせいか、体温が高い。まるで人型のカイロだ。

「えっへへへ…このプレゼントはにーちゃんしかくれない特別なやつだもんねえ…」

「…とんでもない、プレゼントしてもらってるのは俺のほうだよ、はぐみ。」

北沢はぐみ。俺の可愛い妹よ。

生まれてきてくれてありがとう。

がちやがちや

「にーちゃん！がんばれえ!!」

ああ、どうして俺は、ゲーム一つでこんな窮地に立たされているんだろうか…。

遡ること3時間前。

いつも通り仕事を終え、迎えに来ていたはぐみと同じバンドの花音ちゃんと並んで帰る。

はぐみはともかく、この花音ちゃんが一緒に帰る理由は一体何なんだろうか。

そういえば、妹がいつもお世話に…といったところ、お世話しているのははぐみの方だと二人して訂正されたが果たして…？

「お兄さんは、普段ゲームとかしますかあ…？」

「んー…昔はやってたけど…働き出すと、どうも時間がね…。」

「そうなんですかあ…。」

「あ、あのお話?!」
「そうだよお。もしよかったら、やってもらおうと思ってえ…。」

「何の話?」
ゲームか。

若い子の間で流行ってるのか、そういう感じかな?二人には共通のものっぽいし…。

「あのねにーちゃん、今、”がるば”ってゲームが流行ってるのは知ってる?」

「あー……何か、プールで撮ったCMとかは見た気がする……」

「そう！それ！それにね、はぐみたちハロハピも出てるんだけど……」

「えっ!?!…まじ?…」

「まじもまじですよお。」

なるほど……。愛する我が妹が遂にゲームデビューか……

これは、買わねばなるまい……!

「ほほう、そりや買いだなあー……GEOとかTSUTAYOで普通に買える?…」

「……………」

「……………」

「な、なんだよ二人ともそんな顔して……」

「てめえ何言ってるんだ?ああ?」みたいな顔やめろ。

君ら二人同じ表情筋してるんだね。

若干引き気味で様子を伺っていると、オラついた表情の妹が半笑いで訊いてくる。

「に、にーちゃん……冗談とか……じゃないよね??」

「え?え??」

「あ、あはは……お兄さん、おもしろいですねえ……」

「え?引かれてる??かのちゃん、引いてんの??」

「えつとねにーちゃん、すまほのゲームって、大体お金かからないんだよ??」

「ええ!?!」

まじ??

ガラケーからスマホに変えてそろそろ一年。……確かにゲームなんかまともにやらなかった。

というか、未だに“アプリ”っていう言葉が馴染んでない。

そうかあ…ゲームはお金かからないのかあ…。俺、まだ子供の頃の
スーファ○の感覚だったわ。

「無料なら…うーん、やってみるかあ…？」

「…お兄さん！」

「うおう!?!…なんだいかのちゃん??」

「ぜひ…ぜひやりましょうよお!」

「めっちゃ推すやんか。」

「もう、これはおこですなえ。はぐみちゃんも頑張ってるんですから、
それを見てあげてください!」

「…確かにねえ。」

「あつ、で、でもでも!にーちゃん忙しいから…無理にやらなくても
…」

グイグイ来る花音ちゃんと押され気味の俺。その間でオロオロし
続ける妹。

うん、ごめんねはぐみ。この前の誕生会で見る限り、花音ちゃんっ
てもうちよつと大人しい子だと思っただけど…。

お兄ちゃんの目が腐ってたみたい。

「よしわかった。興味もあるし、やってみようかな…？」

ここで「やるぞ!」ってきつぱり言い切れないあたり…俺は男とし
ても兄としてもパツとしないんだろうなあ…。

「ふ、ふ…」

「ふ??」

「ふえええええ!!!」

「おわっ!な、何だア!」

「んー、多分喜んでるんだと思う。」

「あ、はぐみには慣れっこなのね。」

「ん、よくごうやって鳴く。」

鳴く…。

「じゃあ、詳しくは帰ってから教えてくれな？」

「えええええ…。んんっ、お兄さあん？」

「おかえりかのちゃん。」

「ただいまあ。えっと、お兄さん、これ、私の連絡先ですう。」

「え、なにこのアルファベット。メアド？」

「えっ」

「…ああ、そっかあ。あのね、かのちゃん先輩。」

にーちゃん、LINEはやってるけど、電話番号の検索しかやったことないと思う…。」

「ふええ…。」

あ、これは何となくわかったぞ。

馬鹿にされてるか、呆れられてるな。

「わ、わかってるし??安心してくれかのちゃん。」

「ふうーん…?」

「その冷たい目やめて!お兄さん傷ついちゃう!」

「にーちゃん、帰ったらはぐみが教えてあげるね!」

いい子…。はぐみのお兄ちゃん、お兄ちゃん鼻が高いぞ。

帰ったらまたぎゅーしてあげよう。というかさせて。

「今ちようど、イベントでガチャがあるのでえ、私たちが出たら教えて欲しいなあって…。」

「なるほど、その報告用の連絡先ってわけね…。」

「仕事みたいだな…。」

「頑張ってくださいねえ…。あつ、もちろん…」

綺麗な演出の後…おお！

一枚目からはぐみ!!なるほど、イラストにしてもやつぱり可愛いなあ我が妹は。

「に、にーちゃんすごいよ!!4人も出た!」

「おお!!俺つてもしかしてなかなかの強運!!」

「すごいすごい!すごいよお!!」

写真撮っていい??」

「いいぞー。」

「わあい!!ハロハピのみんなに見せるんだ!」

写真を撮った後、何やら操作をするはぐみ。ニコニコしていてすごく可愛い。

俺としても、無事任務を達成できて一安心…

ヴヅツ

小さな振動とともに何やらメッセージが届いたようだ。

…ああ、花音ちゃん。

「ひっ…。」

「どしたのにーちゃん。」

届いたメッセージをみて思わず背筋が凍る。

『お兄さん』

『そーゆーことしちゃうんですねえ』

『私だけ仲間はずれですかあ』

『それとも私だけ嫌いですかあ』

『ねえ』

『おにーさん』

『お兄さん、無視ですかあ』

『お返事はあ』

『お金、まだあるんでしよう』

『お兄さん?』

『私が出るまで許しませんよお』

「あちゃあ…。かのちゃん先輩、久しぶりにコレになっちゃったかあ…。」

「なに…これ…」

「あのね、かのちゃん先輩ってね、仲間はずれとか凄い嫌いなもの。」

「寂しがり屋さんなのかな。」

「いやもうそういうレベルの話じゃないんだけど…。」

「あとは、きつとにーちゃんのこと好きとかそんなんじゃない?」

「これ見てそうは思わないかなあ…。」

「だって、今日だって一緒に待ちたいって言ってきたのかのちゃん先輩からだよ?」

「ええ…。」

絶対布教のためだと思うけど…。

なんにせよ怖。

「あのさ、これつてもしかして、花音ちゃん出るまでやらないとまずい?」

「うん!」

「うんつて…。」

「にーちゃん、もうやるしかないんだよ。」

「さいはまげられた。」

「曲げるな投げろ。」

「それ!…かのちゃん先輩、たまに凄く怖いことするからなあ…。」

「怖いことつて?」

「…とにかく怖いことだよ。がんばってね!にーちゃん!」

斯くして、花音ちゃんを求める俺のがるばライフが始まった。

万が一のことを考えると、愛くるしい妹の応援も手放しには喜べな
かった。

「にーちゃん！がんばれえ！」

…腹括るかあ。

はぐみ と かいて おくりびと と よむ

「にーちゃん。…だめだったね。」

「うん…。どーしよつか。」

「さあ……………かのちゃん先輩に連絡しないと。」

「ちよ、ちよつと待とう?..な?」

イベントが、終わりました。

同時に、花音ちゃんだけガチャで引けないという事実は覆らず…俺の人生も終わりそうです。

結局昨日は連絡できず、今日こっそりはぐみに相談しようとしたところ、逆にはぐみから切り出されてしまったと…今そういう状態なんだ。

…だって怖いんだもん。花音ちゃん。

「はぐみは待てるけど…でも、かのちゃん先輩からいっぱい連絡来てるんじゃないの?」

「うん…全部怖くて無視してる…。」

「あーあ。ムシはいけないって、先生が言ってたよ??」

「…んー、お前は世界一可愛いなあ…。」

「んう……………はぐみをなでなでしても、かのちゃん先輩は許してくれないと思うよ?」

そうだよなあ…。でもな妹よ。今は精神安定のためにも、大人しく撫でられていておくれ。

「はあ……………。わかったよ。」

意を決して、見ないようにしていた通知アイコンを押す。

うわあ……………。通知の数が”99+”になってる…。家族しか登録

していなかった俺にとってみたら最早未知の領域なんだけど、若い子ってみんなこうなの？

「う」…」

『おにーさん？』

『定時連絡のお時間ですよー』

『おにーさん？』

『既読もついてないんですケド？』

『無視はよくないって、学校でも習いましたよね？』

『後ろめたいことでもあるんですか？』

『おにーさーん』

『ひどいです』

『おにーさん、私のこと弄んで…』

『おにーさんのばか』

『連絡くれるって言ったじゃないですか』

『嘘つき』

『嘘つき嘘つき嘘つき嘘つき嘘つき』

『ごめんなさい』

『取り乱しました』

『でもおにーさんが悪いんですよ？』

『私のこと、無視するから』

『どうせまだ引けてないんでしよう？』

『おにーさん』

『これも見てないんですよね』

『おにーさん』

『嘘つき』

『裏切り者』

いやいやいや……。ちょっと見てないだけでひどい言われようなんですけど。

ほらみろ、あの”天真爛漫”を地で行くような最愛のスイートトリトルシスターことはぐみがドン引きだ。

「あちやあ、こりや彼氏さんも長続きしないわけだよね…。」

「…そうなの?」

「うん、いつもすぐふられるって。」

「…うん、何か納得。」

「でも、これはにーちゃんも悪いかも。」

「そうかな。」

「だって、一個も見えてないんでしょ?」

「うん。こないだはぐみと見たつきりかな。」

だって怖いんだもん。こんな子初めてなんだもん。

ちよつとチャット見ないだけで裏切り者呼ばわりだよ??

…ちよつとチャットって、響き面白いよな。ははっ。

「ははっ。」

「…にーちゃんが恐怖のあまりおかしくなった…!!」

「わかった…もうおつかないから電話かけちゃうよ。」

「…勇気あるね。」

ぐぐくりと唾を飲み込むはぐみの手をギュツと握り締めながら、恐る恐る通話ボタンを押す…。

『おにーさぁん?!』

うわぁワンコールも鳴らずに出た。

「も、もしもし??花音ちゃん?」

『ダメだったんでしょ?』

「うっ…。」

『それで怖くなっちゃって、連絡取れなかったんでしよう??』
「うう……」

ほんとなんだよこの子……。全部当ててくるよ……。
年下相手に威圧されて声も出せない自分が本当に情けない。……ごめんなはぐみ、こんな兄ちゃんです。

「……ええんやで。」

笑顔のサムズアップが胸にいたい……！兄ちゃん泣きそうだよ……。

『凶星なんですか？そうなんですか??』

「……はい。スミマセンデシタ」

『はあああん……怖かったですか？何かされると思ったんですか??』

「………はい。」

『ああああん………かわいい。』

「……へ？」

今なんだった？

『……でも、私だけ引けなかったっていうのは、許せませんねえ……。』

「……ほんとごめんね花音ちゃ」

『お仕置が必要ですね。』

「ん………んん??」

『お仕置き、ですよ。ふふっ。』

「ええと……一応訊くけど、何されるの？」

「わっ……やっぱりなにかされるんだ……。」

そうみたいだよはぐみ……死んだら骨は拾ってくれ。

『そうですねえ……』

「あ、あんまりハードなのは勘弁してね??…仕事もあるし…。」

『わかってますよお……』

「……………」

『ふええええっ!!』

「!？」

びつくりした。鼓膜がどこか飛んでつちやうかと思った。

また例の鳴き声か。

『…決まりましたよお。』

「……………うん。」

『おにーさんはあ、今週一週間、お仕事の後私と過ごしてください。』

「えっ」

『やっぱり、ガチャに対して本気じゃなかったと思うんですよ。』

「……………」

『だから、ガチャに使えたであろう元気と時間を、一週間分私にくだ

さい。』

「……………うん。」

『分かりましたかあ?おにーさん。』

「……………まあ、一週間なら…。」

『ふええ…。おにーさんが優しい人でよかったですよお…。』

優しいとかそういうのじゃなくてももう強制やん…。

『楽しみにしてますね??…おにーさあん。』

「……………切れた。」

「にーちゃん、災難だね。」

「お前も最初は乗り気だったじゃないか…。」

「……………帰ってきたらはぐみがいい子いい子してあげるから。ね?」

「うーん…それなら頑張っちゃおうかなお兄ちゃん。」

ちよろいと思われてんのかな。でもはぐみ相手なら何でもいいか。嫌われない限りは。

…でも問題は花音ちゃんだ。

罰とは言え、毎晩毎晩女子高校生とおっさんが二人で過ごすわけだろ…？

あ、社会的に死ぬ未来が見えるわ。

「ごめんなはぐみ…。兄ちゃん死んじゃうかも。」

「…：…かのちゃん先輩とデートするのがそんなに嬉しいの??」
「違うよ。」

妹よ、急に察し悪くなるんじゃないよ。

兎に角、今週一週間は花音ちゃんの罰を受けることが決定しましたとさ。まる。

まったりじかん

「にーちゃんっ！おつかれぴーぽー！」

「おつかれぴー…?」

「はよりの言葉なんだよ！はい、にーちゃんもぴーぽー！」

「び、ぴーぽー。」

結局なんだかんだで長引いた花音ちゃんの束縛期間が終了し、久々の何もない自由時間を満喫していた。

ドアを蹴破る勢いで突入してくる、流行に敏感な妹にもすつかり助けられた期間だった。

今じゃなんとか普通の知人程度に落ち着いてくれたようで助かったが、たまに発作のようにメッセージが来る。色々事情があるんだろうし、あまり邪険にもできないのが大人としての対応だろうね。

「今日はなにして遊ぼっか!!」

「そうだなあ…昨日やった”トランノ”とかいう遊びはもうしないのか?」

「うーん、片付けが面倒だなーって。」

トランノ——何やらはぐみのクラスで流行っている創作ゲームらしく、トランプとUNOをそれぞれ二組混ぜて使う。俺も一度説明されて何となくやっただけだから詳しくはないが、それぞれに付与された「防壁」^{バリケード}「戦士」^{ファイター}「策士」^{タクティシオン}「神秘」^{ワンダー}のクラスを上手く操り、お互いが事前に自由に設定付けた「戦略基地本部」^{マザーベース}の統率力^{HP}を削り合うターン制のカードゲームだった。

デツキなど考える必要がない上、試合中は設定した人物のロールプレイを強要されるため、むしろ素面でプレイするには向いていないといった奇特なゲームだ。

はぐみの言うように、計四組みものカードを使用するため片付けが

酷くしんどい。まるで賢者タイムに部屋を掃除するかのような心境だった。

「そうだよなあ……。兄ちゃん、今日は割とごろごろしてたい気分かなあ。」

「そっかー。そういう日もあるよねー。……。えいつ。」

「兄ちゃん、ごろごろしたい気分なんだってば。」

「はぐみもだよ！」

「肩車しながらそれ言うかね。」

軽快な掛け声とともに程よく引き締まった両の腿で頬を挟んでく
るはぐみ。真夏なら暑苦しかっただろうその体温もこの季節は心地
いい。

そのまま尻滑りの要領でベッドまで移動、頭を打ち付けないように
倒れこむ。

「おりゃー。」

「わぶっ！……。あはははははは!!にーちゃんにーちゃん！今のもっ
かいー！」

「もう疲れたからしなーいよ。」

「えー！じゃあ明日もやってー！」

「はいはい、また明日な。……。じゃあもつとそっち詰めて。」

普通のシングルベッドだ。そんなにワクワクされた目で見られて
もこれ以上楽しいことはないし、何より真ん中に陣取られるとごろご
ろできないだろう？

押されてケラケラ笑いながら転がるはぐみを端に寄せ、隣を深く沈
み込ませ寝転がる。

「……ふう。」

「……………にーちゃん、疲れた顔してるね。」

「そりやまあ働いたあとだからなあ。」

「ふーん……。じゃあ、はぐみ静かにしてるね？」

「退屈だったら部屋に戻ったら？今日は遊ばないんだし。」

「んーん。今日のはぐみもここで寝る。」

「…そか。」

「ん。」

暫しの沈黙。二人の呼吸と、時折体勢を変える際の衣擦れの音だけがこの空間を支配している。

休息。正にその言葉が示すような空間に、ここ暫く距離を感じていた安らぎを味わう。

「…：ねえ、にーちゃん。」

「んー。」

「にーちゃん、少し痩せたね。」

何やらあちこちまさぐっていたと思っただらそんなことか。

「ああ。兄ちゃんは、たまにすごく痩せるんだ。」

「…ダイエットしてるの？」

「どうかなあ。」

「はぐみもした方がいいかな…」

「…お前それ以上薄くなったら風で飛んでつちやうじやんか。」

細い上にちつちやいんだから、ダイエットなんかしたら平面の住人になつちやうぞ妹よ。

「そ、そんなに軽くないよ！」

「…：どうかな。肩車しても重いつて感じないくらいだもんなあ。」

「むー。はぐみ、重い女だもん。」

「はっはっは、それはまた違う意味だろう。」

「すっごく重いよ。…かのちゃん先輩くらい。」

それは……すごく重いなあ。いろんな意味で。

あの子の将来も何かと心配だし、将来犠牲になるであろう子も少し心配だ。何があの子をああしてしまったんだろうかね。

「……それは洒落になってないからやめなさい。」

「…あつ。」

「??」

「……お風呂、入るの忘れてた。」

「そうか、はぐみは夜派だったなあ……」

俺は朝シャン派。少しくせつ毛気味なこともあつて、朝のセットが大変なんだ。

朝派とはいえ、夜じっくり湯船に浸かったりすることもあるが、ね。

「うんっ。にーちゃんも一緒に入る？」

「んー………今日はいいや、面倒だし。」

一度体を横たえてしまうと何もかもが億劫になる。そうしてやがては眠気に勝てずに…。

今日は疲れた。このまま沈んでいきたい。

「じゃあ、お風呂入ってきて、ちゃんと髪の毛も乾かしたらここに来てもいい?」

「いいけど、俺寝てたらごめんな。」

「うんっ!じゃあ、はぐみの隙間だけは空けといてねっ!」

元気よく廊下を駆けていく音を聞きながら、はぐみの気配と共に俺の意識もフェードアウトしていった。

平和な一日…明日も頑張ろう。

はぐはぐあみあみ

十月も折り返しを終え、「今年も後十週を切りく」などと言うようになってきたテレビを見やる。：成程道理で冷えるわけだ。

両親は大真面目な顔で炬燵を出すか否か揉めているし、俺自身も通勤時にコートを着るべきか迷っている。季節は秋の初め、冬の準備期間、か。

「にーちゃんにーちゃん。」

「んー。」

すつかり定位置となりつつある膝の上から顎を上げ見上げる様にして名を呼ぶ妹。：うん、今日もいい体温だ。

「はぐみね、マフラーほしいなあって。」

「……急だな。明日でよければ買いに行くよ?」

「違うの!あのね、はぐみが「マフラーほしいな」って言ったたら、にーちゃんは「じゃあ兄ちゃんが作ってやるよ」って言うの。」

「それは…そういう遊びか何か?」

「そういうものなの!」

ははあん。こりやまた何かに影響されたな?

小さな問題があるとすれば、影響元が何かの媒体なのかあの子達こころちゃんなのか…。後者だった場合、俺の常識では太刀打ちできない事が多いんだ。

「そうかい…」

「じゃあもっかい行くよ?」

「うん。」

「はぐみね、寒がりさんなの。」

「……変わったが?」

「もう!そこは、「じゃあ兄ちゃんが作ってやるよ」でしょ!」

「俺は一体何を作るんだい……?」

その会話は怖すぎる。そこまで分かるならもういつそ全部テレパシーでやれ。

「もっかい!」

「はいはい。」

「……………」

「……………」

「……………あつ、はぐみからか。」

「……………兄ちゃんが作ってやるよ?」

「まだ何も言っていないでしょ!何を作るの!!」

「マフラーかなあ。」

「マフラー!?いいねえ!!!」

みんな聞いてくれ。うちの妹が凶悪な程に可愛い。

どんなにキツイ仕事でも、帰るとこの子が迎えてくれるんなら頑張れると…そう思わない?

「折角だから本格的な手編みにするか。」

「できるの??」

「ああ、兄ちゃんに不可能はないぞ。」

「…かのちゃん先輩相手にはタジタジだったよね。」

「言うな。」

「えへへへ……かのちゃん先輩の話は、対にーちゃん用の切り札だねっ!」

「捨てちまえそんな切り札。」

明日は折角の休日だし、はぐみを連れて買い物に行くのもアリかも

しれない。

それでもつて毛糸やら飾り用の道具やらを買って、適当にうまいもんでも食って帰って来よう。

「じゃあ明日買い物行くか。」

「はぐみもつ、はぐみも行くよっ!」

「わかってるわかってる。…一緒に行く、な?」

「うん!毛糸、買うの?」

「そうだよ。はぐみの好きな色で作ったるからな。」

「ほんどつ?…何色までいいの?」

「……………ほどほどでだな。」

レインボーのマフラーとか、嫌だろ?…俺だったら着けたくもないし、着けてる奴と歩きたくもない。

「かんがえとく!」

「うん。…んじゃ明日は」

「ねーねー。はぐみも作りたい!!」

「…マフラー?」

「そう!!」

「作ってどうすんの?」

「にーちゃんの!にーちゃんの作る!」

「……………はぐみ…」

あ、泣きそうだ。何だい妹よ。いつからそんなでできる子に育ったんだい。

はぐみの手編みを貰えるって?それはもう、実質首にはぐみの手を巻くようなもんじゃないか…!

「よしわかった。…じゃあ朝から材料買いに行つて、午後は二人でマフラー作ろうな?」

「やったっ!!じゃあはぐみ、今日は早く寝るねっ!」

「夕方五時にする宣言じゃないがまあいい……あれ? つてことは俺も……」

「にーちゃんも早寝だよっ!一緒に寝ないと寒いんだからー。」

……やっぱり一番心地良い温度ってのは、人肌なんだなあ。

すれた　こころ　に　じゅんすいさ　が　ささる

「にーちゃん！ドライブ行くの??」

休日の早朝、せっせと車にタイヤを積み込んでいると学校へ行くこうとする妹に見つかった。

「あ、ああ……ドライブ……とはちよつと違うけどね。」

「う?…用事??」

「まあそんなところかな。…車屋さんに行くんだよ。」

「また車買うの!?!」

俺が今お世話になっているカーディーラーは隣町にある。隣町と言っても、中々に遠い為休日でもないと言ねられないのだ。

今日は来たる冬季間に備え、スタッドレスタイヤへの履き替えを依頼しに行く予定だったのだが…。

「買うわけないだろう…。この車、まだ半年も乗ってないんだから。」

「そ、そうだよねっ!」

「じゃ、兄ちゃんは今もうすぐ出発だからはぐみも学校頑張…」

「はぐみもいきたい!!」

「……はあ。」

始まった。

何だか最近矢鱈甘えたな我が妹は、事ある毎に俺に纏わりつこうとしてくる。…いや、前からこうだった気もするが最近特に酷い…と言った方がしっくりくるか。

何せ俺の休みに合わせて学校をサボろうとするほどなんだから。俺自身決して真面目に学校へ通っていた生徒じゃあなかったが、それ

は今は柵上げして良いだろう。

「前にも言ったと思うけど、具合が悪い時以外はお休みしちやいけな
いよ？学生は学校に通うのがお仕事なんだから。」

「やだ！はぐみ、にーちゃんと一緒に良いんだもん!!」

「はぐが学校から帰ってくる頃には俺も戻ってきてるからさ：ね？
ちゃんとお行きよ。」

「やーだー！やだやだやだー!!」

駄々っ子か…。こうなると途端に聞き分けが無くなるし、正直俺の
手には負えなくなる。

ただ一つ懸念することと言えば、はぐみがこうなる時はただ一緒に
居たい訳じゃなくて、何か伝えたいことだとか相談したいことだとか
：胸の内に秘め事があることが多い気がするのだ。

可愛い妹が悩み事でも抱えているなら…と無下にできない俺は
きつと”シスコン”ってやつなんだろうな。

「……じゃあ、お母さんに訊いてご覧？お休みしていいよって言った
ら、兄ちゃんと一緒に居ていいから。」

「……………やだ。」

「どうしてさ。」

「かーちゃん、絶対ダメって怒るもん。」

「そりゃ駄目だからさ。」

「どうしてダメなの？はぐみはにーちゃんと一緒に居たいだけなのに
！」

そんなにウルウルした瞳で見上げないでほしい。…そんな目で訴
えかけられると…

「分かったよ…。兄ちゃんも一緒に行くから、お母さんのところ行くこ
？」

「…うんっ!!」

シスコンの俺にはクリティカルに効くんだよ。

「ダメです。」

「ええー!!! やだやだやだやだ! にーちゃんと一緒に居るう!!!」

「わがまま言わないの。…それと〇〇、アンタもお兄ちゃんなんだからしつかりなさい。」

「……んー。」

「可愛い妹が不登校になったらどうするのよ。」

その心配は全くしてないよ、母さん。

「でもさ、俺としてはやっぱり嬉しいんだよね。こんな歳になっても一緒に居たがってくれるっていうのは。」

「だからって……もう、甘やかしすぎじゃないの?」

「ははは……まあ、たった一人の可愛い妹だからさ。甘やかしたくもなるよ…。」

隣に立つはぐみの髪を手櫛で好きながら答える。…少し伸びたか、面影もお姉さんっぽくなってきたようだ。

「はああ……。いいよ、私から学校に連絡入れておくから、少し病人っぽくしてなさいよっ。」

「…母さんだって甘いじゃんか。」

根負けしたように深い溜息を吐く母親を精一杯のジト目で睨む。結局何だかんだ言っところ言っところは家系なんだろうし、話も楽で助かる。

「うちのお姫様だもん、別にいいでしょ。はぐみとアンタが会えたの
だって私のお陰なんだから、感謝しなさいな。」

「ははは、ありがとう母さん。」

「…う？お休みして、いいの？」

ワンテンポ遅れて首を傾げる妹君。自分の話なんだからちゃんと
聞いていなさい。

「ん。お母さんが学校に電話してくれるってさ。…よかったね。」

「ほんとっ!?!…やった!!かーちゃん大好き!!!」

「はいはい、明日からはちゃんと学校行くのよ？」

「行く!!はぐみちゃんと行くよ!」

現金な奴め…。

ワントーン高い余所行きの声で電話をする母さんと、元気いっぱい
に鞆を放り投げるはぐみ。

俺もまたタイヤを積み込む作業へと戻り…最終的に出発に漕ぎつ
けたのは午後になってからだった。

「……にーちゃん、タイヤ変えるのってどれくらいかかる??」

「んー…いつも三十分くらいかなあ…。」

「へー…。」

「……………」

「……………」

「にーちゃん、たこさんとかさんならどっち好き??」

「んー…食べるならたこさんかなあ。」

「そっかー…。」

「……………」

「……………」

「に、にーちゃん、ビッグベンって、うんて」

「はぐみ?」

「にやつ、なに!」

車内の会話。…特に話すことが無いのはいつもの事だが、今日のはぐみの出方を伺っているだけに特に間が開く。

だが妹よ。最後の話題は流石に止めさせてもらったぞ。世界的な建築物をクソミソに言うのは良くない、うん。

「…何か、にーちゃんに言いたいことがあつたんじやないかい。」
「う”っ…。」

分かりやすい奴め…。

「にーちゃんが気付かないと思ったか?…おばかさんめ。」

「ううう…。。えとね、はぐみ、にーちゃんが大好きだよ。」

唐突に愛の告白かあ。

相変わらず愛い妹よ。

「ん、知ってるよ。」

「でもね、でもね…いつかは、はぐみも大人になっちゃうでしょ?」

「なっちゃうね。」

「そうしたら、きつとにーちゃんとは一緒に居られなくなっちゃうよね。」

「…なっちゃう、かもね。」

「大人って、いーっぱいお仕事したり、いーっぱい我慢したりしなきゃいけないんだよね?」

「…そういうこともあるだろうねえ。」

「やっぱりそうなんだ…。でも、そうやってずーっと頑張ったら、好きな人が出来たりして、誰かのお嫁さんになったりするんだよね?」

「ああ、いずれはそうだろうね。」

将来の話、か。俺なんか当面の事すら考えられずにただ働いてるだけだったのに、大したもんだな…。

「にーちゃん。……………大人になるって、どんな感じかなあ…。」
「……………」

どう答えたものかと、暫し無言で車を走らせる。果たして俺は、この子と同一年の頃にそこまで思考していただろうか。ありつただけの想像力を膨らませて、それでも見えない未来にヤキモキしたのだろうか。

…情けない。そして、痛いほどに眩しい。

「…にーちゃん？…泣いてるの?？」
「……………えっ。」

自分では気づかなかったが、とうに頬から顎と伝った涙はシャツの胸の辺りまでをも濡らしてしまっている。運転中に泣くなんて、危ない事この上ないな…と変に冷静ぶったことを考えつつも、妹がさつきまで話していたことを忘れられずにいた。

「擦れ切ってしまった」大人”にとつて、無垢な純粋さは猛毒なんだ。きつと。

「にーちゃん…う…哀しいことでもあったの？はぐみ、聞くよ？」
「大丈夫、大丈夫だよ。……………ほら、もう少しで車屋さんに着くぞ？降りる支度しちやいなさい。」

「わ、ほんとだ…！…今日もいっぱい車並んでるねえ！」

大人になるって、どういう事なんだろう。

はぐみのある人生（終）

「ただいまあ。」

「あらおかえり。…今日は早かったのね。」

「ああ。…母さん、はぐみは？」

土曜日。いつもどおり仕事を終え帰ってみたはいいものの、いつも元気よく迎えてくれる妹の姿が見当たらない。

「…それがね、何だか元気がなくて…今も部屋から出てこないのよ。」
「…何かあったのかな。」

「今はそつとしておいた方がいいかもしれないけれど…。」

はぐみの元気を奪えるとは、ただ事じゃない何かが起きていると見える。一先ず自室に寄り、部屋着に着替えた後にはぐみの部屋へ。

「おーい、はぐー。兄ちゃん帰ってきたぞー。」

「……………」

ドア越しに呼びかけるも反応はない…どころか物音一つ聞こえないんだが、本当に中にいるのか？

「はぐー？いないのかー？…もうすぐご飯だぞー。」

「…（はん……………？）」

ああ、いるわ。

「ね、出ておいで。兄ちゃんと一緒にご飯食べよ。」

「ちよと…まってる…。」

ふむ。出ては来るみたいだが…確かに声に元気は無い。ただ単にお腹でも壊してずっと寝てた、とかなら全然いいんだけど。兄としては心配である。

やがて、俯きつつ妹が出てきたのは五分ほど経ってからのことだった。

「(こ)ちそうさま…」と小さく呟いて食卓を去るはぐみ。その姿に両親も心配を隠せないようで、親父に至っては氷だけになったグラスをひたすら呷っている。

俺も慌てて掻き込み食事を終わらせる。…シンクに置き粗方の汚れを落としたあとに、はぐみの後を追って妹の部屋へ。

「はぐみー……ありや？」

部屋には誰もいなく、真っ暗なままで。その代わり、壁の向こう…隣の部屋から、何か壁にぶつかるとか音が聞こえた。

隣の部屋…即ち俺の部屋だが、そっちに行ったのか？あの子は。

「…はぐみ？…ああ、本当にこっちにいたんだ。」

「うん、にーちゃん…。」

俺のベッドに上がり膝を抱えるようにして小さくなっているはぐみの姿があった。隣に腰掛け、一度大きく息を吸った。

「……。」

「……ねえ、にーちゃん。」

「……………」

「…ぎゅーってしてもいいーい？」

「……………いいよ、おいで。」

「…うん……。」

いつものような元気いっぱい、のたつくるめいたハグではなく、そつと何かを確かめるようにしがみついたハグ。…気のせいかもしれないが、いつもより心なしか体温も低そうだ。

「…。」

「……あのね、はぐみね。」

「……。」

「…すつごーく、困ってるけど、すつごーく皆が好きでね。」

「……うん。」

「にーちゃんも、かーちゃんも、とーちゃんも…それから、こころんもかおるくんも、かのちゃん先輩もみーくんも皆みんな好きなの。」

「うん……。」

「……どーしたらいいんだろ。」

例によって、はぐみの言葉は拙い。だからいつもどおり、その中から情報とこの子の気持ちを汲み取ってやらねばならない…。

「…そうだなあ…。皆が好きなのはいいことだね。」

「…うん。」

「でも、好きで居られなくなっちゃうようなことが起きたのかい？」

「……んーん、そうじゃなくて、好きだから辛いの。」

辛い…か。

「そつか。…学校で何かあったのかな??」

「うん…そーなの。」

「学校……そろそろはぐみも受験とか考えなきゃいけないもんね。進学とか、そういう話かな?」

「……どーしてわかったの??」

「これかあ…。」

「兄ちゃんは兄ちゃんだからね。…はぐみのことはよく分かっているよ。だから兄ちゃんと話してみたくてこっちの部屋に来たんだろう？」

「…うん、そーなの。」

暫しの沈黙。うーんうーんと小さく唸っているところから察するに、一生懸命言葉と気持ちを整理しているのだろう。

リズムよくトントンと背中をさすりながら待つ。…とんでもないこと言い出さなきゃいいけど。

「…あのね。」

どれほど待ったか。時計のないこの部屋では確認できないが、妹は自分で話し始める。

「昨日ね、学校でね…」

「どうやら、学校で進路決定についての授業があったらしい。そこで渡された進路希望用紙に、引き続きこころちゃんたちとバンド活動をしていく…といった進路を書いて提出したところ、結構な尺で怒られたとか。」

真面目に考えろだの、勉強は選択肢を増やすための手段だだの、就職して親を助けることこそ有意義だの…聞いていてイラつきそうな内容ばかりだった。どうせ自分の生活の為に事務的に働くだけの「ゴミみたいな」職業教師が話したんだろう。

教師という職業を馬鹿にする気はないが、そこまで「職業」に徹するのであればそれにより傷つき心を痛める人間が少なからず居る事を認知した上で信念を持って冷徹に働くべきだとは思うが…いや、こ

れ以上は言うまい。

「でもね…でもね…お勉強いっぱいやって、大学に行くってことは、お引越ししなきゃいけないでしょ？」

「…そうだね。」

そこそこの都市部であるはずのこの辺りだが…我が家から通える距離に大学はない。短期大学や専門学校…といった選択肢もあるのだろうが、本人の意思で選び取る道であることは言わずもがなだ。

「でも、お仕事って、まだ難しいことで、全然想像もできないし…にーちゃんはいつぱいいつぱい働いててすごいなって思うけど、はぐみは…はぐみは…。」

「うん、うん…。わかった。…わかったよ、はぐみ。」

今にも泣き出さんばかりに声を震わせるはぐみ。

こんな時、兄としてどのような言葉をかけてやるのがいいんだろうか。兄として、俺には何ができるのか。

「…兄ちゃんはな、正直先のことわからないし、あんまり難しいこともわからない。」

「……………」

「でもな、はぐみどんな選択をしようと俺はずっと味方だし、ずっとはぐみのそばにいるよ。」

「…ほんとう？」

「本当。…勿論、いつか独り立ちしたくなったら時は邪魔しないけどね。」

「…ならないもん。」

それはそれで困るけども。

「皆だつてそうだ…。はぐみが進学しようが就職しようが…これからの未来、ずっとずっとはぐみを大好きでいてくれるよ。…はぐみはみんなにとって、とーつても大切な子なんだから。」

「…：…そっか…：…みんな、本当に好きでいてくれるかな。」

「ああ勿論。…だから、はぐみもちゃんとみんなのことを信じて、一生懸命決めたことを頑張るんだ。」

「……………」

「どうかな。」

「…：…うん。…うん、はぐみ、やるよ。えらぶ！」

…ううむ。自分で説得しといて何だけど、少々単純すぎるかも知れない。愛する人達との絆を感じることで頑張れる…：それ自体はいいことなんだけど、人の言葉に感化されすぎというか…：ううむ。

まあ、野暮つてもんか。

「けどね…：にーちゃん。」

「…ん。」

「…：…にーちゃんは、ずっとにーちゃん？」

「…：…そりゃあね。兄ちゃんのはぐみのたった一人の兄ちゃんなんだぜ？」

「うん…。」

「何があつても、お前の”にーちゃん”は俺一人だけだ。…：忘れるんじゃないぞ。」

「…：…うんっ!!!」

いい笑顔だ。

これからはぐみがどんな選択をして、どんな人生を生きていくのかはわからない。

それでも、誰にも口出しをする権利はないし、俺はずっとこの可愛い妹の味方で有り続けるだろう。

はぐみが俺を必要としなくなる、その日まで。

「…うっし、それじゃあ風呂に入って、さっさと寝ちやおう！」

「う??まだ寝る時間じゃないよ??」

「…明日、日曜日だろ??いっぱい遊べる日じゃんか。」

「!!…う、うんわかった!はぐみ、いい子でちゃんと寝るよ!」

「うむうむ。それじゃあ行動開始だ!」

「わーい!にーちゃん大好きー!!」

……いつかは要らないって言われんのかなあ…。

おわり

チラと窓に見えるのは濛々と上がる煙と繁華街のネオンの様な鮮やかな光。

…光？

ゆっくりと体を起こし窓へ寄る。

「……………」

「ああ！私のお豆ちゃんがあ!!」

…うう、どうしてこんなに埃まみれに…」

「香澄。」

「ううう。…なに。」

「ちよつと、お前と俺のと飲み物持ってこつちおいで。」

「なにい…?」

ちやぶ台に避難した俺のほ○よいとよくわからんサイダーを持って香澄が近づいてくる。

未だ落ちてしまった枝豆を気にしているが、もういいだろう。

彼は犠牲になったのだ。

「…花火だ。」

「もー。さつき私が言おうとしてたのに、聞かないのは○○くんですよー。」

お豆ちゃん…。」

「豆はもういいだろう…。」

お、そろそろピークかな?」

単発の序章が終わり、大小を組み合わせた連撃が夜空を彩り始めていた。

近くの民家からは、会場に行かずともひと目見ようと出てくる人影がちらほら見える。

「うわあ…。キレイだねえ…。」

「ああ…。昔の香澄だったら「キラキラードキドキー」って言ってたろうな。」

「もー、馬鹿にしてるでしょ？似てないし。」

渾身の裏声はお気に召さなかったようだ。

出会った頃の香澄は、独特な感性から擬音成分多めの日本語を発する女の子だったが

学生生活が終わり数年経った今ではすっかり聞かなくなっちゃった。

香澄曰く「もう大人だもん、そういうもんでしょ」とのことだったがやはり少し寂しい。

「お前の唯一のアイデンティティだったのに…」

「唯一って…もつと色々あるでしょー!」

「あの髪型も辞めちゃったしな。」

「あー…あはは。あれね。」

あれはその、○○くんが言ったから。」

「やめろって?」

「ううん。」

一緒にお出かけた時の、下ろした時の髪型が、可愛くて似合ってるって…。」

そんなこと言ったような言っていないような。

何にせよ覚えていてもらっていたとは。嬉しい。半面恥ずかしい。

髪型なんか褒めたのか俺…。」

「あの髪型も可愛くて、その、好きだったよ。」

「…ありがと。」

いつの間にか夜空は落ち着きを取り戻しつつ、一時的に煌めいていた空間も

ただ煙が立ち込めるのみとなっていた。
雰囲気から察するに残るは数発、あつて目玉が一発か。

「なあ。」

「んー?」

「…もつとこつち寄れよ。」

「えー?どしたの、急に。」

「…いいから。」

「えへへ…。じゃあ、詰めるね?」

香澄の体温が近づいてくる。

肩が触れ合う位置で並び、残り僅かとなった花火を眺める。

「…○○くんと結婚できてよかった。」

「え?」

「…○○くんと一緒になってからは、あの花火みたいにキラキラドキドキする毎日で

ずうーつと幸せだなーって。何か改めて思っちゃった。」

「…そっかあ。花火マジックだな。」

「えへへ、そうかもね。」

一晩の宴もクライマックス。

「ねえ、またあの髪型、してみよっか?」

「……………へ?」

ドーン!と。

最後の火輪が、静かに空に咲いた。

ガチャン

「よくやった香澄い!!」

勢いよく開けると。

そこには、破壊された便器のフタが破片となって散らばり、便器の中には可愛い香澄の綺麗な左足。

右足は曲がっちゃいけない方向に曲がりその素晴らしい身体と共に床に横たえられていた。

香澄お気に入りのMP3プレーヤーも真ん中でパツクリと二つに割れ破片と群れるように投げ出されていた。

その惨状を前に、俺は思ったより冷静で、痛みを与えないように足を便器から引き抜き、廊下に香澄を寝かせ、寄り添いながら救急車を呼んだのであった。

当時高1だった俺にしては中々の判断力だったと言えよう。

親もいない中で、テンパりのあまり一周回って、却って落ち着いたのかもしれないが。

香澄は、左足の捻挫・右足首と脛の骨折と膝の脱臼。ついでに腰と頭を強く打ったことから入院を余儀なくされた。

あれから数年。

「お前さあ、学習とかないわけ?」

「えへへ…面目ない…。」

現在高校2年になった香澄だが、部屋の角の部分でギターごとダンボールの山に埋もれて動けなくなっていた。

ずっと助けを呼んでいたそうなのだが生憎とヘッドホンのせいで気付かなかった。

すまんな妹よ。

空のダンボールを除け、足がつく場所を作ってやる。

「ありがとう、お兄。」

「パンツ全開だぞ。」

「お兄、えっち？」

「疑問形にするな。男は大体えっちなの。」

よいしよよいしよと言いながら立ち上がった香澄を見るに、今回は怪我等無さそうだ。

「で？なんでこんなことに？」

「うーんとねー。」

お兄が通販で溜めた空き箱が一杯あったから、ステージみたいにして練習してたの。

そしたら、盛り上がりすぎて踏み抜いちやって…。」

うちは大抵のものは通販生活だからね。

そこに溜めてあるのは…ああ、Amazonね…。」

…つか上に載るならせめて中身を詰めなさい。よく空っぽの身で少し耐えられたな。

「…香澄、あの時の怪我覚えてるか？」

「トイレに落っこちちゃったやつでしょ？」

覚えてるよ。音楽聴きながらトイレしてて、ノリ過ぎちやって蓋の上に乗ってジャンプしたら割れたんだよね。」

「うん…お前、ほんと馬鹿な。」

「むー…。だって、好きな人の歌だったからあ…。」

「好きなのはわかるが、そのせいで今も困ってるじゃんか。」

あの時のトラウマからか、香澄は一人でトイレに行けない。

流石に中まではついて行けないが、いつもトイレは付き添いで行っ

ていた。

まあ、トイレだけでなく、”狭い個室”・”水回り”も想起に繋がるためか風呂場や洗面所もダメだったりする。要するに四六時中一緒だ。

更に、入院していた時に寂しかったのか、寢床も独りを嫌う傾向にあるので、我が家にはベッドが一つしかない。つまり、そういうことさ。

おかげで俺はひとり暮らしもできず、進学に合わせて香澄と一緒に引越すこととなり…。

今ではすっかり二人暮らしも熟れたもんだ。

「いいもん、お兄と一緒に来てくれるから。」

「…それもそうか。」

ま、何にせよきれいに治ってよかったよ。」

「ちよつと脱臼グセだけ残っちゃったけどね。」

「それだけで済んだだけいいさ。」

俺が何回でも入れてやるからな。」

「うん…お兄に触ってもらえるから、脱臼しちゃうのもちよつとはいいかなーなんて…？」

「バカこの。」

ならないに越したこたアないぞ。」

「はあい、気をつけますう。えへへへ。」

何せたった一人の可愛い妹だ。

自分の人生なぞ投げうってでも一生一緒に居るつもりだ。

「あ、そうだ。」

お兄あのね、そのときに聴いてた歌を歌っていた人のね、新しい曲が結構前に出たんだけど…聞ききたい？」

「ん…いや別に。」

「えーっ。…折角歌ってあげようと思ってたのに…。」

「え、あ、香澄が歌うってこと??」

「そーだよー…いーもんいーもん。お兄なんかしーらないっ。」

やばい。

香澄の歌だつて?

ギターを持ったところを見るに、最近練習していたやつか??
録音と録画と…あ、スマホの充電あつたっけ。

「おねがいだよ香澄、兄ちゃん、聴きたいなあ。」

「…ほんと?」

「ほんとほーんと。ほら、録画してコレクションを増やす準備も万端だ。」

香澄の歌楽しみだなあ。」

「…ふふん、仕方ないなあお兄は…。」

じゃあよく聞いててね?…『流星群』

空を彩る星に乗ってあたしは未来へ――

――願い事をたくさん詰めた鞆を握り締め

*

…鼻肩抜きで言っても最高だった。

確かに、飽く迄素人の演奏ということでミスだの技術云々はあるの
かもしれないがそれでも。

それでも、流星は俺の妹だと、感激のあまり妹を抱き締めつつ思っ
た。

「香澄はかわいいなあ…」

「えへへー、知ってるー。」

花園乱怒（恋人編）

「というわけで。」

「お泊まりに来ました!!」

「……ああ、いらつしやい。」

事前に約束していた通り今日はうちに泊まる俺の可愛い可愛い彼女、戸山香澄。

……と、……えーと。

「香澄いらつしやい。……で、君はどちらさん？」

冒頭の「というわけで。」を発した人物に問いかける。

ロングの綺麗な髪のスラつとした少女。俺や香澄と同じくらいかな。

少なくとも初対面だということとはわかるし、今日泊まりに来ると言うことも聞いていない。

「ん？花園たえですけど。」

「花園さんね……そのリアクションから察するに、香澄から話が来る予定だったのかな？」

「私から？そんな予定ないよ？」

「……じゃあ何で今この場にいるの。」

「おたえはねえ、今日○○くんの家にお泊まりなんだ！って言ったら○○くんにも会ってみたいし、一緒に泊まっていい??って言ったの。」

「それで？」

「だから連れてきたんだあ！えへへ。」

「えへへじゃないよ全く……。どうして俺に連絡しないの君は。」

「ええー？○○くん優しいから、いいって言ってくれと思うって……。」

「……………」

普通に泊まることに関しては別にいいんだけどさ。
彼女がうちに泊まるって言うてるんだぜ？二人きりって思うと
ちよつと楽しみにしちゃうもんだろうがよ…。

まあ、連れてきたのがこんな可愛い女の子だったら…いや、言うま
い。

「○○…だめ？」

「逆に訊こう、初対面の男の家に一泊するということに対して何の恐
れもないのかい君は。」

「??なんで？」

「…えーつと…。」

「○○くん…もしかして、おたえのこと好きになっちゃうかもしれな
いってこと…？」

「香澄…それは絶対にならないから安心して。」

…あと、ややこしくなるからちよつと黙ってて。」

「○○くうん…。」

ああもう！擦り寄ってくるな!!

この子を説得することに頭が回らなくなる!!

…撫でたい。

「えへへへへ…もつともつとお…。」

撫でてしまった。

目の前の花園さんに真面目に説教垂れながら彼女を撫で回してい
る姿は実に滑稽なことだろう。

「…？私も、撫でてもらえるの？」

「何故そうなる。」

「…泊まつちやダメ？」

「あー……。」

もう正直どうでもいいんだが、飽く迄倫理的観点から止めているんだ。

だってこんなに可愛い彼女プラスこんな（見た目だけは）可愛い女の子が一晚同じ家に泊まるなんて…。

「〇〇くん…手が止まつてるよう。」

ああ、もういいや…。

「花園さん、上がんな…。」

はああああああ…。

だめだ。

この状況はダメすぎる。

普通、彼女がいる人間が別の女の子と泊まるなど、言語道断だろう。立派な浮気だ。

しかし、彼女も一緒に泊まるとなるとどうだろう。公認ということになるのか、はたまた信用からこうなっているのか。

などと珍しく真面目なことを、風呂場から聞こえる二人の声を聞きながら考える。

うーん、もうどうでもいいのかなこれは。

「あつははー！くすぐったいよう、おたえー！」

精神衛生的に悪すぎる…。ドア越しに、「部屋にいる」と伝え逃げる。

声が届くだけでこれなら、この後なんかどうなってしまうんだ
…。
取り敢えずゲームでもして気を紛らわそう…。

「…それ、ガルパ？」

「んー？そうだけど…って!？」

耳元で聞こえる声に慌てて振り返る。

手元の端末は手馴れた流れでホームボタンを押しておいた。

「私もやってるんだ〜。

「〇〇も結構ランク高いんだね？」

「おっ、おま、おまママ…おまえ…」

目の前の花園さんとはとても楽しく格好でいらっしやった。
髪は拭いている途中なのか湿っていて、首にはタオル。Tシャツは
体のラインをくつきりと表しており、下は…

「おまえ？…私は、”おたえ”」

「そうじゃない！…下…どこに置いてきたんだ…?」

「下?!」

下は下着のみ。

自宅ならまだしも、ここは知らん男の家だぞ…。

こいつには警戒心とか羞恥心とか、もうそういう必要な感情の類は
無いのか。

「おったえ〜！ズボン忘れていつてるよお〜」

廊下から近づいてくる足音と声。

ぷろぽおず（娘編）

「あのね、お父さん…。相談があるんだけど…。」

夕食後、書斎でまったりしていると最愛の娘が訪ねてきた。

普段ここにいるときは寄ってこないのに珍しいこともあるもんだ。

「どうした、香澄。お勉強のことかい？」

「んーん。そういうのじゃなくて…。」

ああ、相変わらず可愛い。

緊張しているのかワンピースの裾引っ張りおろし、もじもじと弄る。その指先も、居心地悪そうに彷徨わせる大きな瞳も。

全てが愛おしく、可憐だ。娘という鼻眞目があるとしても、世界中の人類全員が可愛いと口を揃えて言うに違いない。

「えっと…えっとね??」

「なんだい？」

「きょう、がっこうでね?…ただしくんって男の子に、けっこんしてって言われたの。」

「…ああ?」

結婚だあ?

何処のクソ男がそんな寝言をほざいてやがんだ?

「それでね?お父さん、お母さんと仲良しだから、どうやったらけっこんしたあとに仲良しできるのかなって、ききに來たの。」
「なっ……!」

もう、結婚は決定していると…?

受ける気なのかそのプロポーズ…ッ！クソ！

「うんとね、ただしくんね、これくれたの。」

「はあ…!?こ、これはあ!?!」

それは、プラスチック製の指輪。

最近の子供…侮れん。俺なんて結局婚約指輪は渡さなかったというのに…。

「そ、その…だな。香澄?その…ただし君というのは、どういう男の子なんだね。」

「えっ?…えつと…ただしくんね、いつも優しくしてくれてね?」

あつ、もちろん、みんなに優しいんだけど、私には特別だよっていつて色々してくれるの。」

「色々…とは?」

勘弁してくれ…お父さんももうグロッキー寸前だよ…。

「うんとね、ぎゅーとか、ちゅーとかしてくれる。

くつつくとすつごく落ち着くんだあ…。えへへ。」

「…お父さん、そういうのは良くないと思うな。」

「えっ、えっ!?ど、どうして??とつてもいい子なんだよ??」

「それでも、お父さんは反対だ。」

「うううううう、じゃ、じゃあ!」

「一回あつてみてよ!!きつとお父さんもただしくんと仲良くなるから!!」

「それは絶対じゃない。」

「うううううう…。」

もうっ!お父さんのばか!!しらない!!もう一緒に風呂入ってあげない!!」

「えっ」

どうしてこうなった。

唐突に娘がプロポーズされたとの話に真面目に回答していたら、一緒に風呂に入る権利を失ってしまった。

走り去る愛娘の足音を聞きながら、おじさんは只一人呆然とするしかなかった…。

「最近の小学生…おそろしいな。」

危うく家庭崩壊の危機だぞ。俺だけだけど。

…くそ、もう香澄は親の手を離れるというのか…？見たくなかった現実だが、年齢など改めて直視すると涙が出そうだ…。

「許さんぞただし…。」

懐き懐かれ（幼馴染編）

「ねね、聞いてた？聞いてた??」

「うつせえなあ…。弾くんならスタジオやら何やら行つて弾いてこいよ…。」

「ええー? いいじゃん○○つちの家一軒家なんだしー。」

「近所迷惑にならなくても俺が迷惑してんの…。」

朝から晩までギターをかき鳴らしていたらしいこの幼馴染。

…”らしい” ってのは、朝出勤前と夜帰宅後の様子が全く変わつてないことからの推測だ。まあいつものこと、つてのもあるんだけど。

こいつ、ギターを始めたのは高校生の時らしいが、それから数年。周りが社会に出てんのに仕事もせず毎日毎日ギターばっか弾き続けてんのは正直異常だと思う。

せめてバイトぐらいせえよ。

「…香澄、君仕事決まったん?」

「えっ?…なんで?」

「何でって…。え?疑問に思う俺がおかしいん?」

「??だつてほら、私はギターで手一杯だから?」

「いや当然のように言うんじゃないよ。あのね、働きもしないで毎日毎日うちに居られても困るんだけど。」

この幼馴染、働かずに遊びに来るだけならまだいい。

…帰らないのだ。しかも放つとくと飯も食わない風呂も入らない。いずれ干からびて死ぬんじゃないだろうか。

向こうの母親に相談しても笑いながら「お願いね〜」とか言われる始末だし。あの家、まともなのは妹だけだな本当。

妹は、かわいい。

「えー、だってー…」

「だってじゃないの…。風呂は？飯も食ってないんやろ？」

「ぶー…。あつ、ご飯は食べたよ！これ!!」

「喜々として見せてくれるのはええんやけど、その筒は…？少なくとも飯じゃ無いやんな？」

「あいす!!ぼきってするやつ!!」

あー…あつたあつた…。

冷凍庫に大量に突っ込んで食うタイミング見失ってたやつな。あれ一人暮らしの身でで処分とかどないせえつちゆうんじやい。

あ、そうだ。俺別に特定の地方の人じゃないからね。ただ単に語尾とか喋り方が変なのよ。昔の友達のせいだね。

「今日は、それだけ？」

「うん！暑かったから!!」

「へー。じゃあ取り敢えずそのギター没収な？」

「え」

「え、じゃないよ。夜も遅いし、まずは生活をしなさいな。

飯はこれから作ったるから、お風呂入っちゃいなさい。」

「う” ……はあい。なんか〇〇つち、お母さんみたい…。」

「君のお母さんこんなに口うるさくないべ？」

「お風呂いただきまあす！」

自分から振ったくせに聞いちゃいないよ。…いや、俺が勝手に拾っただけか。

あいつの着替えとタオルと用意して、と…。どうせ脱衣所に置いても着てこねえし、居間に置いときやいいか。

ギターケースは…と。…何事においてもこれくらい真剣になってくれたらなあ。ギター以外はからつきしだもんな、あいつ。

シャワーを使い始めた合図であろう壁越しの水道音を聞きつつ冷蔵庫の中身を確認。

…まあ特別なもんはできんでも一人分は用意できるか…。

「ただいまあ…あづーい…。」

「…やっぱ裸で上がってきたか…。暑いのはわかるけど、さっさと服着て髪乾かせよー。」

「うー…。」

「はあ…。ほい、麦茶。」

「あ”ーり”ーがーどー…：んう、んっ、んむっ…。ぷはああああああ。あ。」

一気か。風呂を溜めるところから任せるといつもこうだ。

温度の加減つてもんをしらんのかねこの馬鹿は。…いや、加減を知らんのは温度だけじゃないか。

今だつて一気の後氷まで食い尽くすせいで頭痛にのたうち回ってるし。

「ああうう…：誰かあ…：誰かあ…：コーンポタージュを…：それが、ホットミルクをお…。」

「熱いもん飲んだつて頭は治らんよ…。ほれ、飯食つちまいな。」

「うううう。ありがとう…。…：おいしい!!」

「ん、特に凄いもん作れなくてすまんな。」

「んーん、〇〇つちのご飯好きだよ!!」

…まあ、何食つてもおいしいって言う奴だしな。

「君が何かにまずいって言ってるのを聞いたことないがね…。」

「ねえ、〇〇つち…?」

「…ん、どうした。」

「その…ね。言いにくいんだけど…さ。…おかわり。」

「…そんな腹減るなら昼間からちゃんと食べときなさいや。」

なんつーか、幼馴染よりペットって言ったほうが正しい表現かな…。

懐いてる分には扱いやすいからいいんだけど、今日も帰らないつもりなんかな…。

「えへへへー。見て！全部きれいに食べたよー！」

「…犬か君は。」

皿を見せんでいい。

ああもう、すっかり忘れてた。髪、濡れたままじゃないか。

「皿は全部置いといていいから…こっちこい。」

「…う？」

「髪、痛むだろ。ついでにドライヤーも持って来んさい。」

「わかった!!」

駆け出す尻にしつぽが見えるぞ…。

曲がり角で姿が見えなくなり、ほぼノータイムでドライヤーを持って現れた。ちゃんと櫛も持ってんな。

「お、言わなくても櫛持ってきたなー？えらいぞや、えらいぞや。」

「えへへー。お願いねー？」

座椅子に座らせ、後ろに回る。

スイツチと同時に吹き出す温い風と轟音。…俺はこの音があまり得意じゃないんだが、髪は女の命とも言おうしな。

こいつが自立するまでは毎日こうして面倒を見ることになるのだから。

そういや、こういう状況を羨ましいとか抜かす同僚もいたが…。全

然わかってない。そういうのじゃないんだよな。

期待しているようなことは起こらないし、俺としても早く仕事を見つけて欲しいくらいしか望んじやいない。

だから、こいつに異性を感じることがあったとしても、異性として好かれるような兆しがあっても、それは気のせいだ。うん。

「はあーあ。○○つちがお嫁さんになってくれたらいいのに。」

風の合間に聞こえた不穏な言葉もきつと気のせいだろうな。

センセイ（教え子編）

「…いつ、…せんせいっ、聞いてますか??」

「…あ、ごめんね、ぼーつとしちやつてたよ。」

「お疲れですもんね…。」

「いやいや、こんなのまだまださ。…それで、何の話してたっけ。」

「それは…」

夕暮れの教室。教え子に呼ばれて訪れた空き教室で、校庭の賑やかさを見下ろしつつ、思わず気を緩めてしまったのだろう。

呼び出した張本人の話をすっかり聞き流してしまっていた。

「文化祭…じゃないですか?」

「そうだね。」

「…その、忙しいとは思うんですけど、えと…」

「…どうした戸山、らしくないなあ。昼間の元気はどこ行った?」

底抜けに明るい——といった表現がしつくりくる彼女はどこへやら。夕日に照らされた目の前の生徒、戸山香澄は、後ろ手に何をこそごそやりつつあちらこちらへ視線を飛ばしている。

「私たちのバンド…ステージでライブやるんです。」

「ああ、勿論知ってるよ。みんな楽しみにしてる。」

「…その時間、見に来てくれたり…しますか?」

あれは…確かプログラムだと二日目の夕刻だったか。見回りやら警備やら、この学校で貴重な男手ということもあり流石に暇な時間は無いが、一バンドを見るだけの時間であれば大丈夫だろう。

僕は数秒の間の後、頷いた。

「…うん、戸山に誘われたとあつちや、見に行かない訳には行かないもんなあ。」

「えっ、ほ、ほんとですか!？」

「もちろん。」

「…無理とか、してないですか…?」

「大丈夫、僕も戸山の歌っている姿は好きだからね。…ほら、前にライブハウスにも誘ってくれたろ?」

「は、はい…」

「あれ以来のファンだからね。…今回のステージも、楽しみにしてるからね?」

ぱあつと、曇り空が晴れ渡る様に顔を輝かせる彼女。…まったく、この表情の早変わりっぷりはいつ見ても飽きないね。

「はいっ!!絶対、絶対きてくださいね!…せんせいの為に、一生懸命頑張りますからっ!」

「…僕の為、か。…他のお客さんのことはいいのかい?」

「…あ。…え、ええつと、それは有咲とか、おたえに任せますから!」

市ヶ谷と花園か…そういえば彼女らも同じバンドなんだっけ。仲が良いようで大変よろしい。…青春つてやつだねえ。

「…こちら、戸山だつてバンドの一員だろう?…僕の事なんかはいいから、お客さんに向けて発信したらどうだい?」

…君たちの音楽を。」

「で、でも…つ。私、せんせいの為に歌いたい…せんせいに伝えたい気持ちがあるんです。」

「…それは、今…こじや伝えてくれないの?」

「え、えへへ、私、口下手なんで…音楽の力を借りてなら、ちゃんとぶつかっていけるっていうか…。」

あまり口下手という印象は受けないがね。…少々語彙力が足りないな、と思う節はあるけれど。

まあ戸山がそういうならそうなんだろう。楽しみにしておこうか。

「そっか。…じゃあ、嘩かし素敵な演奏を見せてくれるってことで、楽しみにしておくからね?」

「えっ。あつ、ちよ、あんまりハードル上げないでくださいよう。」

「もう上がり切っちゃったからねえ。がんばるしかないね。」

「うええ…き、緊張してきちゃった…」

「大丈夫大丈夫。…戸山ならできるさ。」

「せんせい…」

ぽんぽんとその特徴的な髪形の真ん中を撫でてやる。僕のせいでプレッシャーをかけすぎて、上手いかなかったりしたら大変だしね。…思い出は、楽しい物じゃないと。

「せんせい、上手くできたら、ご褒美とかくれますか…?」

「うーん…そうだなあ……。何が欲しいの?」

「ええつと……。三日目、お忙しいですか?」

「…どうだったかな。」

三日目って言えば…ああ、僕の当番は見回りと各クラスの展示回りか。それほど時間のかからない事であれば大丈夫そうだな。

「少しだけ、少しの時間だけでいいんですけど…。」

「まあ、ちよつとクラスを見回ったりしなきゃいけないけど、どこかで時間はとれると思うよ。」

「……やった。」

「ん。」

「えつとー…一緒に…居たい、です。」

「…僕と?」

「はい……二人だけで、少しお喋りとかしたいかなって……」
「今もしてるじゃないか。」

不思議なことを言う。…場所やタイミングが違う、というのが重要なのだろうか？

何にせよそれくらいであればお安い御用だ。…何なら”ご褒美”としては物足りないんじゃないかと心配になる程だ。

「うう…そうだけど、違うんですよう…。」

「そっかあ。…えつとき、僕、三日目は全クラスの出し物を見て回る担当なんだけどね。」

…一緒に行くかい？」

「……えっ!？」

「そんな大声出さなくても…。それともやっぱりどこかでおしゃべりしてる方が…」

「い、いえっ!…是非、一緒に行かせてください!」

「…ん。じゃあご褒美はそれで決定だね。…頑張れそうかい？」

「…は、はい!もう、今までで一番頑張っちゃいそうです!!」

うんうん、空回りしそうなところだけが心配だけど、元気な戸山は見ていて気持ちがいい。

素敵な演奏を期待しよう。

「それじゃあ、私、練習に行くので!」

「うん、頑張つといで。無理しない程度にね。」

教室の戸も閉めずに駆けだす戸山の背中に隠し切れないうわくを感じつつ、この後控えている会議に頭を切り替える。

その文化祭に向けて、どうやら緊急の会議があるらしいのだ。…生徒指導部も中々に大変だ。

それはそれで、僕達教師陣にとって大切な仕事だし、大切な教え子

達を守るという使命にも繋がる。

少し時間がかかってしまいそう、とは教頭談だが、何にせよ家族への連絡は必要だろう。

「……………あつ、もしもし？まりなかい？

…うん、うん。…ちよつと遅くなりそうなんだ。

待ちきれなかったら、ご飯は食べてしまつて構わないからね。…うん、僕も愛してるよ。」

きちんと妻への連絡も欠かさない。仕事と家庭を天秤に掛けるつもりはないが、家庭を持つとは色々大変なんだ。

こなすつかり大人になってしまった僕だけど、未だに文化祭には心が躍ってしまいそうになる。

…早く中身も大人にならないとね。

全てが欲しい（ヤバい同僚編）

「……くそ、休みなのにいつも通り早起きしちゃった。」

体に染み付いた”習慣”とは恐ろしいもので。

折角の休日だというのに、出勤日と同じ時間に目覚めてしまったよ
うだ。

窓から差し込む爽やかな日差しと朝の匂い……今はそれもちよっ
ぴり恨めしい。

……さて、二度寝するか。

ポーン♪

「んあ？」

スマホが鳴り画面に光が灯る。…通知音の種類からしてメッセー
ジかメールを受信したといったところだろう。

二度寝をも妨害してくるその音に苛立ちはピークを迎えそうだ。
正に怒髪天を衝……ん。

「…戸山さん？」

送信者は”かすみっち”？。…同じ職場の無駄に元気な女性だ。

毎回ぐいぐい来るその感じがあまり得意じゃないんだが、少し前の
飲み会で周りの雰囲気流されるまま連絡先を交換したんだっけ…。

『早起きだね。』

メッセージを見て背筋が凍るかと思った。

早起き、と確かに書いてある。…俺が早く起きてしまうことを予見

していた?…若しくは、この状況を何らかの方法で知つてのメッセー
ジか?

何にせよ、こういうところも含めて謎が多過ぎる。本当に苦手な人
だ。

『わ!既読ついた!』

『ほんとに早起き??』

『勘で言ったら当たった!!私凄い!!』

何だよ勘か…。

驚かせやがって。眠気吹っ飛んじやったじゃないか。

…実際年下だし、先輩じゃなかったらキレてるぞ。

『何ですか朝から』

…送ったあと冷静になつて考えてみると、少し刺があつたかもしれ
ない。向こうも既読つけてから反応ないし。

謝ろうか、それで調子付かせるのも面倒だし謝るまいか…不要な迷
いに頭を回していると追撃が来る。

『もー!!!!!!』

…いやいや、何が言いたんだこの人は。

『いやほんと何なんですか』

『あのね。今日お休みでしょ?』

『○○さん、何してるかなーって!』

『休みですよ』

『なんだっていいじゃないですか』

本当にこんなしよーもないチャットしてる場合じゃないんだけど。だって、週にたった一度の休日だぞ？二度寝したり三度寝したり、あと四度寝なんかもしなきゃいけない。予定は山積みなんだ。早いところ振り切って、安眠の蓄積を…

『ひどい…。』

『でもね、○○さんにはお知らせがあります。』

『はあ』

『ふっふっふっふ。』

『まだ理解が追いついていないようだね、明智君?!』

『○○っす』

『今更名前間違えるってなんなんすか』

『ノリわるい!!』

『忙しいんで手短にしてもらえますか』

『じゃあ、玄関のドア開けてみて〜』

玄関?…:…おいおい、新手のイタズラでも仕掛けたのか?
ドア開たらゴミ捨ててあるとか?…やめてくれよマジで…。
本当に酷い休日だとウンザリしつつ、また思わず降って湧いたような憂鬱に苛立ちを覚えつつドアを開け――

「えへへー。来ちゃった。」

初めて見る私服姿のクソ^戸元気な爆弾^山上司が立っていた。

あまりの衝撃に言葉を失ったまま、暫し見つめ合う。：「う？」とか「んー？」とか言いながら小首を傾げているが、”?”で一杯なのはこっちの方だ。くそ、見た目整ってるだけに一瞬可愛いか思っちゃまった。

「おーい。まだ寝てるのー？」

「立って寝る阿呆じゃないっすよ。」

「えっへへー、来ちゃ」

「それもう聞きました。：何の用で？」

「大事な連絡があつて来たの！：入ーれてっ。」

うちは四部屋くらいが纏まったアパートだ。玄関先という共通スペースでこれだけ声を張り上げられてはご近所さんにも迷惑だろう。大家さんの心象も悪くしたくはないので、ここは一先ず上げてしまふことに。：一瞬部屋の散らかりや、ご無沙汰になっている掃除なんか脳裏を過ぎったが相手はこの人だし。意識している異性でもあるまいしと、気にしないことにした。

「きつたない部屋ー！」

「あんまうるちよろしないでください。：で、何でわざわざ家まで来るんすか。」

「掃除する？」

「なら帰ってください。」

「すっごい邪険にするね。」

「今はプライベートですからね。踏み込む権利はないはずですが？」

「わ！ひげ剃ってないでしょ！」

「……………ま、休みですからね。」

話にならない。文字通り。

何なんだ。ここで快くOKしたら、本当に何しに来たんだかわからなくなるぞ。

ともあれ好きにしていいらしいので、安らかに眠りに就こうと布団に潜り込む。

覚醒しきってしまった思っていた意識は思いの外簡単に落ちていって…。

*
*

パチン、パチン………パチン、パチン、パチン…

手を掴まれている感覚と一定間隔で聞こえる何かを切断する音。再び浮上した意識の中で最初に感知したのがそれだった。

「……あつ！おきた！」

「…何してんすか。」

「また敬語……。爪切ってあげようと思って！」

爪？なんでまた。

「○○さん爪伸びてたからー。欲しいと思ってたし、丁度いいかなーって。」

「…そんなに伸びてたかな。」

「それより、おはようございます。」

「はい、おはよう、ございます？」

深々と頭を下げられ、思わず反応してしまう。さっき言えやそれ。

「…はんできてるよ！」

「……戸山さん、勝手になんでもやりすぎじゃない？」

「ひうつ……嫌だった？」

「うん。」

「ひどいい!!」

酷くない。休日に入りの家に突入して家で好き勝手やるのはまともじゃないだろうよ。

…確かに、やってることは助かるけど。

「まあいいや。ご飯つつたつて、うちに食材なんかなかったでしょ？」

「あつ、持ってきたの!」

「わざわざ家から? 計画的じゃないか。」

「あつちゃんがねー、そうしたら〇〇さん喜ぶんじゃないかって!」

「……妹だっけ。」

「そう! すつごく可愛くてね? いつもいつも」

「妹の話はいいです。」

文句を言いながらも一口……ああ、味は普通か。これで超絶メシマズとかだったら即追い出せたのになあ…。

とうか今更だけど、この状況ってかなりオイシイ状況なのでは? (見た目だけは) 可愛い女の子(年下の先輩)が押しかけ女房よろしく家事と世話をしにやってくる…。

…うん、考えようによつては悪くないかもしれない。

「…おいしい?」

「……普通。」

「そつかあ…。」

「……一応確認なんだけど、こんなことの為だけに押しかけてきたんすか?」

「…迷惑だった?」

「……微妙っすね。飯は普通にうまいし。家事も助かるし。」

「ほんとっ!?!じゃ、じゃあ毎に」

「どうしてそう極端なんですか。大体なんで俺の家に…」

「好かれないんだもん。」

「や、別に嫌いじゃないけど。」

「好きになつてほしいの!!」

「…えー…」

正直めんどくさい。いいじゃん、別に好きにならなくても業務上問題ない程度に仲よければ。別にあなたとどうこうなる気は更々ないんだし。

…そう思っているのはどうやら俺だけの様で、戸山さんの熱弁は止まらない。

「私はずっと大好きだったから!ずっとブローチしてたのに流されるし…」

「…アブローチ?」

「それ!」

「あそう、あれアブローチだったんだ。」

毎日やたらとグイグイ来るアレをアブローチと言うのか。…嫌がらせかと思つてたよ。

日当たりが良くないとかいう謎の理由で二人のデスクだけ島流しにされるし、出張も何故か二人部屋にされるし、余りにも途方も無すぎる”新規プロジェクトの考案”とかいうザツクリした案件を二人で担当させられるし…。

…待てよ?アブローチつてことは、戸山さんの意思が影響してたつてことか?会社規模で?…この人もこの人だけど、それに甘んじる会社も会社だなあ…。

「戸山さんね、やりすぎ。」

「ううん、全然足りないくらいだと思うな。…だって、アレだけしたの

に○○さんは他の女子社員と会話するし、休みの日はどこで何してるか分からないし、私じゃない人と残業したりするし…。」

「戸山さんと違って真面目に働いてるだけなんで。」

「むー…私だって真面目に働いてるもん。」

「どこが。」

あれで真面目に働いてるんだつたらそれは…あでも業務的には真面目なのかもしれないな。遅刻も欠勤もないし。ただベタベタしすぎなくらいか。

「将来の夢の為に頑張ってるの。」

「将来の夢?…立派なビジネスマンですか?」

「ううん…好きな人の、お嫁さんになるってこと。」

「ええ…。他当たってよ…。」

そんな夢だ何だと持ち出されたら重すぎて構ってらんないよ…。
折角だがここは丁重にお断りを…

「嫌。嫌嫌嫌嫌!!」

「え、なに、怖。」

「私は○○さんがいいの…。ううん、○○さんじゃないとダメなの。だってそう心に決めたから!○○さんが入社して、挨拶を交わしたあの日から…。」

「勝手に決めないでくれる?」

「だから私は、○○さんに振り向いてもらうために、○○さんにもっと感じてもらうように、○○さんをもっと近くで感じられるように…。」

色々手を尽くしてるのだから、きつときつと、私をお嫁さんにしてくれる筈だから、その下準備なの。」

「聞いちゃいねえ。…もういいや、好きなだけ喋ってくれ。」

もう抵抗は諦めた。喉が枯れるまで喋ればいいさ。それまで楽しい事でも考えて待つてるから、終わったたら呼んでくれ。

実際きつと、俺に対して何かを聞いてほしいわけじゃないんだろうし。一人で勝手に盛り上がるのがお好きらしい。

「なのに、折角引き離しても会社の女達は〇〇さんに擦り寄ってくるし、〇〇さんは〇〇さんで全く振り向いてくれないし…。」

毎日毎日、〇〇さんの使い終わった箸も飲み終わったペットボトルも缶も切った爪も、ちゃんと全部集めてるのにどうして報われないの？

家にだって来るのは初めてじゃないのに〇〇さんは気付いてくれないし、毎日一緒に寝てるのも多分気付いてないし…。これじゃあ私にだけ想いが積もって行っちゃう…もう、辛いよう…。」

「終わった？まだ続く？」

「〇〇さん!!」

「…なに。二人しかいないんだから名前呼ぶ必要ないじゃないすか。」

「私を貰ってください。」

「遠慮しておきます。」

「お願いします！なんでもするから！なにしてもいいから!!」

「誤解を招くようなこと言わない。」

「もう下僕でもいいから！なんならペットとして飼ってくれてもいいの!!」

「そんな趣味はない…。」

「むう…。手強い…!」

「あのさあ、俺にとつて戸山さんって、職場の知り合いでしかない訳。それをいきなり貰えだの飼えだのと…」

頭、おかしいんじゃないか？」

「頭おかしいです！だから面倒見てください!」

「尚更困ります。…もう、そんなしょーもないことばっか言うなら帰ってくださいよ。」

家事とかは助かりましたけど、本当に何も求めてないんで。」

「何で!!彼女でも居るの!?!」

「居ますよ。」

「……………そう。」

なんだ、最初からこう言えばよかったのか。トーンの下がり方には最早引いちやうくらいだけど、どうやら帰ることにしたらしい。

何も言わなくなってしまったが、俯いたまま玄関へ早足で行ってしまった。…念のためドアを完全に出るまでは見守ってみようと着いて行くが、こちらには目もくれない。あの一言効きすぎだろ。

「…彼女ってやっぱりあの子?」

「あの子って?」

「○○さんの幼馴染の…」

「…何で知ってるの。」

「○○さんの事は何でも知ってるの。…じゃあ、用事ができたから帰ります。お邪魔しました。」

「そうかい…そりゃよかった。」

「…絶対、○○さんを救って見せるから。」

もう意味が分からない。

結局休日夕方まで使い潰されるし、本当に苦手だなこの人。好意を何かと勘違いしちやあいないかね。

これからも、こんなことが続くのだろうか…。

「何だか途中よくわからない事をベラベラ喋っていたし、妄言も大概にしてほしいよ、まったく。」

普段料理もしない俺は、台所から包丁とフォークが一つずつ消えていることに気づかなかった。

それに気づいていれば、そしてすぐに追いかけて居れば、あんな事にはならなかったかもしれないのに。

姉弟でデキること（姉編）

「ねーちゃん。来たぞー。」

とあるアパートの一室。「戸山★」と痛々しい表札が掛かった部屋のドアを、もう何度も使っている合鍵を使い解き放つ。

入った玄関で靴を脱ぎつつ奥に呼び掛けると、居間の方から「入っちゃってー」と返事が返ってきた。

「んじゃ、お邪魔しまーっす！っつと。」

現在高校2年生。青春真っ盛りって時期を謳歌している俺だが、たまの週末にこうして姉の元を訪れることがある。

姉はとつくに社会に出ていて、いい歳なのに彼氏の一人もできず独身生活をエンジョイしているらしく、寂しいからと呼びつけられるんだ。

居間に入るとまず最初に感じたのは、空腹を刺激する香しい匂い。

「へいらっしやいー！」

「おーす。」

「違うよ○○、そこは「お久しブロッコリー！」だよ。」

「……なんだ、飯作ってたん？」

「す、スルーだ……。」

「珍しいじゃん、姉ちゃんが料理って。」

「ま、まあね？可愛い弟の為に、腕によりを掛けてあげようと思ってね。」

「あそ。…手洗ってくるわ。」

「またあ!？」

そんなことばっか言ってるから彼氏できねえんだよ…。

うちの姉には悪い癖がある。…所謂ブラコンとシスコンってやつを拗らせた結果なんだろうが、極度に俺を可愛がってくるんだ。

因みに俺と姉の間にはもう一人姉が居るんだが、そっちはそっちで被害に合っているらしい。まるで天災のような姉なんだ。

「……あれ、何この歯ブラシ。」

洗面所には見覚えのないコップと歯ブラシ。姉ちゃんのセットは隣にあるし、俺のものでもない。……ややつ？これは？もしかするともしかしないでもないやつかこれは。

自前のタオルハンケチで手を拭き拭き居間の方へ戻る。

「姉ちゃん、あの歯ブラシ誰の？」

「んー？…ああ、青い奴？」

「そ。」

「えへへ…あれはちよつと前に来た友達のかなあ。」

「忘れ物？」

「うん。…暇だったら捨てていい？」

「は？返さなくていいの？」

「もう会わないしいーのいーの。」

ああ、またこれだ。…きつと相手は姉ちゃんの見た目とか第一印象に惹かれて寄ってきてしまった哀れなメンズなんだろう。

そしてきつと、泊まることになったはいいものの、徹夜で弟・妹談義を聞かされ身も心もズタボロにされた悲しきメンズなんだ…。男はつらいよ。

「…自分で捨てろよな。」

「そーいいながら捨ててくれるの、優しいよね。」

「……捨てる前に言うなよそーいうことは。」

やらざるを得なくなるじゃないか。恐ろしい強制力だ。

「さて！今日の晩御飯完成です。」

「…何作ったん？」

「○○の好きな食べ物ばかりだよ！テーブルまで運んでくれる？」

「あいよ。」

*
*

「我ながらよく平らげたものだ…。」

「育ち盛りだもんね。おいしかった？」

「おー。姉ちゃん風にいうなら、「キラキラドキドキする味だった！」だな。」

「もーやめてよー。本物はもっと可愛らしいんだから。」

「そこかよ。」

「へっへっへー。可愛いお姉さんを持って幸せかなあ??んー??」

絶妙に人をイラつかせる表情やめろ。

「……や、あしゆねえの方が可愛い。」

あしゆねえ。俺にとって見たら二番目の姉だ。一番上の香澄姉ちゃんとは一歳差で、名前は明日香。

香澄姉ちゃんが噛んで「あしゆか」と言ったのを皮切りに、香澄姉ちゃんからは「あしゆ」or「あつちゃん」、俺からは「あしゆねえ」or「おい」と呼ばれるようになった。

「むー…。そうやって若いほうばかり鼻負する…。」

「一歳しか変わんねえだろ。」

「二十歳越えたら大問題なの!!」

「越えてねえだろ！」

まだ19だろあんた。

「でも、でも…」

「ほら、そんな細かいことしてたらあつという間に朝になるぞ?」

「え!! あつ、それは勿体ないね。」

「ん。…今日も、やるんだろ?」

「そうだね。…だから先にお風呂入っちゃおうか。」

「姉ちゃん先に入って来いよ。」

「りよ!」

実は、俺がここに呼ばれるには理由がもう一つある。それはまあ、飯だの風呂だのが全て終わった後、部屋を真っ暗にして行われるのだが…。

* * *

「あがったよ!!」

「おう…:…や、髪乾かしてから来いよ。ほたほた言うてるやん。」

「だって! もうっ! 待ちきれないっ!」

「…:…はあ。」

「やろうっ! はやくっ!」

「タオルとドライヤー。」

「へ?」

「タオルとドライヤー。持ってこいって言うてるの。」

「なんで?」

「素で訊くなよ…:。そのままじゃ風邪ひくだろ? 乾かしてやるから、持ってこいって。」

「…:○○、天才?」

「はよ。」

ったく。どつちが上だかわからないな、おい…。

元気に駆けてく姉ちゃんの背中を見送りつつ溜息を零す。つか、乾かした後に俺も風呂入るんだよな…。

結局何やかんやあって、消灯の刻。

「はあ…はあ…！」

「姉ちゃん、息荒すぎ。……消すぞ?」

「うん!準備万端だから!!」

カチカチツ

紐を二度引つ張り豆電球のみにする。これはお決まりで、真っ暗だとお互いの顔が見えずつまらないから、という理由から来ている。

そのまま姉ちゃんの布団に腰を落ち着けると、もう待ちきれないと言った様子で目を輝かせる子供ガキと目が合う。

「…わかったよ。……今日もいつも通りいくぞ?いいか?」

「う、うん!もう何でもいいから早くやろう!」

今日も今日とて戦の幕が上がる。

○太郎電鉄。99年縛り——

「…デビルと牛歩ととりかえしつて…あんた鬼か。」

「お姉ちゃんは小悪魔なんです☆」

「やかましい!覚えとけよ!」

姉弟の週末が、暮れる。

イタズラしちやうぞ（妹の友達編）

コン、コン

客があまりにも来ず、ただカウンターでぼーっとするだけだった午前中。只管に浪費され続ける時間に業を煮やし、オーナーである祖母に断り店を閉めた。

自室に戻りすっかり定位置となっている座椅子に腰を落ち着けた直後に……冒頭のやや控えめなノックが鳴った。

「??……誰？」

俺の知る限り我が家にノックをしそうな人間は居ない。古物商？骨董屋？……を営む我が家だが、オーナー……いや、もう勤務時間じゃないからいいか。バアさんは有無を言わず勝手に開けて入ってくるし、たった一人の妹はそもそも部屋に來ない。

……この家にはその二人と俺しか住んでいない訳で、ノックにも全く心当たりはない状態だ。

「…お、おにい……ちゃん……。」

「!？」

「はっ………はいっても、……いい？」

「………有咲^{ありさ}?……なのか？」

如何せん障子越しのシルエットじゃ誰かわからないが……その少しツンツ気のある声と、俺に対しての呼び方から妹の有咲の可能性ありだと思われる。

「そう………だつよ。」

「話し方どうした。……んまあ入るのは構わないけど。」

すすす…と静かに障子が開き覗き込むように顔を出したのは、ウエーブがかつた明るい金髪をポニーテールにまとめた妹。…顔が赤いのは何なんだ。

「はいつていい?」

「いいよ。」

「…ちよつと待っててね?」

何やら後ろの廊下に向かつて一言断り、部屋に踏み込んでくる妹。後ろ手でびったりと障子を閉める辺り几帳面さが窺える。

俺の目の前にドスンと腰を下ろすや否や、いつもの調子で話し出す有咲に、何故おかしなキャラクターを演じていたのか疑問がさらに深まる。

「店、閉めたの?」

「誰も来ねえからさ。」

相変わらず語気の強いやつだ…。

「兄貴が仏頂面で座ってるからつしよ。」

「普通に真顔だったぞ。」

「あつそ。」

どうでもいいんならイチイチ貶さないでほしいんだが。特に顔はやめなさい、怖い怖い言われて割と凹んでるんだから。

誰に似たのか、俺は酷く厳つい顔をしているらしい。数少ない友人には「視線だけでスクランブル交差点を空にできる」などと訳の分からない弄られ方をする程である。

「で、さっきの変な喋り方なんだ?今更可愛い子ぶってもだいぶ手遅れだぞ?」

「五月蠅い死ぬ。…友達来てつからさ。暫く部屋から出てこないでくれる?」

……口の悪さが引つ掛かるが、要するに厳めしい兄貴が居ることをあまり知られたくないのだろう。言われなくとも、この後は惰眠を貪り過ぎすつもりだ。

「態々言わんでも分かるだろ?俺が仕事以外で部屋から出るかよ。」

「念の為に言ってるだけだつてば。兄貴マジでヤバイツラしてんだから、そろそろ自覚したほうがいいよ?」

「言・い・過・ぎ・だツ。わーったから、もう出てけ。俺は寝る。」

チツ、と小さく舌打ちを残して部屋を出て行く有咲。後ろを向く瞬間に物凄い笑顔を作ったのを俺は見逃さなかったからな。

精々友達と仲良くやっておけ。

「さつてと……………。鬼の居ぬ間に睡眠、つてなあ…。」

仲が悪いわけじゃないんだが、どうも顔を突き合わすと口汚く罵り合うだけなんだよなあ…と、いつから始まってしまったのか分からない諍いに想いを馳せつつ、平たく背凭れを倒した座椅子に寝転がるのだった。

「……………ん。」

背中が痛い。随分と長いこと寝てしまっていたようで、紅いながらも顔を見せていた太陽はすっかり沈み切り真っ暗な闇が部屋を支配していた。

首と背筋をポキポキ言わせつつのっそりと起き上がる。

「……あー……喉が……ん」んっ。」

まだ少し暖かいとはいえ秋もすっかり深まっかけていて。風邪ではないが乾燥に喉をやられたらしい。

「…茶…は寝る前に呑み切ったか。」

机の上に置いた湯呑はすっかり空に。…冷めきつていても水分が残っていらや…と少しは期待したんだがな。

「お水ならありますよ。」

「おっ、サンキュ。」

「いーえー。」

タイミングよく隣からキャップを外して差し出されたペットボトルに勢いよく口をつける。……ふう。枯れ切っていた喉に再び潤いが戻り、それだけでも幾分か生き返った心地になる。

自分でも引くほど喉が渴いていたらしく、元々七割程しか入っていなかった水をほぼ飲みほしてしまった。

「あー…ごめんな。殆ど飲んじやったわ。」

「あついいんです！全部飲んじやってください！」

「…そ？そりや悪いな。…んっ…んっ…んっ、ごちそーさん。」

「わああ……！はっ、お、お粗末でした！」

さて。喉も潤ったしどうすつか。どうせ有咲の友達がいるせいで部屋からは出られないし、まだこのまま寝続けるのもいいかなあ…。

「…sみちやあーん??…つかしーな…。」

ぬ。妹の声がある。声を出しながら歩き回っているあたり、何かを探しているような感じがあるな。

「かーすみちやあーん……かすみちやーん??」

”かすみちゃん”。きつとそれが、遊びに来ている友達の名前なんだろう。

「…にしてもあいつが、”ちゃん”付けで人を呼ぶなんてなあ。」

口調と威勢だけならスケバンとも間違えられるほどの女だ。見た目も化粧こそしていないがハッキリとした顔つきをしているし、中途半端に美人な辺りも色々闇が深そうなのに……。

そういうや、友達を家に連れてくんのも初めてか。

「…友達、迷子になってんかなあ…。」

「この家、広いすもんね。」

「まあな。初見は絶対迷うと思う。」

「私、迷わなかったんですよ。…凄いですか?」

「ほほう、大したもんだ。」

そうだよな。うちは所謂和風建築つてやつで、庭もそこそこ立派なものだ広がっている。バアさんの話じゃ、ここ流星堂りゅうせいどうの先代が建てた家だそうで、当時はかなり有名な屋敷だったとかなんとか。

…今となつちやただ古くて不便も多いデカイだけの建物だが、そのあたりも含めて”由緒”が云々つてことなんだろうか。でもこのご時世に竈だぜ?笑うわ。

「……お兄ちゃんは、ずっとここに居るんですか?」

「まあ、有咲が外に出るなっていうからさ。」

「…閉じ込めておきたいんでしょか。」

「友達に見られるのが嫌なんだとき。…かすみちゃん？つてさつき呼んでた子だと思っただけ。」

「別に見られて困るようなことでもないと思いますけどねえ。」
「そうかな。」

あいつの本当の顔の方をむしろ見せてやりたいくらいなただけだな。……………ん。

俺はさつきから一体誰と話しているんだ？俺のことを”お兄ちゃん”と呼ぶ女の子…まさかこの子が有咲…ということはあるまい。確かめるべく、吊り下げられた電球に電流を流す。

「ふあつ!!…まぶしっ!」

「おっと……………誰?」

薄黄がかつた光に照らされ、部屋の全貌が明らかになる。眩しそうに声を上げる割には全く動じず、俺がさつき飲み干したであろうペットボトルをガジガジ齧っている少女が隣に座っていて、思わず暫し見つめ合う。

「……………」

「……………」ガジガジ

「……………」

「……………」ガジガジガジ

「……………」どうしてペットボトル齧ってんの?」

「……………」おにいちゃん、言うほど怖い顔してないですね。」

「…いや誰やねん!!」

思わず大声を出してしまった。…だって、目の前にいる茶色髪の幼い顔つきの少女、あまりにも初対面すぎる。どうしてそう落ち着いていられるのか全くわからないし、その目的も右に同じだ。

「きつ、君がかすみちゃんか!?!」

「そですよ。戸山香澄とやまかすみっていいいます。有咲に誘われて、ハロウィンパーティーしにきたんです。」

「はっ、はろういん…? そりやまた随分とウチに似つかわしくない行事だね。」

「純和風ってやつですもんね。…でもほら、仮装、似合っていないです?」

じゃーん、と擬音を口にしつつ両手を広げてみせるかすみちゃん。

「…有咲と同じ制服ってことはわかるんだけど…何かアレンジでもしてるのかい?」

「…あつ、まだ着替える前でした。…えへへ、いやあ失敗失敗。」

「なんなんだ…。」

コンコンコンコンコン

「!!」

先程の叫び声を聞いて来たのだろうか、それとも灯りを?

恐らくこのイラついたように連打されるノックは有咲のものであるし、素を隠そうとしない態度から何かしら気づいているのかもしれない。

未だポケーッと突っ立っているかすみちゃんを抱き寄せ、その流れのまま寢床に突っ込む。

「か、かくれんぼですか?!」

「しーっ。面白いものを見せてやるから、じっとしててな?」

「…ふふっ、どきどきします。」

咄嗟に飛ばしてみせたウインクに意図を汲み取ってくれたようだ。悪戯っぽく笑うかすみちゃんに布団を被せ、未だ微振動を伝えている障子のもとへ。

「……ふあああ…、何だよ有咲…。」

「馬鹿兄貴っ、ノックしたんだからすぐ開けろよな!!…：かすっ…友達、来てねーかな?」

「友達い?…：さあ、俺は見ちやいねえけど…。いなくなったんか?」
「…：うん。なんか、「トイレいつてくるー」って出て行っただけ戻ってこねーんだよ。もう二時間以上になる。」

「…帰っちゃまったんじゃねえの?…お前、どうせ変に可愛い子ぶって愛想尽かされたんだろ?」

「…っ。…：…：…：やっぱ、そう…：なのかな。」

…あれ?もつと強く言い返してくると思ったんだがな。珍しくしおらしくなっちゃまって…。

「やっぱ」って言ってたし、自分でも思うところがあつたんかね?…何も言えずにじつと妹の顔を見つめていると、ほんのり涙を浮かべた顔で俺を見上げてきた。

「……兄k…いや、お兄^{にい}。」

「…なんだ、懐かしい呼び名だな。」

「…私、やっぱ怖がられてるのかな。」

「うん。めっちゃ気持ち悪かったぞさっきのお前。…友達の前だといつもあなのか?」

「…：…：…：だつて、お兄にしているみたい話すと、みんなヤンキーだとか不良だとか言うから…。」

「しろうがねえだろ。…：実際不良みたいなものなんだから。」

「…：不良じゃ、ないもん。」

不満そうに口を尖らせる有咲。もうちよつと畳み掛けてみるか。

「…一度素で接してみたらいいいじゃねえか。こつちが普通の私なんだ
くつつつて。」

「…絶対、嫌われるもん。」

「今だって嫌われてるかもしれない状況だろ？なら、思い切つてやつ
てみたつていいんじゃない？そつちの方が友達にはウケるかも知
れないし。」

「うう……他人事だと思って…ばかお兄。」

「そりや他人事だもんよ。…そんなに嫌われたくない相手なのか？」

別にかすみちゃん以外にも同じクラスの女の子くらい沢山いるだ
ろうし、正直一人に対しての固執が重すぎると思うぞお前は。彼女か
よ。

「嫌われたくないよ！…絶対、嫌われたく、ない。」

「ふーん？…何かあつたんか？」

「だつてえ…大好きなんだもん。」

「は？」

「だ…大好きなのっ！香澄ちゃんが!!」

「……ええ？そつち系？」

「ちつ、ちがつ……！……初めて言ってくれたんだもん。…「私たちは
一番の友達だよ」って。」

「…なら、尚更素の状態だよ」

「だからこそ、嫌われたくなくて、慎重になって……変に、意識し
ちやつて……。」

……こりや、思った以上に重症だな。あの有咲がまるで恋する女の
子みたいだ。

「…っあー……。まあ、あの子なら受け入れてくれると思うぞ？…悪い
子じゃなさそうだし、簡単に人を嫌いになるような子じゃ…」

「待って。」

「あ？」

「…どうしてお兄が香澄ちゃんのことわかった風に言うの？何を知ってるの？」

「……………えーつと…だな。」

ついうっかりやっちゃった。

「……………あ。」

俺に詰め寄るようにして一歩踏み出した有咲は、部屋の中をまっすぐ見つめ固まっている。直後、グルンと音が聞こえそうな不気味な動きで顔をこちらへ向ける。

「あの水のペットボトル、どうしたの。」

「ああ、ありや俺がさつき飲んだやつで」

「嘘。さつき香澄ちゃんが買ってたやつだもん。…香澄ちゃんはどこ？」

「……………あー。」

直感が告げているが、この状況は確実にまずい。というか、話の流れにかすみちゃんを差し出したほうが俺の身の為だが、出てくる場所があそこじゃあなあ。いっそのまま隠し通し

「えへへー、バレちゃったかあ。」

「かすみちゃんのばかー!!!」

乱れてぐちゃぐちゃな髪型のまま、這い出てくるかすみちゃん。バレてない、まだバレてなかったぞ…。

しかも、布団が暑かったのか服を緩め靴下を脱いだ状態でのご登場だ。これはもう何を言われても言い逃れできんなあ…。

「……クソ兄貴？これはどういう？」

「……ええと。ほ、ほらっ！今日はハロウィンだろ？イタズラしちゃうぞっつって」

「ふっぎけんな!!じゃあさっきのも全部香澄ちゃんに聞かれて」

「うん!…有咲、すっごい可愛かったよ?」

小首を傾げるかすみちゃん。君もかなり可愛いと思うがね。

「うるせえ!!マジで嫌われたと思って心配したんだかんたっ!!」

「嫌いになんかならないよう!私、有咲のこと大好きだしっ、一番大切な友達なんだよっ!!」

「うっ………う、うっせえ…ばか。」

ぶわあつと涙が滲み出てくる有咲の瞳。急すぎて驚いたのか、複雑そうな顔を背けるも、その表情はどこか嬉しそうだ。

「私も大好き…だから、勝手にどっか行くんじゃねえよ馬鹿野郎。」

「えっへへへ、ごめんごめん。……そっちの話し方の方が、有咲は可愛いと思うな?」

「か、揶揄うな!!」

「からかってないもくん。」

「揶揄ってる!!」

「からかってない。」

どうやら有咲にとってかすみちゃんというのは、特別な友達らしいな。そりゃあそこまで固執するのも頷ける、か。

しかし、女の子二人が楽しそうに戯れつく風景のなんと眼福なことか。

「……うむ、『ハッピーハロウィン』、だなあ。」

「兄貴？てめーには後で話があるからな？」

「…おつ、イタズラしちゃうのk」

「首洗って待つとけ…。」

俺にももうちよつと優しくしてくんねえかな。

「仲良しなんだねえ、二人とも。」

「……かすみちゃんみたいなのが妹だったらなあ…。」

「あつ、私もお兄ちゃんほしいんです！なつてくださいい!!」

「そいつは私の兄貴だ香澄ちゃん。」

「取られたくないってこと？」

「ちげー!!」

「んもー、有咲ってば、そんなにお兄ちゃん俺が大好きなのかあ？」

「お前マジでイタズラじゃ済まねえレベルで痛めつけっかな。」

「あっはい。」

かすみちゃんとの出会いが、今後どう有咲を変えていくのか。

そしてかすみちゃんが俺の妹になる日は来るのか(？)。これは、十月も最後となる少し肌寒い秋の日に起きた、小さな悪戯のお話。

ほろ酔い快速超特急（クラスメイト編）

『呑みに行きましょ〜！』

彼女から提案があつたのは授業の前日…つまり昨日だ。

社会人になつてからとあるスクールに通いだした僕だが、思つていたより歳の近い学生も多く、通いだして数日で気の合う友達も増えた。現在は仕事の都合上休学と言う形を取っている彼女も、初対面で意気投合した稀有な人間の一人だ。

「急だね。」

『私今休学中じゃないですかあ。…本当はみんなともつともつと仲良くしたいのに、中々機会が無いからあ！』

「…でもこんな急じゃあみんな予定合わないと思うけど。」

彼女——とやまかすみ戸山香澄ちゃんは、明日の授業終わりにお酒の場を設けた
いというのだが…。

『あつ、ええと、お兄さんだけでいいんです！』

「僕ら二人でいいなら前も飲んだじゃない？」

『でもほら、学校の事はお兄さんから聞けばいいし…。』

「矛盾がもう…」

「みんなともつともつと仲良くしたい」とは何だったのか。結局お酒好きなだけなんじゃないのかなこの子は。

因みに僕が二十五歳、香澄ちゃんは二十一歳。…その歳の差から、お兄さんと呼ばれているらしい。

「まあ、暇だったらね？」

『やったー！』

「ねね、お兄さん、もいつかい乾杯しよーよお。」

「…おかわりする度に乾杯する気なの?…はいはい、乾杯ね。」

やたら上機嫌な香澄ちゃんに擦り寄られつつ、チンツとグラスを合わせる。隣のボックス席のお客さんが珍しいものでも見るような視線を投げかけてくるのはある意味正解だろう。

何しろこの乾杯も八回目になる。おまけに香澄ちゃんときたら、お酒は大好きな癖にアルコールに耐性が無さすぎるといって至極面倒なタイプらしく、制止も振り切つてスタートから混沌ちやんぼん混合ぼん呷りしてはへべれけ状態なのだ。うーん…面倒臭い。

「でえ?」

「…なにが?」

「そんなら決まってるでしょ?!学校らよ、がっこー。」

「ああうん…普通に楽しくやってるよ。皆氣の良い連中ばかりだしね。」

最早呂律の怪しい香澄ちゃんとは対照的にいつもと全く変わらぬ僕。別段普段から飲み慣れている訳じゃあないが、中々どうしてお酒には強いらしい。

今は亡き父親の遺伝だろうか。…あれは中々のザルだったと聞いているが…。

「それだけえ?」

「んー。…一体何を聞きたいのさ、香澄先生は。」

「わたしはねえ…:うふえふえふえ…:まら若い男女らんが集まってるんだからあ、そういうぐちやぐちやはないのかと聞きたい!!」

「あーもうめんどくさいな…。」

呂律だけじゃなく人格まで危うくなっているようだ。普段の子は、目が合うなり「えへへ」とはにかむ様な可憐な少女だというのに。…成人済みの女性に「少女」は無いか。

「その辺は僕にはわからないかなあ。…ほら、僕大してそういうの興味ないし。」

「うそばっかりい…知ってるんらよ？…いっつもいっつもありさひゃんのおっぱい見てるでしょー！」

「見てないよ…。」

ありさちゃん…っていうのは、同じクラスになった小柄な女の子の事だ。あまり絡まないせいで苗字は覚えちゃいないが、言われてみれば確かに胸の大きい子だったような気がする。

「うそらあ…すつごいやらかいんらよ？」

「感触の情報貰つてもな…。背が低いから大きく見えるわけじゃなくて？」

「ちがーもん…あつ、お兄さんも触ったらわかるとおもう。」

「馬鹿なんじゃないの。」

どんな状況ならそれが正当化できるってんだい。「君のおっぱいの感触を確かめたいんだ。」って？ホント馬鹿。

「うぬぬぬう……。」

「はいはい、もう大人しく飲もうね。」

「おにさん！」

「誰が鬼やねん。」

ぐすつ。僕も少し酔い始めていたのか、脳天に落としたチョップが少々鈍い音を立てた。コンマ数秒遅れて頭を押さえる香澄ちゃんに、

ほんのちよっぴりだが申し訳ない気分になる。

「うーむむむむ……どーしてたたくのかなあ……。」

「ごめんごめん、加減が利かなかった。」

「あーあー……これは明日にひびくやつだらあ。」

「ごめんて……。」

「謝るならせーいってものがあるでしょおがあ。」

「SAY??」

「せーい……。」

セエイ??……いやいや、そんなに目一杯口を動かしても伝わらない物は伝わりませんよ。

……あ、歯並び綺麗。

「うーん。……えいつ。」

香澄星人の意味不明な言語の解析は諦め、店員呼び出しボタンを押す。店内に響く「ぴんぽん」と、困惑した様子の香澄ちゃん。

「なんで?なんでなんでなんで?」

「??飲み物もうないなーって思ってたさ。……次何飲む?」

「せーい……。」

またそれか。

「………YO!香澄Chan!HA!気付けばグラスが空っぽだY

O!次はつ何飲むの??SAY!!」

「へっ?……うあ、えつと……こ、これっ!」

僕なりのSAYで返してみたつもりだったが、香澄ちゃんはエラく慌ててしまつて。……手元のメニューに、ズビツ!と細い人差し指を突

き立てていたので覗き込む。

「……HEY! 香澄Chan! Come on veilはCheeseだYO!」

何だか楽しくなってきた。

「ち、ちちがうもん、知ってたもん、チーズだもん!」

「それじゃあ何飲むの? SAY!!」

「むむむむ……」

「HEY! Doした? RAPはYO! Tempoが大事だYO! Check it out!」

おいおい乗ってきちゃったぞ。…僕、ラップの才能あるんじゃないか?

…あいや、これ深夜テンションにアルコールが混ざっておかしくなってるだけだわ。

香澄ちゃんもお気に召さないようで頬を膨れさせちゃってるし。

「…いじわるなお兄さんきらい。」

「NA!」

「全然話きてくれないんだもん。」

「Cho! Cho! 待つんだYO!」

「らっぷもきらい。」

「香澄ちゃん……」

「ふーんだ。」

どうしよう。多分「せーい」って誠意の事なんだろうけど、今更そんなことも確認できない雰囲気になっちゃったぞ……。

少々激しめのLyricをかましてしまったのは申し訳ないと思うけど、こんなに機嫌を損ねてしまうとは。

そしてそこにオーダーを取りに来る店員さん。益々話しくい…。

「ええと、角ハイ一つと…：香澄ちゃん、何飲むの？」

「ふーんだ、あててみたらー？」

相変わらずツンとそっぽを向いている香澄ちゃん。怒っているんだらうけどこれはこれで可愛い…：じゃなくて、中々の難問が繰り出されたぞ。

今日香澄ちゃんが飲んできた履歴を確認すると…：生ビール、梅酒サワー、芋焼酎、トロピカルカルーア、生ビール、ウーロンハイ…：こいつ滅茶苦茶に飲みまくってんな…。

全く規則性も何もあつたもんじゃないし、見たところほぼ全てが一気飲みなためどれが好きなのかもわからない。…：かくなる上は。

「香澄ちゃん…：ちよつとこっちおいで。」

「…：なんですかー。」

ずりずりとおしりスライドで近寄ってくる香澄ちゃんの肩に、飽く迄自然に手を回す。そのまま側頭部を抱え込む様にして僕の顔に近づけ…：

「正解教えてくれたら、…：とっつておきの、面白いお話してあげる。」

と耳元で囁いてみた。正直話のタネなぞまるで持ち合わせちゃいないが、学校のゴシップを心待ちにしている香澄ちゃんならきつと食いつく事だろう。

…：…：…：と思つたのだが僕の予想は大きく外れたようで、香澄ちゃんからは何やら震えた声で「ひゃい…」と返ってくるだけだった。

「や、「ひゃい」じゃなくてさ、次の注文どうするの？」

「ひうつー…：…：あ、あおりんぐ、そーだ…：。」

正解はまさかのソフトドリンクだった。
その茶番っぷりには僕も店員のおねーさんも思わず苦笑。その一杯を最後として、二人で店を出たのだった。

「おおー、結構冷えるねえ。」
「……………」

外に出て、近くの鉄塔にくっ付いている時計を確認すると…時刻は
てっぺんを過ぎたところ。
何という事だ。終電を逃してしまったらしい…。

「…香澄ちゃん？」
「……………うえっ!？」

だがそれよりも気になるのは、会計時からやけに大人しい香澄ちゃん。
どこかポーっとした様子で、大人しく袖を掴んでついてくる。
名前を呼べば反応はあるんだけど、どうしたもんかな…。

「具合悪いのかい？ 飲みすぎた？」
「……………んーん。」
「まだ怒ってるの？」
「んーん。」
「……………少し座って休んでいく？」
「……………あのね、お兄さん。」

袖を掴んでいた手が、すすすつと下に降り僕の左手へ。きゅつと弱
弱しく握ったかと思うと、身長差の都合から上目遣いの香澄ちゃんは

「…まだ、帰りたくないなって。」

とんでもない音速の矢を放ち、僕のほろ酔いハートを撃ち抜いたのだった。

——結論から言うと、香澄ちゃんも少々酔い過ぎていたようで、特にその後どうこうなることは無かった。

ただ僕の帰宅手段が無いのは事実な為、その後始発が動き出す時間まで二人カラオケで歌い明かしたんだ。

「…：んーっ！いっぱい歌ったねえお兄さん。」

「そうだね…：もう喉がボロボロだよ…。」

「えへへ…あ、そうだ。」

まだ薄暗い冬空の下、僕の耳元に口を近づけた香澄ちゃんは、「誰かの恋愛話とか、知ったらすぐ教えてね！」と囁いて満面の笑みを浮かべた。

…：本当に好きなんだなその手の話題が。

「だから…僕、そういうの興味ないんだってば。」

「偶然聞いちゃったらくとかでいいの！…：教えてくれたら、私も…：私の好きな人のお話、聞かせてあげるからね！」

「…：ふーん。香澄ちゃんは居るんだねえ、好きな人。」

少し意外だった。周りで騒ぎ立てるのばかり目に付くせいかな、彼女自身にそういう話は無いもんだとてつきり…。

「いるよっ！絶賛片思い中々。えへへ。」

「そかそか…：まあ、何かあったら教えるよ。」

「ん…：じゃ、私あっちだから！！」

元気に駆けて行く背中と揺れる赤茶の髪を、その姿が見えなくなるまで見送る。相変わらず帰る手段はまだ無いし、結局手持無沙汰だ。……ああそういえば。僕がその手の話題に興味が無いのは、自分の事で手一杯なだけだ……と彼女に伝え忘れてしまったようだ。

人の色恋沙汰にはまるで興味が無い。……いや、違うな。

僕は君以外の人の色恋沙汰には興味が無いんだ。気になって気になつて仕方がない、君以外には。

「好きな人……誰なんだろう。」

一本目の電車が動くまであと数分。

僕の君への想いも、発車の時が近付いて来ているようだ。

大人と子供（上司編）

ガチャア

「…ありや、〇〇くんだ。」

「ああ、お疲れ様です。」

「まだ残ってたの??」

定時もすっかり過ぎてしまった夜半。事務所のドアを昼間と変わらない勢いで開け放ち、僕の元教育係でもある上司が顔を覗かせる。その顔は一瞬驚きの表情を映したがすぐにいつもの柔和な笑みへと変わった。

「ええ、明日も休みなんです、キリのいいところまでやつちやいたくて。」

「あつははは！頑張り屋さんめえ。」

「いえいえそんな…：戸山主任こそ、随分遅いですね。」

「あつもう、またそうやって呼ぶ…：」香澄さん”でいいって言ったでしょー。」

戸山香澄さん。勤続年数で言えば僕より二年多い先輩である。先輩といつても、平社員の僕と違って主任の肩書を貰っている香澄さんは直属の上司にあたるのだが。

何故か苗字で呼ばれることを嫌がり、特に畏まった場でなければ名前前で呼ぶようお願いされていたのだが…長いこと画面と向き合い続けたせいかわいいうっかりをしてしまったようだ。

うっかり呼び間違えてしまっても、今日の前でしているように頬を膨らませて拗ねる姿が見られるのでアリっちゃアリなんだが。

「ああすみません、うっかりってやつです。」

「頑張り屋さんでもうっかり屋さんは良くないなあ…。」

「気を付けますね。…で、香澄さんは何の業務で？」

「うっ。」

「うっ」??」

何やら変な鳴き声を漏らしたかと思うと、もじもじと居心地悪そうに肩を揺らす。そんな言い辛い業務なんてあつただろうか。

「実はその……………寝ちやってて。」

「……………んん?」

「資料室で去年の忘年会運営記録探してたらその…………」

「……………ああ。」

そういえば忘年会の企画だの運営だのは香澄さんが任されていたんだっけ。去年は確か前任の主任がやっていたけど、辞めたせいであるっと委任されたんだよね。

その資料を探しに…と、香澄さんらしい真面目な行動だとは思うけど、確かにあの資料室は魔窟だ。資料室らしく、紙の積み重なった匂いに程よい湿度と程よい気温。あれで寝るなという方が難しいかもしれない…誰も来ないし。

「…こんな時間まで寝てたんですか?」

「えっへへへ……………恥ずかしながら。」

「じゃあもう今日は寝なくても大丈夫そうですね。」

「それとこれとは別!」

ああ、この人帰ってからもまだ眠る気なんだ。

「ところで○○くんは、何時まで残業するつもりなのかな?」

「ん……………」

言われてチラリと時計を見やる。事務所の扉から右側の壁にある時計は、そろそろ二十二時を迎えようとしていた。

定時からの計算上三時間以上も一人で作業していたことに気付き、我ながらよく頑張ったと感慨深げな気持ちだ。

「じゃあ、このシートだけ作り終えたら帰りますかねえ。鍵は香澄さんですか?」

「んーん。多分〇〇くん任せだと思っよ。」

「…なら何で帰る時間なんか訊くんです。」

彼女は残業でも何でもなく眠り続けていた為にこの時間になったのだから、施錠を待つわけでも無いのなら僕の退社時間など関係ないだろうに。

此処は何か冷やかしの一つでも飛んでくるかと思ひ身構えつつも問うと。

「いやあ、私おなか空いちやってさ。よかったらこれからご飯食べに行かない?」

「……………」

何とも自由な人だ。たつぷりと睡眠欲を満たした後は食欲が主張を始めているらしい。自分の欲求に素直というか、生きたいがままに生きているというか…この底抜けな真っ直ぐさに微塵も計算が無いのであれば、それはもう見習った方がいいのかもしれない。

「えへへ」と笑い頭を掻く香澄さんはまるで子供のようで、その誘いを無下にするのも憚られるような気分させる。要はアレだ、面倒を見なくなるというか、構ってあげなくなるような、そんな感じ。

恐らくコンビニ弁当か何かだと考えていた夕食から大きく変わった今晚のプランに、もうひと頑張りすべく、僕は大きく息を吐いて見せた。

「…それもいいですね。んじゃ、一緒に一緒に終わらせちゃいますよ。」

「うわーい、やったーう！」

「…この時間、そんなガッツリイける店ありましたっけ？」

「うーん…どこか、居酒屋とか？…よくない？」

「居酒屋で香澄さんの食欲満たせます？」

「そ、そんなに食べないし」

「めっちゃ食うじゃないですか…前に新人さんの歓迎会やった時だつて、主役が引いてたじゃないすか。」

「う、うるさーい！いいから〇〇くんは、手を動かしなさーい!!」

美味しい食事の為、ひいては可愛げのある先輩様の為。

人々は、こうした小さな楽しみを燃料に、日夜働いているのである。

ずつとずつと、一緒だよ… (Poppin, Party
y編) (終)

「Poppin, Partyクリスマスライブ、かあ…。」

溜息を一つ吐き、ここ二時間程集中してやっていたスマホアプリを終了させる。特にスマホでゲームをする方ではない俺だが、この音ゲーだけは珍しく続いている…と思う。

課金もそこそこするし、自信を持って「この子が推し！」と言える子が出来たのも初めての経験かもしれない。…それ程、このアプリには…いや、このシリーズには波長が合ったのだ。

さて話を戻すと、アプリ内では本日限定でクリスマススイベントが開催されている。女子高校生たちの青春をロックバンドに注ぎ込む姿を描いたストーリーが主軸の音ゲー…取り分け俺が入れ込んでいるのは”Poppin, Party”というバンドだった。

主人公の所属するバンドであり、どのキャラも個性がしっかり確立されており好感が持てる。

「香澄ちゃん…今日も抜群の可愛らしさだったな…」

メインとなるキャラクター、戸山香澄は主人公格を担う人物で、明るく元気、苦難にも負けず立ち向かい挑み続ける姿勢が魅力の女の子だ。…何を隠そう俺はこの子を愛している。

端から見れば多少危ない人に見えてしまう程の溺愛っぷりだが、俺個人としてはまだまだ足りない方だと思う。確かに部屋の壁や天井は香澄ちゃん関連のポスターやタペストリーで埋め尽くされ、スマホケースも鞆のキーホルダーも、お気に入りのカードゲームのスリーブも全て香澄ちゃん。

フィギュアは公式系は全て持っているし、金で買えるグッズはほぼ

集めた。…それでも足りない。まだまだ満足するには遠すぎるのだ。

「さて今日はどんな香澄ちゃんに会えるのかなあ…?」

一人暮らし、友人の一人も居ず身内も近くには居ない男が、何の苦
労もせず時間を潰せるとしたらそれは妄想に浸ること。いくらしよ
うと誰にも迷惑を掛けないし、金や体力を奪われることもない。その
上自分にとって最大限迄都合の良い状態で夢を見られるのだから、こ
れ以上有意義なことはないだろう。

特に香澄ちゃんは主役格を担うこともあって、他の登場人物との交
流もそこそこに有り、カツプリングの可能性も上々。ネットでも様々
な”掛け算”を散見するが、どれも中々に評判がいい。

これ即ち戸山香澄という一人の少女の持つポテンシャル・可能性で
あって、まさに万能の女神。妄想も捗ると言えよう。

「シートよし、タオルケットよし、枕カバーの交換もよし。…ふむ、そ
れでは消灯…無限の可能性を秘めた幻想樂園へと今日も踏み込ん
で行く事としよう。」

俺は最近自分の持っていたとある特殊能力に気付いてしまった。
…自分の妄想を睡眠時に夢として体験できる能力。

夢をコントロールできる能力と言い換えてもいいだろう。明晰夢
の様なアレではなく、夢のチョイスから夢の中の行動・設定・視点
等、ありとあらゆるものを好きに支配できるのだ。当然毎晩のように
香澄ちゃんと過ごしているのは言うまでもない。

恋人・妹・幼馴染・姉・教え子・同僚・上司…それはもう色んな
可能性を試してきた。夢の完成度・自由度は、妄想をどれだけ強く深
く掘り下げたかで変動する。お陰で、寝る前にはこのアプリをやりこ
み、”香澄ちゃん欲”を存分に高めた状態で瞑想と称した妄想に浸
る。気付けばそれが日課となっていた。

その日課は聖夜だという今日でも変わることは無く、俺もまたブレ

ることはない。

「ふふふ…待っていてね香澄ちゃん…。」

さて、そろそろ能力を発動させる時が来たようだ。俺の唯一取り柄とも言えるこの能力スキル、「無限大な夢ドリームジャンボ」を頼りに今日も香澄ちゃんの可能性を探るとしよう。

カチ、カチ、カチ…三度紐を引つ張れば部屋は暗闇に支配される。嫌が応にも眠るしかない状況の中、寂しくないと言えば嘘になる。

勿論香澄ちゃんについてだって分かっている。彼女は手の届かない低次元の存在。文字通り住む世界が違う女性を愛してしまった俺は、恐らく一生この業を背負って一人で現世を生き抜かなくてはならないのだ。

「おやすみい…ふふつ…」

理解わかっている。理解わかついているとも。

だからこそ、妄想は止まらないし現実からは逃げ出したくなるんだ。

——俺の愛する彼女はキャラクター。平面世界に生きる無限の可能性を有し、溢れんばかりの魅力で俺を翻弄させる。

今日も、妄想ゆめの中で新たな君と。

未知数の可能性を生きようじゃないか。

おわり

【奥沢美咲】 奥沢さんは掴めない
初めての人

「○○っつゃ。」

斜め向かいに座る気怠げな少女——奥沢美咲が名前を呼ぶ。

「…いや、なんでもない。」

「そう。」

放課後。

部活や委員会がある連中はとっくにそれぞれの場所へ向かってい
るであろう時間。

僕は一人、使われていない教室の乱雑に放置されたうちの一つ、ま
だ使えそうな椅子に座り締切が目前に迫った原稿に取り組んでいる。

彼女、奥沢さんは何が面白いのか毎日こうして僕の作業時間が終わ
るまで眺めている。

暇なのか、変人を観察する目的で来ているのか。

「ねえ、奥沢さん。」

「…ん。」

「このところ毎日だよな？何しに来てるのか知らないけど、暇なの
？」

作業の手を止め訊いてみる。

気紛れのようなものかもしれないが、こうもまじまじと見つめられ
ると居心地が悪すぎる。

その間に奥沢さんは表情一つ変えず、

「…別に。」

特に暇ってわけじゃないけど。いつもHRの後早足でどこ行ってんのかなって思ってたさ。

…まさか毎日同じ場所で同じことしてると思わなかったけど。」

「……あそう。じゃ、用が済んだらさっさと」

「帰れ」と言おうとしたが別に彼女から迷惑を被っているわけじゃない。

「邪魔しないように適度に放つといてくれ」と訂正し作業に戻る。

「…うん。」

「………○○ってさ。ぼっち？」

「ツ………うるさいな。どうでもいいだろそんなこと。」

話しかけないでくれよ、こっちは集中したいんだ。」

解ってる。

実際にクラスで浮いていること。どのグループにも属せず、誰とも共通のものを持っていない。

内向的なことも原因かもしれないが、こういった具合に上手くコミュニケーションが取れないこともまた原因だろう。

「ごめんね。」

ほら、あたしも…割とぼっちってどうか、友達とかいないしさ。」

はは…と乾いた笑い。

いいよ別に合わせてくれなくて。

確かに輪の中心になるようなタイプじゃないかもしれないけど、友達がいらないような人じゃないだろ君は。

「…いや、あたしはさ。」

友達って存在がよくわからないんだよね…。友達と知り合いの違

いって何なのかなって。」

「…それで？」

「うん…。」

確かにクラスで話しかけてくれる子とかは居るけど、それって向こうが勝手に寄ってくるだけじゃん？

あたしが選んで、好き好んで一緒にいるのとはちよつと違うのかなって…。」

「そう。」

「でもね、なんというか、すごく気になる人…っていうか…。」

興味が湧いた？…これも違うかな？うん、まあそんな感じがいてね。」

…何の話だ？

話の意図も分からないし、正直僕には関係ない話なんだと思う。

流石に暇が過ぎたのか、はたまた沈黙に耐えられなくなったか。

いや、じゃあ帰ればいいのに。

「でもその人ってさ、全然周りに関わろうとしないし、あたしが話しかけてもツーンって感じ？」

最初はちよつと嫌な奴かな？って思ったんだけど、今はただただ…気になっちゃうんだよね。

あ、変な意味じゃないよ？…ただ、興味があるってだけの、話。」

「…で？結局何が言いたいわけ？」

言ってるじゃん、集中したいんだよ。締切が近いんだよ、わかるかい？…」

れつきとした仕事なんだ、他人も関わってるんだよ。」

「あ……う……。」

これはいけない。

これがいけない。

「いいかい？奥沢さん。」

君がなんの目的で僕に付き纏って、毎日眺めるだけ眺めて僕の集中力を削いで、

拳句今日はよくわからない話まで始めて、僕の時間を奪っているのかわからないけど」

「集中、出来なかったの？」

「僕は……………え？」

「あたしがいて、こここのところずっと集中できてなかったの？」

「そりやそうでしょ。」

いつも一人だったのに急に跡を付けられるようになるし、ずっと一人だった教室に入ってくるしずっと見つめてくるし、僕が帰る時間に合わせて帰るし…そりや気にもなるよ。」

何が言いたいんだ奥沢さんは？

そんな当たり前のこと訊いてきてさ。

ずっと、ずっといるんだよ？

何か言いたいことあるのかな、とか、何で僕なんかについてくるんだろう、とか

ずっと見ていてそんな面白いことあるのかな、とか…

「…毎日気になって、集中できないんだよ。」

「……………」

ほら見ろ。またやつちやったよ…。

ついムキになって捲し立てて、会話よりも言葉数で圧倒する事を優先してしまう。僕の悪い癖だ。

こうして僕の周りからはいつも人がいなくなっていく。

「なーんだ。○○もあたしのこと気になってんじゃん。」

…え？

「さっきの話ね。」

…あたしが初めて興味持ちちゃった人。あれ、キミだよ？」
「えっ……。」

「あたしには興味持ってくれたってことだよね。……友達に、なれそう？」

頭が真っ白に…いやホントになるんだねこれ。

一瞬で何も考えられなくなった。

いつもの喋りで圧倒する癖も、この時ばかりは息を潜めていて――

「しっ…仕方つが、あるまいね。」

――発せたのはやっと一言。

それも吃りまくった上に芝居がかったような、動揺してるのがモロバレのやつ。

それでも奥沢さんは笑いもせず、

「…やったね。」

これからよろしく。」

そう真顔で言っただけで教室を出ていくのだった。

…少し口角の上があったあの表情は、ズルいと思います。

異空間に咲く百合

「何を見せられているんだ僕は…。」

放課後、久々に溜まっていた作業をと思い例の空き教室に向かったのだが…。

教室を出た瞬間から感じていた。背後にいつも通りの隙間を空けて付いてくる気配を。

ただ、いつもと違う点があつて。

感じていた気配は2つ。それもセットで来るといふよりかは、一つの気配を追うようにして着いてくるのがもう一つの気配。

それを感じた時点で振り返っておけばよかったのか。今となつてはもうどうしようもないが、それを放置してしまったのが恐らくこの状況を作っている。

「もー…。こころ、あんまりうるさくしちゃうと〇〇に怒られちゃうからさ…ね？」

「ばたばた走つたりしちやダメだよ。」

「ええー？だって、ここにいっても何もすることがないわ！」

お外に出て、今起こっている面白いことを探しに行くほうが有意義よ!!」

「や、あたしはそういうの求めてないからさ…。」

「だってだって、最近全然構ってくれないんだもの…。」

放課後も姿が見えないと思つたらこんなところに…。もー!!! あたしとも遊んで欲しいわ!!!」

「あーもー、くつつかないでよー。暑いでしょー？」

ほっぺた膨らまさないで、ね？外に行きたいなら行つておいでつて。」

目の前で繰り広げられる問答。

正直僕としては、金髪の騒音源、弦巻さんさえ居なくなってくればもうなんでもいいんだが。

勿論、決して疚しい事があるわけではない。

奥沢さんと二人の時間を過ごしたいとか、あまり他の人に構っている奥沢さんが好きじゃないとか、そういう事はこれっぽっちも思っていない。

あの日——奥沢さん曰く友達になれた記念日らしい——以来、正直まともに奥沢さんと接することはなかった。

まあ、次の日とその次の日に僕が欠席したせいもあるが、学校では相変わらずだし放課後も残る用事がなかったからだ。

そもそも僕がやっている作業というのも、知り合いの劇団から脚本やら台本の校正やらを頼まれてのものである。

最近こそこの学校の演劇部からも頼まれているが、それでもそんなに頻繁に発生する作業ではない。

ある一定期間を要するの作業が月に1、2度入るといったところか。

勿論何もない日は余程のことがない限り即下校するので、他人と関わることはまず無いのだ。

「○○、手、止まってるよ。」

「ごめんね…やっぱうるさかったよね。」

「い、いや…奥沢さんは別に悪くない…けど。」

考えに耽っていたところ奥沢さんにつつかれる。

君のせいじゃないとしっかり伝えた上で、原因に視線をやる。

「…なあに？」

「弦巻さん。…奥沢さんと遊びたくて、付いて来たの？」

「そうよ！前はたまに構ってくれていたのに、最近は全然だったから尾けてきたの！」

あなたはここで何をしているの？」

「はあ…。別に君に教える必要も義理もないだろう。

僕としては静かに作業に集中させさせてくれたらそれでいいんだ。
いいかい？弦巻さん。

今ここには、ちゃんと目的があつて教室を利用している僕と、対して目的もなく何となく残っている君たち二人がいるわけだ。」

「や、あたしは、○○と一緒にいたくてついてきたんだけど。」

「ぐっ…。お→、奥沢さんちよつと黙っていてくれ給え…。」

急に恥ずかしいセリフを…思わず声が裏返ってしまったが、バレてはいまい。

「今の面白い声ね！もう一度やってほしいわ!!」

「ほ…ほつといてくれ…。」

「…でも、それで美咲は居ていいのだとしたら、あたしも居ていい事になるんじゃないかしら？」

「なんで？」

「あたし、○○とお外に行きたいの。」

「はい？」

「最初は、美咲と遊ぼうと思ってついて来たのだけれど、あなたもすつごく面白そうなの！」

「…馬鹿にしてる？」

「そんなことないわ！えつと…。あたし、あなたとお友達になりたいの！」

○○みたいな、いつもつまらなそうな顔をしている人、見たことないもの。

きつと仲良くなると、もつといっぱいの発見があると思うのよね。」

何だその理由。

顔のことはほつといてくれ。感情が出やすいんだよ。

「…僕には君と友達になる利点が見当たらないんだけど？」

「利点…メリツトね！」

それなら、美咲とお友達になるメリツトは何だったのかしら？」

「それは…」

「○○は、あたしのことが好きになっちゃったよね？」

「こころ、○○はあたしが居ると気になってそわそわしちやつて落ち着かないんだって。」

「だからきつと、好きだから、友達になれて嬉しいんだよ。」

「語弊のある言い方をしないで欲しいね。」

「好きだなんて一言でも言ったかい？もちろん嫌いじゃないけど…どちらかという好きな部類に入るのかもしれないけど…。」

「ぐ、誤解されるような言い回しは止めて頂きたいね…。」

「そ、そもそも君たちはいつもそんなにべたべたくっついて過ごすものなの？」

「今日の前では、椅子に座った奥沢さんに跨り、向かい合い抱き合うようにして弦巻さんが座っている。」

「その状態でずっと会話を続けるものだから、気になって仕方がない。」

「こういうのを巷では“百合”と表現するのだとか。」

「成る程、確かに芳しい百合の如し甘美な光景とも言えるが」

「…こころはいつもこうなんだ。」

「距離感が独特なんだよね。」

「美咲ったらすぐくいい匂いがするんだもの!!いつまでも近くに居たいのよ！」

「…あら？そういうえば、○○、あたしの事も気になっているのかしら？」

「へ？」

「だって、さつきから全然ペンも持たないし、ずっとあたしとお話して

るでしょう？

これってさつき美咲が言った、気になってそわそわしちやって落ち着かないっていう…」

「…奥沢さん。」

「ん、ごめんね。諦めてもらったほうがいいかも。」

「わかったわ!!○○、あたしのことも好きなのね!!

それなら、○○とあたしも今日からお友達ね!」

ああああ…そこに繋がってしまうのか。

極端に都合のいい解釈というか、恐るべき短絡的思考というか…。花咲川の異空間という弦巻さんを指す異名も、ここまでくるとしくりくるように感じる。

…頭が痛くなってきた、今日はもう帰ろう。

「ああ、もう友達でもなんでもいいや…。とにかく、僕が作業をしているときは静かにしているか放っておいてくれると助かるんだ。

そこだけ分かっているしてくれるなら別に何でも…。」

「もう…：またそういうことばかり…。」

○○ってば、難しいことばかり言い過ぎよ。…ほら、おでこにも皺が出来ているわ。」

「ッ…!」

気づけば顔はしっかりと両手でホールドされ、鼻同士がぶつかりそうな距離に弦巻さんの顔。

近くで見たらその端正な顔つきがより実感できて…じゃない、近い近い。

異性どころか同性でさえこんな距離は経験ないんだから勘弁してくれ。

「き、今日はもう帰るっ…から。」

「あら!じゃあ一緒に探索に」

「い、いけない！」

……また今度、誘ってくれよ。」

流石にメンタルがもう持たない。

奥沢さんとの時間を切り上げて帰るのは少々痛い、作業が進まないのもまた困る。

弦卷この問題さんはまた後日に持ち越すでしょう。

帰り際、少し申し訳なさそうな表情で視線を落としていた奥沢さんの姿に少し胸が痛んだが、そこで気の利いた一言でも言えるのであれば僕は今頃ぼっちなんかやっていない。

くそ、残念だが帰るしかあるまい。

本当、弦卷あさんあみたいいな距離感の人はコミュ障にとつての天敵だと思ふ。

少なくとも、僕にとつてはそうだ。

不可避

「……………!!」

「あれれ〜??〇〇〜!!どこ行っちゃったのかしら??」

商店街。魚屋とコンビニの間、路地にあるポストの後ろで息を潜める二人——僕と奥沢さん。

「くっ…しっこいな…まだ動いてくれない…」

「こら、そんなに顔出したらみつかっちゃうでしょ…!」

もつとこつち…!下がってきなつてば!!」

何故こんなかくれんぼのような状態にあるかというと、事の発端は
一時間ほど前に遡る。

「…ふう、何とか締切には間に合ったな…。」

夕暮れの街を一人歩く。

長いこと着手していた1件がようやく僕の手を離れたのだ。これで暫くは直帰、穏やかに自由な放課後を謳歌できるというものだ。

勿論、好きだから受けるのであって、作業に費やす時間も苦痛などではないのだが、それでも自由な時間というのはやはり良いものだ。

ああ、その自由な時間…何をしようか…。

「ちよ、ちよつとまって〇〇!!」

「…えっ…」

後ろから呼び止められる。

この時点で正直、関わり合いになりたくない物への恐怖と嫌な予感がしてはいた。

「…奥沢さん。」

「はあ…はあつ…今日、教室に行ったら…誰も、居なかったから…。」

「…それで態々走って追って来たって？」

「もう、帰るなら帰るって言ってよ…。」

「…どうして？」

「だ、だって…あたし達、友達じゃん？」

「…だから？」

友達だから予定くらい共有しろとでも言うのだろうか。それは勘弁願いたいものだね。

友達だかなんだか知らないが、彼女にそこまで僕に付き纏う権利はないだろう。…まあ、奥沢さんなら、別にいいけど…。

「だから…：友達が危ない目に遭いそうならそれを守ってあげなきゃって言うってんの!!」

「…はああ？」

「もう、いいからこつち来る!!」

「うえっ、あつちよ…!?!」

危ない？僕が？ただ帰宅するだけの時間に何があるというのか。考える間もないまま僕の右腕は捕らえられ、近くの婦人服屋へ引き摺り込まれる。

「お、奥沢さん…：説明を、求めても良いだろうか??」

いや、説明すべきだぞ君は！

「しーっ!!ばか!みつかつちやうでしょ!!」

「見つかるって何に…」

「もーっ…つまんないわねえ…。」

「!?」

この声は…弦巻さん?

こんなところで、随分とでかい独り言だな。

「…わかった?今日はこころの、『楽しいもの探し』の日なの。」

…〇〇、前に一度興味持たれてるんだから、見つかったらどうなるかわかったもんじやないよ。」

「彼女は天災か…?」

「まあ、関わったらいろいろ諦めるしかないっていう点は確かにそうかも…。」

「言い得て妙であるな。…とところで奥沢さん。逃げ込むならもうちよつと隠れやすい場所の方が良かったのでは?」

「うるさい。近くに店がなかったんだから仕方ないでしょ。」

「しかしだね、こんなに狭い空間じゃ君との距離もまた僕を不安定にさせるといふか…」

「あら?美咲と〇〇!こんなところで何してるの?」

「…ッ!」

「…あー…。あはは、見つかったかあ。」

マネキンの後ろで言い合っていたせいで周囲にアンテナを張れていなかったか。

声をかけられるまで、近づく悪魔の存在に気付かなかったようだ。

というか奥沢さんすごい汗だな。僕より君の方が拒絶してるんじゃないか。

「もうっ!どうして二人とも先に行っちゃうの??」

あたし退屈だったのよ!!」

「いや、知らないし…」

「それに、こんなところで二人で仲良くしちゃって…。」

あたしも仲間に入れて頂戴!!」

「えーつと…」

こつちに視線をやらないでほしい。
返事くらい自分で考えるべきだと思うよ奥沢さん。

「弦巻さん…。僕はね、今日は家に帰りたいたいだよ。

何も無い放課後つてのが久々で、ゆっくり休みたいんだ。…だから、君たちに構つてる暇は」

「ふんふん、なるほど。」

それじゃあ、今日はみんなで〇〇の家に行きましょう!!」

「は?」

「ちよ、こころ…それはさすがに…」

このふたりが…うちに??

いやいやいや。それはまずい、絶対にダメだ。

「こころ、それはさ。〇〇の家のご都合とかもあるつていうかね?

もつと前もつて約束するもんだし、急に行くつていうのも難しいでしよ?わかる?」

「…美咲は、〇〇の家行きたくないの?

好きな人の家つて、普通行きたくないものなんでしょう?」

「へ…?…!!?」

「…奥沢さん?」

「ちよつとま、いや、そういう…」

「あははは!美咲、お顔が真っ赤よ!!タコさんみたい!!」

何をそんなに真に受けてるんだか…。

あの弦巻さんが思いつきで喋つてることだろうに…。

「ちよ、こころ…あのつ、いや…」

「行きたいでしょ?美咲?」

「いやあの弦巻さん、やめたげようよ…。」

「こんなテンパー奥沢さん初めて見るし。」

「じゃあ、〇〇の家、お邪魔してもいいかしら?」

「えー?…うーん…。」

どうしよう。

僕今物凄く面倒なことの中心にいる気がする。

そして、僕の返答次第では長引くし解決もするだろう。

従って、僕の出すべき答えは——

「…今日はちよつと急で厳しいし、また今度、前以て言ってくれるなら
ご招待してやろう。」

「ほんと?!絶対、絶対よ!!」

「ああ、ただし、4, 5日前には言うようにしてくれたまえ、準備があるんでね。」

「わかったわ!!きつとよ!!!」

「…奥沢さんも、それでいいかな?」

「ひえっ!?!…え、ほ、本当にいいの…?…」

うん、なんかもう…面白いからどうでもいいや。

きっとこの二人からは逃げ切れない運命なのだろう。

元はといえばあの作業場を選んだ自分が悪いのだ。

僕の馬鹿。

目指せ病みキャラ

「この部屋、別の女の匂いがするわ…。」

「うん、そりやまあ、隣に奥沢さんいるしね?」

月曜日。

只でさえ憂鬱な曜日であるというのに、今日は誠に残念なことに放課後の時間を人に抑えられていた。

…僕のスケジュールだぞ。好きにさせてくれたまえよ。

「時に弦巻さん?結局君は何の目的でココに来たがっていたんだい?」

「?そんなの決まってるじゃない。」

もつとあなたを把握して、より深い関係になるためよ?」

ん?言葉の端々から香る隠しきれない違和感。

…この人、こんなキャラだったっけ?

「……………奥沢さん、これはどういう状態?」

「あー…。」

面倒くさそうに頭を掻く奥沢さん。あのね、止めなかった君も同罪だからね?」

其の辺も弁えた上で僕に絡んで欲しいものだが…

「ごころってさ、簡単に言うとはら…世間知らず?じゃん。」

「まあ、否定はしようがないね。」

「すっごいお金持ちだし、”弦巻”って名前も知らない人なんかほぼ居ないじゃん?」

「うん…?」

彼女の家は世界でも有数の”財閥”の一つである。

その名前を聞けば誰もが一樣に「ああ、あの…」と言った反応をするレベルだ。

生活をしている中で誰もが関わる物、商品やら場所やら。国内のもののは殆ど弦巻グループが関わっているのでみんなも探してみよう。

「だからさ、一般的な知識が結構足りてなかったりするのね。」

「…ええと、端的に纏めて話すかどうかということだい？」

「……はあ。漫画とかドラマとかに影響されやすいつてこと。」

「……ああ。じゃあ、コレも？」

「何よ〇〇。あたしが折角家まで来てあげてるつていうのに、別の女のほうがいいつてわけ？ねえ？」

「……………」

「……………」

「これ、一体何を見てどこを目指してるの？」

「…あ、あはは。多分、これかなあ…。」

手帳型のスマホケースを開きこちらに見せてくれた画面には”ヤンデレレビューのススメ”の文字。

勧めんなそんなもん。

「奥沢さんのスマホで見られるつてことは…？」

「…うん、まあ。あたしがちよつと目指してみようかなーつて思つて調べたところを、隣からこう、ね。」

…勧める方も勧める方だけど、目指す方もどうかと思うよ奥沢さん。

ま、まあ？とっ友達のやることだし、僕があれこれ言える権利はないんだけどさ？

「ふ、ふーん？奥沢さんは別に…そのままの、感じで、いいと…おもうんですけど…」

「…ッ！…そ、そうかな？」

「……………」

「……………」

ガシッ

「へっ？」

「何そんな女に照れてるの？…あたしだけ見てたらしいじゃない…。」

「ちよ、弦巻さん？い、痛い痛い…」

後ろから思い切り肩を掴まれる。力強すぎない？てか、身長差からしてありえない向きで掴まれてるんだけどどうなってんの??

もう言動も滅茶苦茶になってるように見えるし、話の整合性なんてあったもんじゃない。助けを求めるように奥沢さんを見やると…

「……………／／／」

ああだめだ。真っ赤な顔しちやつて、一見こちらを向いているように感じる視線も僅かにずれている。

あれは自分の世界に入ってしまったっている顔だ。

まあ理解できなくはないがね。僕も時々この世の理について、第六次元の彼方まで意識を…

「いやまって弦巻さんほんとに痛いから!!」

「…いずれあなたも、その痛みを快感として感じられる日が来るわ。」

そうなればもうあたしのもの…ふふ、ふふふふ。」

「あのね弦巻さん？恐らく、君は方向性を見失っているんじゃないかと推測するんだがね？」

「何を言っているのかわからないけれど…あたしは何も見失ってなん

かない。

ずっとあなたのことだけ見ているのよ。だからあなたもあたしだけ…」

「……？あたしだけ？その続きは？」

「……………えーっと。」

「ああ、○○くん。」

「あ、お、奥沢さん？戻ってきたの??」

「…うん。あれね、多分ネタ切れ。」

「ネタ切れ？」

…何の？

「○○。あたし、困っちゃったわ。」

「ここから先は、まだ読んでないの。」

「……………はあ？」

なんだそりゃ。

さっきまでの何かを身体に降ろしたかのような完成度は一体何だったんだい。

…すっかり素の弦巻さんじゃないか。

「…ぷっ。」

「??」

「あっははは!!何だよそれ!!おっかしいなあ弦巻さん！」

「もう、そんなに笑うことないじゃない!頑張ったんだからっ!!」

笑われているのが自分だとワテンポ遅れて気がついたのか。

顔を赤らめて頬を膨らませる弦巻さんに、先程までの違和感とも言える”ヤンデレ”とやらの姿も影一つも見当たらない。

うん、こっちの弦巻さんの方が自然でいいよね。

「はー…笑った…。」

「ごめんごめん弦巻さん。調子の差が面白くてさ、馬鹿にしたりしてるわけじゃないから。」

「美咲が途中までしか見せてくれなかったんだもの…。」

「○○は、どう思ったかしら?」

「さっきまでのアレ?…うーん、兎に角違和感がすごくて…。」

「僕は今の、演技も何もしていない弦巻さんの方がいいかな。」

「あらー…聞いた?美咲!」

「やんでれって奴じゃないあたしの方が、○○は好きらしいわ!!」

「…そう、よかったねーこころ。」

「ちよ、好きとは言っていないだろう。捏造はやめたまえよ。」

「あら、そうなの?…そんなことより、さっきのあなたの笑顔!」

「とってもキラキラしていたわ!!あなたも素敵な笑顔を持っているのね!!」

「うっ…。そんなこと言ったら弦巻さん、君の笑顔だつて僕には眩しすぎて…。」

「いや勿論そんなことは言えないがね。」

「それでも、今日の一件のお陰で、弦巻さんに対する苦手意識が少し減ったかも。」

「その点に於いては、奥沢さんに感謝しなくてはいけないだろうね。」

「—その後の奥沢さんがちよつとテンション低めになっていたのは気になったけど、それはまた別のお話。」

「…そう。○○くんつて。あたし以外の女には、そんな顔で笑うんだ。」

奥沢サン

夕暮れの放課後。僕は久々に例作の空き教室場にいた。
今度は全く以て今までは違う、衣装作りの依頼を受けたのだ。
いくら手先の器用な僕とは言え、流石にここまでガツチガチの裁縫
経験はない。服て。

刺繍とかは出来るんだけどね。

「…痛ッ…」

「……あのさ、苦手ならやらなくていいんだけど？」

急に手伝わせろって行ってきた時はまた何か企んでいるのかと
思ったけど…。目の前奥沢の彼女は、本日4枚目の絆創膏を左手薬指に巻
きつけているところだ。

…どうしてそこを刺す？

「……ほら、あたしってさ、羊毛フェルトが趣味なの。

…だから、ね？」

「意味がわからない。||イコールではないでしょうよ。」

「…出来るかと思ったんだもん。」

「だから、苦手って分かったならもういいってば…帰れば？」

「えー…嫌だけど。」

嫌、って…。

もう痛々しくて見ていられないよ。というか絆創膏持ち歩いてい
るなんて…女子力というやつだろうか？

「…じゃあもう何も言わないが。」

…くれぐれも、衣装に血は付けないようにしてくれたまえ？」

「ん、気をつけてみるよ。」

そしてまた沈黙。

二人分の息遣いと衣擦れの音。たまに糸を切る小さな音がハツキリと聞こえるような静寂の中で淡々と進められる作業。

——嗚呼、静寂の音……!

コレが僕の求めている空間。”学校”という魔窟に於いて唯一心を落ち着けることができる時間。

最初こそ拒絶したかった奥沢さんだが、こうして理解してくれた上で手伝いまでしてくれる。…そろそろ、空間としての異物感もなくなってきた。

「…あ。」

「……ん。」

「…忘れてた。」

「…何を。」

「…〇〇、ちよつとだけ、休憩しない?」

「休憩…?なんで?」

僕は全然疲れちやいない。何せまだ始まってから二時間少々しか経っていない。

疲れたなら帰ってくれて構わないのだが。

「いやほら……お腹、空かない?」

「空かない。昼食は食べなかつたのかい?馬鹿だね君は。」

「……あー、うん。」

「……。」

「えつと……。クッキー、焼いたんだけど食べない?」

「何故。」

「あの、…あー!糖分つてさ?頭動かすのに必要だつて言うじゃん?」

集中力を保たせるためにもさ、ね?」

「??…糖分なら別に不足してはいないし、効率よく糖分を摂取するな

らクッキーよりも適したものがあつたのでは？」
「ぐっ……ああ言えはう言う……。」

食べたいなら食べたらいのに。

あ、勿論服に零さないように外で食べてきてもらうが。

「……い」

「い？」

「……一緒に……食べたい、から、食べて……」

「……っ」

そんなに顔を真っ赤にして。

クッキーと一緒に食べる？僕と？……いやいや。それはないだろうよ。だってそんなの……もう、け、けけ、結婚する流れじゃないか。

従妹の漫画で読んだぞその展開は……!!

「そ、そんなに……ボボボボボ、僕と、く、くく、」

「た、食べたいよっ！」

「……!!」

「……うう……。」

「そ、そうか……。」

その上目遣いをやめないか。まるで僕が悪いことをしているような……ええい、何故僕が罪悪感を感じなければならん……!

食べるから、食べるからやめて。

「マツ→まあ？そこまで言うなら、食べてやらんことも……あ、あるまい？」

「……ほんと？」

「ああ……ま、まあ。」

「へ……へへっ、何か、忍びないね。」

「か、構わんよ…。」

動揺のあまり全体的にテンボスってしまったが。
いそいそと目の前に出されたそれは、見た目的には普通に美味し
うな。

「…これ、〇〇の分、だから。」

「おおお…：売り物みたいだ。」

「ちゃんと作ったんだよ？…買ってきたとかじゃないから。」

「別に疑っちゃいな…あれ？僕の分、って？」

「ああ、あたし用のはこつち。」

カバンの別ポケットから小袋を取り出す。なぜ分けられているか
はわからないが、同じくらいの量が入っている。

「……？」

「別に、何も変じやないでしょ？」

「いや、意味がわから」

「いただきます。…ん、おいしい。」

腑に落ちないが、美味しいと言うんだから食べてみよう。

…まあ、余程恨まれてる相手ならまだしも、奥沢さんだしな。…
食えるものではあるだろう。

「じゃあ僕も…いただきます

……なに。」

「へ!?…え、あ、いや。…ほら！自分が作ったものを人が食べるって初
めてだからうまくできてるかなーとか不味いって言われなかなー
とか気になっちゃってあはは!!」

「な、何をそんな早口で捲し立てて…」

食べようとしているところをそこまでマジマジと見つめられたら気にもなるだろうよ。

問うたところでまともな答えは返ってこなかったけど。

「……………んむ?」

なんだろう、何か変わった味がする。

「奥沢さん?これって何味…って、どうしたの、顔真っ赤だけど。」

「はあ……………はあ……………ええ?…別に、何でもないよお。」

「…風邪ひいた?…というか元から熱あった?」

「ぜ、全然そんなことないからあ!……………全部、食べて?」

発熱とかならクッキー食ってる場合じゃないと思うんだけど…。

まあきつと隠し味的なものでも入っているのだろう。僕は料理を全くやらないし興味もないからわからないけど。

…あ、二枚目にはアーモンドっぽいのが入ってる。

「…んむ。……………んん??」

「…どしたの?」

「……………ん。これ、アーモンドとかかと思っただけど不思議な味するね。」

「^^ ^^ ^^ ^^ ……」

「あ?…なに、そんな顔見たことないよ奥沢さん。」

すっごい目尻下がってる。

笑い声も気持ちわるいし。

君の表情筋、まだ死んでなかったんだ。

「これ、なに?」

「……………私のつm…じゃない、ウチにあった豆入れたんだよね。しお…ええと、塩漬け?のやつ。」

「なんだそれ聞いたことないな。」

まあ、飛び抜けて不味いつて訳じゃないしまあいいか。

「おいしい?」

「んー……。普段あまりお菓子食べないからよくわかんないけど、不味くはない、のかな?」

「そっか……。じゃあ、次はもうちよつとうまくやるね?」

「いや、別に無理して作ってこなくてもいいよ。飽くまで目的は作業なんだから。」

「えへへ、わかってる。作業の邪魔にならないような、手軽な食べ物に入れるね?」

「そうしてくれると助かるよ……。…んん?」

今なんて言った?…。いや、聞き間違いか。

奥沢さんの言うとおおり、僕も自分で気づかないうちに糖分が不足していたのだろうか。

「…ね、○○。」

「?」

「喉、乾かない?」

「ああ、そりやまああるだろうね。…まあでも水持つてきてるから」

毎日きちんと忘れずに天然水を持つてきている。

今日の水は確か…アルゼンチン産のミネラルウォーターだったかな。

「いやいや、勿論、お茶も用意してあるからさ。一緒に飲む?」

「いやいいって。」

「……………飲んで。」

「なぜ。」

「飲むべき。」

「……いや持ってきてr」

「飲んで。」

「……あい。」

なんだって言うんだ…。

その低い声と冷たい表情から察するに、どうやら今日は水を飲んではいけならしい。さらばアルゼンチン。…デンマークだったかな。

「やれやれ…そんなに自信のあるお茶なのかい。」

「ふふ、あのね。クツキーに合うように淹れたお茶だったから、絶対セツトで飲んで欲しかったんだ。」

…怖かった？

「…まあ。」

「ごめん。…ちよつと押しが強かったよね。」

「そういう問題じゃなかったと思…いや、取り敢えず頂こう。」

君、目の光どこに置いてきたの。

ちよつと失礼、と言い残し水筒を持って教室を出る奥沢さん。何か準備でもあるのだろうか。

少しして戻ってきた奥沢さんは、若干荒い呼吸をしている上、髪が少々乱れていた。…走ってきたの？…ってくらい。

…まあ、何はともあれ、お茶を頂く。

丁寧な手つきで水筒から注がれるお茶からは、ほんの少し湯気が立っている。

「まさか、今お湯入れてきたとか？」

「まあ、そんなところ。…やっぱり温かくないとその…雑味、そう雑味が、ね。際立つちゃうから。」

「そういうもんなのかあ…」

淹れたて？のお茶をすすす。

……うん？深みの中に……なんだろう、甘みがある気がする。

「いいお茶っ葉とか使ってるのかな？ほんのり甘いや。」

「ああ…っ。」

「そういう吐息は飲んだあとに出すもんじゃ？」

「ああ、ごめんね。つい。」

「??……ねえ奥沢さん、やっぱり熱でもあるんじゃ？」

「顔、赤いよ？」

「うーん…そうなのかな。」

「うん、それなら本当に帰ったほうが良いのでは？…口の中乾いたりしてない？」

「あー…確かに、口の中に唾液はもう残ってないかも。」

「そんな状態でクッキーなんか食べるから…。」

「まあそんなことはどうでもいいんだ。お茶のおかわりは？」

「ああ、いただこうかな。」

水筒の蓋を一旦返す。お茶を淹れてもらうって何かいいよなあ。途端に自宅のような安らぎを感じる。

…何故か蓋と水筒を交互に見比べ何かを考え込んでいる奥沢さん。

「あー、やっぱり熱あるかもー。帰ろっかなー。」

「ええ？…ああ、うん。お大事に？」

「この水筒、まるごとあげるね。」

「えっ」

「全部、全部飲んでね…？」

「えっ、えっ？」

「じゃ、またあした！」

とても熱があるようには思えない元気な様子で教室を出ていく彼女。

残されたお茶と僕。

……とりあえず僕も、これをさつさと飲んじやって帰ろ…。

「んっ…んっ…んっ…んん？」

なんだろ、何か入ってる。

「…髪の毛?？」

……………。

なんで?どのタイミングで??

…ああ!さつき淹れに行った時かな?何だか走って髪も乱れていたみたいだし、仕方ないのかな。

これが隠し味?……つて、

「流石に奥沢さんは、そこまでぶっ飛んでないだろ…。」

帰ろ。

あ、今凄いいしょーもない駄洒落思いついちゃった。誰もいないし言ってしまったでもいいだろうか。

「お茶に髪の毛って…。奥沢さんから奥沢産のお茶もらっちゃったよー

…なんちやつて。」

…事故だよね?奥沢さん?

泡沫の蜜月と狩人の瞞着

「……………どうしたの…弦巻さん…!!」

何事もなく過ごしていた平穏な筈の一日。昼休みにそれは現れた。奥沢さんも珍しく欠席だったために、完全に誰とも交流しない、静かな一日だと思っていたのに。

僕が昼食を取っている席によるよろ近づいてくる人影を見て、思わず声をかけてしまった。

「……………○○っ…ぐきげんよう。」

遅刻してきたらしく、まだ鞆を持ったままの弦巻さん。その姿は見るに堪えない程痛々しく、右手には松葉杖、両腕と顔の左半分にはきつく巻かれた包帯。

恐らく見えていないだけで、制服の下も何かしたの傷を負っているだろう。そんな歩くのもやっとの状態で僕のところまで来るのだから、いつものような遊びとは別の何かがあるのだろう。

「その怪我…い…な、何があったの!？」

「……………今日、美咲は?」

「奥沢さん??……………今日は休んでるみたいだけど。」

「そう……………あ、あ、あ、美咲に何かしちやっただのかしら。…つとと。」

頭を抱えるような素振りを見せた直後にふらつく。無理もない。只でさえ片足立ちのような状態で、松葉杖と自身の鞆を持っているのだ。…その状態で立ち話つてのが配慮不足だった。

慌てて体を支え転倒を阻止するが…女の子って、こんなに軽いのか。

「絶対大丈夫じゃないよね。…奥沢さんと何があつたのか知らないけど、学校に来ていい状態じゃないと思うよ君。」

「…それでも、学校には行かないと…」

「…：弦巻さん、僕これから早退しようと思うんだけど、一緒に遊びに行かない?」

「○○って不良さんなのね。…遊びに行くところは、楽しいところかしら?」

別に本気で遊びに行こうって訳じゃない。仮にも数少ない顔見知り人間がこんな状況になっているんだ。このまま「ハイ頑張つて」とはいくまい。

今は帰って休ませるためにも、そして可能ならば何があつたのか聞くためにも僕と一緒に早退するのがいいと思っただけだ。

「前に僕の家に来た時、楽しくはなかった?」

「○○の家に行くの?」

「君の家まで真っ直ぐ送り届けるのと、どっちが楽しいかな?」

「…：…いく。○○のおうちにお邪魔するわ。」

「決まりだ。」

僕の事を気に留めている人間なんか特にはいないし、弦巻さんだってまだ出席も取られていない。特に気にすることもなく、弦巻さんの体を気遣いしつつも学校を出ることにした。

指す。
ヨロヨロと頼りなく揺れる体を支えながら一歩ずつ確実に前を指す。

こんな足でよく登校してきたもんだよ、ほんと。

「弦巻さん、タクシー呼ぼうか?」

「んーん…。だい、じょうぶよ。」

「…弦卷さん、喉乾いたりしない？」

「何ともないわ。…大丈夫。」

「弦卷さん、どこか」

「ねえ○○。」

間が持たず勝手にテンパる僕に落ち着いた様子で話しかける弦卷さん。そうだよ。弦卷さんレベルのコミュカモンスターだと、こんな状況でも緊張なんてしないよね。

…僕なんか話すだけでもいっぱいっばいだし、剩え女の子の体に素手で触れていることもあって心拍数が…。

「な、なんだい弦卷さん。」

「○○は、あたしのこと嫌い？」

「へっ!?…いい、いや、決してそんなことは…」

「なら、どうして苗字で呼ぶのかしら。」

「…それはなんだい、苗字呼びは不満だと？」

おいおい勘弁してくれ。…下の名前で誰かを呼ぶなんて、生まれてこの方やったことないんだから。

「ええそうよ。…あたしはこころ。ひらがなみつつでこころなの。」

だから○○も、あたしのが嫌じゃなければ「こころ」って呼んでほしいの。」

「……………いやちよつと待って！心の準備無しに、そんな親しげになんて、呼べないよお…。」

だってそんなの…恥ずかしすぎる。下の名前で呼び合うだなんて、まるで——

「あつー…っ、着いたよ、つる…ま、きさん？」

ほらもう、意識しだしたせいで普通にも呼べなくなっちゃったじゃないか。

だがそれではご不満だったらしく、ピタリと足を止めて僕の家を見上げる弦巻さん。

心なしか険しい表情だ。

「……やっぱり君の家に真っ直ぐ」

「ごころって呼んで。」

「……いやー、まだ早いかなーなんて」

「ごころって呼んで。」

「……えー。」

「ごー」

「……」

「もひとつ、ごー！」

「…もひとつ、ご。」

「もひとつは要らないの。ろ！」

「…はい。ろ。」

「ごころよー！」

「……ご、ごご、ごごごごごご、ごごごごごご。」

「それじゃあ多すぎるわ。」

「ごめん…。」

無理だつてば。吃っちゃうし。

不満そうながらも、やっと動き出して家に入ってくれる弦巻さん。続いて玄関を潜ろうとし、何やら後ろから気配を感じ振り返る。

「??」

気のせいかな。誰かもう一人いたような気がしたんだけど。

慣れない事をしたせいで体も心も驚いているのかもしれない。そ

れ以上深くは考えず弦卷さんの跡を追った。

「……………へえ。」

部屋に辿り着いてベッドに腰掛ける弦卷さん。相変わらず痛々しく映るその姿に、胸が苦しくなる。

「…それで、その怪我はどうしたの？奥沢さんが関係あるの？」

「……………あまり信じたくは、無いのだけれど……………」

「うん？」

そこから訥々と、何かを思い出す様に時折天井を眺めながら話してくれた内容はこうだ。

昨日奥沢さんと校内を歩いていた時に階段から落ちて負った怪我。その時に違和感を感じたという。…弦卷さん曰く、「落ち行く中で最後に見た美咲の顔は凄く楽しそうだった」と。

結果として骨折に裂傷に捻挫に打撲と、かなりの重傷を負った彼女だった……………」

「あたし、美咲と一緒に居ちゃいけないのかしら……………」

「…そんなことないよ。君達はずっと仲良しの友達だったろう？」

「そう、だと思っっているのはあたしだけかもしれないじゃない。」

「どういうこと？」

「美咲はあたしのことを嫌って……………」

何だか今日はやけに弱気だな。…あの無駄に活力漲る弦卷さんはどこに行っちゃったって言うんだ。いや当然か。これほどの怪我を、それも友達を疑ってしまうような状況で負っているんだから。

「そんな……。そ、そうだ！喧嘩とかした…。りは？」

何かのきっかけで拗れてこんなことに…。いや、それにしてもやり過ぎか。

もし仮に奥沢さんの仕業だとして——そこまで彼女を動かすものが分からないし、飽く迄仮定の話として——そこまで酷い仕打ちが釣り合うようなことを弦巻さんがするとは到底思えない。

喧嘩でもしたなら可能性は無くは無いと言えるが…。ううむ。

「喧嘩…ではないのだけれど、○○と一緒に居る時は怒られることが多い気がするわ。」

注意、ともいうのかもだけど。」

「怒られる？」

一緒に居る時のことを思い返してみるが心当たりは全くと言っていいほど無い。そりやまあ、言われているのは僕じゃないから気にならないとしても不思議じゃないんだけどね。

「ええ。…はしたないから○○の膝の上に乗らないように、とか、女の子なんだから誰彼構わず抱きつかないの、とか…。」

あたしのことを心配してくれてはいるのだろうけど。」

「ううむ…他には？」

「あとは、○○は忙しい人だからあまり遊びに誘わないようにって言われたわ。」

…だから美咲が居ない時に話しかけてるのよ。」

「…僕が忙しいっていうのは何故信じないの。」

「そうは見えないもの。…それどころか、いつも独りで寂しそうだわ。」

えええ…。そんな風に見られてたの…？

そう考えると何だか気恥ずかしい気がしてきた。でも仕方ない

じゃん、ぼっちだし。

「全部…いけない事だったのかしら。」

「そんなことは…あーいや、抱きつくのはやめた方がいいかも。」

「そうなの?」

「ほ、ほら、勘違いさせちゃうでしょ? 弦巻さん、見た目だけは可愛いらしいんだから。」

言うや否や、ボツ!と音が鳴りそうな勢いで顔に血を上らせる弦巻さん。うんうん、そうだよ。それくらい恥ずかしいことをしてるんだよ君は。

「……かつ」

「か……?」

「可愛らしく…見えるのかしら、○○には。」

「えっ?……んー、まあ、造形的には整ってるかなーって。」

「そ、そう……。」

「……まさかそれで照れてるのかい?」

「……別につ。照れてなんかないわっ。」

照れる場所が違うと思うのだが。

彼女はもう少し、自分の実年齢とその行動に於ける精神年齢の乖離を気にしたほうがいい。やっぱりその、「高校生にもなって…」的な目は向けられているわけだからね。

「じゃあ、勘違いされてもいい相手になら、抱きついてもいいって……ここかしら。」

「……んー…そこは「うん」とは言えないなあ。」

「ううううう……えいっ!」

唸りながらフラフラの足で立ち上がったかと思うと、そのまま体重

を投げ出してくる。

だから何故その足で立とうとするのか。全く以て理解はできないが、倒れ込む婦女子を見放すわけにはいかない。：結果抱き合う形にはなつてしまったが、何とか受け止めることできた。

同時にふわりと香る柔らかく甘い香り。抱きしめていることを否が応にも伝えてくる柔らかな体温。：これはだめだ。超絶コミュ障ぼっちの僕なんかがそう簡単に味わってしまったてはいけない禁断の果実…。

「…勘違い、した?」

「……………した、かも。」

「…それなら、嬉しいわ。」

「弦巻さん…………。」

「…もう。…………。」

「…………。」

「…………。」

吐息のかかる程の距離で暫し見つめ合う。

何だろう。：ずっと苦手だと思つてた彼女だけど、近くで見るとこんな綺麗な瞳をしてたんだ。吸い込まれるようなその黄金色の瞳に、まるで惹き込まれるような感覚を覚えた。

そのまま何分経つたらう。ふと、気が付いた時には――

「……………んっ。」

微かに触れ合った小さな唇。その熱は、小さな音と共に僕の脳髄にまで焼き付けられた。

*
*

「…………じゃあ、また明日。…………。」

すつかり辺りは暗くなっている。彼女のナビゲーションに従い弦巻家まで来たはいいんだが…。

…なんだこの豪邸は。あの弦巻ということである程度予想はしていたけど…。僕はとんでもない子に手を出してしまったのかもしれない。今更と言えば今更だが、薄ら寒い殺気のようなものを感じるほどに、相手は巨きかった。

その大きな屋敷に違わぬ大きな門の前で、出迎えの黒服さん達が見守る中での別れ。

「……………○○。」

「…な、なんだい。」

「今日のことは、二人だけの内緒よ?」

「……………!!…う、うん。」

「ふふっ。それじゃあ……………また明日。」

黒服の背中に隠され見えなくなっていく小さな姿を見送り、今日の事が夢なんじゃないかと今更ながらに疑う。

黒服さんの一人が送って行くかと尋ねてきたが、この火照りを冷ます為にも歩いて帰ることを選んだ。

……………結局、こころは僕のことをどう思っているのかと、帰路に就きながら考える。

遊ばれている、ということはないだろうが、普段の様子を見ているとどうも色々理解が足りていない節がある様に思われる。

今日してしまったことだって、考えようによっては「挨拶」だと言い張ることもできるわけで……………ううむ。

「……………えっ、あっ?」

「○○。待ってたよ。」

考え事をしながら歩いていたせいで、その人が眼前に迫っていることに気づけなかった。

——奥沢さん。

「奥沢さんっ！急に学校を休んで、心配だったのだよ！一体何が」

「○○。こころの唇、美味しかった？」

「ッ!？」

遮る様にぶつけてくる言葉は、酷く冷静に聴こえたがその実僕の胸を突き刺すような熱を伴っていて。

不気味に吊り上がった口角からは感情を読み取ることができないが、彼女の両目には零れる寸前の涙が湛えられていた。

「奥沢さ…ん？」

「もし、さ。あたしが同じように酷い怪我で、○○のところに行ってた…ら…。」

「○○は同じように早退してくれてたのかな？」

「……………そりゃ、まあ。」

「そっか…………。じゃあやっぱり、怪我なんかさせるべきじゃなかったなあ…………。」

「…奥沢さん…まさか、本当に…………。」

涙を流しながらも見蕩れるほどの笑顔を崩さずに言葉を紡ぐその姿は酷く滑稽で魅力的だった。

だがそれが却って僕の恐怖心に作用していた。

「仕方ないじゃん。そうだよ仕方ない…。だって、あの子が傍にいる限り、○○はあたしのこと見てくれないでしょ？」

「…何言ってるんだよ。その程度のことです、こころにあんな怪我を負わ

せたってどういうの?…その程度のこと、こころをあんなに不安に」
「その程度!…いや、確かにそうだね。○○の言うその程度の事で、
人って簡単に壊れるもんなんだよ。不思議だね。」

「どうして、どうして君たちがそんな風にならなきゃいけないんだよ。
おかしいじゃないか。」

…あんなに仲良さそうにしてたじゃないか…。それがどうして」
「どうして?…こうなるのは時間の問題だと思ってたけど、あた
しは。」

…だからこそころの行動を制限したつもりだったし、警告もし
た。…それでもこの結果だもん。これはもう運命だよ。」

そんな言葉を知ったように軽々しく使うなよ。…運命なんてただ
の逃げの言葉じゃないか。そこまでして果たしたい想いがあるなら
もつと行動してみろよ。やれるだけのことはやってみろよ。簡単に
人を傷つける手段に走るなよ。

「…それが一体、何になるって言うんだよ…。」

「………………。あたしは、あたしの欲しいものを手に入れようとした
だけだから。」

「だから、どうしてそんなことになるんだよ!!」

堂々巡りの様相を呈してきた話に思わず声を荒げる。だってこの
子は異常だ。どんな理由があったって、どんなに欲しい物があったつ
てその行動は間違ってる。

欲しい物があるなら自分で掴みに行かないと。大体そんなに欲し
がる物って……

「……あたし達がこんなことになってる原因、それは○○だよ。」

「…………へ?」

「○○がいたから。○○と出逢ってしまったから。○○が優しくし
ちやつたから。○○がそこに居ることが普通になつちやつたから。」

…○○が、全ての元凶なんだからね。」

「……………そ…んな…。」

「だからあたしは○○をあたしの物に、あたしだけの物にするために出来ることをするだけ。」

○○に振り向いてもらうためならどんな邪魔者だって排除する。どんな汚いこともする。それで○○があたしだけ見てくれるなら。」

無茶苦茶だ。この子は奥沢さんの皮を被ったなにか別のものだ。あの、ガキばかりのクラスの中で唯一常識があつて雰囲気があつて話が合つて、大人しくも思いやりのある奥沢さんは。

奥沢さんつて…何だ。僕は彼女の深層まで知つたつもりでいただけなのか。彼女が見せていた上辺だけ、表層だけを見て全てを知つたつもり…？

じゃあ…結局こころを傷つけたのは、彼女たちをここまで拗れさせたのは……僕？

「ね。…だから運命だつて言ったでしょ。」

あつたかもしれない祝福

——これはまだ、奥沢さんが”豹変”する前のお話。

「○○、これどうしたらいいの。」

「ん…ああ、じゃあこつちで貰おう。続きは僕がやるから、奥沢さんはまたそつちの仮縫いを。」

「ん。りよーかい。」

相も変わらず放課後の作業場で衣装づくりに勤しんでいた僕らだったが、今日は少し特別だ。

何でも、奥沢さんも弦巻さんに着せるための服を作りたいらしく、僕の手伝いを並行してやってもらう条件の下に同じ場所で作業しているんだ。

何だかんだで僕の方が洋裁は慣れているし、当然っちな当然の流れなんだけど。

とは言え、飽く迄主体となりデザインやら形取りやらを執り行うので、僕の出番と言えれば仕上げ程度のもの。当然、すぐに手持無沙汰になり奥沢さんを観察する作業になる。

「……………つつ!?!」

「……………はあ。また刺したのかい?」

「ん……………」

今日だけでももう何度目だろうか。ぷっくりと膨れ上がっていく真つ赤な液体を二人して見つめる。

痛いのに不思議とぼーっとしちゃうことってある種の”あるある”なんじゃなからうか。

「……吸う？」

「はあ？奥沢さんの指を？」

「うん。」

「結構だ。…吸血蝙蝠にでもくれてやるといいよ。」

「あそ。……はむ。」

差し出されたその指を断ると、自分で刺した薬指を啜え暫し吸う奥沢さん。…血ってそんなに美味しいものじゃなからうに。

じっと見つめる視線に気づかれただろうか。ふと視線を上げた奥沢さんは悪戯っぽく笑うと、「やっぱり吸いたい？」と口から離れた指先を突き付けてくる。

いや、ほんと、要らない。

「……手、借りるよ。」

「ほ、ほんとに？」

「？………これでよし、と。」

「あつ………むー……。」

出血と言うのは吸うもんじゃないよ奥沢さん。一刻も早く止めるものだ。

てらてらと光っている指を消毒液に浸したガーゼで拭き取り絆創膏を巻く。僕がしたのはこれだけだ。

何がそんなにご不満なのか。

「……〇〇って、鈍いとか勿体無いとか言われるでしょ。」

「何のことだか。」

「今あたしが言いたいことね。」

「はいはい。集中してやらないと、終わるものも終わらないが？」

全く。少し返事を返すとすぐ調子に乗って手元を疎かにするなこ

の子は。悪い癖だと思うよ。

しかし、変に根を詰め過ぎて出血過多で死なれるのも夢見が悪い。
…ここは用意してきたアレを出す時が来たかな。

「む。言われなくても分かってるし…。」

「…その前に少し休憩しようか。」

「えっ??…珍しいじゃん、○○の方からそんなこと言うなんて。」

「たまにはいいじゃないか。」

「ふーん…。何企んでるの?」

「……………べ、別に。」

何故そんな疑うような眼差しで刺してくるんだね君は。僕を刺殺
体にでもしたいってのかね。

確かに、企てはある。だが、飽く迄ここは冷静に。気取られては行
けない。

「ふーん?」

「…さ、さあ!手を一旦止めて!休憩も大事だよお奥沢さん!」

「や、とつくに止めてるけど。…変だよ、○○。」

「う”っ!」

「…はあ、わかった。付き合ってたげる。」

「う…む。」

なんだか納得は出来ないがまあいい。慣れない事はさっさと終わ
らせちまおう。

「時に奥沢さん。」

「なんででしょう。」

「今日は何の日かね。」

「今日?10月1日…何かあったっけ。」

「今日は…はっ、はははっはっはっはっ」

「何？笑うんなら顔も笑いなよ。…ほら、口角上げてさ。」
「ちがわい！……ハッ、はっぴー…ばあすでいという奴だろう…き、君の。」

言えた…！ハッピーポーズदैって何て恐ろしい言葉なんだ。気軽に使うもんじゃないぞこれは。

「……たまげたなあ。」

「えっ、あれ!?思ってたリアクションと違う!?」

「…ぷっ。あははははは!!」

「???'」

「何その顔っ！あっははは!!……はー、はー…覚えてたんだ?」

そんなに笑うこと無かろう。間違えたかと思ったんだから仕方あるまい。

未だ涙目で荒い呼吸をしている奥沢さんは、何が楽しいのか上機嫌のまま続ける。

「…それで?…誕生日を覚えてるだけで終わりってことはないよね?」

〇〇は。」

「……成程、物質的な祝福でないと歓びを感じ得ない下劣な民族と
言うことだな?」

「何その言い方。」

「ふふっ、まあいい。……ここ、こつちにきたまえ。」

「はっ?…え?まじ?」

「まじだ。」

立ち上がり、左手で手招きしつつ右手は用意したブツへ。あれだけの時間をかけて作ったんだ、役に立ってくれよ…?

珍しく不安げな様子でゆっくりと近づいてくる。……ちよつと
まって、近すぎ近すぎ…

「奥沢さん!?!あ、あああああたってるんだけど??」

「どこまで近づけばいいの?これくらい?もつと?」

「やわら…あいや、そこでストップしたまえ!」

ほぼ抱き合っていると云っても過言ではないくらい密着状態の奥沢さんが見上げてくる。何だねその弱気な顔は。これは立派なパーソナルスペースの侵害だぞ。

何とか人ひとり分程の距離を確保し、続ける。…あれ、少し残念そうな…いや、考えちゃだめだ。

「…髪に触れても?」

「…特別だよ?」

「っ…何っ…顔してんだ。」

頬を上気させ、目を伏せつつもじもじする彼女の姿は、まるで熱に浮かされているかのように僕の目を惹きつけて止まない。

許可は貰っている為、遠慮なく前髪に触れていく。

「…目を、閉じて。」

「…ん。」

目を閉じ、少し顎を上げる奥沢さん。ゴクリと聞こえた喉の音は果たしてどちらのものだったか。

「んっ…。」

「…変な声を出すんじゃない。」

「だって、擦ったいんだもん。」

おでこに少し触れてしまったし…そのせいかもしれない。

決して重い印象は受けない前髪を解き、とてもシンプルで邪魔にな

「!?…ちよ、ちよつと、奥沢さんっ!?」

「……………○○っ!○○っ!!」

ものすごいスピードで抱きつかれた。目にもとまらぬとはこういう…じゃない、この状況は色々とマズい。

彼女は柄にもなく感極まった様子で強く抱きついてくるし、その、さつきは振り解けたあの柔らかさが無遠慮に僕を蹂躪して……

「本当に、嬉しかったんだよ…。」

「…わかったよ。」

「さつきのは、その、忘れなくても、いいけど…」

「え」

「うそ! やっぱ忘れて!!」

「お、おおう…。」

プレゼントをあげたのは僕の方なのに。

何だかとても重い意味を持つ贈り物をもらった気分になる夕暮れ時だった。

「奥沢さん…改めて、おめでとう。」

「……………ん。」

破壊、からの、修復

運命って何だろう。

運命：ネットで調べると、人間の力や意志の及ばない、人間に幸福や不幸を齎す力の事と出てくる。

確かに、今の状況を考えるに、人間の力じゃどうしようもないところまで来てしまっているのかもしれない。僕じゃもうどうすることもできないし、僕は何よりも情けない。

今だって、結局ずるとあの状況が続いてしまっているし、こころとも関係を切れず奥沢さんにも答えを出せていない。

そのせいもあつてか、こころは定期的に謎の怪我を繰り返すし奥沢さんもどんどんエスカレートしている気がする。

そして今日もまた、人を信じられず外出すら恐るようになったところを慰める名目で徒に身体を重ねているんだ。そしてまた、形容しがたい胸の痛み支配されるんだ。

「…ありがとう○○、今日も幸せで、あたし……」

「……………うん。」

「あつ、どこへ行くの○○！あたしを置いていかないで？ね？ね??」

「……………ちよつと今日、用事があるんだ。」

「ようじ…?」

今日は、どうしても外せない、大事な用事があるんだ。

正直気が進むものじゃないし、一つ間違えば全てが壊れてしまうことだと思っっている。でもきつと、それが”運命”とかいう人間じゃ到底力の及ばないものに対抗する唯一の賭けだと思っただから。

「ごめんね、こころ。」

「……………○○、あたしね。…あなたが何を考えているかまではわからなけれど…できることなら頑張らないで欲しいの。」

「…どういうこと？」

「あなたを失うなんて嫌よ。…：例え毎日どんな仕打ちを受けようと、あなたとだけは共に歩んで行きたいの。あなたが、必要なのよ。」
「…：僕は、こころが傷つくところを見たくないんだ。それに、奥沢さんも。」

「そうよね。…：あたしが止めたところで詮無いことだったわ。」

横たわったまま名残惜しそうに僕の背中に指を這わせていたころだったが、それはやがて何かを思い留めるように抱きしめる力へと変わる。

背を向けるようにして寝ている僕を後ろから抱きしめる形になったこころは首筋に一つ二つ、と啄む様なキスを降らせる。

「…んっ、んっ…：ん…：んっ。…：お願いよ〇〇。」

「…なあに。」

「…：どんな姿でもいい。あなたが満足したら、必ず私のもとへ帰って来てちょうだい。」

「…：善処するよ。」

嗚呼、こんな時でさえ気の利いたことすら言えない僕だ。

弦巻邸を出て暫く歩いた。相変わらずこの辺は居住エリアでもなく商業区でもなく、開発途中といった印象の風景が続く道である。

飽く迄勤ではあるが、付いて来ているであろう気配に声を投げかける。

「…：奥沢さん、いるんだろ。」

「さすが、ずっとあたしに気づいてたんだね。…：気づいていながら、こころとあそこまで出来るんだね？」

「……奥沢さん。」

いつの間にそこにいたのか、背後に立つ何かに奥沢さんを感じる。
…相変わらず心底楽しそうに笑うね君は。

「奥沢さん、もうやめよう。」

「やーだ。○○があたしの物になるまで、永遠に続くんだよ。」

「……知ってた。」

だからこうして覚悟を決めてきているんじゃないか。

「君は前に言ってたね。…これは運命だつて。」

「そうだね。運命だよ。誰にも止められないし、誰も止まる気がない。」

「○○のせいでここまで転がっちゃったんだもん、ぴったりでしょ？」

「……ふふふ。じゃあ…始まりが僕のせいだとするなら、終わらせるのも僕であるべきだよね。」

「わっからないかなあ…終わらないんだつてば、これは。」

終わらせる方法はあると思うよ。君がそれを言いたがらないつてだけでね。

僕は予てより準備していたものを上着の右ポケットから取り出す。

「……ふうん？それであたしを…やる気なんだ？…こころの為に…。」

ピンクのクマ柄の可愛らしい彫刻刀。怪我が酷くて動けなかったこころのために、部屋で版画をする為に黒服さんが用意したものを一本拝借していたのだ。

ぱっと見た感じ用途のわからないこれは…ええと、確か切り出し刀とか言ったかな。武器にしか見えないんだよね、これ。

「いいよ？刺しなよ。」

両手を広げて挑発するように近づいてくる奥沢さん。：彼女は本気で刺されてもいいと思っっているんだろう。目が据わっている。

「全く：君の愛とやらも底が知れるね。」

「は？どういう意味。」

「僕にそんな度胸があると思ったかね？」

「……大事な人の為なら何でも出来る人だと思ってるけど？」

「……うーん、それじゃあ50点だね。」

大事な人のためなら何だって出来る：そこに関してはイエスと答えられるだろう。

ただ：

「君だって、僕にとっては大事な人だからね。」

「：はあ？それじゃあどうしてこころなんかと!!」

「黙ろう、奥沢さん。……これが運命に対する、僕の答えだよ。」

取り出した切り出し刀。それを、気が迷ってしまったといううちにと急いで首筋：左耳の下辺りに当てる。さつきまで暖かい口付けを受けていた場所にヒヤリと冷たい金属の感覚。

その姿を見て、不気味な程楽しそうだった奥沢さんの顔がサツと青くなる。

「う、うそでしょ？…何してんの○○っ!」

「君の行動もこころの傷も、僕らの関係も君らの関係も過ごした日々も過ぎ去った時間も全てが運命なら、これもまた運命だ!!!」

ひと思いに刃を根元まで突き刺し、震える手のまま一気に肩へ向け
て振り抜く。

ほんの少しの痛みと共に訪れる急激な寒気。グルリと世界が回っ

たような感覚が来てその後――

「○○ッ！○○」
「!!!!」

ひどくとおくにおとがきこえる気がする

「い……いやあああああああ
!!!!」

いたいよ……

終わりの始まり

あの僕の”自傷行為”の後、目覚めたのはひと月ほどの昏睡期間を経てからだった。

『○○っ!?…よかった…目覚めたのね…本当によかった…!!』

目覚めてすぐ、僕の手を取り涙を流す金髪の少女の姿が忘れられない。そこには確かに、愛情を感じることができたから。

お医者様の話だと、外傷や体内へのダメージは然程深刻じゃあない代わりに精神的にショックが大きかったのでは…といった感じだった。強いストレスやメンタル面での圧迫に多量の失血や大きな外傷が重なることで目覚め無くなる事例は少なくないらしい。

その間も、付きっ切りでこの子は看病してくれたようで…

「○○、気分はどう?」

「うん、傷もすっかり治ったみたいだし…だいぶ良くなったかな。」

「そう、それはよかった。…お昼ご飯もちゃんとお食べられたって聞いたわ。」

彼女は本当に心配してくれていたようで、目覚めてからも毎日ここを訪れてくれている。面会時間いっぱい、お喋りしたり世話をしてくれたり…とにかくべったりして帰るのだ。

今日も今日とて丸椅子に座る彼女は可愛らしい。そのゴールドの瞳も金糸の様な髪も、まるで作り物であるかと疑ってしまう程に美しく、僕の目を惹いて止まない。今は点滴や固定器具に囲まれ自由の無い僕だが、この体がもつと動けたならきつと触れてしまっていたことだろう。

そんなことを考えつつボーっと彼女を見ていると、彼女は照れたように林檎を剥く手を止めこちらに視線をやる。

「な、なあに？……あまり見られるとその……恥ずかしいのだけれど。」

「ううん。……どうしてそこまで、してくれるのかなって。」

「……だって、○○がこうなったのって、あたしたちのせいなんですよ？」

「そんなことないよ。君たちが悪い訳じゃない。」

「いいえ、あたしと、美咲が悪いのよ。あなたに出逢ってしまったから。」

「……そんなことないさ。だからその、そういう償いみたいなことなら」

「違うー！」

「………病院だよ。もう少し声を抑えたまえ。」

「あ……ごめん、○○。」

思わず立ち上がり声を荒げる彼女を座らせる。……うん、今は確かに、少し意地悪を言った自覚はある。

しかし、本音としてはそうなのだ。彼女らに気を遣わせたり、謝ってほしくてこんなことを仕出かした訳では無いのだから。

本当に死んでしまおうとさえ思った。……ころと奥沢さんは仲がいい。見ているだけで思わず頬が綻んでしまうような、少々スキンシップ激し目とも言えるかもしれない程べったりな、素敵な友人同士のはずなんだ。

そこに僕という異物が混ざってしまったことで互いを疑い牽制し合う様に、果ては傷つけ蹴落とし合うようにさえなってしまった。それならばこの異物は一刻も早くそこから消え失せるべきであり、彼女らはまた元の関係に戻るべきなのだ。

「……全部僕が悪いんだ。君たちは……こころも、奥沢さんも悪くないんだから。」

「……○○。でも、あたしが○○の元を訪れるのは何も償いの為だけじゃないわ。あなたを愛しているから……傍に居たいのよ。」

「……それはよく伝わっているよ。毎日本当にありがとう。」
「うん……」

二人の間に妙な空気が流れるのを肌で感じる。以前こころと部屋の中で味わった、蜜月の沈黙とはまた違ったものだ。目の前の少女も落ち着かないようにソワソワと視線と指を動かしているし、僕も何だか居た堪れない気分になってくる。

そんな中口を開いたのは彼女の方だった。

「ねえ、○○。」

「ん。」

「あなたは……あたしと美咲、どっちが好きなのかしら？」

「……ふむ。」

少し軌道の変わりだした話に、思わず息を呑み込む。どっちが……というのは正直考えていなかったことだ。

贅沢な風に言えばどちらも好きだ。愛していると言っても過言ではない。……そして率直に言うならば、それぞれが違うベクトルに進む感情の為比較の仕様が無いと思っている。

「そうだね……難しい質問だけど……。こころは、純粋に可愛いし放っておけないし……好意も物凄く真っ直ぐに伝わってきて好きだ。」

「そう……美咲は？」

「奥沢さんは……そうだな。何を仕出かすかわからないっていう不安要素は正直大きい。その根源が僕に対しての愛情だって知ってしまったからはどうしたもんか対応にも困った。」

「……うん。」

「でもね。奥沢さんは、最初から嫌いじゃなかった。僕みたいな奴のことを気にかけてくれるし、何が面白いのか毎日毎日ついてくるし。そのお陰で、口には出さなかったけど、毎日楽しかったんだ。」

「……っ。」

最初、奥沢さんに対しても自分と同じような物を少しだけ感じていた。周りの反感を買わない程度ではあるが、適度に周囲と距離を置く立ち振る舞い。一人でいることを苦とせず、ただ自分の波長と合う人間・場所を求める…そんな奥沢さんが、僕は確かに好きだった。

「大好きだったんだよ、奥沢さんが。」

「…そ、そう…なのね。」

「でも人間って…いや、僕ってやつは存外強欲だったみたいなんだ。」
「…というと?」

「僕はね。………このころの事も好きで好きで堪らないんだ。」

「!!………そうなの。」

おかしいな。潤滑なレスポンスで会話を進めていたと思っていたのに。気付けばもう陽が落ち始めているじゃないか。

彼女越しに見る夕日は少し切なく、胸に来る物があったが…。

「やっぱり僕がおかしいんだ。君だってこんなこと急に言われても困るだろうし。」

「ええと、その……あたしのどんところが好きなの?」

「………それを訊いてどうするの?」

「えっ。」

僕の問いに驚いたのか、俯きつつ頬を染めていた彼女が勢いよく顔を上げる。ここ最近で一番の大きな動きに、綺麗な髪はふわりと靡き、フローラルな香りが僕にまで届く。

「だって、気になるじゃない。」

「………僕がここころの何処を好きなのか………それを知ってどうするつもりなの?」

「どうもこうも、ただ純粹に好奇心で」

「もうやめよう?」

「……っ。…な、なにをかしら?」

最初からずっと知っている。目を覚ましたあの日から。それでも、きつといつか二人でお見舞いに来てくれるんじゃないかって…いや、一緒にじゃなくても、二人の顔が見られるんだろうって少し期待もしていたんだ。

それでもやっぱり、このままじゃダメみたいだ。

「もうやめようよ、奥沢さん。」

「あっ…ひうつ!」

抱き締め…るには両腕の可動域が狭すぎた。手で触れられなくても、こうして頭を彼女の肩に載せられただけで分かったから。

この匂い、この柔らかさ……ころじやない。確かにここに居るのは、奥沢さんだった。

「……恥ずかしいね、これ。」

「………う、うん。…いつから気付いてたの?」

少し名残惜しいが、頭を肩から持ち上げる。近くでしっかりと見るその顔は、化粧やカラーコンタクトを使ってはいるものの確かに奥沢さんだ。

それに――

「何となく、って感じになら、結構前から。…確信したのは今日だし、証拠を見つけちゃったのもついさっきだ。」

「証…拠?」

「そう。…ずっとつけててくれたの?」

「……あ。」

僕の視線を辿って言っている意味が分かったのか、しまったという顔をする奥沢さん。こんな表情を見るのは初めてかもしれない。

先程勢いよく顔を上げた瞬間、前髪の根元…生え際の部分にちらりと見えた水色と桃色の花弁。…以前誕生日に渡したものだだったが、まさか変装のカツラの下にまでつけて来るとは。

やはり、彼女には本心から好かれているようで、何とも言えず愛しい気持ちになる。

「やっぱりちよつと嬉しいもんだね。…さて、ここまで来たからには分かってるだろうけど。」

「……うん。」

「……ころはどこ？」

「……言いたく…ないよ。」

「言つて。」

「だって、○○を、取られたくないんだもん。」

「…その点は大丈夫。」

「嘘だ。絶対そつちに行つちやうもん。○○、このころのこと大好きでしよう？だから…」

「大丈夫だって。…さつきも言ったでしょ。」

「……でも……。」

目覚めたからには前に進まなければいけない。例え今のあやふやで居心地のよかつた関係を壊すことになっても、進むべきなのだ。

恐らくこれから僕が採る選択肢は最低にイカレてると思うけど、それでも。

「大丈夫だよ。僕は奥沢さんが大好きなんだから。」

奥沢さんには掴めない（終）

「○○…ッ!!」

「わっ…つと…。」

「○○っ!○○っ!!」

しがみ付く様に飛びついてきて、僕の存在を確かめるが如く全身に手を這わせ頬擦りをする痩せ細った少女。それは紛れもなく、あの予測不可能でいて太陽のように無駄に眩しかった弦巻ころの成れの果てであった。最後に記憶に残っている痛々しい傷や包帯こそ纏っていないが、確かに。

一方部屋の入り口で苦虫を噛み潰した様な顔をする奥沢さん。ようやくこの部屋の事を教えてもらったのは今日の事…僕の退院に合わせてのタイミングだった。

「このころ…こんなになって…。」

「あたしはいいの…あたしなんかはどうでもいいのよっ!…今は○○が帰ってきてくれた、それだけで…」

僕が自分を傷付けたあの後、奥沢さんはここに責任を押し付け責め立てたのだと言う。

——「あんたがあたしの○○を奪ったから、あんたがすべて悪いんだ。」——

当然反発・否定をするこのころだったが、既に半分崩壊しかかっていた心が壊れきるまでに時間はかからず。人間不信に陥ってしまった僕への帰りを待つだけの人形となってしまうこのころを、奥沢さんは何と自宅の空き部屋で世話していた。

黒服の方々に動きが無い所を見ると、全てが正当化されているか若しくは…

いや、そんなことはどうでもいい。僕は帰ってきたんだから。

「待たせてごめん、こころ…。」
「ううんっ!!こうして帰ってきてくれたんだもの、間の時間なんて些末な問題だわ!」
「……………ごめんねこころ。」

僕という存在に触れて確かめたからか、落ち着いた様子で身を預けるこころを抱きとめる。…ああ、こんなに痩せてしまつて。少し感情的に抱き締めたならば折れ砕け散つてしまう程にか細く儂いその身に、味わい続けたであろう苦しみを感じ取る。

もう、こんな事を引き起こしてはいけない。再度決意するに充分な程、こころの軽さは僕に重く押し掛かった。

どれだけそうしていただろうか。

二人触れ合う部分のせいかな、少し暑いときえ感じ始めた頃。痺れを切らしたように後ろの彼女から眩きが漏れる。

「…だから教えたくなかったのに。」

事の真相か、或いはこの場所の事か。齒噛みする様に吐いた声は、後悔と苛立ちに満ちていたように感じる。

「ねえ奥沢さん。」

「……………なに。」

「奥沢さん、こころの事が憎い?」

「今はね。」

「こころの事が邪魔?」

「…今はね。」

「なら、こころが嫌い?」

「……………」

嫌いな筈はない。何故なら彼女は甘すぎる。

こころに対して数々の悪行を画策してきた奥沢さんに憤りと怒りを抱いていた僕が言うのも変な話だけど、きつと奥沢さんはこころのことも愛していた。

愛する友人、いやそれ以上かもしれない相手が自分と同じ男性を狙っていると知った時、どうするか。すつと一步退くなり真つ向勝負でアタックを敢行するなり、それは大人になつてしまつた偽りの人間が選んでしまいがちな、つまらなくありきたりな選択肢だ。それに比べて彼女と来たら…

邪魔だと警告するかのように危害を加えるも究極に追い込むことはせず踏み止まつたせいで、動き回れる程度の怪我を与えたのみ。その中途半端さ故に僕をこころに取られた後も、「嫌だ」とは思いつつも実力行使の末の結果の為直接こころに働きかけることは出来ず、唯一不確定要素である僕を揺さぶるという足掻き。

その結果僕が想定外の行動をとつたために取り乱しこころを追い込んでしまう。そこでも結局非道にはなれず弦巻家に通した上でこころの面倒を見続けていたと…その末に取つた行動があのバレバレの変装、と。

「…嫌い……………」

「…ん？」

「嫌い…になんか、なれる訳……………ないでしょ。」

「……………美咲。」

この無様さ、この素直さ、この愚直さよ。奥沢さんという少女の、何と人間らしい事か。何と愛おしいものか。

だから僕は、奥沢さんも大好きなんだ。

やはりこの二人は…僕が愛してやまないこの二人は、どこまでも仲良く愛し合っていないきや。僕という無粋な存在が介入しても尚、崩れ

去ることのない生温い血の沼のように、何処までも繋がっていないきやいけない。

そう居てくれるのであれば、僕は喜んでその血を飲み干そう。全身で味わい、共に混ざり合おう。

「……………ごめ……………ごめん……………っ！……………ごころ、あたし……………ツ!!」

「……………いいの、美咲。……………美咲も辛かったんだものね。……………苦しかった……………のよね。あたしにはわかるわ。」

「……………ごころ……………!!!」

僕の腕の中から抜け出したごころが嗚咽を漏らす奥沢さんに駆け寄り抱き締める。嗚咽は次第に悲鳴のような悲痛な叫喚へと変わり、一連の騒動の収束を表す鐘のように、小さなアパートの一室に響き渡った。

これが僕の求めていた形。僕自身愛してしまっていると気付かされた二人なんだ。

* * *

「○○……………もう、絶対離れちや嫌よ。」

「そうだよ○○。……………確かに○○と急に距離を詰めたせいであたし達はおかしくなっちゃったけど。今度は、あたし達にとって掛け替えの無い存在になったんだから。」

一頻り泣いて、夜も更けた頃。改めて今後の関係性を定めた僕達はベッドに川の字で寝ていた。「もう奪い合わず、傷つけ合わない。」その言葉の下に交わされた契りは、一生を三人で愛し合って生きていくというものだった。

僕は二人の関係と二人それぞれを、二人はお互いと僕を深く愛してしまっている訳だから、これ以上素敵に当て嵌る型なんて無いんだ。この結論はある意味必然……………運命なんだから。

「ごめんよ……。でも、これからはずっと一緒だ。」

「よかった。……そういえば○○、何だか雰囲気が変わった気がするわ。」

「あ、それあたしも思った。…前はちよつと変わってるーくらいだったけど、今は少し怖い所もある。」

「怖い?」

「うん……。前にあたしの目の前で自分を切った時からそうなんだけど、何をするかわからないっていうか……。」

「…でも、あたしは今の○○も大好きよ。ミステリアスで狂氣的で、とーつても魅力的だわ。」

確かに自分でも少し違和感がある。いや、寧ろ違和感は消えた気がする。

僕は彼女達の自分に抱く印象を聞きながら、少し前に交わした会話を思い出していた。あれは確か、“ヤンデレ”がどうとかって話だった気がするが……。

後に調べた情報に依ると、相手を想うが故に理解を越えた行動に走ったり、病的……つまり病んでいると判断されてしまう程の愛情表現を自分や周囲にしてしまう人間の事を指す言葉らしいが。

奥沢さんがそんな感じなのかもしれないとは薄々思っていたが、少し前からの僕は何だ。自分を傷つけることで愛する者の愛すべき姿を誘導したり、拳句全てを手に入れたいと我儘を言ってみせたり。以前の僕では考えられなかった言動だが、何と清々しい気持ちか。

今までよりも、ずっと生きていると実感できる。

「…ありがとうこのころ。…奥沢さん、今の僕は…やっぱり嫌かな。」

「別に……どんな○○でも、あたしの気持ちが変わることは無い……っていうか、ここころは「ここころ」って呼ぶんならあたしも名前で呼んでよ。」

「奥沢さんは奥沢さんだしなあ。」

「でも差をつけられるのって、何か嫌。お願い○○。あたしも名前で呼んで…。」

やはり君は素直で良い。人としての生を感じられる。

それに比べて、僕はまだ生きている実感が足りないように思える。尽く々々僕は強欲な様で、ここまで幸せな空間で満たされた時間だというのにまだ実感とやらを渴望している。

そう、あの流れるように体を這う温度。それをまるで他人事のように温もりとして感じたあの瞬間、僕は確かに生きていた。

全てが解決して綺麗な円を描いた今こそ、その実感をプラスすることで最上の快感が得られるんじゃないか。

「わかったよ……じゃあ、美咲。」

「っ!!……うん。」

「よかったわね美咲。これであたしたち、お揃いよ。」

「うん。……こころ、○○、あたし、今すつごく幸せかも。」

奥沢さ…美咲のはにかむ様な笑顔がとても眩しい。やはり試したい。生の実感を、ここで——ッ！

「……え、…○○…??」

「……○○、何……してんの…??」

何時ぞやも同じように僕の肌を裂いたピンクのクマ柄の彫刻刀。あの時と逆の手に握られたそれは、未だに大きく残る傷跡の対を作るように項の右から右腕の先を引き裂いていた。

痛みよりもゾクゾクと込み上げてくる快感。肌を這うように流れ出ていく滝のような生温い紅が下がっていく体温と反比例するように僕の脳を灼いていく。これだ、これこそが僕の生きる実感——

「今度は二人で看病してね。」

おわり